福島県文化財調査報告書第404集

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告１

麻生館遺跡

2002年

福島県教育委員会
財団法人 福島県文化振興事業団
国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所

福島県文化財調査報告書第404集
会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告１
麻生館遺跡
福島県教育委員会
財団法人 福島県文化振興事業団
国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告 1

麻生館遺跡（あざぶだて）

口絵1　調査区全景（北から）

口絵2　２～５・７号掘立柱建物跡（西から）

序　　文

「会津縦貫北道路」は，喜多方市と会津若松市を結ぶ延長約13.1kmの地域高規格道路です。平成８年度に都市計画道路として決定され，平成９年度からは建設省（現国土交通省）直轄事業として建設工事が進められています。

この路線が発表された区間には，先人が残した貴重な文化遺産が埋蔵されており，福島県教育委員会は周知の埋蔵文化財包蔵地を含め，数多くの遺跡を確認してきました。

埋蔵文化財は，それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に，我が国の歴史，文化等の正しい理解と，将来の文化の向上発展の基礎をなすものであります。

このため，福島県教育委員会では，国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所と埋蔵文化財の保護・保存について協議を重ね，平成13年度から現状保存が困難な遺跡について記録として保存することとし，発掘調査を実施してきました。

本報告書は，耶麻郡塩川町に所在する麻生館遺跡の発掘調査の結果をまとめたものです。

今後，この報告書が，県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに，地域の歴史を解明するための基礎資料として，さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に，この発掘調査にあたり，御協力いただいた国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所，財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関並びに関係各位に対し，感謝の意を表するものであります。

平成14年10月

福島県教育委員会

教育長　　髙　城　俊　春

あ　い　さ　つ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会からの委託により，県内の大規模な開発に伴う埋蔵文化財の調査を行っております。会津縦貫北道路に関連する埋蔵文化財の調査もそのひとつであり，平成13年度より本格的な調査を開始いたしました。

平成13年度は，予定路線上で工事が優先される塩川町遠田地区の麻生館遺跡と荒屋敷遺跡について発掘調査を実施いたしました。本報告書は，このうち麻生館遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

麻生館遺跡は，平安時代と中世の複合遺跡であることが確認されました。平安時代では掘立柱建物跡，中世末では，堀によって区画され，その内側に建物群が配置された屋敷地が発見されました。塩川町周辺では，近年開発に伴い数多くの発掘調査が実施され，中世の様相が次第に明らかにされており，本報告書も会津地域の歴史を知る上で貴重な資料の一つになるものと思います。

今後，これらの調査成果を考古学・歴史学などの基礎資料として，さらには地域社会理解のために広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに，発掘調査当初から報告書刊行に至るまで，御指導・御協力いただきました関係機関ならびに関係各位に対し，深く感謝申し上げますと共に，埋蔵文化財の保護・活用について，今後とも一層の御理解と御協力をお願い申し上げます。

平成14年10月

財団法人　福島県文化振興事業団
理事長　佐　藤　栄　佐　久

緒　　言

1．本書は，平成13年度に実施した会津縦貫北道路遺跡発掘調査の報告書である。

2．本書には，福島県耶麻郡塩川町に所在する麻生館遺跡の調査成果を収録した。

　遺跡番号40300049　麻生館遺跡　耶麻郡塩川町大字遠田字麻生館

3．遺跡発掘調査事業は，福島県教育委員会が国土交通省の委託を受けて実施し，調査にかかる費用は国土交通省が負担した。

4．福島県教育委員会では，発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。

5．財団法人福島県文化振興事業団では，遺跡調査部遺跡調査課の次の職員を配して調査に当たった。

文化財主査	高橋信一	文化財主査	小笠原啓美
文化財副主査	菊田順幸	文化財副主査	井　憲治
文化財主事	横須賀倫達		

なお，臨時的に下記の職員の協力を得ている。

文化財主査	斎藤竜一	文化財主事	三浦武司
文化財主事	稲村圭一		

6．本書の執筆は，高橋，斎藤，菊田，横須賀が分担して行い，各文末に文責を明記した。全体の構成・編集は横須賀が担当した。

7．本書に使用した地図は，国土交通省国土地理院長の承認を得て，同院発行の５万分の１地形図を複製したものである。（承認番号　平14東複第241号）

8．本書掲載の自然科学分析・空中写真撮影は，次の諸機関に依頼し，その結果と考察を付章に掲載している。

遺構外堆積土のテフラ同定分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
出土木製品の樹種同定	パリノ・サーヴェイ株式会社
空中写真撮影	株式会社オリス

9．本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

10．発掘調査および報告書作成にあたって，次の諸氏・諸機関から御指導・御助言・御協力をいただいた。（順不同・敬称略）

塩川町教育委員会・塩川町西部土地改良区・喜多方市教育委員会

和田　聡・植村泰徳・山中雄志・片岡　洋

用　　例

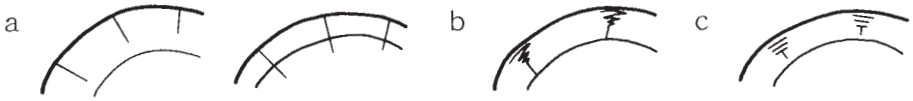
1．本書における遺構図の用例は，以下のとおりである。

方　位　　遺構図・地形図は原則的に南北を軸線とし，真北を上に向ける。これに該当しない場合は，図中に方位を示した。図中の方位は国土座標の真北を示す。

縮　尺　　縮尺率は遺構の大きさと性格により適宜決定し，スケールの右に示した。挿図中に出土位置を示した遺物の縮尺は，挿図に合わせ決定し，特に縮尺率は示していない。

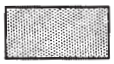
標　高　　水糸レベルの数値は海抜高度を示す。

ケ　バ　　遺構内の傾斜面はａ，緩斜面はｂ，削平や撹乱範囲などの傾斜面はｃで示している。



土　層　　遺構外の自然堆積はローマ数字（Ｌ　・Ｌ　…），遺構内堆積土は算用数字（　１・２…）で表記した。土色は『新版　標準土色帖』（小山・竹原1997）により判定した。

網　点　　挿図中の柱痕には下記のスクリーントーンを用い，その他は用例を同図中に表示した。


柱痕

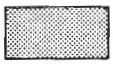
新　旧　　重複する遺構の新旧関係については，所属時期の新しい遺構の上端のみを表現した。また撹乱は挿図中に「カクラン」と片仮名表記し，上端線のみで表現している。

2．本書における遺物図の用例は，以下のとおりである。

縮　尺　　縮尺率は遺物の大きさと性格により適宜決定し，スケールの右に示した。原則的に土器は1/3，石製品は2/5，木製品（柱材）は1/6で表現している。

土　器　　断面の表現方法として土師器は白ヌキ，須恵器は黒ベタ，陶器は下記のスクリーントーンを採用している。また土師器の黒色処理を下記のスクリーントーンで示した。粘土積上げ痕は断面に一点鎖線で表記した。

陶器断面


黒色処理

番　号　　挿図毎に通し番号を付し，出土位置・層位は番号右の（　）中に示した。写真図版中には遺物の右下に挿図番号を付した。

寸　法　　遺物の寸法や観察結果は，一覧表とし，第二章の末尾に掲載した。

3．本報告書で使用した略号は，次のとおりである。

塩　川　町･･･ＣＫ	麻生館遺跡･･･ＡＺＴ	
遺構外堆積土･･･Ｌ	遺構内堆積土･･･	グリッド･･･Ｇ
掘立柱建物跡･･･ＳＢ	柱　列　跡･･･ＳＡ	土　　坑･･･ＳＫ
井　戸　跡･･･ＳＥ	溝　　跡･･･ＳＤ	遺物包含層･･･ＳＨ
ピ　ッ　ト･･･Ｐ		

目　　次

第１章　遺跡の環境と調査経過 …… 1

第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査経過 …… 3
第３節　調査方法 …… 5
第４節　周辺の地理的環境 …… 7
第５節　周辺の歴史的環境 …… 9

第２章　遺跡の概要 …… 15

第１節　遺跡の位置と地形 …… 15
第２節　基本土層 …… 15
第３節　範囲確認調査 …… 18
第４節　遺構の分布 …… 20

第３章　遺構と遺物 …… 23

第１節　掘立柱建物跡・柱列跡 …… 23
１号掘立柱建物跡（23）　２号掘立柱建物跡（29）　３号掘立柱建物跡（37）
４号掘立柱建物跡（41）　５号掘立柱建物跡（44）　６号掘立柱建物跡（46）
７号掘立柱建物跡（48）　８号掘立柱建物跡（50）　９号掘立柱建物跡（53）
10号掘立柱建物跡（54）　11号掘立柱建物跡（60）　12号掘立柱建物跡（62）
13号掘立柱建物跡（65）　14号掘立柱建物跡（67）　１号柱列跡（69）
第２節　土　　坑 …… 71
１号土坑（71）　２号土坑（71）　３号土坑（72）　４号土坑（72）
５号土坑（74）　６号土坑（74）　７号土坑（74）　８号土坑（75）
９号土坑（75）　10号土坑（76）　11号土坑（76）　12号土坑（78）
13号土坑（78）　14号土坑（80）

第３節　井　戸　跡 …… 81
１号井戸跡（81）　２号井戸跡（82）
第４節　溝　　跡 …… 84
１号溝跡（85）　２号溝跡（90）　３号溝跡（90）　４号溝跡（92）
５号溝跡（94）　６号溝跡（94）　７号溝跡（94）　８号溝跡（97）
９号溝跡（97）　10号溝跡（97）　11号溝跡（98）
第５節　ピ ッ ト 群 …… 98
ピットＡ群（99）　ピットＢ群（99）　ピットＣ群（102）
ピットＤ群（105）　ピットＥ群（106）
第６節　遺物包含層 …… 110
第７節　遺構外出土遺物 …… 114

第４章　考　　察 …… 121

第１節　平安時代の遺構と遺物 …… 121
１．遺物について（121）　２．遺構について（124）
第２節　中世の遺構と遺物 …… 126
１．遺物について（126）　２．遺構について（129）
３．麻生館の復元（135）
第３節　ま　と　め …… 139

付　章　麻生館遺跡の自然科学分析 …… 175

１．テフラの検出同定及び屈折率測定 …… 175
２．木製品の樹種同定 …… 177

挿図・表・写真図版　目次

［挿図］

図１　会津縦貫北道路位置図 …… 1
図２　平成13年度
発掘調査遺跡位置図 …… 2
図３　麻生館遺跡調査区位置図 …… 4
図４　グリッド配置図 …… 6
図５　周辺の地形・地質 …… 8
図６　周辺の遺跡 …… 10
図７　基本土層 …… 16
図８　トレンチ配置図，出土遺物 …… 19
図９　遺構配置図 …… 21
図10　掘立柱建物跡配置図（１）…… 24
図11　掘立柱建物跡配置図（２）…… 25
図12　１号掘立柱建物跡（１）…… 26
図13　１号掘立柱建物跡（２），
出土遺物 …… 27
図14　２号掘立柱建物跡（１）…… 31
図15　２号掘立柱建物跡（２）…… 32
図16　２号掘立柱建物跡（３）…… 33
図17　２号掘立柱建物跡（４）…… 34
図18　２号掘立柱建物跡出土遺物（１）
…… 35
図19　２号掘立柱建物跡出土遺物（２）
…… 36
図20　２号掘立柱建物跡出土遺物（３）
…… 37
図21　３号掘立柱建物跡（１）…… 38
図22　３号掘立柱建物跡（２）…… 39
図23　３号掘立柱建物跡（３）…… 40
図24　４号掘立柱建物跡（１）…… 42
図25　４号掘立柱建物（２），
出土遺物 …… 43
図26　５号掘立柱建物跡 …… 45
図27　６号掘立柱建物跡（１）…… 47
図28　６号掘立柱建物跡（２）…… 48
図29　７号掘立柱建物跡 …… 49
図30　８号掘立柱建物跡（１）…… 51
図31　８号掘立柱建物跡（２），
出土遺物 …… 52
図32　９号掘立柱建物跡 …… 54
図33　10号掘立柱建物跡（１）…… 56
図34　10号掘立柱建物跡（２）…… 57
図35　10号掘立柱建物跡（３）…… 58
図36　10号掘立柱建物跡出土遺物 …… 59
図37　11号掘立柱建物跡 …… 61
図38　12号掘立柱建物跡 …… 63
図39　12号掘立柱建物跡出土遺物 …… 64
図40　13号掘立柱建物跡（１）…… 66
図41　13号掘立柱建物跡（２），
出土遺物 …… 67
図42　14号掘立柱建物跡・出土遺物 …… 68
図43　１号柱列跡，出土遺物 …… 70
図44　１・３～８号土坑 …… 73
図45　２・10号土坑 …… 77
図46　９・11～14号土坑 …… 79
図47　土坑出土遺物 …… 80
図48　１・２号井戸跡 …… 82
図49　井戸跡出土遺物 …… 83
図50　１号溝跡（１）…… 86

図51　１号溝跡（２），出土遺物（１）…… 87
図52　１号溝跡出土遺物（２）…… 89
図53　２号溝跡 …… 91
図54　２号溝跡出土遺物 …… 92
図55　３・４・６・９・10号溝跡 …… 93
図56　５・８・11号溝跡 …… 95
図57　７号溝跡・出土遺物 …… 96
図58　ピットＡ群（１）…… 100
図59　ピットＡ群（２）…… 101
図60　ピットＢ群 …… 103
図61　ピットＣ群（１）…… 104
図62　ピットＣ群（２）…… 105
図63　ピットＤ群 …… 106
図64　ピットＥ群 …… 107
図65　ピット群出土遺物 …… 108
図66　遺物包含層範囲，出土遺物分布図 …… 111
図67　遺物包含層出土遺物（１）…… 112
図68　遺物包含層出土遺物（２）…… 113
図69　遺構外出土遺物 …… 115
図70　平安時代の出土遺物 …… 122
図71　掘立柱建物跡の柱穴配置…… 124
図72　平安時代以前の遺構分布…… 125
図73　中世末の出土遺物 …… 127
図74　中世建物跡の分類 …… 131
図75　２号建物跡における部屋割りの復元 …… 133
図76　中世遺構群とその変遷 …… 135
図77　麻生館跡の復元 …… 137

［表］

表１　路線周辺遺跡一覧…… ２
表２　周辺の遺跡一覧（１）…… 11
表３　周辺の遺跡一覧（２）…… 12
表４　範囲確認調査トレンチ一覧 …… 19
表５　ピット群底面標高一覧 …… 109
表６　土器観察表（１）…… 117
表７　土器観察表（２）…… 118
表８　土器観察表（３）…… 119
表９　木製品観察表…… 120
表10　石製品観察表…… 120
表11　中世末掘立柱建物跡一覧…… 129

［写真図版］

図版１　麻生館遺跡周辺航空写真（1947年）…… 143
図版２　麻生館遺跡周辺航空写真（1963年）…… 143
図版３　調査区全景…… 144
図版４　基本土層 …… 144
図版５　１・８・12号掘立柱建物跡 …… 145
図版６　１号掘立柱建物跡全景…… 145
図版７　２～５・７号掘立柱建物跡 …… 146
図版８　２号掘立柱建物跡全景…… 146
図版９　２号掘立柱建物跡細部（１）…… 147
図版10　２号掘立柱建物跡細部（２）…… 147
図版11　３号掘立柱建物跡全景 …… 148
図版12　３号掘立柱建物跡細部 …… 148
図版13　４号掘立柱建物跡全景 …… 149
図版14　５号掘立柱建物跡全景 …… 149
図版15　６号掘立柱建物跡全景 …… 150
図版16　７号掘立柱建物跡全景 …… 150
図版17　８号掘立柱建物跡完掘全景 …… 151
図版18　８号掘立柱建物跡細部 …… 151

図版19　9・10号掘立柱建物跡，
1号柱列跡…… 152
図版20　9号掘立柱建物跡完掘全景 …… 152
図版21　10号掘立柱建物跡完掘全景 …… 153
図版22　10号掘立柱建物跡細部…… 153
図版23　11号掘立柱建物跡完掘全景 …… 154
図版24　12号掘立柱建物跡完掘全景 …… 154
図版25　13号掘立柱建物跡完掘全景 …… 155
図版26　13号掘立柱建物跡細部…… 155
図版27　14号掘立柱建物跡完掘全景 …… 156
図版28　1号柱列跡…… 156
図版29　1～3号土坑 …… 157
図版30　4～7号土坑 …… 157
図版31　8～11号土坑 …… 158
図版32　12～14号土坑 …… 158
図版33　1号溝跡全景（1）…… 159
図版34　1号溝跡全景（2）…… 159
図版35　1号溝跡（1）…… 160
図版36　1号溝跡（2）…… 160
図版37　2号溝跡 …… 161
図版38　3・4号溝跡 …… 161
図版39　5・6号溝跡 …… 162
図版40　7・8号溝跡，2号土坑 …… 162
図版41　8～11号溝跡 …… 163
図版42　1・2号井戸跡 …… 163
図版43　ピットA群全景 …… 164
図版44　ピットD群全景 …… 164
図版45　ピットE群全景 …… 165
図版46　ピットB・E群細部 …… 165
図版47　掘立柱建物跡
・土坑出土土師器 …… 166
図版48　掘立柱建物跡・土坑
・井戸跡出土須恵器 …… 166
図版49　掘立柱建物跡・柱列跡
出土石製品…… 167
図版50　掘立柱建物跡出土木製品（1）
…… 168
図版51　掘立柱建物跡出土木製品（2）
…… 169
図版52　2号井戸跡出土木製品…… 170
図版53　溝跡出土土師器・須恵器 …… 170
図版54　溝跡出土須恵器 …… 171
図版55　1号溝跡出土木製品 …… 171
図版56　ピット群出土遺物 …… 172
図版57　遺物包含層出土須恵器…… 173
図版58　遺構外・範囲確認調査
出土須恵器…… 173
図版59　須恵器細部…… 174

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　調査に至る経緯

会津縦貫北道路（地域高規格道路）は，喜多方市関柴町大字西勝から耶麻郡塩川町・河沼郡湯川村を経て会津若松市高野町大字中沼に至る延長13.1kmの４車線自動車専用道路である。平成８年度に都市計画道路の決定が行われ，平成９年度から建設省（現国土交通省）直轄事業として進められている。

この事業は喜多方市と会津若松市の会津北部地域の縦軸を強化し,「会津地方拠点都市地域」・「会津リフレッシュ構想」・「会津西北地域活性化対策事業」等の広域的な地域開発プロジュクトを支援し，会津地方の定住化と活性化を図ることを目的としている。この事業の完成より磐越自動車道との一体化によって会津北部地域は東北地方の高速交通体系に組み入れられ，産業・経済の発展が期待される。（高橋）

第２節　調査経過

１．平成12年度までの調査経過

福島県教育委員会では，路線内に所在する埋蔵文化財の保護を図るため，平成９年度に財団法人福島県文化センター（現財団法人福島県文化振興事業団）に表面調査を委託した。表面調査は，建

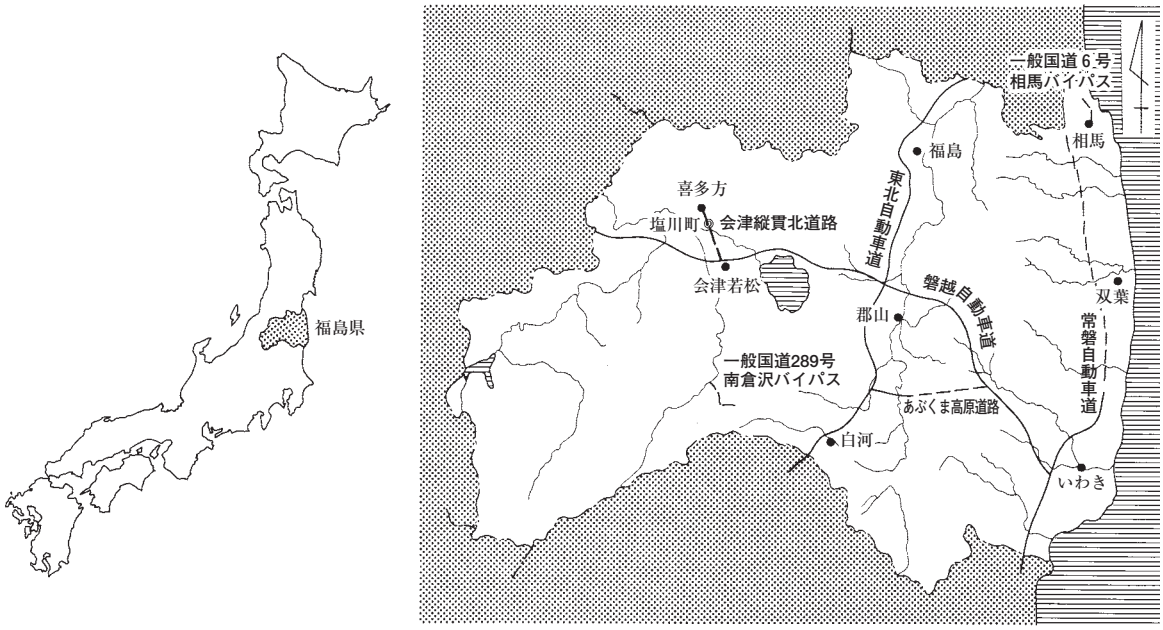
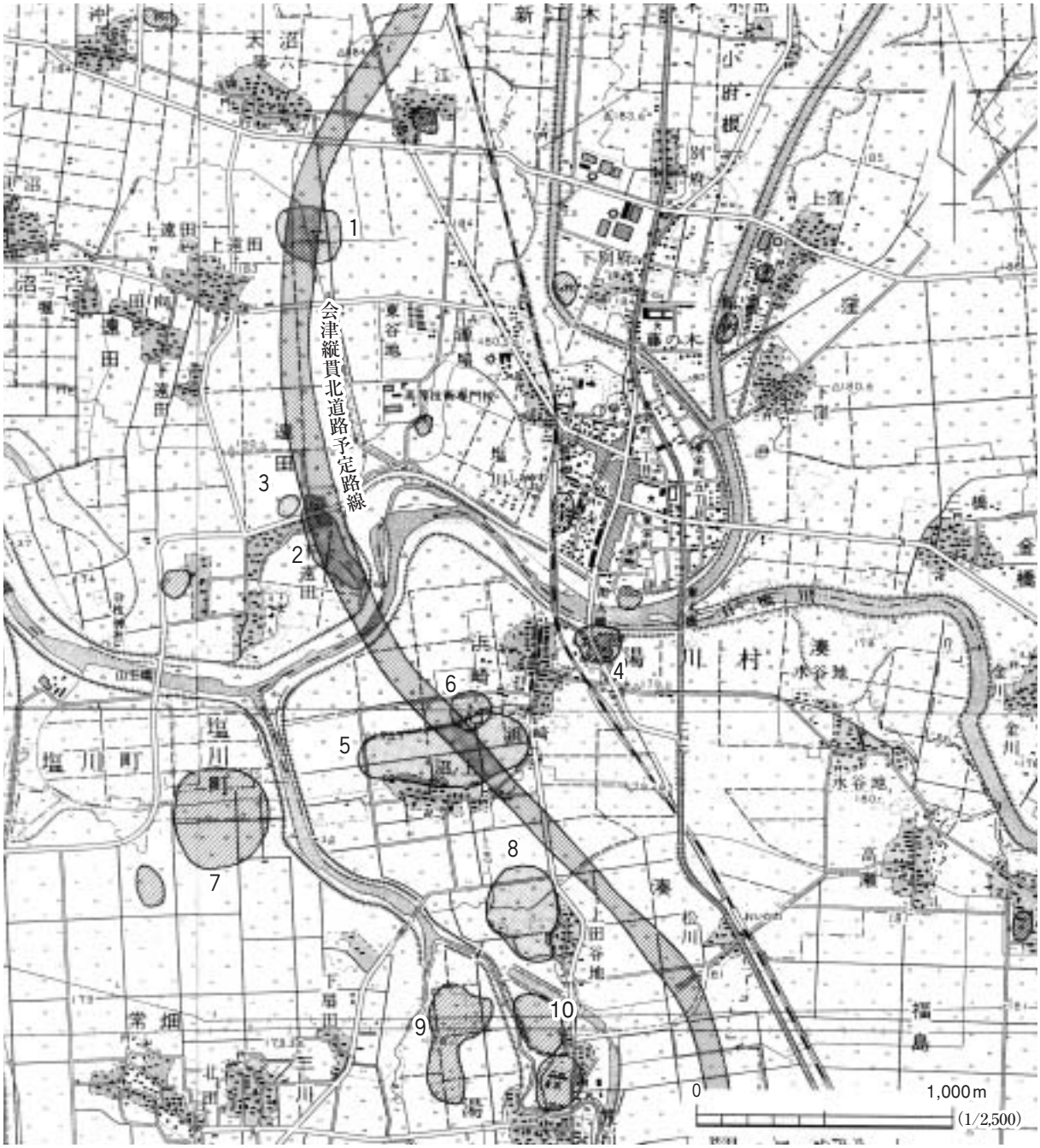


図1　会津縦貫北道路位置図



網点…予定路線に係るおそれのある遺跡，斜線…予定路線に係るおそれのない周知の遺跡

表1　路線周辺遺跡一覧

	No.	遺　跡　名	遺跡番号	所　在　地	時　代	備　考
塩川町	1	麻生館遺跡	40300049	塩川町遠田字麻生館	平安・中世	H13発掘調査
	2	荒屋敷遺跡	40300073	遠田字荒屋敷・灰塚他	縄文～古墳 平安・中近世	H12･13発掘調査 (県･町調査)
	3	下遠田館跡	40300050	遠田字荒屋敷・館ノ腰	中　世	
湯川村	4	浜崎城跡	42200001	湯川村浜崎字北殿町	中近世	
	5	沼ノ上遺跡	42200020	湊字沼ノ上	奈良・平安	
	6	浜崎館跡	42200029	湊字宮前	中　世	
	7	北田城跡	42200002	三川字大館	中　世	
	8	上田谷地遺跡	42200021	湊字上田谷地	奈良・平安	
	9	下川原遺跡	42200022	笈川字下川原	奈良・平安	
	10	西川原北遺跡	42200023	笈川字西川原	奈良・平安	

図2　平成13年度発掘調査遺跡位置図

設省（現国土交通省）東北地方建設局（現整備局）郡山国道工事事務所から提供された計画路線図（1：2,500）を基に，喜多方市から会津若松市までの延長約12.3km・幅150mを対象として，平成９年11月12日から11月26日まで現地調査を実施した。調査は，遺物を表面採集できた範囲を遺跡（A）として認定した。また，遺構や遺物は確認できなかったが地形的条件から遺跡の可能性が高く，試掘調査を必要とする遺跡推定地（B）とに分け登録した。前者には原則として遺物散布地の小字名を遺跡名としたが，複数の小字にまたがる場合には大字名と小字名を組み合わせて遺跡名とした。遺跡推定地（B）については，市町村名の頭文字に該当するアルファベットを用いてＹＢ－１（湯川村遺跡推定地No.１）のように示した。また，周知の遺跡についても，今回の表面調査で遺跡範囲を再確認した。名称・所在地・遺跡範囲に関しては，『福島県埋蔵文化財包蔵地台帳』・『福島県遺跡地図　会津地方』（福島県教育委員会　1996年）に準拠したが，所在地について一部補足して表記している。当初，表面調査は道路予定全区間を対象に計画したが，会津若松市中沼地区12haを除き実施した。調査の結果，２市２町１村で24遺跡を確認した。内訳は，喜多方市で５遺跡，塩川町で５遺跡，湯川村は河東町分も含めて４遺跡と遺跡推定地３地点，会津若松市で７遺跡である。この調査成果は，平成10年刊行の『福島県内遺跡分布調査報告４』に掲載されている。

平成12年度は，福島県教育委員会と国土交通省東北地方現整備局郡山国道工事事務所との協議の結果，最初に建設工事に着手する塩川町麻生館跡・荒屋敷遺跡の計39,100　を対象とした試掘調査を実施した。この調査は，10月２～27日と11月27～30日まで実施された。麻生館跡は館跡との関連が想定される遺構の他，平安時代の集落跡が確認されたため，名称を麻生館遺跡と変更した。また，荒屋敷遺跡では，古墳時代前期及び平安時代の遺構・遺物を確認した。この調査成果については，同年度刊行の『福島県内遺跡分布調査報告７』に掲載されている。なお，同年度には会津縦貫北道路建設に伴う付属施設整備のため，麻生館遺跡・荒屋敷遺跡について塩川町教育委員会で試掘調査を実施している。試掘調査の結果，荒屋敷遺跡から土坑や溝跡，奈良～平安時代・中世の遺構・遺物が検出された。このため，塩川町教育委員会荒屋敷遺跡は大型排水路建設に伴う1,180　を11月20日から12月20日まで発掘調査を実施した。その後，年が明けて３月には荒屋敷遺跡の測道や上水道管敷設に関連して工事立会や立会調査を実施している。（高橋）

２．平成13年度の調査経過

麻生館跡（4300049）は，中世から近世の館跡として登録された周知の遺跡である。会津縦貫北道路の建設に伴い，平成12年度に財団法人福島県文化振興事業団によって試掘調査が行われ，新たに平安時代の集落跡を確認した。そのため要保存範囲となる6,200　について，名称を麻生館遺跡と変更し，平成13年度に発掘調査を行う運びとなった。

麻生館遺跡の発掘調査は，平成13年４月９日より現地確認，連絡所の設置，駐車場造成など本格的に調査を開始するための条件整備を進めた。また地権者との協議の結果，調査区南端を流れる用水路周辺部分約700　，及び調査区北部を東西に横断する農業用道路以北約800　，合わせて約

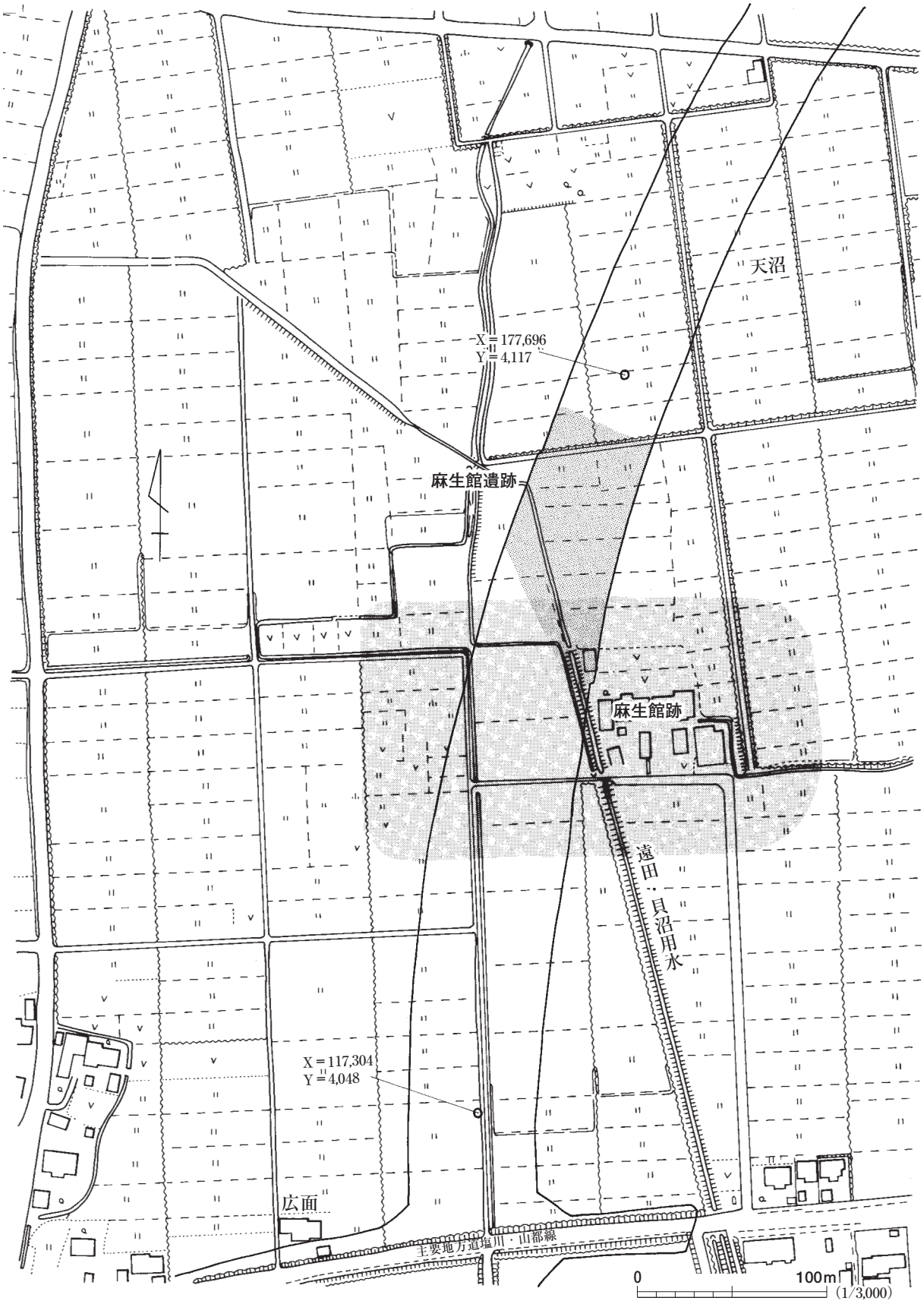


図3　麻生館遺跡調査区位置図

1,500　の範囲については暫く現状のままとすることになった。

４月19日，調査区中央一帯，約4,700　の範囲について重機による表土除去作業を開始した。ゴールデンウィークが明けた５月８日，調査員４名，作業員32名の体制で本格的な発掘調査に着手し，調査区の三方を囲郭する溝跡，これに伴い溝跡の内外に位置する掘立柱建物跡などを検出している。また調査区北西部では古代の土師器，須恵器を含む遺物包含層や該期の掘立柱建物跡を確認した。

６月に入ると，調査は南側より漸次進行し，主に館跡の堀跡と考えられるＳＤ01やその内部に位置する掘立柱建物跡の精査が進められた。６月上旬には平行して行なっていた荒屋敷遺跡の調査が本格化し，調査員２名及び作業員の約半数が荒屋敷遺跡に移動している。６月中旬，調査区南端約700　について表土除去作業，遺構検出作業が開始され，ピット群や２号溝跡の延長部分を検出した。しかし，特に南西側については顕著な削平が認められ，地山面は周囲より一段低くなっていた。

７月は比較的好天が続き，遺構の精査は進捗した。７月中旬にはＳＤ01以南について，ほぼ調査が終了し，遺構精査の中心はＳＤ01以北へと集中することになった。また７月下旬には担当調査員１名が荒屋敷遺跡に移動し，これに替わって臨時に調査員の応援を受けながら調査が進められた。

８月上旬には農業用道路以南については遺構精査が終了し，８月８日には高所作業車による写真撮影を行なっている。お盆休みが明けた８月21日には調査区北側の農業用道路部分，約500　の表土除去作業，遺構検出作業に入り，掘立柱建物跡やピット群など高い密度で遺構が存在することを確認しえた。そのため，この範囲の精査を継続する一方，調査区内を東西に走る用水路から北，調査区内未着手部分約300　を含めた約12,500　の範囲についてトレンチ調査による遺跡の範囲確認調査を行なった。その結果，遺跡の範囲はさらに北側へは広がらず，調査範囲は現状のまま確定するに至っている。また８月30日にはラジコンヘリにて空中写真撮影を行った。

９月に入ると調査範囲の縮小に伴い，漸次器材の撤収や連絡所の撤去を行い，作業人員も縮減している。９月21日には最後に残った調査区北端の約300　についても調査を終え，麻生館遺跡の発掘調査全行程を終了した。

なお，９月28日には周辺住民を対象とした麻生館遺跡の現地見学会が開かれ，会場には約100人の見学者が訪れている。11月14日には福島県教育庁文化課・財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部遺跡調査課・国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所各担当職員の立会のもとに現地の引き渡しを行い，調査を終了した。（横須賀）

第３節　調査の方法

麻生館遺跡の調査区は南北に長い帯状で，その範囲は南北の長さ約150m，東西の幅約50m，面積6,200　の規模である。調査で用いた測量座標の設定は，調査区外に位置する国土座標値Ｘ＝177,500・Ｙ＝4,000の地点を新たにN500，E000の測量原点とし，調査原点から北に50m，東に40mの位置を

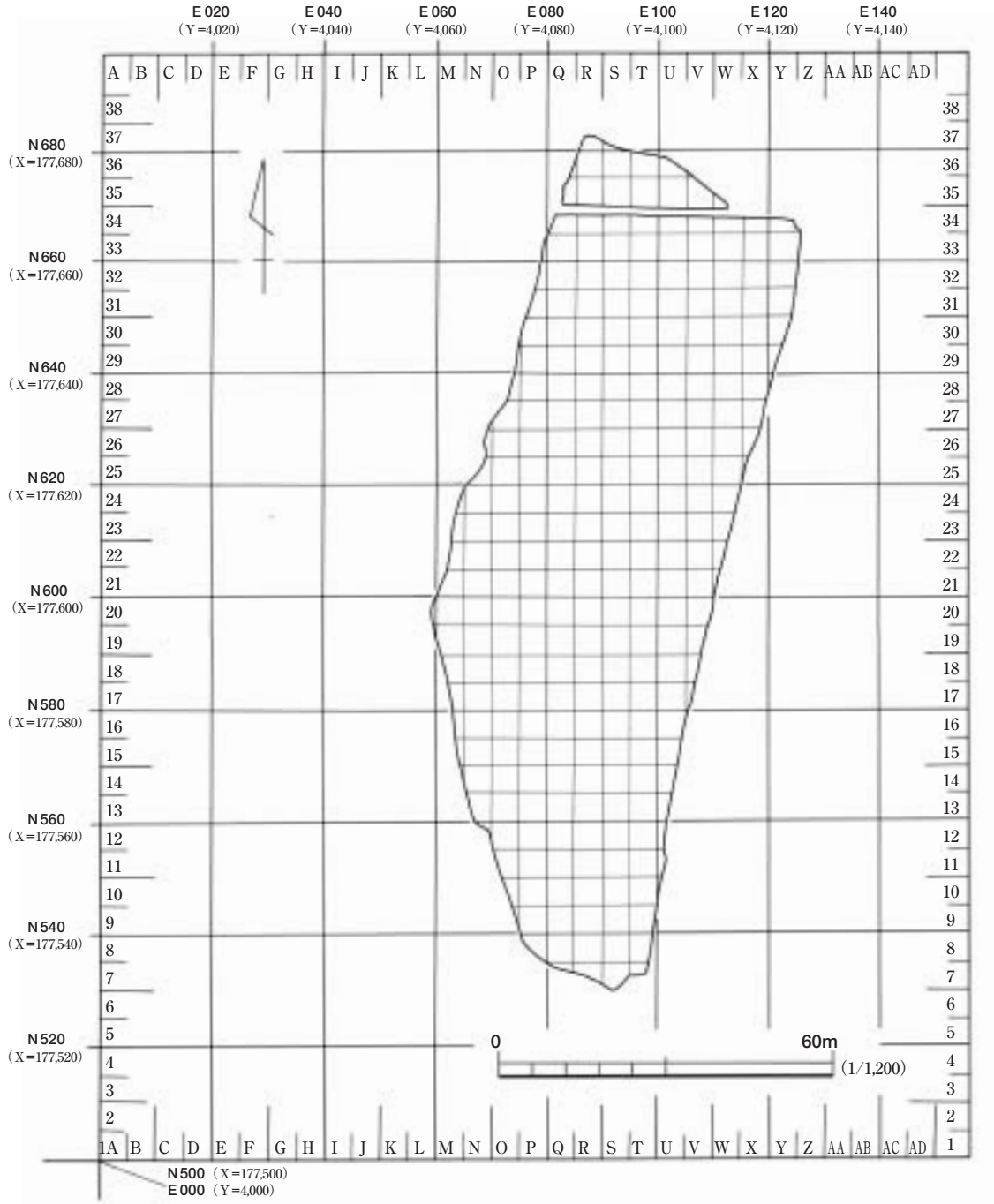


図4　グリッド配置図

N550・E040と表示した。グリッドの設定は，座標の設定によってできた5m四方の方眼を一単位とし，北にアラビア数字１・２・３…，東にアルファベットＡ・Ｂ・Ｃ…という記号を与え，その組み合わせで表している。

表土除去作業は，試掘調査によって除去できる表土の深さが明らかだったため，バックホーを用いて行った。遺構検出作業および遺構掘り込み，精査については，人力により作業を行った。

各遺構の掘り込みは，原則として掘建柱建物跡および柱列跡の柱穴については食い違い４分割ないし２分割，土坑や井戸跡については２分割，溝跡については数カ所に土層観察用のベルトを設定

し，それぞれ上位の堆積土から掘り下げていった。堆積土の土層番号は，遺構外の基本土層をＬとローマ数字の組み合わせで表示し，遺構内の土層は　とアラビア数字の組み合わせで表示した。

遺物の取り上げは，遺構外はグリッドを単位として基本層位ごとに，遺構内は土層観察用ベルトの層位ごとに取り上げ，良好な出土状況にあるものについては写真撮影および出土状況の作図を行った。

記録写真は，35mmの小型カメラと，必要に応じて６×4.5　の中型カメラを使用し，フィルムはモノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムを併用して遺構検出時の状況・遺構内堆積土の状況・遺物の出土状況・遺構の完掘状況の撮影を行った。遺構の図面は前述の座標を元に1/20縮尺を基本として作図し，状況に応じて1/10・1/40縮尺を採用した。なお，麻生館遺跡の地形図は1/200縮尺で作成している。

以上，調査によって得た調査記録・出土資料などは，当事業団が定めるところの整理基準に沿って整理し，報告書の作成が終了した後，これらの調査記録・出土資料は福島県教育委員会が保管している。（菊田）

第４節　地理的環境

福島県は，東北地方の最南端に位置し，首都圏からの玄関口の役割を持つ。面積は13,782k　で，県としては岩手県に次いで全国２番目の面積を有している。県土のおよそ８割は山地で占められていて，東は太平洋に面し，中央やや西寄りには国内有数の大湖である猪苗代湖が位置する。分水嶺を越えて流れる阿武隈川・久慈川・阿賀川など大きな河川があり複雑な地勢を示す。東部には太平洋岸に沿って阿武隈高地が，中央部は磐梯吾妻を含む那須火山帯に属する奥羽山脈が連なり，西には越後山脈が迫っている。これらの山地山脈により，県全体は３つの地方に区分される。太平洋に面した浜通り，阿武隈高地と奥羽山脈に挟まれ阿武隈川の流れに沿って広がる中通り，奥羽山脈から西側の山々や会津高原，会津盆地を含めた会津地方である。

会津地方の気候は内陸性気候を示し，冬は寒冷で積雪が多く，山間部では数mに及ぶ事も多い。春は雪解け水により河川が増水するが，治水工事が発達している現在では被害はほとんどない。梅雨時は中・浜通りに比較すれば好天の日が多く，降水量もあまり多くない。夏は高温多湿であるが，雷雲の発生も多い。秋は盆地霧が多く発生し，時として視界がたいへん悪くなり交通事故などの原因にもなる。

荒屋敷・麻生館両遺跡がある耶麻郡塩川町は会津地方の中央北部，会津盆地のほぼ中心に当たり，地質学上は西南日本内帯の東端に位置する。会津盆地は塩川町の南隣，湯川村付近を中心として，南北におよそ30km，東西およそ12kmの南北に長い構造である。盆地の地表部は，北からは濁川，東からは猪苗代湖を源流とする日橋川，南からは南会津の山々を源流とする大川とその支流が葉脈状に盆地内を西進している。これらの河川により盆地内は，周辺の山地から運ばれた堆積物に広く

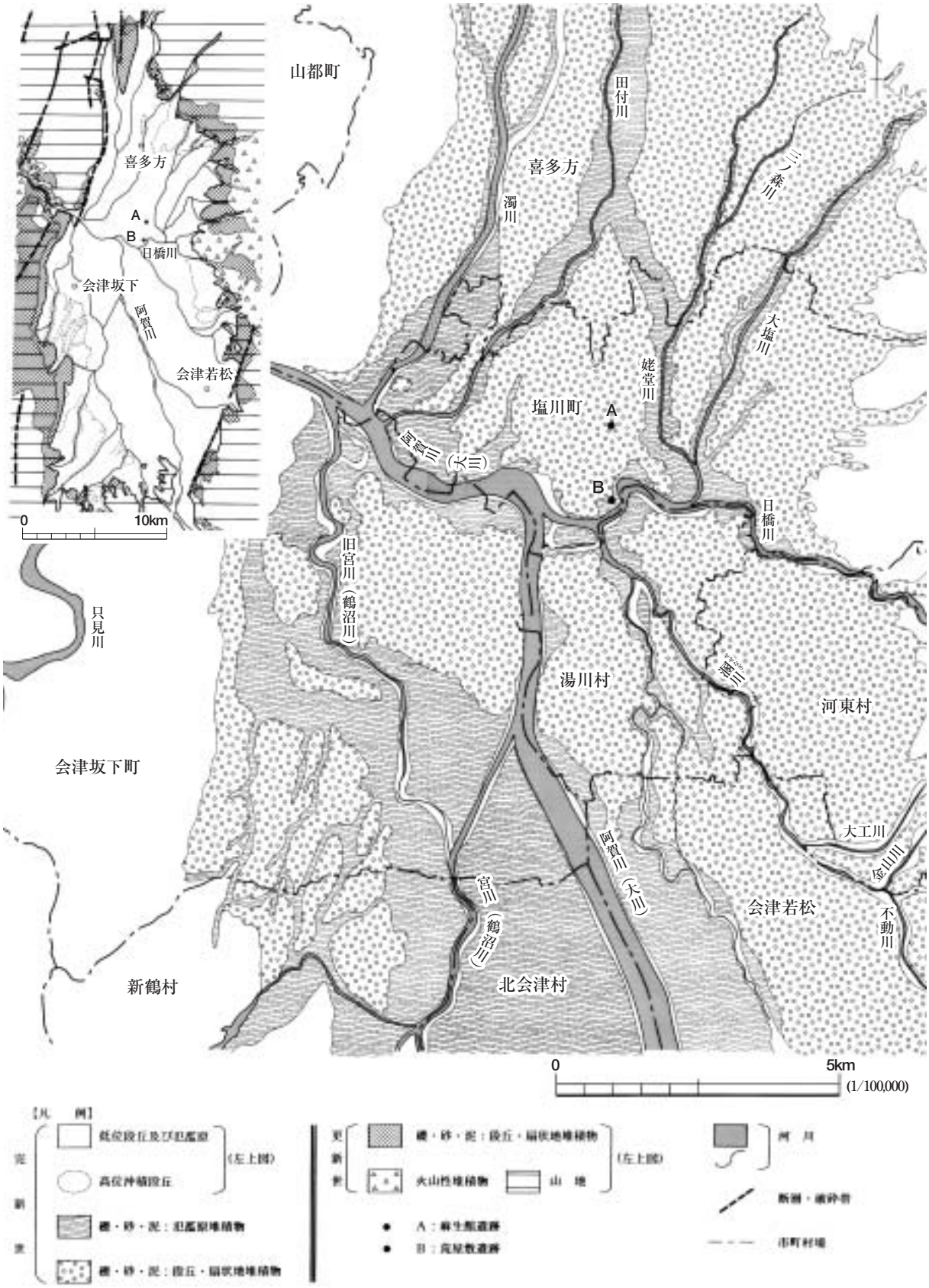


図5　周辺の地形・地質（鈴木・吉田・真鍋他：1976,1987をもとに作成・簡略化）

厚く覆われ，なだらかな沖積平野および扇状地となっている。これら堆積物は，年代的には第四紀完新世に属する。堆積物を運んだ河川は喜多方市慶徳町付近で一つに合流し，阿賀川となって越後山地の地峡をさらに西進し，新潟県に入り阿賀野川と名を変えて新潟から日本海に注ぐ。

盆地の周辺は，東に奥羽山脈，西に越後山地が南北に走る。東の山々は，新第三紀層を基岩とし，南部の会津若松市南東域では背中炙山安山岩，北部の塩川～喜多方市東部では猫魔ヶ岳火山噴出物が地表を覆っている。西の山々は，新第三紀鮮新世および第四紀更新世の堆積岩層を基岩とし，只見川流域には沼沢火山噴出物が堆積する。盆地南東部および北西部にそれぞれ南北に断層が走るが，この断層は有史以来しばしば活動しており，特に江戸時代初期の1611年の地震では，慶徳町付近の地峡で崩落および断層隆起があり，阿賀川がせき止められて『山崎新湖』が形成された。付近の集落は水没して多大な被害を生じ，元通り開削するまでに34年もの長き年月を要したことが記録として残っている。

今回発掘調査を実施した麻生館遺跡は，段丘・扇状地上に位置し，ごく僅かに南に傾斜した平坦面となっている。 同時に調査を行った荒屋敷遺跡は，盆地内堆積土のうち氾濫原と段丘・扇状地の境界に位置しており，遺跡東南部は旧河川流路，西北部は自然堤防および微高地となっている。

（菊田）

第５節　歴史的環境

町内では埋蔵文化財分布調査が終了していないので，歴史的環境については不明な点が多い。そこで，『福島県埋蔵文化財地図及び一覧表』（1984・10刊行），『福島県遺跡地図』（1996・３刊行），最近の文化財調査報告書を参考に概観していく。

旧石器時代の遺跡・遺物は現在まで町内では確認されていない。近隣では旧石器時代後期の遺跡として西会津町山本遺跡や高郷村塩坪遺跡がある。

縄文時代の遺跡は，町東部の標高1271.20ｍを測る雄国山麓西側を中心に数多く発見されている。地形的には西側に広がる扇状地に扇央から扇端に分布する傾向にある。遺跡地図には11ヵ所が確認されている。これらの遺跡の中で，常世原田遺跡は縄文時代早期中葉の貝殻条痕文系土器群で「常世式期」の標識遺跡である。この遺跡は，地元に在住する喜多方市の故二瓶清氏や湯川村の故宇佐見定憲氏によって注目され，昭和15（1940）年の桑山龍進氏の発掘以来，数回の小規模な調査が行われている。同遺跡は昭和54（1979）年に県指定史跡に指定され，その後吉田格氏が実施した昭和23年調査資料が福島県立博物館に寄贈され，平成９（1997）年には福島県重要文化財に指定されている。常世式土器は，貝殻腹縁文・平行沈線文・各種刺突文・波状文と底部が乳房状を呈する尖底土器等の特徴を持ち，その分布は広く東北地方一円に及んでいる。この他に，縄文時代の遺跡として上ノ台・南原・掘込・大原・森台・鶴塚遺跡がある。今回発掘調査を実施した麻生館・荒屋敷遺跡からは縄文時代後期～晩期にあたる新地式・大洞ＢＣ式の土器が出土している。

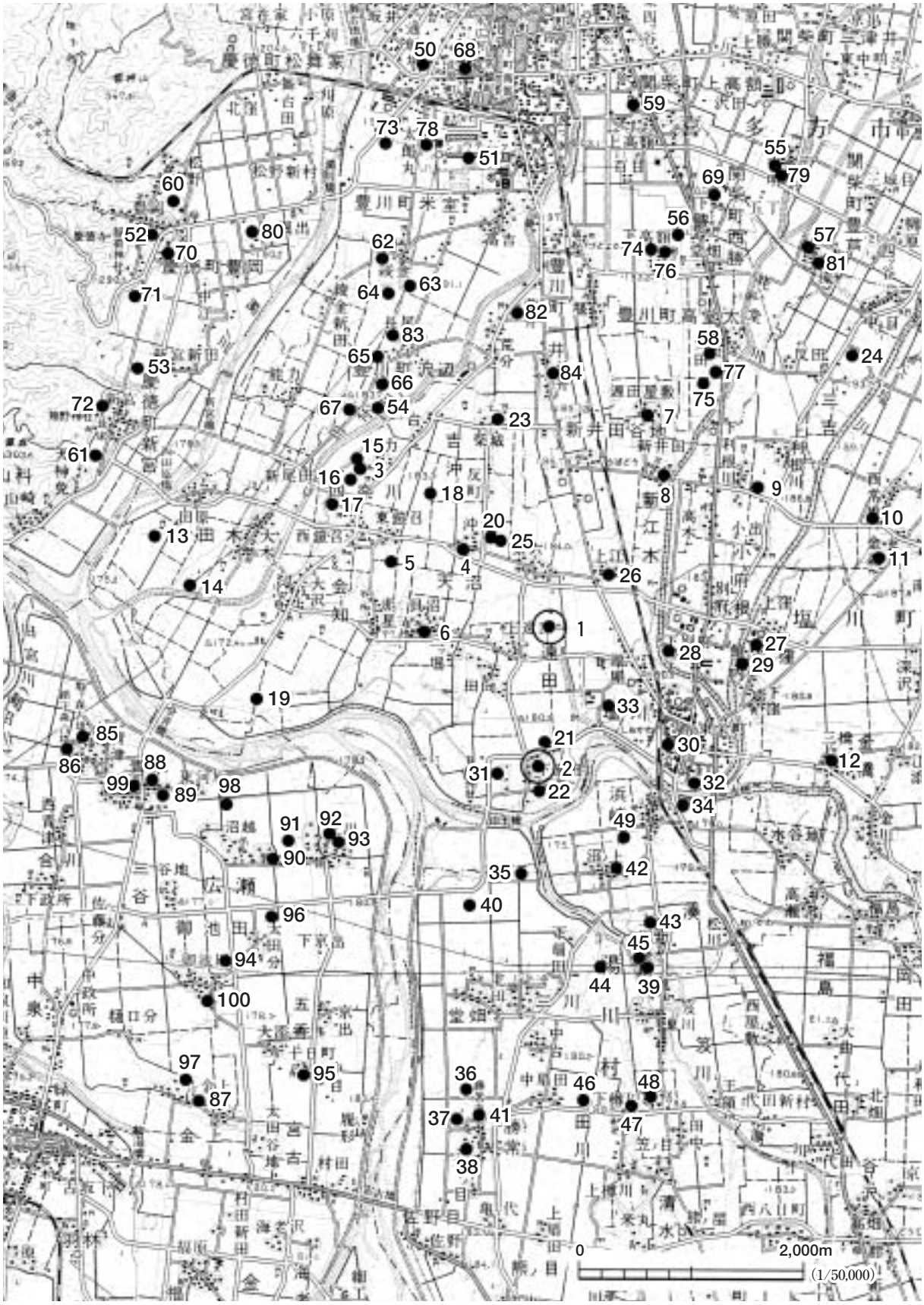


図6　周辺の遺跡

表2　周辺の遺跡一覧（１）

※No.は図６，遺跡番号は『福島県遺跡地図』（1996）に対応

No.	遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	遺　跡　の　概　要
1	40300049	**麻生館遺跡(麻生館跡)**	塩川町　遠田字麻生館	平安の集落跡・中世の館跡
2	40300073	**荒屋敷遺跡**	遠田字荒屋敷・灰塚他	縄文～古墳・平安・中近世の散布地
3	40300001	牛塚	四奈川字墓ノ前	古墳時代～近世の塚
4	40300002	沖舎利塔	吉沖字村前	中世・近世の石造物
5	40300003	鎧召・七ツ壇塚群	四奈川字千刈	古墳時代～近世の塚
6	40300004	貝沼館跡	天沼字貝沼	中世の城館跡
7	40300005	鏡ケ城跡	源太屋敷字前畑・館ノ腰	中世の城館跡
8	40300007	新井田・田辺館跡	新江木字新井田	中世の城館跡
9	40300008	下利根川石造供養塔	下利根川字仲田	中世の石造物
10	40300010	常世館跡	常世字西町	中世の城館跡
11	40300023	三橋館跡	金橋字舘ノ内	中世の城館跡
12	40300039	金森古墳	五合字金森甲	古墳時代の古墳
13	40300040	古屋敷遺跡	大田木字古屋敷	縄文・古墳～平安時代の散布地
14	40300042	鶴塚遺跡	大田木字鶴塚・下屋敷	縄文～平安時代の散布地
15	40300043	墓ノ前遺跡	四奈川字墓ノ前	奈良・平安時代の散布地
16	40300044	鏡ノ町遺跡Ａ	四奈川字鏡ノ町	奈良・平安時代の散布地
17	40300045	鏡ノ町遺跡Ｂ	四奈川字鏡ノ町	奈良・平安時代の散布地
18	40300046	妙見遺跡	吉沖字妙見	奈良・平安時代の散布地
19	40300047	内屋敷遺跡	会知字内屋敷甲	奈良・平安時代の散布地
20	40300048	舘ノ内遺跡	吉沖字舘ノ内	奈良・平安時代の散布地
21	40300050	下遠田館跡	遠田字荒屋敷・館ノ腰	中世の城館跡
22	40300051	下遠田石造供養塔	遠田字谷地中	中世の石造物
23	40300054	柴城跡	吉沖字柴城	中世の城館跡
24	40300056	南館館跡	三吉字南館・内屋敷・沢田	中世の城館跡
25	40300057	沖館跡	吉沖字館ノ内	中世の城館跡
26	40300060	上江館跡	新江木字館跡	中世の城館跡
27	40300061	丹波館跡	窪字館	中世の城館跡
28	40300063	別府館跡	小符根字館ノ内	中世の城館跡
29	40300064	上窪南館跡	窪字館ノ内・館野	中世の城館跡
30	40300066	小十郎館跡	塩川字館ノ内・堀目	中世の城館跡
31	40300067	新屋敷跡	遠田字新屋敷	中世の城館跡
32	40300068	柏木城館	塩川字古町・古城	中世の城館跡
33	40300069	沼ノ上遺跡	遠田字沼ノ上	縄文時代の貝塚，弥生・平安時代の散布地
34	42200001	浜崎城跡	湯川村　浜崎字北殿町	中世・近世の城館跡
35	42200002	北田城跡	三川字大館	中世の城館跡
36	42200003	堂後遺跡	勝常字堂後	弥生・奈良・平安時代の散布地
37	42200004	覚成上人墓	勝常字堂後	中世の墳墓
38	42200005	村南遺跡	勝常字村南	弥生時代の散布地
39	42200008	笈川館跡	笈川字舘	中世の城館跡
40	42200018	堂畑館跡	堂畑字大舘	中世の城館跡
41	42200019	勝常寺薬師堂	勝常字代舞	中世の社寺跡
42	42200020	沼ノ上遺跡	湊字沼ノ上	奈良・平安時代の散布地
43	42200021	上田谷地遺跡	湊字上田谷地	奈良・平安時代の散布地
44	42200022	下川原遺跡	笈川字下川原	奈良・平安時代の散布地
45	42200023	西川原北遺跡	笈川字西川原	奈良・平安時代の散布地
46	42200024	下樽川西遺跡	笈川字下樽川	奈良・平安時代の散布地
47	42200025	下樽川遺跡	笈川字下樽川	近世
48	42200026	殿田遺跡	笈川字殿田	縄文時代の散布地
49	42200029	浜崎館跡	湊字宮前	中世の城館跡
50	20800017	塚原壇	喜多方市　長源壇	中世の塚

表3　周辺の遺跡一覧（２）

※No.は図６，遺跡番号は『福島県遺跡地図』（1996）に対応

No.	遺跡番号	遺　跡　名	所　　在　　地	遺　跡　の　概　要
51	20800019	長内遺跡	喜多方市 豊川町米室字長内	弥生時代の散布地
52	20800020	慶徳城跡	慶徳町豊岡字今町	中世の城館跡
53	20800021	新宮城跡	慶徳町新宮字館内	中世の城館跡
54	20800022	八幡塚古墳	豊川町沢部字宮下	古墳時代の古墳
55	20800030	西中明板碑	関柴町西勝字三島	中世の石造物
56	20800036	水谷地古墳	豊川町高堂太字水谷地	古墳時代の古墳
57	20800037	布流板碑群	関柴町豊芦字村中	中世の石造物
58	20800041	太田板碑	豊川町高堂太字村中	中世の石造物
59	20800058	台畑遺跡	関柴町上高額字宮越	平安時代の散布地
60	20800067	木曽原遺跡	慶徳町豊岡字木曽原	古墳・平安時代の散布地
61	20800068	招木遺跡	慶徳町新宮字招木	平安時代の散布地
62	20800069	村前遺跡	豊川町米室字村前・綾金	奈良・平安時代の散布地
63	20800070	塚田Ａ遺跡	豊川町沢部字塚田	奈良・平安時代の散布地
64	20800071	塚田Ｂ遺跡	豊川町沢部字塚田	奈良・平安時代の散布地
65	20800072	長尾遺跡	豊川町沢部字長尾	平安時代・中世の散布地
66	20800073	前田遺跡	豊川町沢部字前田	奈良・平安時代の散布地
67	20800074	四十苅遺跡	豊川町沢部字四十苅	奈良・平安時代の散布地
68	20800076	塚原館跡	天満前	中世の城館跡
69	20800089	下勝館跡	関柴町西勝字館ノ内	中世の城館跡
70	20800094	新館跡	慶徳町豊岡字本町	中世の城館跡
71	20800095	八幡館跡	慶徳町豊岡字不動前	中世の城館跡
72	20800097	駿河館跡	慶徳町新宮字熊野	中世の城館跡
73	20800098	太郎丸西館跡	豊川町米室字館跡	中世の城館跡
74	20800099	下高額館跡	豊川町高堂太字千苅・村東	中世の城館跡
75	20800100	太田館跡	豊川町高堂太字館ノ内	奈良時代の散布地，中世の城館跡
76	20800108	下高額板碑	豊川町高堂太字村東	中世の石造物
77	20800110	於壇遺跡	豊川町高堂字於壇	奈良・平安時代の散布地
78	20800129	太郎丸東館跡	豊川町米室字太郎丸	中世の城館跡
79	20800130	中明館跡	関柴町西勝字館ノ内	中世の城館跡
80	20800133	谷地ノ城館	慶徳町豊岡字柳町	中世の城館跡
81	20800134	布流館跡	関柴町豊芦字布流	中世の城館跡
82	20800135	菅井館跡	豊川町一井	中世の城館跡
83	20800136	長尾館跡	豊川町沢部字長尾	中世の城館跡
84	20800137	渋井館跡	豊川町一井	中世の城館跡
85	42100009	亀ケ森古墳	会津坂下町青津字館ノ越	古墳時代の古墳
86	42100010	鎮守森古墳	青津字館ノ越・中西	古墳時代の古墳
87	42100030	金上城跡	金上字館	中世の城館跡
88	42100093	吉原遺跡	青木字吉原	縄文・古墳・平安時代の散布地
89	42100094	青木遺跡	青木字青木	平安時代の散布地
90	42100099	辻田遺跡	沼越字辻田	平安時代の散布地
91	42100100	高畑遺跡	沼越字高畑	縄文・弥生・平安時代・中世の散布地
92	42100101	中立川遺跡	立川字中立川	平安時代の散布地
93	42100102	東立川遺跡	立川字東立川	平安時代の散布地
94	42100105	御池田山ノ神遺跡	御池田字山ノ神・江免	平安時代・中世の散布地
95	42100131	中目経塚	五番字家ノ西	中世の塚
96	42100133	稲荷北遺跡	沼越字稲荷北	平安時代の散布地
97	42100163	金上村東遺跡	金上字村東	弥生・平安時代の散布地
98	42100176	古舘遺跡	沼越字古舘	平安時代・中世の散布地
99	42100179	樋渡館跡	樋島字樋渡	中世の城館跡
100	42100181	旭田館跡	御池田字旭田	中世の城館跡

弥生時代の遺跡は，町内平坦部の沖積地に立地する舘ノ内・堂後・村南・長内・高畑遺跡から土器片が出土している。まだ本格的な調査が実施されておらず，遺跡の性格や時期等は不明な点が多い。荒屋敷遺跡からは弥生土器の小片が出土しているが，時期は明確でない。

古墳時代に入ると会津盆地内でも数多くの古墳が築造されており，周辺の開発が進み支配階級の台頭が著しい時期である。会津盆地内では，前期の古墳群として塩川町から喜多方市周辺の深沢・田中舟森山・観音森（竹屋古墳群）・高森山古墳・十九壇古墳群などが，会津若松市周辺では会津大塚山・堂ヶ作古墳などが，会津坂下町の亀ヶ森・鎮守森古墳などが分布している。これらの古墳分布から会津盆地には，盆地東部・北西部・北東部に大きな勢力を持つ豪族の存在が考えられてきた。近年，塩川町舘ノ内遺跡から２基の方形周溝墓が発見されている。共に一辺10m程の規模で周溝のみの確認であったが，いずれも四隅が張り出す平面形態を示しており，周溝内からは北陸系土器も出土している。これらの特徴から山陰・北陸地方で確認されている「四隅突出型墳丘墓」の影響が推定され，東北地方における最古段階の周溝墓と考えられている。

次の中期～後期の古墳は，前期古墳同様に雄国山麓の末端部に数多く築造されており，七ツ壇・金森・狐壇・松崎・前畑・常世竹花・茶臼森古墳,明蓮寺・深沢前山古墳群などが確認されている。

古墳時代の集落跡は，古屋敷遺跡で古墳時代中期の豪族（首長）居館跡が，盆地平坦部の鶴塚遺跡や舘ノ内遺跡などで後期の集落跡が確認されている。町内に多く古墳が築造されているのに比べて集落の存在が確認されているものは少なく，今後に集落遺跡の発見が期待される。

奈良・平安時代に入ると,律令体制の地方浸透に伴い安定した社会が形成されたものと考えられ，会津盆地内では集落跡を中心として遺跡の数は爆発的に増加する。町内においても，沖積地にも遺跡が多く分布しており，会津郡もしくは耶麻郡の一部と考えられている。鏡ノ町遺跡Ａ（16）からは，数多くの建物や倉庫群，そして奈良三彩小壺や瓦塔片等の遺物が出土しており，地方官衙に関連する在庁官人の居宅跡と推定されている。盆地平坦部の田付川沿いに位置する鏡ノ町遺跡Ａを中心に舘ノ内遺跡をはじめとして，古屋敷・鶴塚・墓ノ前・鏡ノ町Ｂ・妙見・内屋敷・沼の上遺跡などが確認されている。麻生館遺跡からは３×５間の大型建物跡が検出されたほか，同時期と推定される比較的小型な建物跡，土師器・須恵器片が検出され，同時代の集落の様相が明らかになってきた。また，荒屋敷遺跡からも平安時代の９世紀後半を中心とした土師器，須恵器が流路跡を中心に数多く出土しており，土師器や須恵器には墨書や線刻を施されたものもあり，遺跡の性格を考える上でも興味深いものがある。

中世にはいると武家社会が成立し，新たな支配者が台頭する。鎌倉時代後半以降の会津地方では，三浦蘆名氏の勢力が伸び，その一族が各地を領していったと考えられている。本町内も位置的に北田城の北田氏と，新宮城の新宮氏の支配下にあったものと推定される。中世以降に城館跡を中心として町内外で多く確認されており，今回発掘調査を実施した麻生館遺跡近隣には沖館跡・上江館跡が，荒屋敷遺跡近隣には下遠田館跡・新屋敷跡が確認されている。城主名は記録も少ないが，沖館跡には山口沙弥道光，上江館跡には栗村弾正清政，下遠田館跡には三橋備前定重と二男の刑部重治

との伝承が残っている。

戦国時代に入ると，会津地方でも戦乱が相次いだ。その多くは戦国大名化する蘆名氏と中小在地領主との戦いであり，文亀２（1502）年には常世・三橋など会津盆地北東部の在地領主らが追い払われ，天文年間（1532～1554）には，会津地方の領主達の殆どは蘆名氏に服属し，蘆名盛氏の時代に全盛期を迎える。その後，蘆名氏の支配体制の矛盾が顕在化したり，家督相続や重臣間の対立が深まって，しだいに家勢も衰えてきた。天正17（1589）年６月には蘆名義広と伊達政宗による摺上原の戦いが行われ，伊達政宗が勝利した。蘆名氏を滅ぼして会津へ入った伊達政宗により，金川・三橋・塩川などが片倉景綱へ安堵されている。その後，豊臣秀吉による奥州仕置き以後の会津地方は，蒲生氏郷・秀行，上杉景勝と支配者が変遷し，関ヶ原の戦いを迎かえる。遺跡の周辺には，中世～近世にかけての塚・供養塔・石造物等が建立されており，当時の人々の信仰に関連する遺構が多数残っている。

近世（江戸時代）に入り幕府と藩で全国の土地や人民を支配する幕藩体制が確立し，会津地方でも上杉景勝から蒲生秀行（再蒲生），蒲生忠郷，加藤嘉明・明成氏の支配を経て保科（松平）氏の治世を迎え，明治時代に至る。現在では町の中心地である旧塩川村は，慶長13（1608）年出羽米沢に通じる檜原峠越米沢街道の宿駅に定められた。また，毎年暮れには旧塩川村に詰市と称される市が開設され，諸産物の売買が盛んに行われた。当時の塩川は会津藩内における阿賀川水運の起点であり，このため船問屋・米問屋が軒を並べ，藩の大阪廻米を納めるための蔵などが建ち並び，阿賀川水運や米沢街道の陸運の中継地として栄えたと伝えられる。この地域の主な特産物は米であったが，この他に薬用ニンジンの栽培があり，藩の専売品として全国有数の生産高を誇った。　（菊田）

参考文献

（地理的環境）

鈴木　敬治　他　1973　「喜多方地域の地質」　福島県

久保田鉄工株式会社　1987　『URBAN　KUBOTA　26』　久保田鉄工株式会社

和田　聡　他　1999　「古屋敷遺跡」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書４』　福島県耶麻郡塩川町教育委員会

（歴史的環境）

福島県教育委員会　1988　『福島県の中世城館跡』

文化６年会津藩編　1983　『新編会津風土記』　雄山閣

塩川町史編纂委員会　1966　『塩川町史』　塩川町

福島県教育委員会　1996　『福島県遺跡地図　会津地方』　福島県

和田　聡　他　1999　「古屋敷遺跡」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書４』　福島県耶麻郡塩川町教育委員会

森　幸彦　他　1999　『常世原田遺跡―吉田格氏昭和23年調査資料―』福島県立博物館

第２章　遺跡の概要

第１節　遺跡の位置と地形

麻生館遺跡は，福島県耶麻郡塩川町大字遠田字麻生館に位置する。塩川町は南に湯川村・河東町，東に磐梯町・北塩原村，北に喜多方市，西に会津坂下町と境を接している。猪苗代湖十六橋水門を水源とする日橋川が町の南境を東から西に流れ，町の西部で南会津を源流とする阿賀川と合流し，阿賀野川と名前を変えて日本海へ西流する。町の北東端は湿原植物で有名な雄国沼である。塩川町のほぼ中央を南北にＪＲ磐越西線及び国道121号線が縦断しており，麻生館遺跡はＪＲ磐越西線塩川駅から北西へ約７kmの位置にある。本遺跡から喜多方市中心部までは北へおよそ2.5km，会津若松市中心部までは南南東へおよそ６kmである。

本遺跡は町の東西を南流する姥堂川と田付川に挟まれた沖積平野の微高地上に位置し，周辺一帯は広く平坦な地形を呈している。遺跡周辺の表面地質は礫，砂，泥などからなり，阿賀川とその支流によって形成された氾濫原及び扇状地堆積物である。また後述するが，６世紀中葉に噴出したとされる榛名山二ッ岳伊香保テフラ（Ｈｒ－ＦＰ），さらに10世紀前半に噴出したとされる十和田ａテフラ（Ｔｏ－ａ）を含んだ土壌層が一帯を薄く覆っていることが確認された（付章参照）。遺跡の周辺は水田が広がる穀倉地帯であり，麻生館遺跡も調査前は水田として利用されていた。そのため，調査区内は遠田・貝沼用水が縦断するなど灌漑工事やそれに伴う土地区画改良工事が実施されており，本遺跡は原地形の上部を既に削平されてしまっている。

今回発掘調査を実施した範囲は，会津縦貫北道路予定路線内にかかる6,200　を対象としている。地山面（Ｌ　）の標高は181.50m～182.00mを測り，調査区内は南東部に向かって緩やかに傾斜している。また調査区南西部の一部は著しく削平され，周囲より一段低くなっていた。

周辺には，塩川町教育委員会により調査された沖館跡をはじめとし，上江館跡，貝沼館跡，柴城館などの中世城館跡が多数存在する。また鏡ノ町遺跡Ａ・Ｂ，内屋敷遺跡，古屋敷遺跡など古代～中世にかけての集落跡の調査も行われている。本遺跡と同様に今年度発掘調査を実施した荒屋敷遺跡は，南方約1.2kmの下遠田日橋川右岸に所在する。　（菊田）

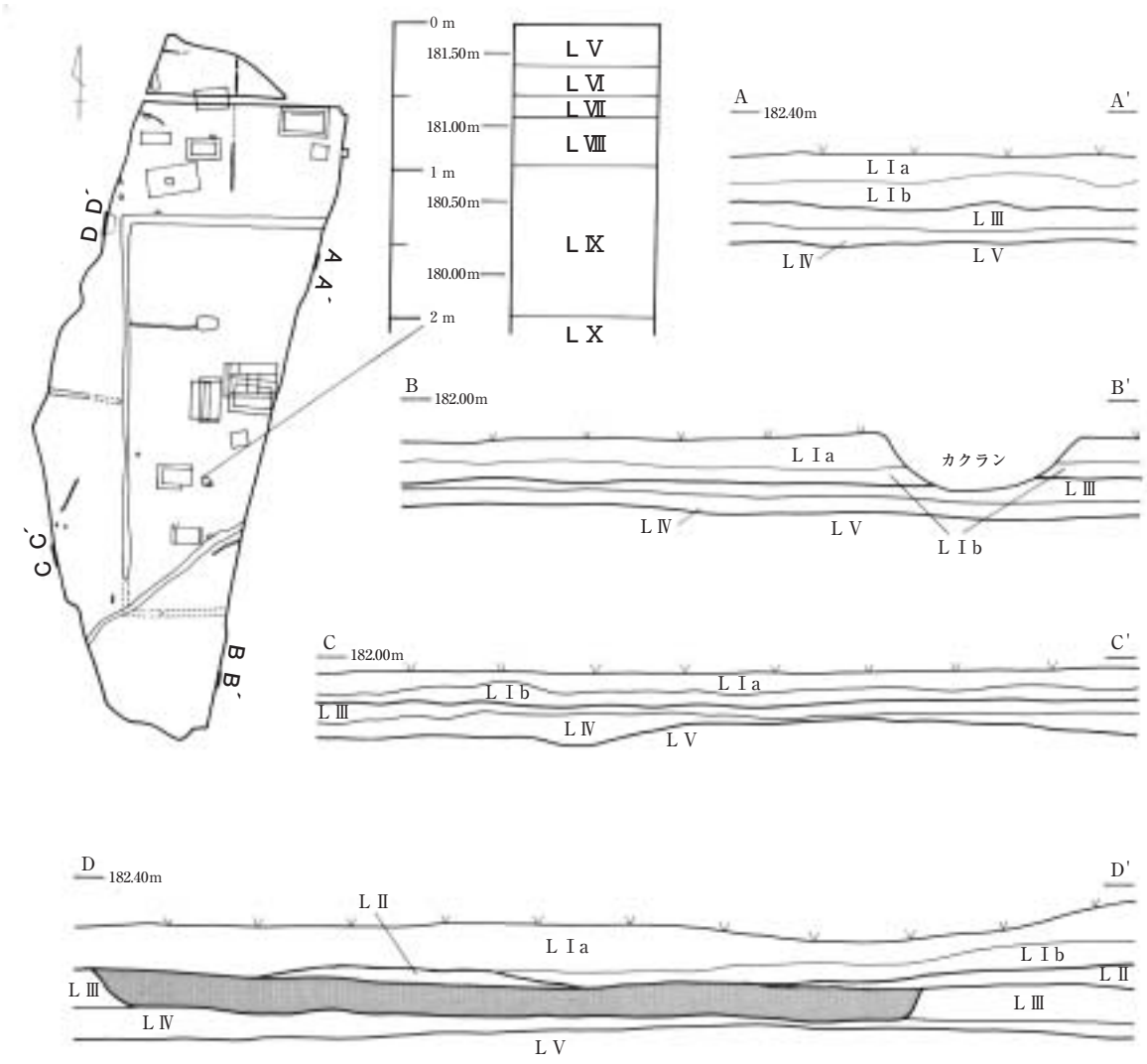
第２節　基 本 土 層　（図７，図版４）

麻生館遺跡における堆積土は，調査区内においてほぼ一様である。大きく10層に分層され，Ｌ～Ｌ　と表記した。土層観察は調査区境の壁面を利用し，南北に長い調査区の形状を勘案して，北東部（ＡＡ′），南東部（ＢＢ′），南西部（ＣＣ′），北西部（ＤＤ′）の４箇所で記録を行っている。また調査区中央に位置する２号井戸跡の精査後，遺構の断割りを行いＬ　以下の土層を確認，記録

を行っている。以下各層の特徴と分布を述べる。なおＬ　，Ｌ　はテフラ同定分析を行い，Ｌ　は十和田ａテフラ（Ｔｏ－ａ），Ｌ　は榛名山二ツ岳伊香保テフラ（Ｈｒ－ＦＰ）を含む土壌層と判断された。詳細については巻末の付章を参照していただきたい。

Ｌ　：水田耕作土，及び水田床土となる盛土層をＬ　とし，前者をＬ　ａ（10YR4/2：灰黄褐色シルト），後者をＬ　ｂ（10YR4/3：にぶい黄褐色シルト）に細分する。調査区全域に分布する。盛土層となる本層が調査区全域を覆っていることから，原地形の表面は全面的に失われている可能性が高い。

Ｌ　：黒褐色シルト（10YR2/2）質土である。調査区北西部の限られた範囲にのみ認められた。



基本土層

ＬⅠa	10YR4/2	灰黄褐色シルト（耕作土）	ＬⅤ	7.5YR4/6	褐色シルト（古代遺構確認面）
ＬⅠb	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト（水田床土）	ＬⅥ	10YR7/1	灰白色粘質土
ＬⅡ	10YR2/2	黒褐色シルト（遺物包含層）	ＬⅦ	10YR7/6	明黄褐色粘質土
ＬⅢ	10YR6/4	にぶい黄橙色シルト（テフラを含む土壌層，中世遺構確認面）	ＬⅧ	10YR8/3	浅黄橙色粘質土
ＬⅣ	7.5YR5/2	灰褐色砂質土（テフラを含む土壌層）	ＬⅨ	10YR6/1	褐灰色粘質土
			ＬⅩ	10YR7/1	灰白色砂質土

10号土坑堆積土

0　1 m（1/40）

図7　基本土層

層中に古代の土師器，須恵器が多量に含まれるため，本層については該期の遺物包含層と認識し，第３章第６節で報告している。ただし本層直下Ｌ　の形成が10世紀以降と推定されるため，本層は再堆積層との判断が導かれる。本層と同様の黒褐色土は，次節で述べる範囲確認調査において調査区外北側でも確認され，さらに調査した遺構内堆積土にも認められた。そのため，地形改変前はＬ　とした黒褐色土層が薄く周辺全域を覆っており，本層は古代以降の旧表土であった可能性が高い。原地形はやや起伏を有し，本層は調査区内の僅かに窪んだ範囲に遺存したものであろう。

Ｌ　：にぶい黄橙色シルト（10YR6/4）質土である。本層は一部で欠層するなど堆積状況に薄厚がみられるが，概ね調査区内全域を薄く覆っていた。ただし，削平が著しい調査区南西部では欠層する。また調査区北西部における堆積は薄く，所々で欠層する。層中にはパミス，ガラス鉱物が多量に含まれていたため，土壌をサンプリングし，テフラ同定分析にかけた。その結果，本層は十和田ａテフラ（Ｔｏ－ａ）を含んだ土壌層との判断が得られ，本層の形成は10世紀以降と認識される。中世以降とした遺構群の確認面であるが，表土除去作業の際，調査区中央～東側の広い範囲でこのＬ　及びＬ　を除去してしまい，この範囲の遺構の一部を失ってしまっている。層中から遺物の出土は確認されていない。

Ｌ　：灰褐色砂（7.5YR5/2）質土である。本層はＬ　同様，一部で欠層するなど堆積状況に薄厚がみられるが，概ね調査区内全域を薄く覆っていた。ただし，削平が著しい調査区南西部では欠層する。層中にはパミス，ガラス鉱物などの火山性堆積物が極多量に含まれており，土壌をサンプリングし，テフラ同定分析にかけた。その結果，榛名山二ツ岳伊香保テフラ（Ｈｒ－ＦＰ）を含む土壌層との判断が得られ，本層の形成は６世紀以降，10世紀までと認識される。分析結果は，本層が古代（９世紀後半）とした遺構群の確認面である可能性が高いことを示すが，調査時において本層からの遺構の掘り込みは確認できていない。これは，表土除去作業の際，調査区中央～東側の広い範囲で本層を除去してしまったこと，および本層が欠層，あるいは層厚の非常に薄い範囲が存在したためと考えられる。なお層中から遺物の出土は確認されていない。

Ｌ　：褐色シルト（7.5YR4/6）質土である。調査区全域を覆っており，本層以下が地山層となる。Ｌ　，Ｌ　を除去してしまった範囲，及びこれらが欠層する範囲において遺構確認面となった。Ｌ　上面で遺構を精査した範囲においては，主に２ｍ×２ｍのトレンチを数箇所に入れ，本層上面まで下げたが，遺構，遺物は検出されていない。

Ｌ　：灰白色粘質土　（10YR7/1）　層厚20　。

Ｌ　：明黄褐色粘質土（10YR7/6）　層厚14　。

Ｌ　：浅黄褐色粘質土（10YR8/3）　層厚34　。

Ｌ　：褐灰色粘質土　（10YR6/1）　層厚103　。

Ｌ　：灰白色砂質土　（10YR7/1）　層厚未確認。著しい湧水を認める。

Ｌ　～Ｌ　については２号井戸跡を断割った際に確認した地山層であり，主に色調と土質，層厚を記した。いずれも砂質土層や粘質土層であり，本遺跡周辺の基盤層が礫・砂・泥などの扇状地堆積物であるとの認識と矛盾しない。なお２号井戸跡はＬ　まで掘り抜いており，この層より著しい湧水が認められている。（横須賀）

第３節　範囲確認調査　（図８，表４）

今回の発掘調査では，道路・用水部分の付け替えなど条件整備の都合上，まず中央部から調査を行い，その後調査区北側の農業用道路以北，南側の畑作地部分の表土除去作業を行うという手順を踏んだ。調査区北側部分の表土除去・遺構検出作業を行った際，この範囲の遺構密度が高いことに注意に及び，遺跡範囲外としていた発掘調査区北端から県道までの約12,000　について，トレンチ調査による遺跡の範囲確認を行うに至った。結果から述べれば，遺跡の範囲は発掘調査区から北へは広がらず，発掘調査範囲は現状のままとなった。ただしトレンチ調査により発掘調査区北側外の土層堆積状況が明らかとなり，原地形復元の参考ともなる。以下調査の概要を述べる。

トレンチは２ｍ×10ｍを11本（２・４～14Ｔ），２ｍ×15ｍを２本（１・３Ｔ），1.5ｍ×10ｍ（２Ｔ）を１本，合計14本265　を設定した（表４）。発掘調査区に近い範囲，及び廃土置き場としていた範囲を取り巻くようその周囲に重点的にトレンチを設定している。その結果遺構が検出されたのは，調査区内未着手部分から設定した２Ｔのみであり，遺物についても極めて希薄な出土状況であった。なお堆積土は発掘調査範囲内のＬ　～Ｌ　が認められ，その内容については前節を参照していただきたい。土層観察の結果，堆積状況は大きく以下の３種類に分けられる。

①Ｌ　・Ｌ　～Ｌ　が認められ，Ｌ　が欠層する　…　１～３・７・８・12Ｔ
②Ｌ　～Ｌ　まで欠層なく認められる　…　４～６・９・10・14Ｔ
③Ｌ　直下がＬ　となり，Ｌ　～Ｌ　が欠層する　…　11・13Ｔ

①とした堆積状況を示すトレンチは，発掘調査区と隣接した範囲に設定したもの，及び確認調査範囲の北側，県道に近い位置にある。発掘調査区内における狭い範囲を除いた土層堆積状況と同様であり，これと矛盾しない。②は確認調査範囲の中央部分，及び南東部分に集中する。黒褐色土（Ｌ　）が遺存し，この層が古代以降の旧表土との認識（前節参照）から，周囲よりやや標高の低い地形であったと認識できる。９Ｔ－14Ｔ－６Ｔと繋がる東西のラインはＬ　が厚く堆積しており，低い沢状の地形をなしていたことが推定される。なお発掘調査区内Ｌ　のような遺物の多量出土は認められなかった。③は確認調査範囲の中央南寄り，①，②としたトレンチに囲まれるような形で位置する。Ｌ　（盛土）直下がＬ　となるため，表面が著しく削平されたものと考えられる。周囲よりやや標高の高い地形が復元できる。

以上の様相から復元される周辺地形は次のようになる。確認範囲中央は低い沢状の地形を呈し，周囲を南北に分ける。その南は小丘陵状となり，確認範囲の南西方向，発掘調査範囲北東部にかけ

表4　範囲確認調査トレンチ一覧

トレンチ	確認土層	遺構	出土遺物	トレンチ	確認土層	遺構	出土遺物
1T	L　・　～		土師器・須恵器	8T	L　・　～		
2T	L　・　～	溝跡	土師器・須恵器	9T	L　～		
3T	L　・　～			10T	L　～		
4T	L　～		土師器・須恵器	11T	L　・		
5T	L　～			12T	L　・　～		土師器・須恵器
6T	L　～		須恵器・陶器	13T	L　・		
7T	L　・　～			14T	L　～		

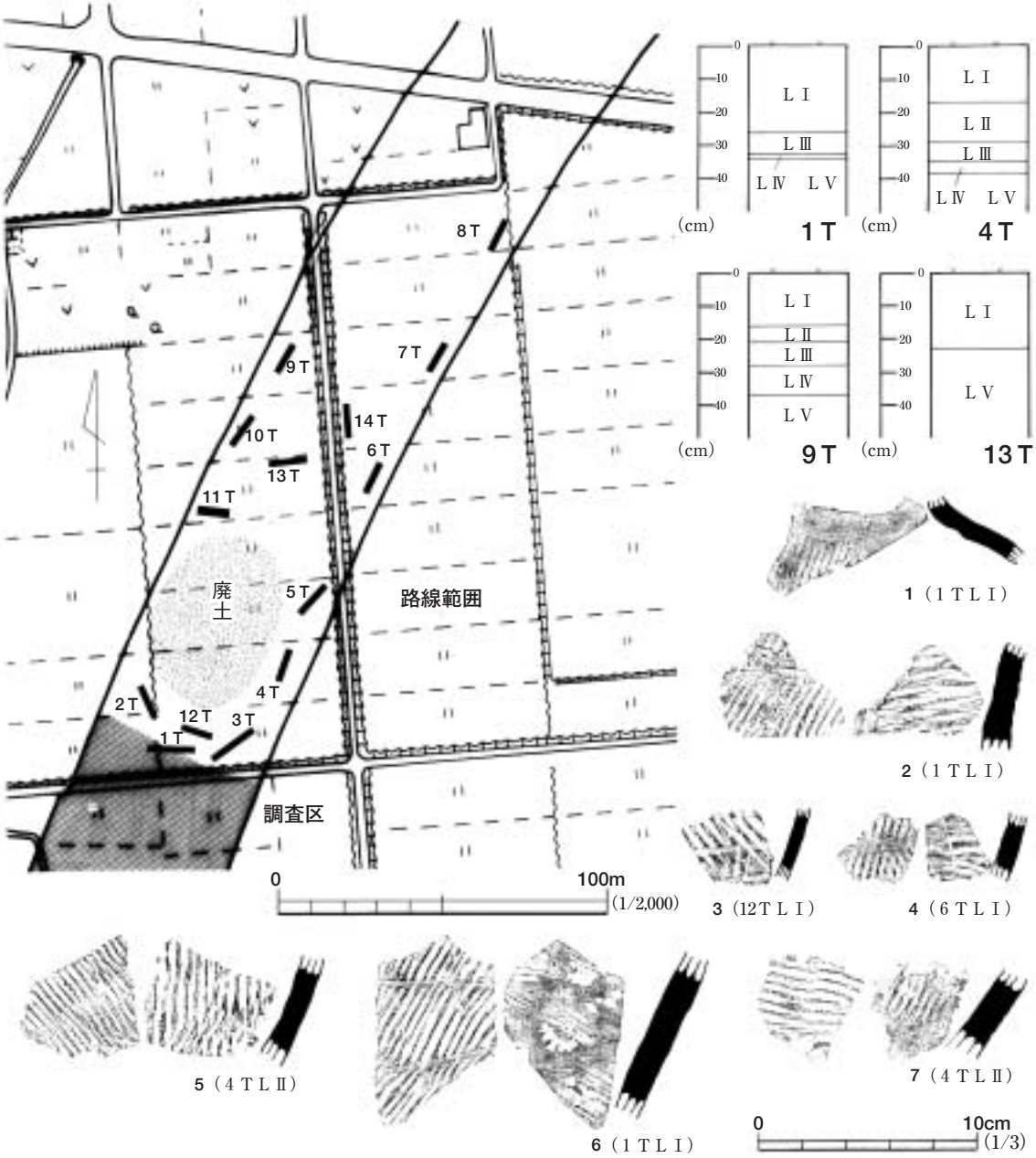


図8　トレンチ配置図，出土遺物

てはやや地形的に窪む。また発掘調査区を含めて全体的に南東方向に非常に緩やかに傾斜する。

トレンチ内Ｌ　（盛土）・Ｌ　中からは古代の土師器・須恵器，近世陶器が僅かに認められた。このうち須恵器７点のみ図８に示し，報告しておく。図８－１は甕の肩部，２～７は甕の体部片である。すべて外面にはタタキメが残り，横方向に２・４にはカキメ，３・６には螺状沈線文が認められる。２・４～７の内面には平行当具痕が残り，６はこれを消すようにナデが加えられている。これらの遺物は近世の陶磁器類を除き，ほぼ平安時代前半，およそ９世紀後半を中心とした年代を示す資料である。後述するように発掘調査範囲の北西部分には該期の掘立柱建物跡や遺物包含層が存在し，この範囲及びその西側一帯に集落が存在した可能性が高い。ここに示した遺物は，調査区内出土の遺物と同様，この集落に起源をもつものと考えられる。

今回の範囲確認調査では遺構が確認されず，発掘調査範囲がさらに北に広がることはなかった。しかし，発掘調査において検出された平安時代の集落，及び中世末の館跡は調査範囲より北には広がらず，両者ともその北際を確定することができたことは一つの成果であろう。Ｌ　，Ｌ　がほぼ地表面を覆っていた発掘調査区内とはやや異なり，これより北の範囲については削平などによる地形改変以前，やや起伏に富んだ地形であったことも明らかとなった。古代の集落及び中世末の館跡は，この地形的に起伏を含んだ土地を避け，比較的平坦な範囲を選定し，展開していったものと考えられる。

（横須賀）

第４節　遺構の分布　（図９）

検出された遺構の内訳は，掘立柱建物跡14棟，柱列跡１列，土坑14基，井戸跡２基，溝跡11条，ピット群５箇所，遺物包含層１箇所である。調査区内はほぼ平坦な地形を呈しており，現状から遺構の分布状況に地形的な要素は看取できない。遺構は，調査区の中央を三方に囲郭し東側調査区外へ延びる１号溝跡の内側，北外側，南・西外側の３箇所に分布域が分かれる。以下この分布域毎に遺構の分布状況を整理しておく。

１号溝跡の北外側は，今回の調査で最も遺構密度が高い範囲である。検出した遺構は，出土遺物や遺構の特徴など調査成果から得られた年代観から，大きく平安時代と中世に２分することができる。平安時代の遺構は西側部分に集中し，掘立柱建物跡３棟（ＳＢ01・13・14），遺物包含層（ＳＨ）１箇所が認められた。遺物包含層と遺構の分布状況から，該期集落の中心は調査区外北西部にあると推定される。建物跡３棟はそれぞれ軸線方向を一にしており，集落景観は規則的な建物の配置形態を採る可能性が高い。

中世とした遺構は掘立柱建物跡４棟（ＳＢ08～10・12），柱列跡１列（ＳＡ01），土坑４基（ＳＫ10・12～14），井戸跡１基（ＳＥ01），ピット群２箇所（Ａ・Ｂ群）である。掘立柱建物跡４棟はいずれも１号溝跡北辺に沿い，東西棟の建物となっている。４棟の建物跡はそれぞれ規模・形態を異にするものの，軸線方向を一にとり，ほぼ同時期に並存していたものと推測される。また２箇所の

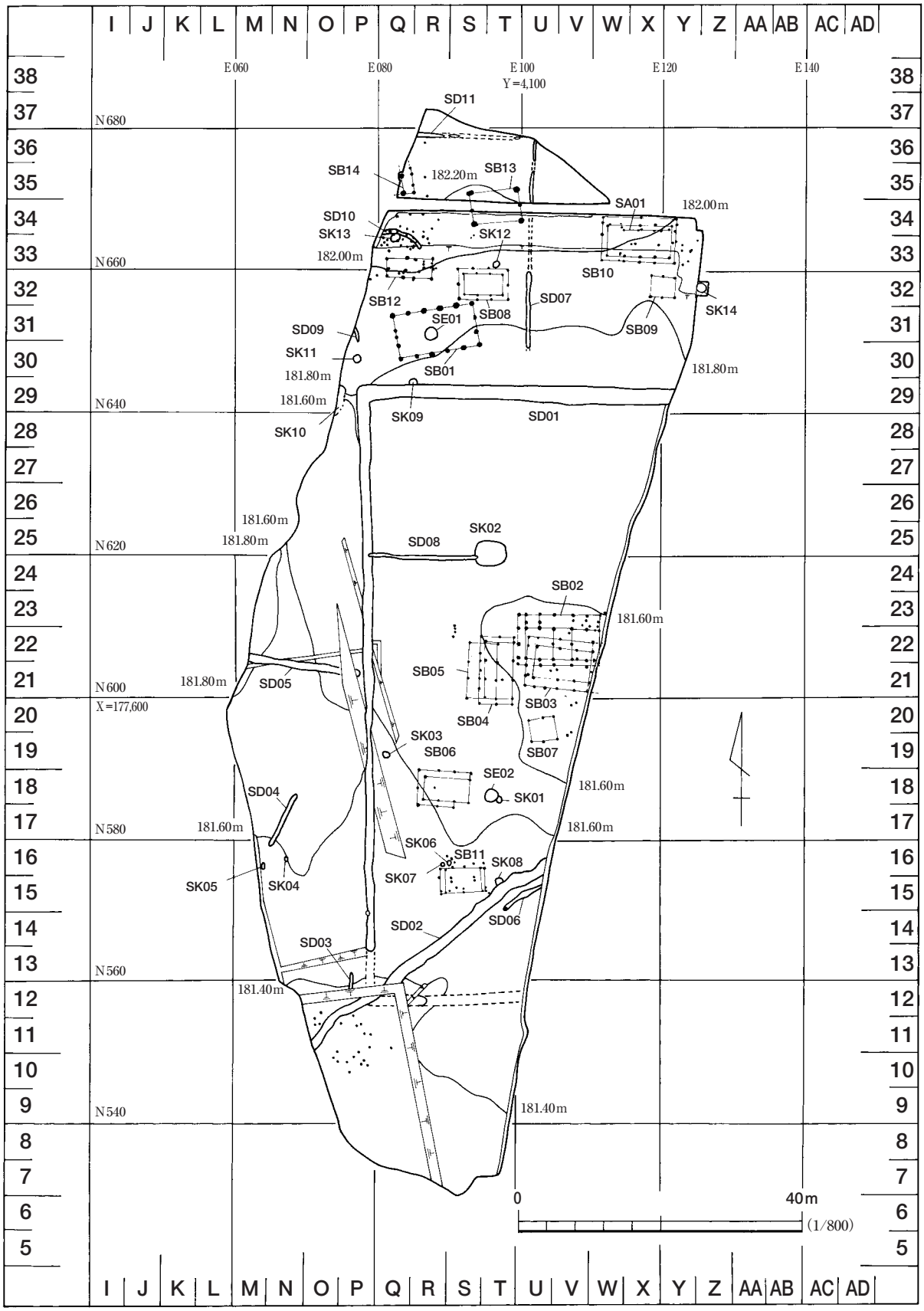

I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z AA AB AC AD
38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5
E060
E080
E100
Y=4,100
E120
E140
N680
N660
N640
N620
N600
X=177,600
N580
N560
N540
SD11
SB14
182.20m
SB13
SA01
182.00m
SD10
SK13
SK12
182.00m
SB10
SB12
SD07
SK14
SE01
SB08
SB09
SD09
SK11
181.80m
SB01
181.80m
181.60m
SK09
SD01
SK10
181.60m
181.80m
SK02
SD08
SB02
181.60m
SB05
181.80m
SD05
SB03
SB04
SK03
SB06
SB07
SE02
181.60m
SK01
SD04
181.60m
181.60m
SK06
SB11
SK08
SK07
SK05
SK04
SD06
SD02
SD03
181.40m
181.40m
0
40m
(1/800)

図9　遺構配置図

ピット群はそれぞれ東西の調査区外に範囲が広がるようである。

この他近世以降と推定される溝跡２条（ＳＤ07・11），年代不詳の土坑２基（ＳＫ09・11），溝跡２条（ＳＤ09・10）が存在する。７・11号溝跡及び１号溝跡内部に位置する８号溝跡は，その位置関係や形態，規模から本来同一遺構である可能性が高い。

１号溝跡の内側からは掘立柱建物跡６棟，土坑６基，井戸跡１基，溝跡３条，ピット群２箇所が検出されている。掘立柱建物跡（ＳＢ02～07・11），土坑１基（ＳＫ02），井戸跡（ＳＥ02），ピット群（Ｃ・Ｄ群）は中世に属すると考えられる。掘立柱建物跡は同一範囲内での重複が認められ，該期は少なくとも２小期に分かれることが確認できた。このうち２・３号建物跡は，その規模や溝跡の中心に近い位置関係から，該期の中心的な建物と考えられる。また４・５号建物跡はこれと隣接し，主軸方向を直交させている。６・11号建物跡，２号土坑は中心の建物群からやや離れた位置に所在し，６号建物跡に隣接して２号井戸跡が存在する。

この他，平安時代の土坑２基（ＳＫ01・03），時期不明の土坑３基（ＳＫ06～08），近世以降の溝跡１条（ＳＤ08），古代以前の溝跡２条（ＳＤ02・06）が存在する。

１号溝跡西・南側からは土坑２基，溝跡３条，ピット群１箇所が検出された。遺構の希薄な範囲である。土坑（ＳＫ04・05）は平安時代，ピット群（Ｅ群）は中世に属すると考えられる。ピット群はさらに西側調査区外へ範囲が広がるようである。溝跡（ＳＤ03～05）の年代は不明である。

以上，検出された遺構は主に時期的に２大別される，平安時代の遺構群は主に調査区北西部に集中し，一部の土坑が調査区内に散在する。中世とした遺構群は堀跡と考えられる１号溝跡の内側，及び北外側に集中する。これらは館跡を構成する遺構群と考えられ，調査区外東側を除いて館跡のほぼ西半の状況が明らかとなっている。（横須賀）

第３章　遺構と遺物

第１節　掘立柱建物跡・柱列跡　（図10・11）

今回の調査で検出された掘立柱建物跡は14棟，柱列跡は１列であり，大きく調査区の北部，及び東部中央の２箇所に分布範囲が分かれる。調査区の北部，Ｑ～Ｙ30～35グリッドの範囲では建物跡７棟と柱列跡１列が調査されている（図10）。これらの遺構群は，建物の軸線方向や柱穴の掘形規模から大きく２時期に分かれ，３棟が平安時代前半（９世紀後半），残る４棟及び柱列跡が中世末（15世紀末～16世紀代）に属すると考えられる。大型，方形の１号溝跡に区画された中央部，及び調査区西側中央，Ｒ～Ｗ15～23グリッドの範囲からは７棟の建物跡が確認されている（図11）。いずれも中世末に属すると考えられ，１号溝跡や調査区北部における４棟の建物跡，及び柱列跡との有機的な関連が予想される。２・３号建物跡，４・５号建物跡はそれぞれ重複関係にあり，該期は連続した２小期に分かれるようである。

なお各遺構を報告するに際し，規模・柱間寸法は柱痕の中心を結んだ数値で示し，柱痕の遺存が確認できなかったものは底面の中心部から計測している。柱間寸法については0.05ｍを単位として平面図に記載し，柱痕を基点にしていないものは（　）で示した。また，柱穴に直接伴う遺物については平面図に記載している（縮尺不同）。

１号掘立柱建物跡　ＳＢ01

遺　　構（図10・12・13，図版５・６）

１号建物跡は，調査区北端付近のＱ～Ｓ30・31グリッドに位置し，１号溝跡の北４ｍあまりの場所にある。遺構確認面はＬ　上面，その標高は181.90ｍである。建物のほぼ中央には，１号井戸跡が存在する。また柱穴の一部は，遺物包含層としたＬ　に覆われていた。近接して北には８・12号建物跡が位置し，南には１号溝跡が東西に走る。

本建物跡は南北梁行き6.0ｍ，東西桁行き11.3ｍの規模を測り，平面積は67.8　となる。建物の長軸はＮ79°Ｅである。この地域の磁偏差は西偏７°20′であるから，磁北に対する長軸方向はＮ86°20′となる。

本建物跡を構成すると思われる柱穴を17個確認した。北西隅の柱穴をＰ１とし，時計回りにＰ１，Ｐ２，Ｐ３…Ｐ17と呼称した。北桁行きは，Ｐ１～Ｐ６で構成され，その総長は11.35ｍである。それぞれの柱穴の柱間寸法は2.15～2.4ｍの範囲にあり，その平均は2.27ｍを測る。掘形底面の標高は，181.42ｍ～181.66ｍである。これに対応する南桁行きはＰ９～Ｐ14で構成される。総長は11.3ｍ，その柱間寸法もまた2.1～2.45ｍの範囲にあり，平均は2.27ｍである。掘形底面の標高は181.40ｍ～181.56ｍである。東梁行きは，Ｐ６～Ｐ９で構成される。梁行きの総長は6.0ｍ，柱間寸法は1.95

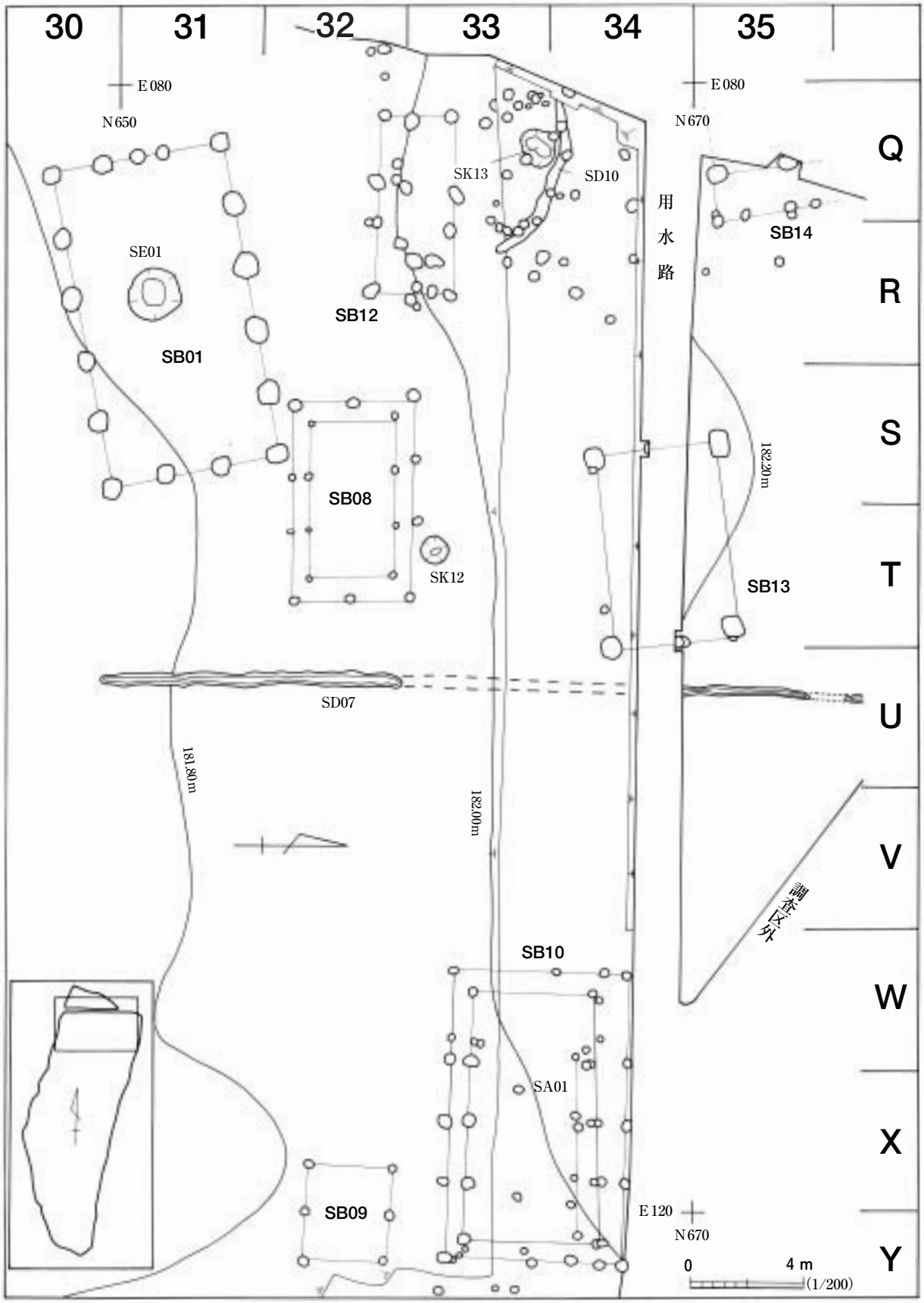


図10　掘立柱建物跡配置図（１）

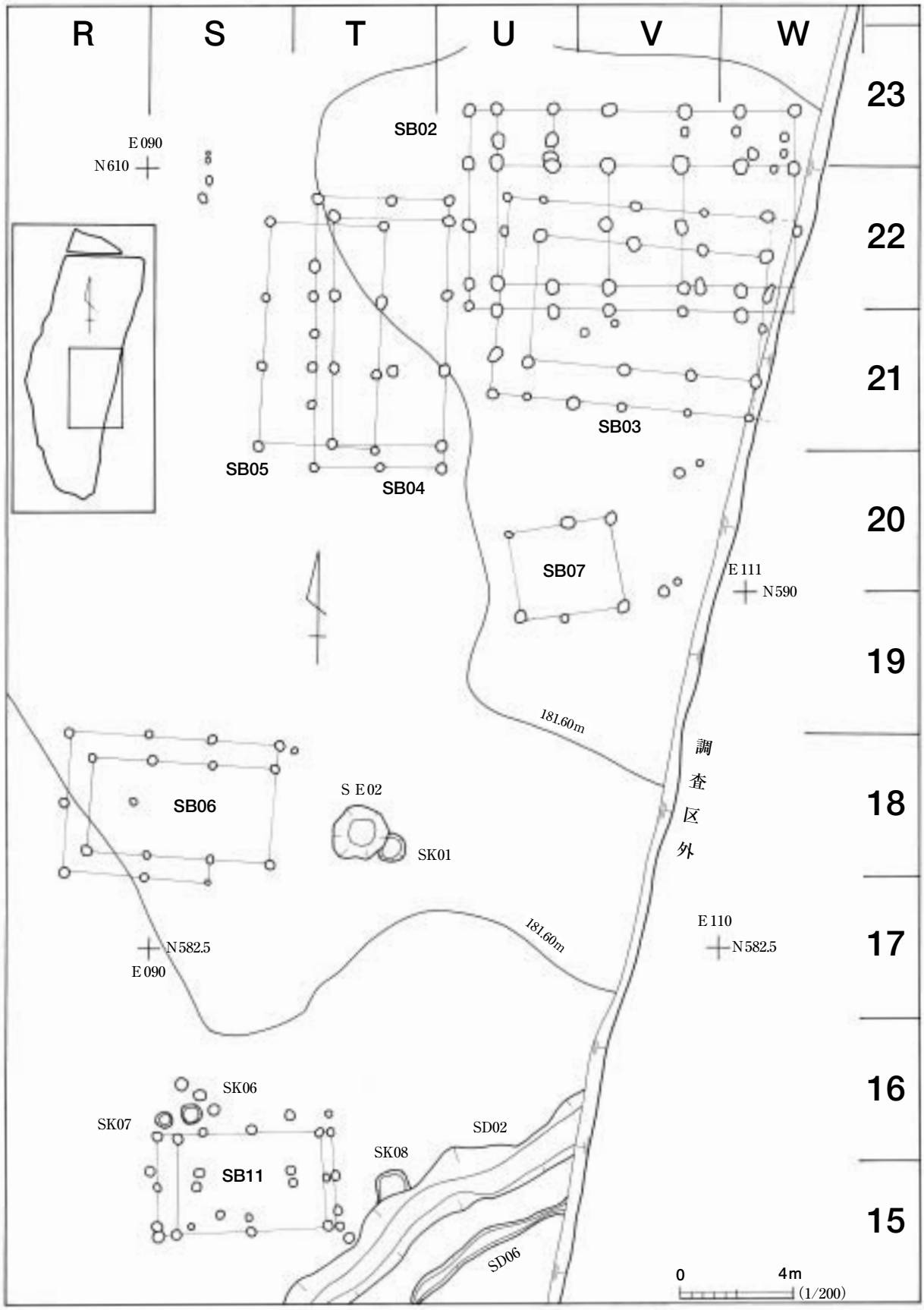
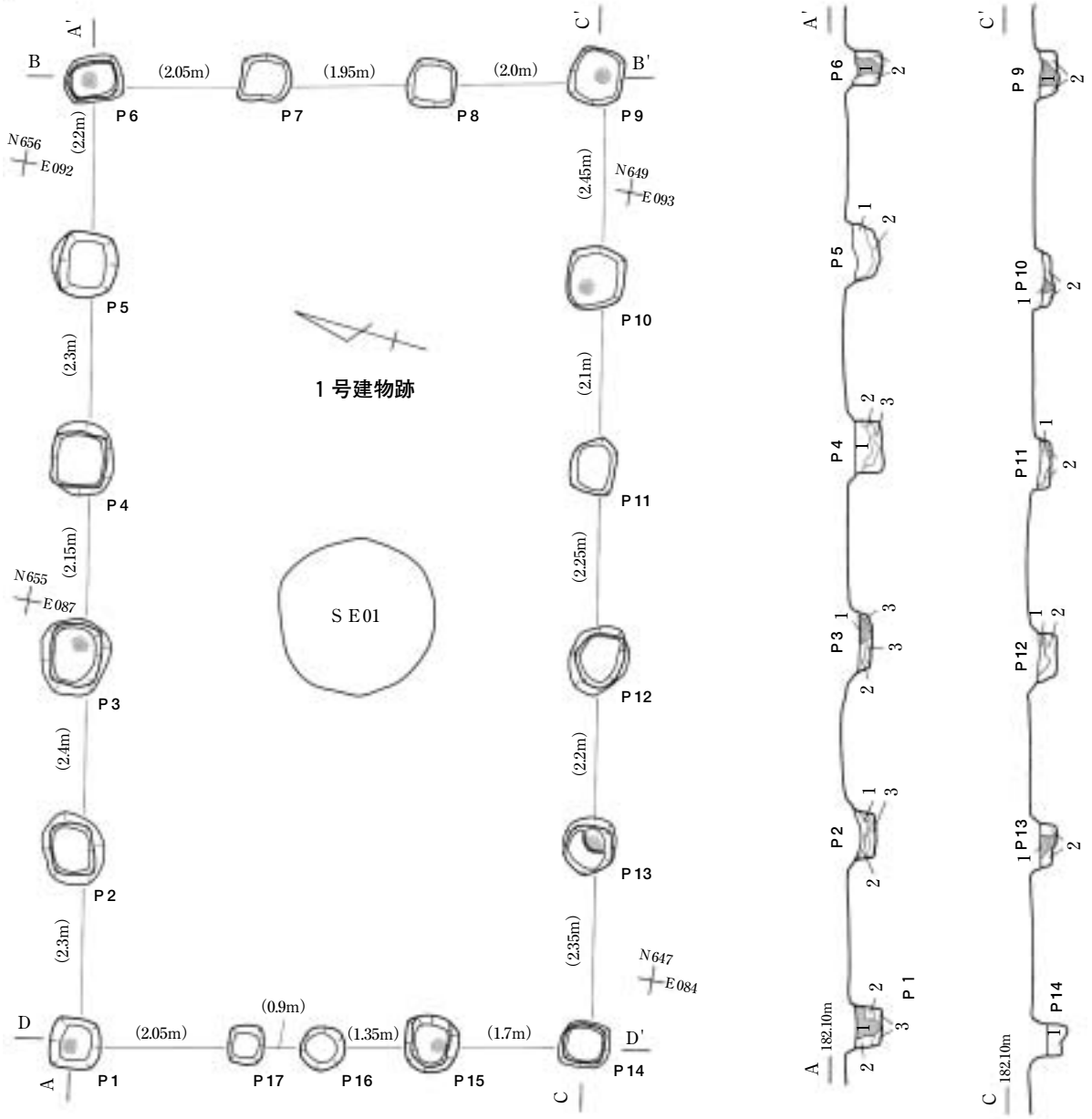


図11　掘立柱建物跡配置図（２）



1号堀立柱建物跡

P1（AA' DD'）
1　10YR2/1　黒色シルト（柱痕）
2　10YR2/2　黒褐色シルト
3　10YR4/4　褐色粘土

P2（AA'）
1　10YR2/1　黒色シルト
2　10YR2/2　黒褐色シルト
3　10YR3/3　暗褐色シルト

P3（AA'）
1　10YR2/1　黒色シルト（柱痕）
2　10YR2/2　黒褐色シルト
3　10YR5/2　灰黄褐色粘土

P4（AA'）
1　10YR2/1　黒色シルト
2　10YR3/2　黒褐色シルト
3　10YR5/3　にぶい黄褐色粘土（黄褐色土との混土）

P5（AA'）
1　10YR2/1　黒色シルト
2　10YR2/2　灰褐色シルト

P6（AA' BB'）
1　7.5YR3/1　黒褐色シルト（柱痕）
2　10YR2/1　黒色シルト（黄褐色，灰黄褐色土との混土）

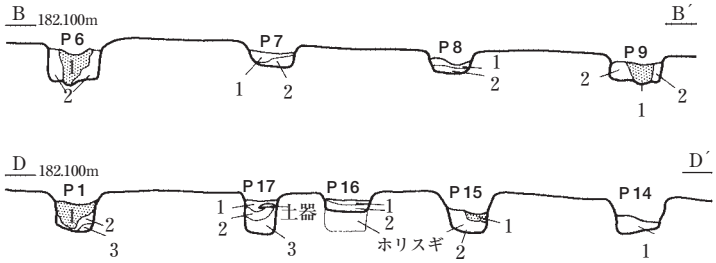
P7（BB'）
1　10YR2/2　黒褐色シルト
2　7.5YR4/4　褐色粘土

P8（BB'）
1　10YR3/2　黒褐色シルト
2　10YR5/3　にぶい黄褐色粘土（褐色粘土との混土）

P9（BB' CC'）
1　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト（柱痕）
2　7.5YR4/4　褐色シルト

0　2m　(1/80)

図12　1号掘立柱建物跡（１）



P10（CC′）
1　7.5YR3/2　黒褐色シルト（柱痕）
2　10YR3/3　暗褐色シルト

P11（CC′）
1　10YR2/1　黒色シルト
2　7.5YR4/4　褐色シルト

P12（CC′）
1　10YR2/1　黒色シルト
2　10YR5/3　にぶい黄褐色粘土

P13（CC′）
1　7.5YR3/2　黒褐色シルト（柱痕）
2　10YR3/4　暗褐色粘土

P14（CC′ DD′）
1　10YR2/1　黒色シルト

P15（DD′）
1　10YR2/1　黒色シルト（柱痕）
2　7.5YR3/3　暗褐色シルト

P16（DD′）
1　10YR2/1　黒色シルト
2　2.5YR5/3　にぶい赤褐色砂

P17（DD′）
1　10YR2/1　黒色シルト
2　10YR3/2　黒褐色シルト
3　7.5YR4/6　褐色シルト

0　2m（1/80）

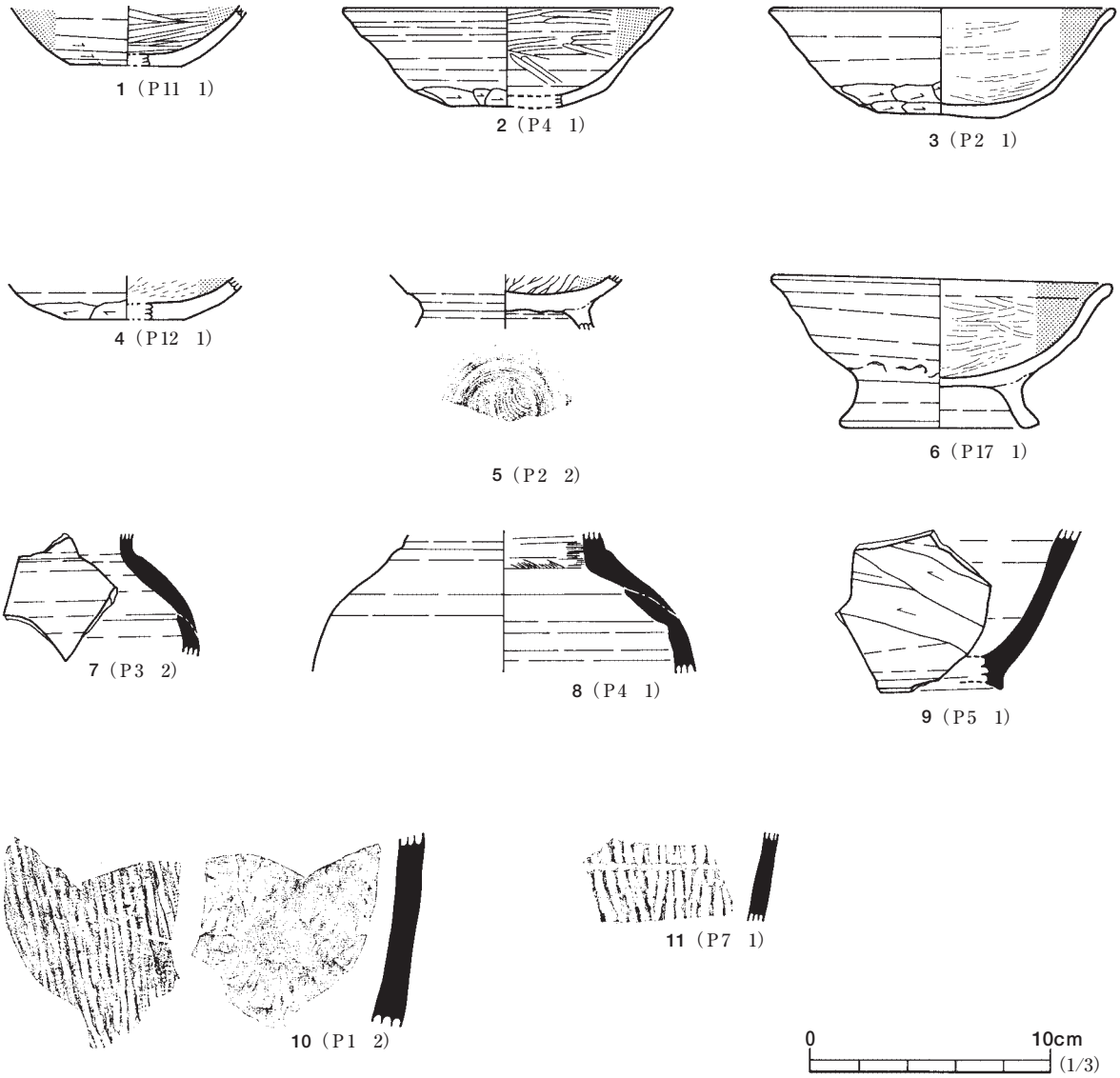


図13　１号掘立柱建物跡（２），出土遺物

～2.05mの範囲にあり，平均は2.00mを測る。掘形底面の標高は181.42m～181.60mである。西梁行きは，Ｐ14～Ｐ17・Ｐ１の５個の柱穴がある。掘形底面の標高は181.40m～181.68mである。Ｐ16はその深さが西梁行きを構成する他の柱穴に比して明らかに浅い。東梁行きにはこれと対応する柱穴がなく，他の柱穴とは異なる性格を想定しておきたい。Ｐ16を除いた西梁行きの柱間寸法は南から1.7m，2.25m，2.05mを測り，平均は2.00mである。

柱穴の平面形は，Ｐ12を除き方形～長方形である。柱穴は50×50　前後のものが最も多く６個を数える。60×60　前後と60×50　前後のものが２個ずつある。最も大きいものは88×80　（Ｐ３），最も小さいものは47×40　（Ｐ17）である。柱痕をＰ１，Ｐ３，Ｐ６，Ｐ９，Ｐ10，Ｐ13，Ｐ15で確認した。柱痕は直径16～20　の円形を呈しており，すべて掘形の底まで達している。また，柱痕はＰ９を除いて黒色又は黒褐色のシルトであり，Ｐ９の柱痕はにぶい黄褐色シルトであった。柱痕のないものは堆積土に乱れがあり，柱を抜き取った後に埋め戻したものと考えられる。

遺　　物（図13，表6，図版47・48）

柱穴の堆積土からは比較的多くの土器が出土している。これらの土器は掘形を埋め戻した際に混入したものと考えられ，その量から本建物跡の年代を示すものと評価できる。土師器６点と須恵器５点を図示した。

１～６は土師器である。１～４はロクロ成形の杯である。１は両面とも黒色処理され，外面底部周辺には回転ケズリ，内面にはミガキが認められる。底部はケズリで再調整されている。２～４は外面底部周辺を手持ちケズリ，内面はミガキの後黒色処理される。３・４の底部は手持ちケズリで切離し痕が消されている。２は器高4.1　，３は口径14.1　，底径5.0　，器高4.5　を測る。５はＰ２　２より出土した高台杯の杯底部である。内面をミガキの後黒色処理している。外面にはロクロナデが認められ，杯底部には回転糸切り痕が認められる。６はＰ17　１より出土した高台杯である。杯部の口縁部は僅かに外反しており，高台脚は短く直線的に開き，端部には面を持つ。法量は口径14.0　，高台径8.2　，器高6.3　を測る。内面はミガキ調整の後に黒色処理され，外面には高台部の貼り付け痕が観察される。

７～11は須恵器である。７は甕，あるいは壺の頸部から肩部にかけての破片である。Ｐ３　２より出土した。内外面ともロクロナデが観察される。８は瓶類の頸部から肩部にかけての破片である。Ｐ４　１より出土した。頸部径は7.8　と推定される。内外面ともにロクロナデによって調整され，頸部内面にはユビナデ痕が認められる。９は瓶類の底部付近の破片である。Ｐ５　１より出土した。外面の一部を回転ケズリで調整している。10は甕の体部片である。Ｐ１　２より出土した。内面に菊花状当具痕，外面にタタキメが認められる。11も甕の体部片である。Ｐ７　１より出土した。内面をヘラナデで，外面をタタキで調整している。外面に螺状沈線文が認められる。

ま　と　め

１号建物跡は，東西５間×南北３間（４間）の東西棟である。柱穴掘形の大きさは，近接する８・12号建物跡に比べ大きく，形状も異なっている。また建物の軸線方向もこれと平行，あるいは

直行せず，本建物跡は８・12号建物跡をはじめとする中世末の建物跡と異なる時代に属し，出土遺物から９世紀後半頃に位置付けられる。平面積68　を測る大型の建物跡であり，梁側の柱穴配置に特異性が認められた。建物範囲のほぼ中央に位置する１号井戸跡は，遺構の性格や位置から本建物跡に伴う施設ではなく，中世末の建物跡と同時期のものと考えられる。　（斎藤）

２号掘立柱建物跡　ＳＢ02

遺　　構（図11・14～17，図版７～10）

本建物跡は調査区の西部中央，Ｕ～W21～23グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面だが，本来はＬ　上面で確認できたものと考えられる。現状の地形はほぼ平坦となっており，確認面の標高は181.60m前後で一定している。３号建物跡とは位置的に重複するが，柱穴間の切り合い関係は認められない。詳しくは後述するが，本建物跡が後出すると考えている。また近接して西側には４・５号建物跡，南には７号建物跡が位置する。調査区中央部を三方に囲郭する１号溝跡の内部に位置し，溝跡内側までの距離は北に約29m，西に約20m，南に約46mを測る。

本建物跡は身舎，庇，縁を区分することが困難であるが，ここではＰ１～Ｐ15を身舎，Ｐ17～Ｐ24を庇，Ｐ16・Ｐ25～Ｐ34を縁と推定して報告を進める。また身舎，庇，縁の区分として他に以下の①～③の可能性を挙げておきたい。①Ｐ７の存在から，Ｐ１～Ｐ５，Ｐ９～Ｐ15を身舎として北・東に庇，南・西に縁が付く。②同様にＰ７の存在からＰ１～Ｐ13，Ｐ32～Ｐ34を身舎とし，北に庇，南に縁が付く。③以上可能性を示した身舎以外を庇，あるいは縁に統一して理解する。ただし本建物跡の柱穴配置から身舎，庇，縁を明確に区分することは難しく，またその複雑な構造を本建物跡の特徴とも捉えることができる。なおＰ８，Ｐ25は調査区外にあり実際には確認していないが，その位置から存在を推定しピット番号を付した。身舎北桁行きを基準とした建物の軸線方向はＮ89°Ｗを示す。身舎の平面積はおよそ43.3　，庇，縁を含めた建物の総面積はおよそ80.3　を測る。

身舎としたＰ１～Ｐ15について説明する。北桁行き（Ｐ１～Ｐ６）は総長10.55m，南桁行き（Ｐ９～Ｐ13）は確認長8.6mを測る。北・南桁行きとも５間になると推定され，柱間寸法は中央の１間が広く平均2.60m（約8.6尺），他は平均1.99m（約6.6尺）を測る。この1.99mを１間の基準とすれば，中央の柱間は概ね1. 25間分となる。梁行きは西側１間，東側２間と推定され，西梁行きの柱間寸法は4.1m（約13.5尺）を測り，桁行き柱間のほぼ２倍の値を示す。Ｐ14，Ｐ15は棟持柱と判断した。Ｐ３－Ｐ14－Ｐ11は総長4.15m，柱間寸法は平均2.08m（約6.8尺），Ｐ４－Ｐ15－Ｐ10は総長4.2m，柱間寸法は平均2.10m（約6.9尺）を測る。柱穴の平面プランは隅丸方形を基調とし，平面規模は１辺40～54　とほぼ近似値をとる。検出面からの深さは36～56　を測るが，45　前後となるものが多く，特に位置による偏りは認められない。Ｐ７を除いた13個から柱痕が確認され，柱痕幅は12～17　を測る。Ｐ14の底面からは木製礎盤（礎板），Ｐ３・Ｐ５・Ｐ６から柱材を検出している。

北庇としたＰ17～Ｐ22は総長10.60mを測る。Ｐ16－Ｐ17は西側の縁の出となり，0.95m（約3.1尺），Ｐ17～Ｐ22，５間の柱間寸法は身舎の桁行きに対応して中央の１間が広くなり，他の４間の平均は

2.01m（約6.6尺）を測る。北側の庇の出は1.95m（約6.4尺）となり，身舎桁行きの１間とほぼ等しい。またＰ１とＰ17，Ｐ２とＰ18のほぼ中間にはそれぞれＰ23，Ｐ24が位置する。Ｐ20・Ｐ21の底面からは木製礎盤（礎板），Ｐ23の底面からは石製礎盤（根石），Ｐ19から柱材が検出されている。西縁としたＰ16・Ｐ31～34は総長6.95mを測り，南側の縁の出となるＰ31－Ｐ32の柱間寸法は0.85m（約2.8尺），他の３間は平均2.03m（約6.7尺）となる。南縁としたＰ26～Ｐ31は確認長9.55mを測る。柱間寸法は北庇同様身舎桁行きと対応し，中央の１間が広い。他の３間の柱間寸法平均は2.02m（約6.7尺）となる。Ｐ27からは柱材が検出されている。庇，縁における柱穴の平面プランは隅丸方形を基調とする。柱穴の平面規模は32～52　を測るが，40　前後となるものが多く，身舎の柱穴と比して相対的に小さい。検出面からの深さは概ね36～54　の幅に収まるが，20～33　と浅いもの（Ｐ16・Ｐ17・Ｐ33），76　と深いもの（Ｐ21）が認められる。柱穴の深浅について位置的な関連は看取できない。柱痕幅は10～16　を測り，僅かだが身舎における柱痕幅の数値を下回る。

遺　　物（図18～20，表6・9・10，図版49～51）

本建物跡に伴う遺物は，木製礎盤（礎板）３点，石製礎盤（根石）１点，柱材５点である。主な木製品については樹種同定分析を行っており，表記した樹種についてはこの結果による。図18－１～３には木製礎盤（礎板）を示した。１はＰ14底面から出土したもので，樹種はクリである。表面は比較的遺存状態が良く，単位幅2.4　の整形痕が残る。また木口には製材時の工具痕と考えられる痕跡が認められる。２はＰ20底面から出土し，樹種はクリ，木取りは板目と確認できる。工具痕は観察できなかった。３はＰ21底面から出土した。柾目に木取りされている。遺存状態は良好で，表裏両面，側面に非常に滑らかな整形痕が観察できる。特に表・裏面の整形痕は，工具の幅が礎盤の幅より大きくなり，また木の表面から工具を離すことなく，連続して刃が当てられている。以上の観察から，表裏面を整形するのに使用した工具には台鉋を考えている。

図18－４はＰ23の底面から出土した石製礎盤（根石）である。大きさは24.2×17.8×7.4　を測り，１個体の石材をそのまま利用している。石材の一部には被熱した部分が認められ，広く被熱した面を上にして底面に置かれていた。

図19－１～４はそれぞれＰ３，Ｐ27，Ｐ19，Ｐ５から検出した柱材である。いずれも柱痕跡中において確認され，木口方向を下に向け底面から直立した状態で出土している。断面の形状から４点とも角柱であり，樹種同定分析の結果２～４の樹種はクリと判明している。１は柱幅11.1×10.2を測り，断面はやや長方形状となる。四方柾に木取りされ，木口には単位幅8.5　超を測る切断時のものと考えられる痕跡が残る。この痕跡は互いが明瞭な段を有し，また木目が打ち込まれた方向に引っ張られたような箇所も確認できた。そのためオノなどを打ち込んだ痕跡と推定される。２は柱幅12.9×8.0　を測り，断面は長方形を呈する。木取りは四方柾，木口には切断時の工具痕が僅かに残る。３は柱幅12.8×10.9　を測り，断面は長方形を呈する。木取りは二方柾，木口には単位幅5.4　の工具痕が残る。４は片側の収縮が著しい。柱幅14.5　を測り，断面は長方形状を呈していたと推定される。木取りは二方柾，木口には３と同様単位幅5.4　の工具痕が認められる。図20－１はＰ６

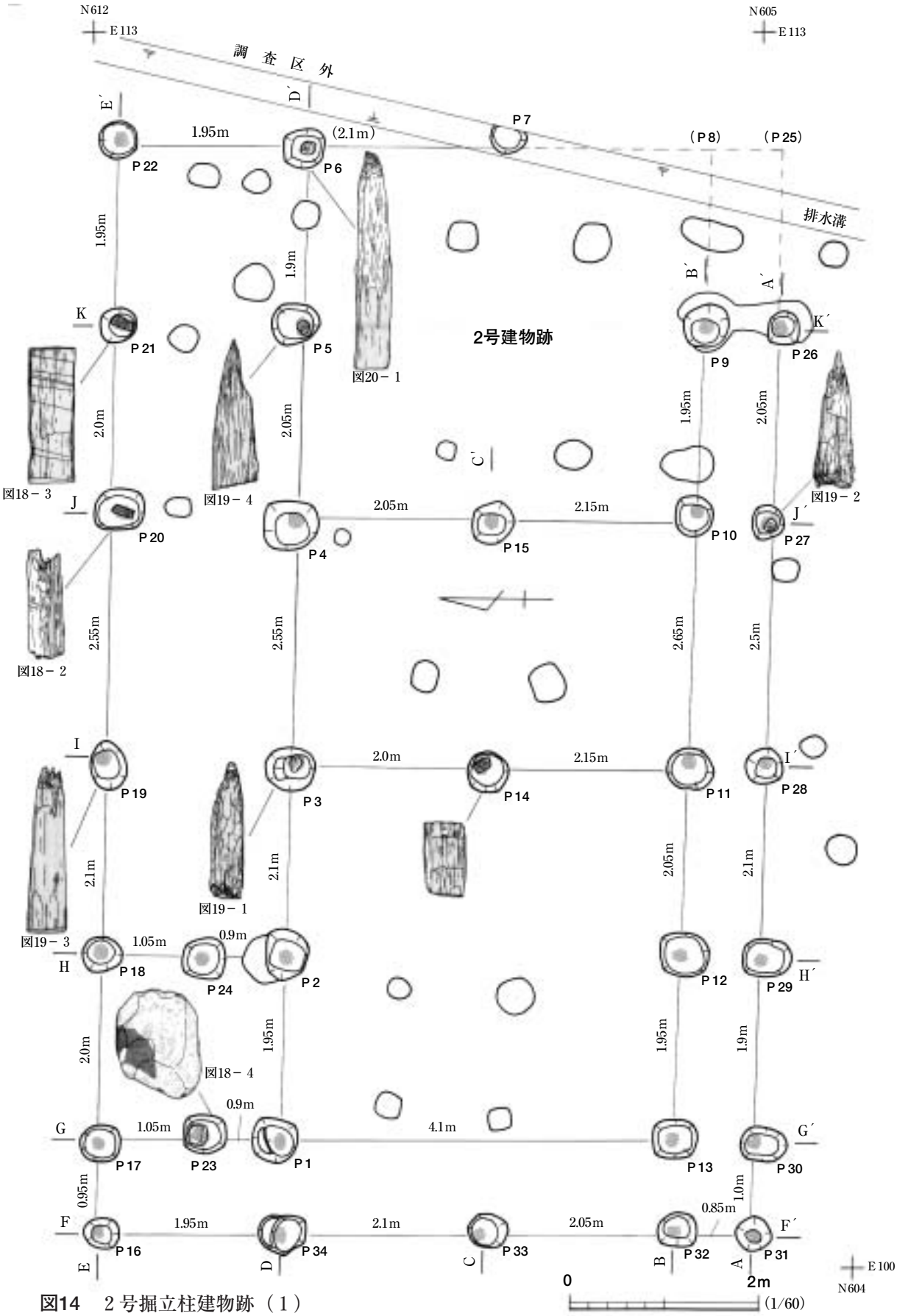
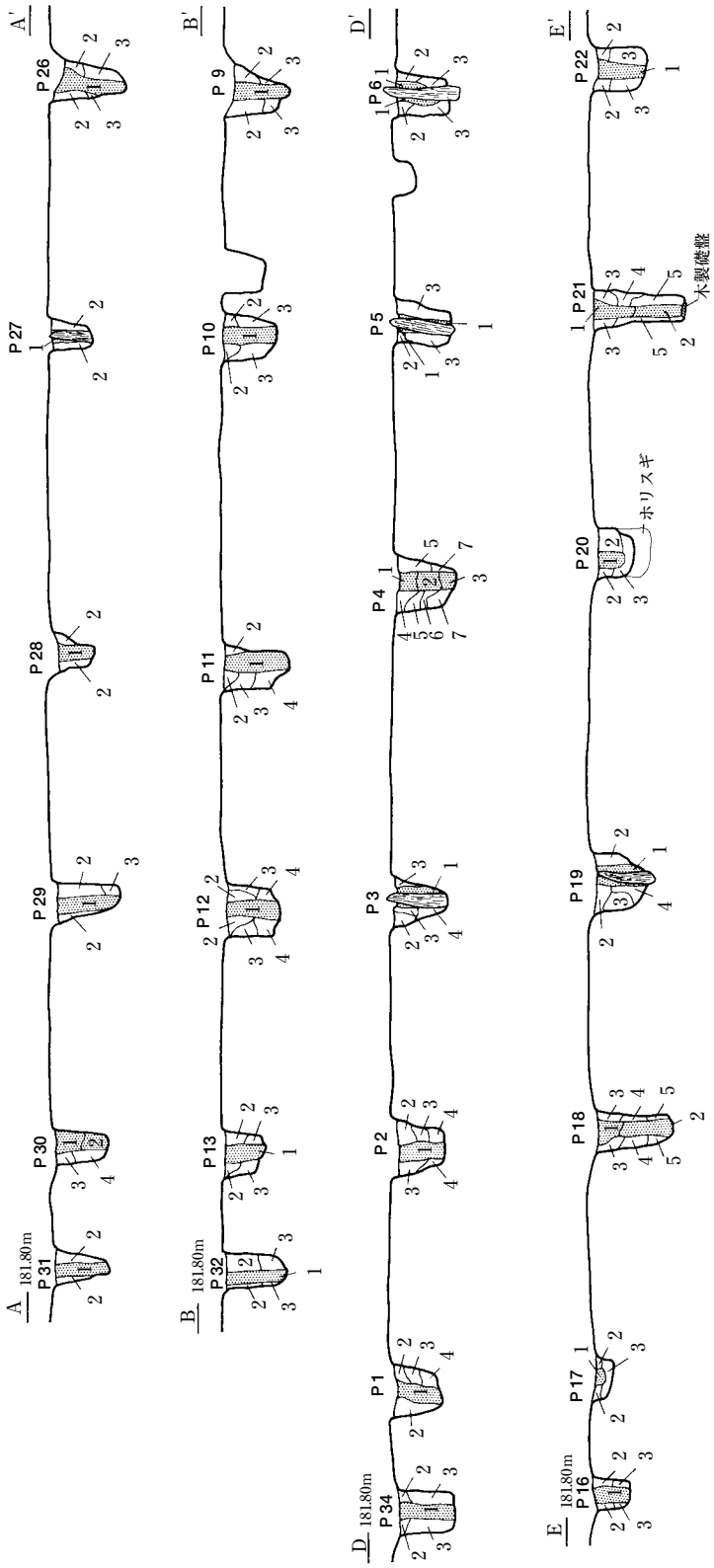


図14　２号掘立柱建物跡（１）



2号堀立柱建物跡

P1（DD'）
1　10YR4/1　褐灰色粘土（明黄褐色土塊含む：柱痕）
2　10YR4/1　褐灰色粘土（明黄褐色土塊との混土）
3　10YR4/6　褐色粘土（黒褐色土との混土）
4　10YR3/1　黒褐色粘土（明黄褐色土塊との混土）

P2（DD'）
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土（明黄褐色土塊含む：柱痕）
2　10YR3/2　黒褐色粘土（明黄褐色土塊との混土）
3　10YR4/6　褐色粘土（黒褐色土との混土）
4　10YR3/1　黒褐色粘土（褐色土粒含む）

P3（DD'）
1　10YR3/2　黒褐色粘土（柱痕）
2　10YR3/2　黒褐色粘土（褐色土との混土）
3　5 Y6/1　灰色粘土（黒褐色土との混土）
4　10YR2/1　黒色粘土（明黄褐色土塊との混土）

P4（DD'）
1　10YR3/2　黒褐色粘土（炭化物少含む：柱痕）
2　2.5Y4/1　黄灰色粘土（黄褐色土含む：柱痕）
3　2.5Y3/1　黄褐色粘土（黄褐色土含む：柱痕）
4　10YR3/1　黒褐色粘土（褐色土塊との混土）
5　10YR5/6　黄褐色粘土（黒褐色土との混土）
6　10YR4/6　褐色粘土（黒褐色土との混土）
7　2.5YR5/2　暗灰黄色粘土（黒褐色土との混土）

P5（DD'）
1　10YR3/1　黒褐色粘土（灰色土塊少含む：柱痕）
2　10YR2/2　黒褐色粘土（黄褐色土塊多との混土）
3　10YR3/1　黒褐色粘土（灰色土塊との混土）

P6（DD'）
1　10YR4/1　褐灰色粘土（灰色土塊含む：柱痕）
2　10YR5/8　黄褐色粘土（黒褐色土との混土）
3　10YR2/1　黒色粘土（黄褐色土塊との混土）

P9（BB'）
1　2.5YR3/1　黒褐色粘土（灰色土塊含む：柱痕）
2　10YR3/3　暗褐色シルト（褐色土塊との混土）
3　10YR6/2　灰褐色粘土（黒褐色土との混土）

P10（BB'）
1　10YR3/1　黒褐色粘土（炭化物少含む：柱痕）
2　10YR3/1　黒褐色シルト（褐色土塊との混土）
3　2.5Y3/1　黒褐色シルト（褐色土塊との混土）

P11（BB'）
1　2.5YR4/1　黄灰色粘土（炭化物少含む：柱痕）
2　10YR2/3　黒褐色シルト（褐色土含む）
3　2.5Y4/4　オリーブ褐色シルト（黒褐色土との混土）
4　2.5Y3/1　黒褐色粘土（褐色土粒含む）

P12（BB'）
1　10YR3/1　黄褐色粘土（炭化物少含む：柱痕）
2　10YR2/2　黒褐色シルト（黄褐色土塊との混土）
3　2.5YR6/4　にぶい黄色粘土（黒褐色土含む混土）
4　2.5YR5/2　暗灰黄色粘土（黒褐色土含む混土）

P13（BB'）
1　10YR3/1　黒褐色粘土（炭化物少含む：柱痕）
2　10YR4/1　褐灰色シルト（明黄褐色土塊との混土）
3　10YR3/1　黒褐色粘土（黄褐色土塊との混土）

0　2m　（1/60）

図15　２号掘立柱建物跡（２）

P16（EE´）
1　10YR3/1　黒褐色粘土（灰白色土粒含む：柱痕）
2　10YR3/2　黒褐色粘土（褐色土との混土）
3　2.5Y5/2　暗灰黄色粘土（黒褐色土との混土）
P17（EE´）
1　10YR3/1　黒褐色粘土（褐色土少含む：柱痕）
2　10YR3/1　黒褐色粘土（黄橙色土塊との混土）
3　2.5YR5/2　暗灰黄色粘土（黒褐色土との混土）
P18（EE´）
1　10YR3/1　黒褐色粘土（炭化物含む：柱痕）
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土（黄褐色土粒含む：柱痕）
3　2.5Y5/3　黄褐色粘土（黒褐色土含む混土）
4　10YR4/2　灰黄褐色粘土（黒褐色土との混土）
5　10YR4/1　褐灰色粘土（黒褐色土との混土）
P19（EE´）
1　2.5Y6/1　黄灰色粘土（褐色土少含む：柱痕）
2　2.5YR6/1　にぶい黄褐色粘土（黒褐色土との混土）
3　10YR4/2　灰黄褐色粘土（黒褐色土との混土）
4　10YR4/1　褐灰色粘土
P20（EE´）
1　10YR2/2　黒褐色粘土（褐色土少含む：柱痕）
2　10YR4/2　灰黄褐色粘土（黒褐色土との混土）
3　2.5Y5/4　黄褐色粘土（一部グライ化）
P21（EE´）
1　10YR3/1　黒褐色粘土（炭化物少含む：柱痕）
2　2.5Y4/2　暗灰黄色粘土（褐色土粒含む：柱痕）
3　10YR4/6　褐色粘土（黒褐色土との混土）
4　10YR5/4　にぶい黄褐色粘土（黒褐色土との混土）
5　2.5Y4/1　黄灰色粘土（黒褐色土との混土）
P22（EE´）
1　10YR3/1　黒褐色粘土（炭化物多含む：柱痕）
2　10YR4/2　暗褐色粘土（褐色土との混土）
3　10YR6/2　灰黄褐色粘土（黒褐色土との混土）

P26（AA´）
1　10YR2/2　黒褐色粘土（炭化物少含む：柱痕）
2　2.5Y3/1　黒褐色シルト（褐色土塊との混土）
3　10YR2/1　黒色シルト（褐色土粒少含む）
P27（AA´）
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土（柱痕）
2　10YR5/6　黄褐色粘土（黒褐色土との混土）
P28（AA´）
1　2.5YR3/1　黒褐色粘土（褐色土粒少含む：柱痕）
2　10YR5/6　黄褐色粘土（黒褐色土との混土）
P29（AA´）
1　10YR3/1　黒褐色粘土（黄褐色土粒含む：柱痕）
2　10YR2/1　黒色粘土（灰白色土塊との混土）
3　10YR5/4　にぶい黄褐色粘土（黒褐色との混土）
P30（AA´）
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土（灰白色土塊含む：柱痕）
2　10YR2/1　黒色粘土（褐色土粒少含む：柱痕）
3　10YR4/4　黒色粘土（黒褐色土との混土）
4　10YR6/6　明黄褐色粘土（黒褐色土少との混土）
P31（AA´）
1　10YR3/1　黒褐色粘土（褐色土粒含む：柱痕）
2　10YR5/6　黄褐色粘土（黒褐色土との混土）
P32（BB´）
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土（炭化物少含む：柱痕）
2　10YR2/2　黒褐色粘土（褐色土粒含む：柱痕）
3　2.5Y3/1　黄灰色シルト（褐色土含む混土）
P34（DD´）
1　10YR2/2　黒褐色粘土（褐色土粒含む：柱痕）
2　10YR6/4　にぶい黄橙色シルト（黒褐色土との混土）
3　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土（褐色土との混土）

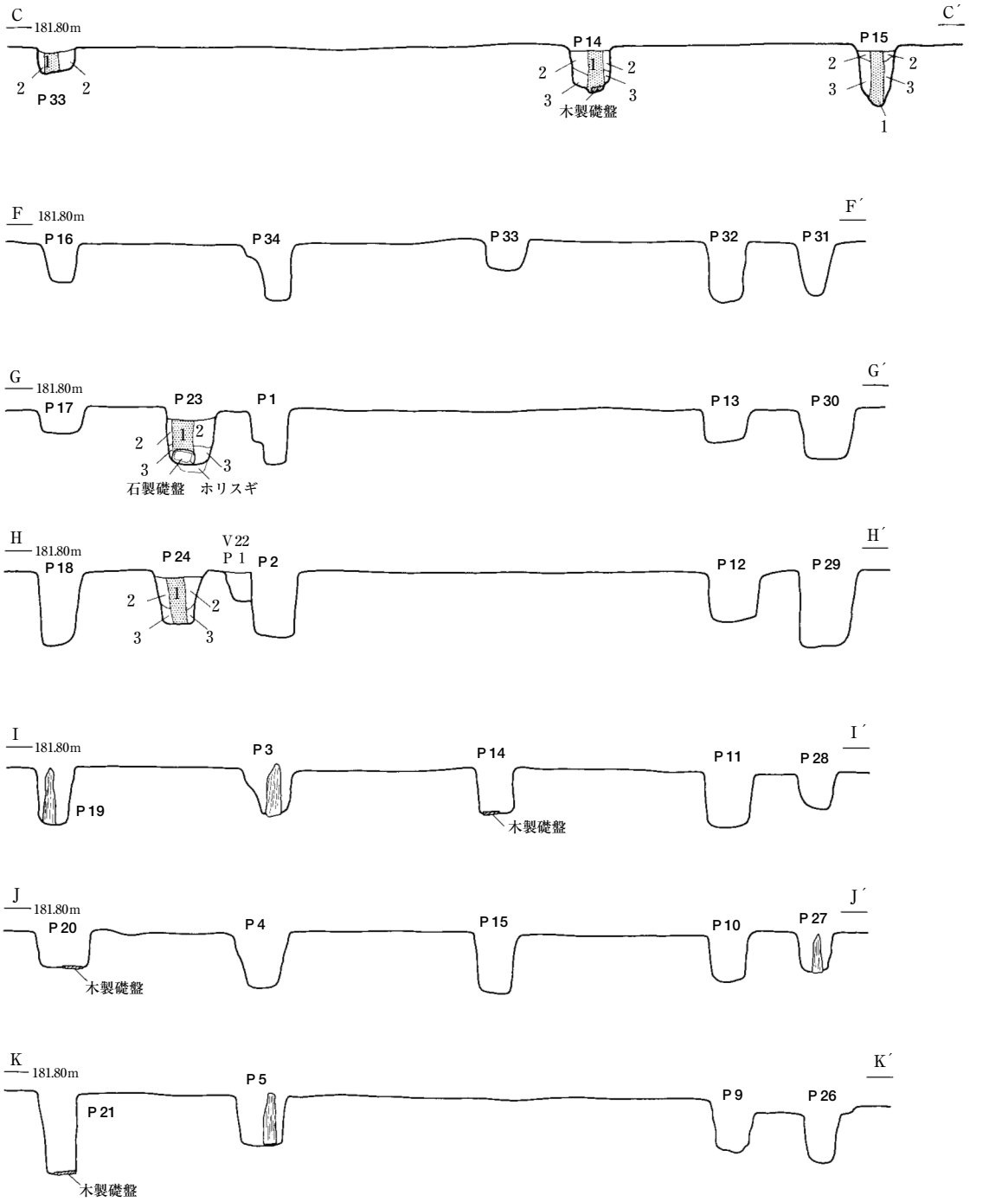
図16　２号掘立柱建物跡（３）

から出土した柱材である。やはり柱痕中から検出され，木口を下にして直立した状態で確認されている。柱幅は11.6×11.1　を測り，断面は方形に近い。木取りは二方柾であり，木口には単位幅4.7　の工具痕が認められる。工具痕は２方向から打ち込まれものと判断される。樹種はクリであった。検出しえた柱材は比較的遺存状態が良く，建物機能時の面が遺存している。若干の収縮は勘案しなければならないが，角柱であるものの，断面は長方形状を呈するものが多い。また柱幅も長辺で10.2～14.5　程度となり，建物の規模に比してやや脆弱な感は否めない。

ま　と　め

本建物跡にはいくつかの特徴的な要素が認められ，以下①～⑥に箇条書する。①柱穴の配置から平面的に複雑な構造となり，身舎，庇，縁の区別が難しい。②間仕切りに使用されたと考えられる柱穴が存在する（Ｐ14・Ｐ15・Ｐ23・Ｐ24）。③検出した柱材は，柱穴の位置に関わらず角柱となる。④木製礎盤（礎板）に台鉋のものと考えられる整形痕が残る。⑤梁行き（Ｐ１－Ｐ13）と桁行き（Ｐ１－Ｐ２など）の柱穴寸法がほぼ２：１となる。⑥柱材，木製礎盤ともにクリ材が用いられている。

以上のうち確認しえない③，④，⑥以外は，重複する３号建物跡にみられない特徴である。室町時代末から普及し，17世紀には一般的な武家住宅として確立するとされる書院造りの特徴として，



P 14（CC´）
1　10YR2/2　黒褐色シルト（炭化物含む：柱痕）
2　10YR4/2　灰黄褐色シルト（黒褐色土との混土）
3　2.5Y4/1　黄灰色粘土（黒褐色土との混土）
P 15（CC´）
1　10YR3/2　黒褐色粘土（炭化物少含む：柱痕）
2　10YR3/3　暗褐色粘土（褐色土粒多含む）
3　10YR3/2　黒褐色粘土（褐色土少含む）
P 23（GG´）
1　10YR2/2　黒褐色粘土（黄褐色土塊含む：柱痕）
2　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土（黒褐色土との混土）
3　10YR6/4　にぶい黄橙色粘土（黒褐色土との混土）
P 24（HH´）
1　10YR3/2　黒褐色粘土（炭化物少含む：柱痕）
2　10YR3/1　黒褐色粘土（黄褐色土塊との混土）
3　2.5Y4/1　黄灰色粘土（黄褐色土塊多との混土）
P 33（CC´）
1　10YR3/1　黒褐色粘土（褐色土塊含む：柱痕）
2　10YR4/4　褐色粘土（灰白色土塊との混土）

0　2m
（1/60）

図17　２号掘立柱建物跡（４）

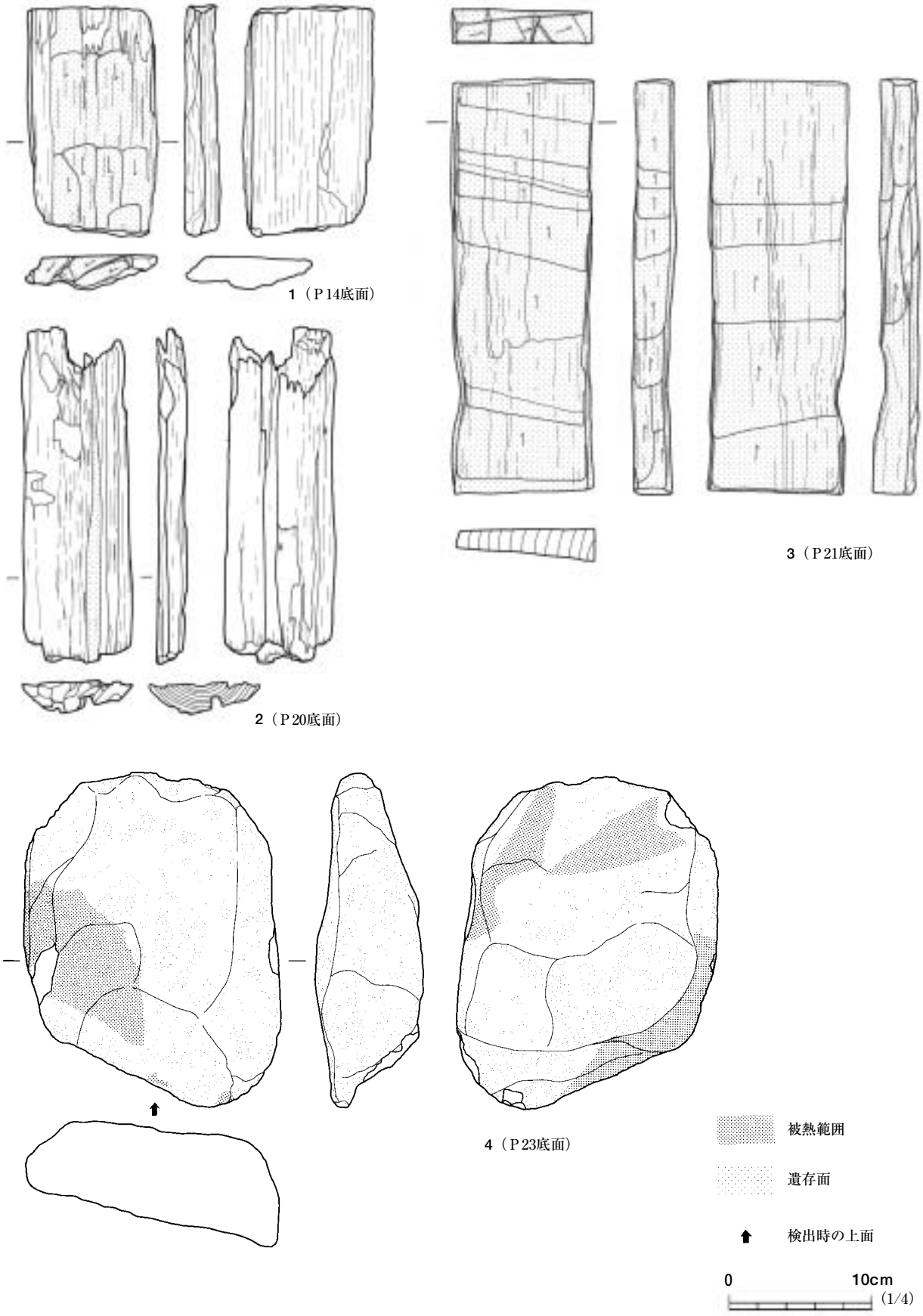


図18　２号掘立柱建物跡出土遺物（１）

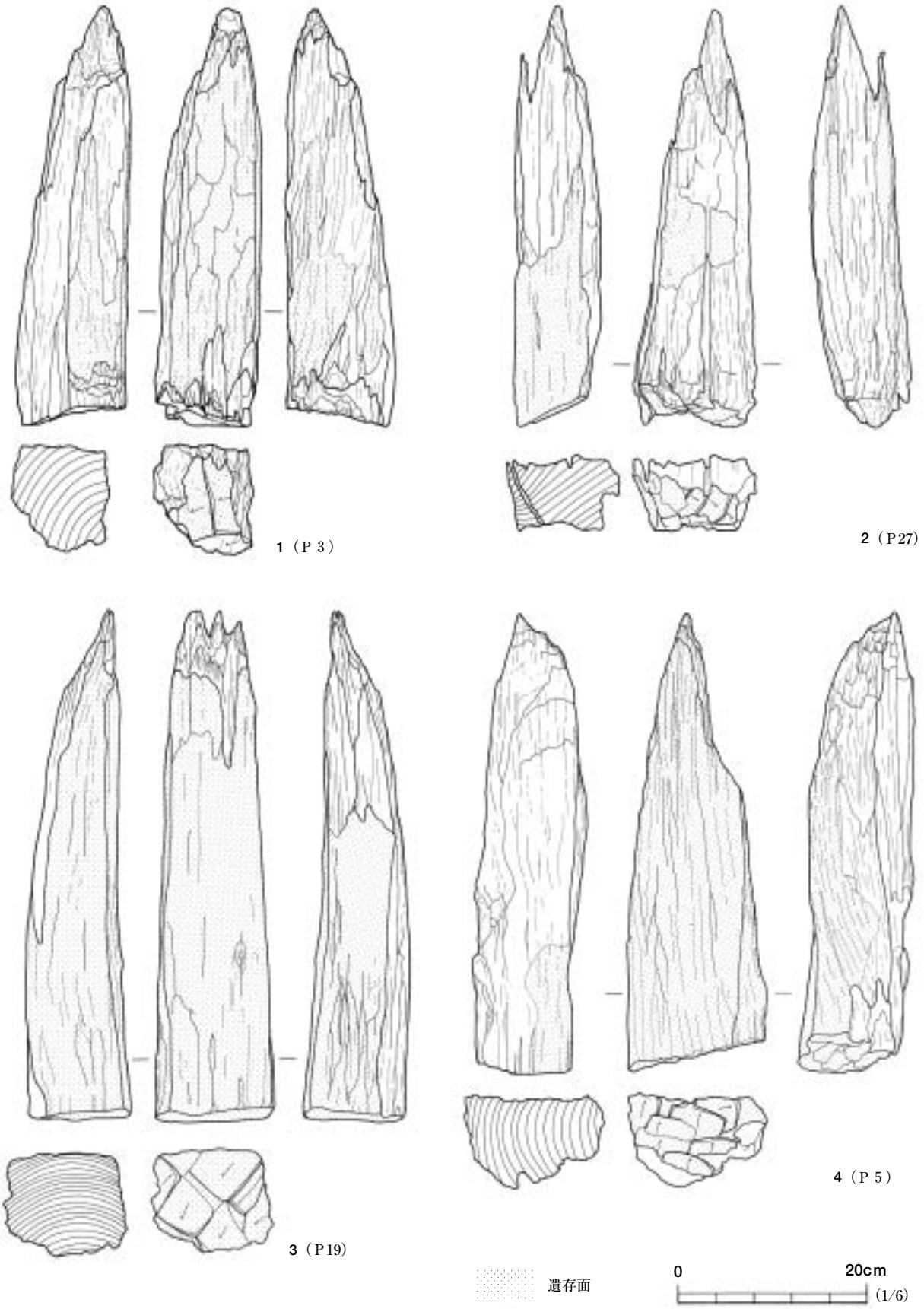


図19　２号掘立柱建物跡出土遺物（２）

建物構造の複雑化（身舎と庇の区分の消失），間取りの複雑化，それに伴う空間区分のための角柱の使用，板敷きから畳敷きへなどの変化が挙げられる。これらの特徴は概ね本建物跡から得られた諸属性に沿うものであり，先行する３号建物跡から変化したものと捉えておきたい。さらに④とした台鉋は16世紀代に普及するものとされ，建物の示す年代的な特徴と齟齬しない。

以上の諸要素により，本建物跡は書院造風の建築様式が武家住宅に普及する過渡期に当たると判断される。また本建物跡と近接した時期と考えられるピット群（Ｅ群），及び本建物跡周辺を覆っていた表土中からは瀬戸・美濃系大窯期前半代とした天目茶碗片が出土している（図65－2）。よって本建物跡の帰属年代は16世紀中頃～後半，先行する３号建物跡を15世紀末～16世紀前半と捉えておきたい。

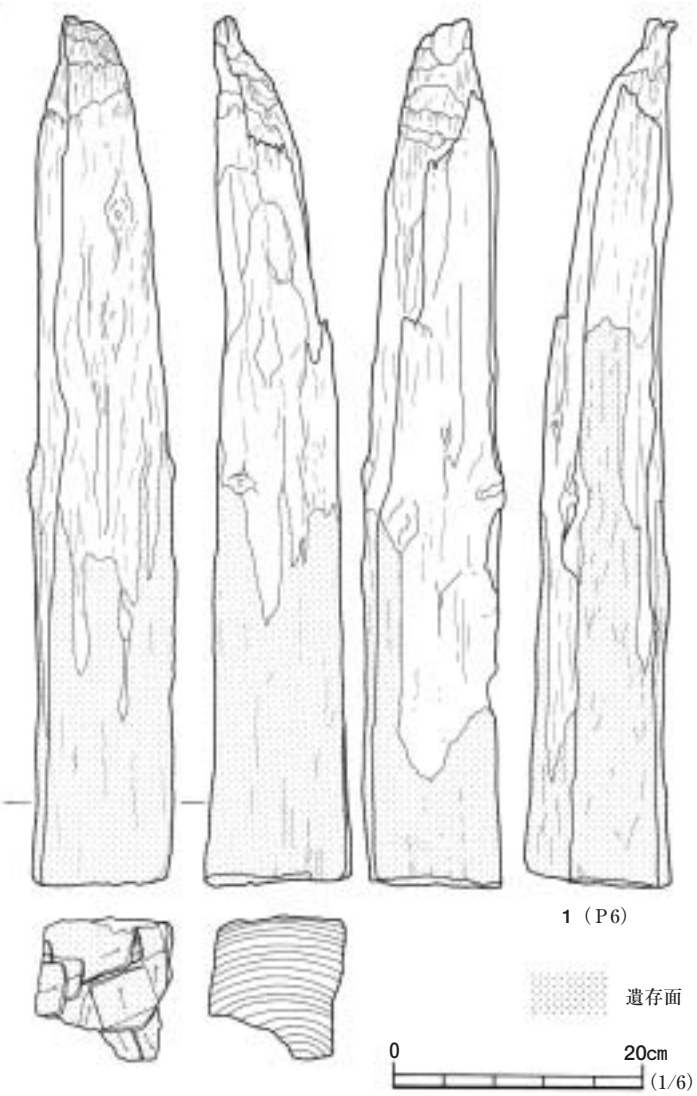


図20　２号掘立柱建物跡出土遺物（３）

周囲を囲郭する堀跡（１号溝跡）とは有機的な関連が想定され，本建物跡はその位置，規模から中世末に機能した館跡の主屋（主殿）と評価することが可能である。隣接する４号建物跡は軸線方向を同一にとり，並存していたものと考えられる。（横須賀）

３号掘立柱建物跡　ＳＢ03

遺　　構（図11・21～23，図版７・11・12）

本建物跡は調査区の西部中央，Ｕ～W21・22グリッドに位置する。遺構検出面はＬ　上面であるが，本来はＬ　上面で確認できたものと考えられる。現状の地形はほぼ平坦であり，検出面の標高は181.60m前後を測る。２号建物跡とは本来重複関係にあるが，柱穴の直接的な切り合いは認められない。時期的な先後関係については，柱穴配置から復元される建物構造から本建物跡が２号建物跡に先行すると考えている。周辺遺構との位置関係を整理すれば，西側に４・５号建物跡，南に７

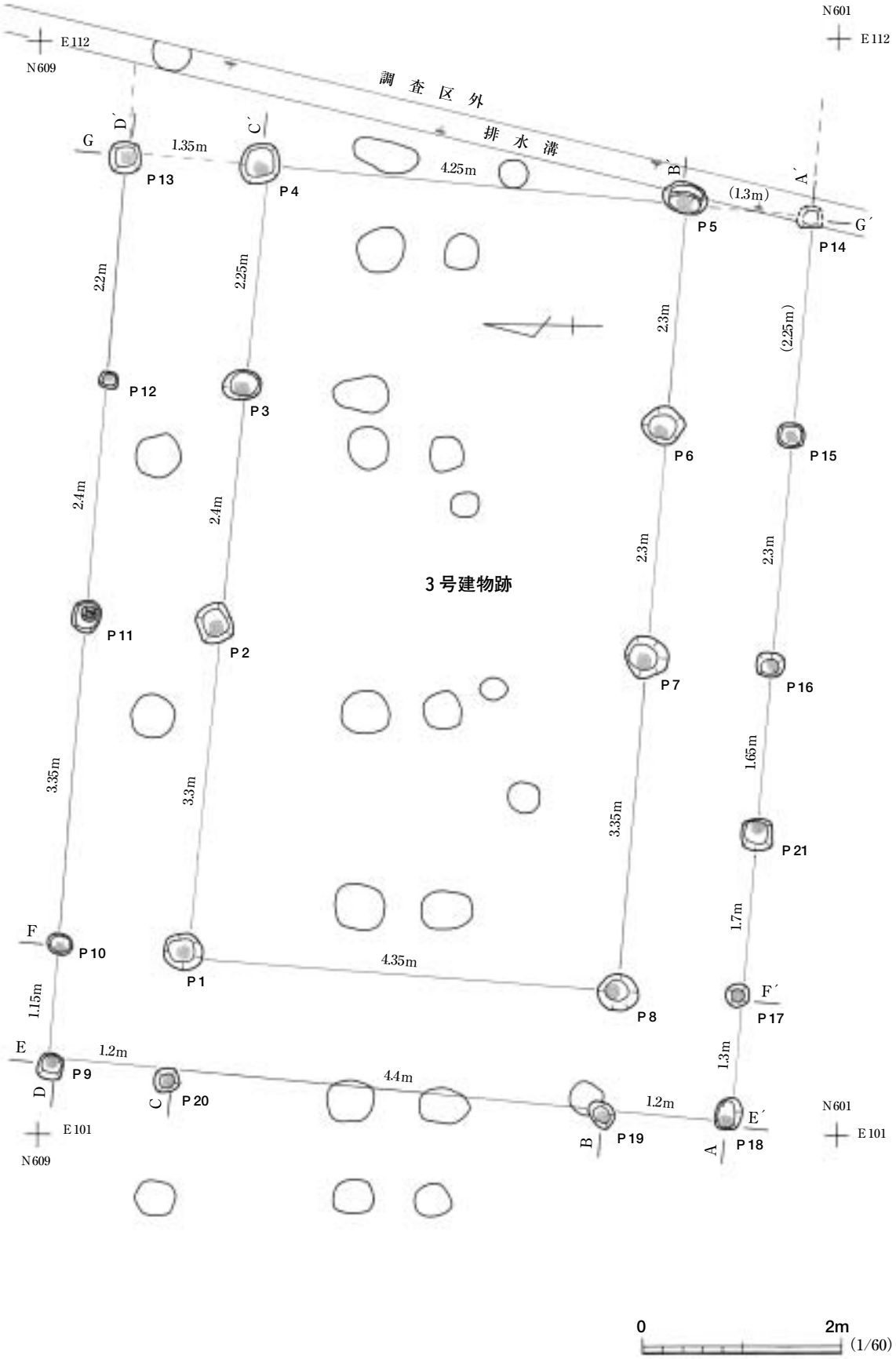
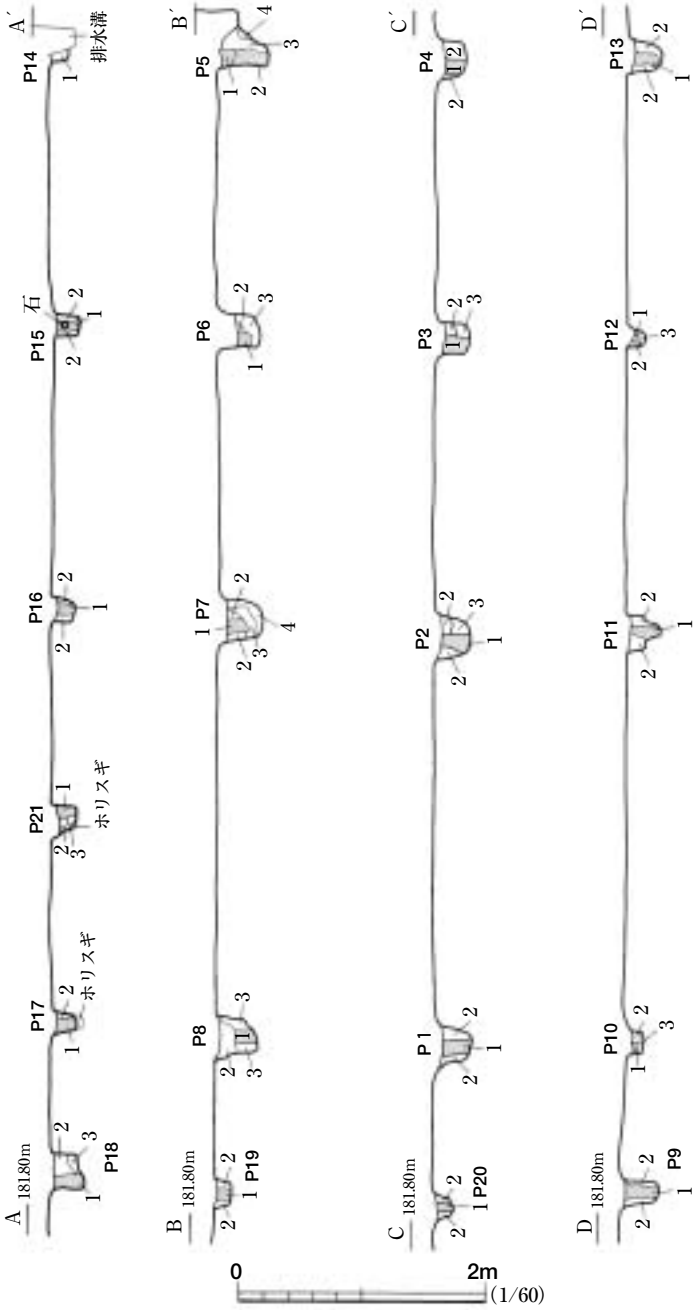


図21　３号掘立柱建物跡（１）



3号掘立柱建物跡

P１（CC´）
1 10YR2/2 黒褐色粘土 （褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR3/2 黒褐色シルト （褐色土塊との混土）

P２（CC´）
1 10YR2/2 黒褐色粘土 （褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR3/2 黒褐色シルト （褐色土粒との混土）
3 10YR3/1 黒褐色シルト （黄褐色土塊との混土）

P３（CC´）
1 10YR2/1 黒色粘土 （褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 （黒褐色土との混土）
3 10YR2/1 黒色シルト （褐色土粒極少含む）

P４（CC´）
1 10YR2/1 黒色粘土 （褐色土粒含む：柱痕）
2 2.5Y3/1 黒褐色シルト （褐色土塊との混土）

P５（BB´）
1 10YR2/2 黒褐色粘土 （褐色土粒含む：柱痕）
2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土 （柱痕）
3 10YR3/3 暗褐色シルト （褐色土との混土）
4 10YR4/6 褐色粘土 （黒褐色土との混土）

P６（BB´）
1 2.5Y3/1 黒褐色粘土 （褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR4/1 褐灰色粘土 （黒褐色土との混土）
3 10YR4/2 灰黄褐色粘土 （黒褐色土との混土）

P７（BB´）
1 10YR2/2 黒褐色粘土 （褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土との混土）
3 10YR4/6 褐色粘土 （黒褐色土との混土）
4 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土（黒褐色土少との混土）

P８（BB´）
1 2.5Y3/2 黒褐色シルト （褐色土粒多含む：柱痕）
2 10YR3/2 黒褐色シルト （灰白色土塊との混土）
3 2.5Y4/1 黄灰色粘土 （灰白色土塊との混土）

P９（DD´）
1 10YR3/1 黒褐色粘土 （褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR3/2 褐灰色シルト （黒褐色土との混土）

P10（DD´）
1 10YR4/1 褐灰色粘土 （褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR5/6 黄褐色粘土 （黒褐色土との混土）
3 10YR4/4 褐色粘土 （灰白色土との混土）

P11（DD´）
1 10YR3/1 黒褐色粘土 （褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 （黒褐色土との混土）

P12（DD´）
1 7.5YR3/1 黒褐色シルト （褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR2/2 黒褐色シルト （褐色土粒との混土）
3 10YR4/4 褐色シルト （黒褐色土との混土）

P13（DD´）
1 10YR3/1 黒褐色粘土 （褐色土粒含む：柱痕）
2 7.5YR4/6 褐色シルト （黒褐色土との混土）

P14（AA´）
1 10YR2/2 黒褐色シルト （褐色土塊との混土）

P15（AA´）
1 2.5Y3/1 黒褐色粘土 （褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土粒少との混土）

P16（AA´）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土塊との混土）

P17（AA´）
1 2.5Y3/1 黒褐色シルト （灰白色土粒少含む：柱痕）
2 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土粒多との混土）

P18（AA´）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （灰白色土粒含む：柱痕）
2 10YR6/6 明黄褐色粘土 （黒褐色土との混土）
3 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土 （黒褐色土との混土）

P19（BB´）
1 10YR3/2 黒褐色粘土 （褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR4/4 褐色シルト （黒褐色土との混土）

P20（CC´）
1 2.5Y4/1 黄灰色シルト （灰白色土粒少含む：柱痕）
2 2.5Y3/1 黒褐色シルト （褐色土との混土）

P21（AA´）
1 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘土 （褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土塊との混土）
3 10YR3/3 暗褐色シルト （黒褐色土少との混土）

図22　３号掘立柱建物跡（２）

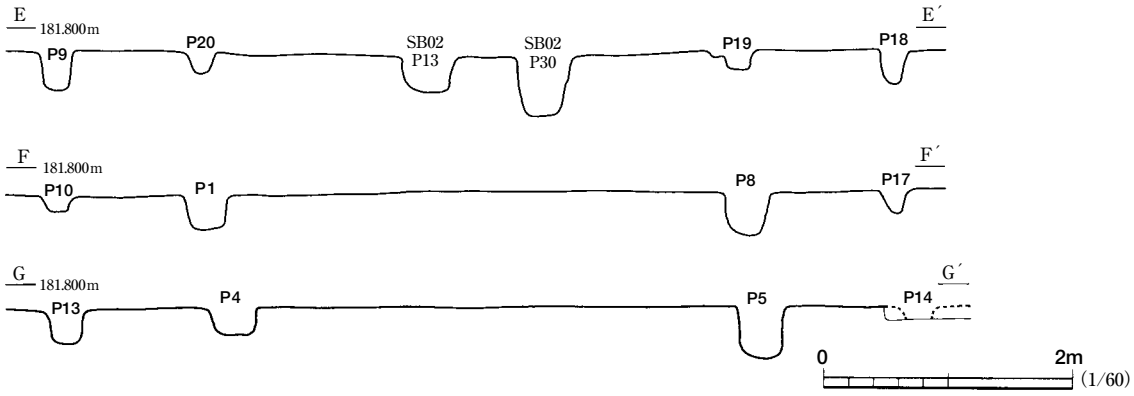


図23　３号掘立柱建物跡（３）

号建物跡と接し，調査区内を三方に囲郭する１号溝跡の内部に位置する。北・西・南辺の内側からの距離はそれぞれ約34m，約43m，約21mを測る。

現状における本建物跡は桁行き３間，梁行き１間の東西棟の身舎に北，西，南の３面に縁が付く構造と認識できる。ただし調査区東外に身舎の一部が延びる可能性や，東側にも縁の付く可能性が考えられ，本遺跡における該期の建物跡の構造から勘案すると，東側に縁の付く可能性は極めて高いと思われる。身舎の北柱列を基準とした建物の主軸方向は，N85°Wを示す。建物の平面積は現状で身舎部分が34.2　，三方の縁部分を含めると62.7　であり，身舎を現状のままとし東側に縁が付くと仮定した場合70　程度と予想される。

身舎は８個の柱穴で構成される。北・南桁行きとも３間で平均総長は8.0mを測る。北・南桁行きとも西側の１間が東側の２間より約１m広くなり，東側２間の柱間寸法は平均2.31m（約7.6尺），西側の１間は平均3.33m（約11尺）となっている。東側２間の柱間寸法を桁行き１間の基準とすれば，西側１間は約1.5間分となる。梁行きは１間で柱間寸法の平均は4.3m（約14.2尺）を測る。柱穴の平面プランはすべて隅丸方形を基調とし，平面規模は１辺30～40　前後と大きなバラツキはない。検出面からの深さは北桁行きが24～30　，南桁行きが36～42　と南桁行きの柱穴がやや深くなる。すべての柱穴からは柱痕が確認され，柱痕幅12～15　程とほぼ一定する。

縁部分は13個の柱穴で構成され，Ｐ21を除いた12個は，それぞれ身舎の柱穴と対応した位置に造られている。Ｐ21のみＰ16とＰ17のほぼ中間に位置する。北・南縁の平均総長は9.15m，西縁は6.8mを測る。縁の出は北・南側で身舎桁行きから平均1.26m，西側で身舎梁行きから平均1.23mとなり，平・妻側ともほぼ同規模となる。柱穴の平面プランはすべて隅丸方形を基調とし，平面規模は１辺18～30　，検出面からの深さは15～32　を測る。柱痕はＰ14を除いた12個で確認され，柱痕幅は9　前後が多い。縁部の柱穴は，身舎の柱穴に比して規模，深さが一回り小さく，浅い。また柱痕幅も相対的に小さくなることが指摘できる。

本建物跡に伴う柱穴から遺物は全く出土していないが，建物跡範囲内のＬ　中からは瀬戸・美濃系大窯期と考えられる天目茶碗片が出土している（図69－4）。

ま　と　め

本建物跡は調査区東端と接し正確な構造，規模は明らかでないが，現状において３間×１間の３面縁付き建物跡と認識できる。本遺跡における該期の建物跡の構造から四面縁である可能性は高く，その場合の平面積は70　となる大型の建物である。２号建物跡とは位置的に重複関係にあり，柱穴配置より復元される建物構造から本建物跡が先行すると考えている。

調査区内において三方を囲郭する１号溝跡とはほぼ軸線が一致し，同時期の所産と考えられる。１号溝跡の内外に存在し，これと軸線をほぼ平行，直交方向にとる一群の建物跡，さらに竪穴状遺構や井戸跡で館跡が構成されると推測され，本建物跡については位置や規模から建て替え前の主屋（主殿）に当たると考えて大過ない。隣接する５号建物跡とは主軸方向が直交するため，同時並存していた可能性が高い。正確な帰属時期については文献記録やこれを示す出土遺物に恵まれず判然としない。しかし２号建物跡の報告で示した年代観に基づき，２号建物跡に先行するという認識から，15世紀末～16世紀代前半に収まると考えておきたい。（横須賀）

４号掘立柱建物跡　ＳＢ04

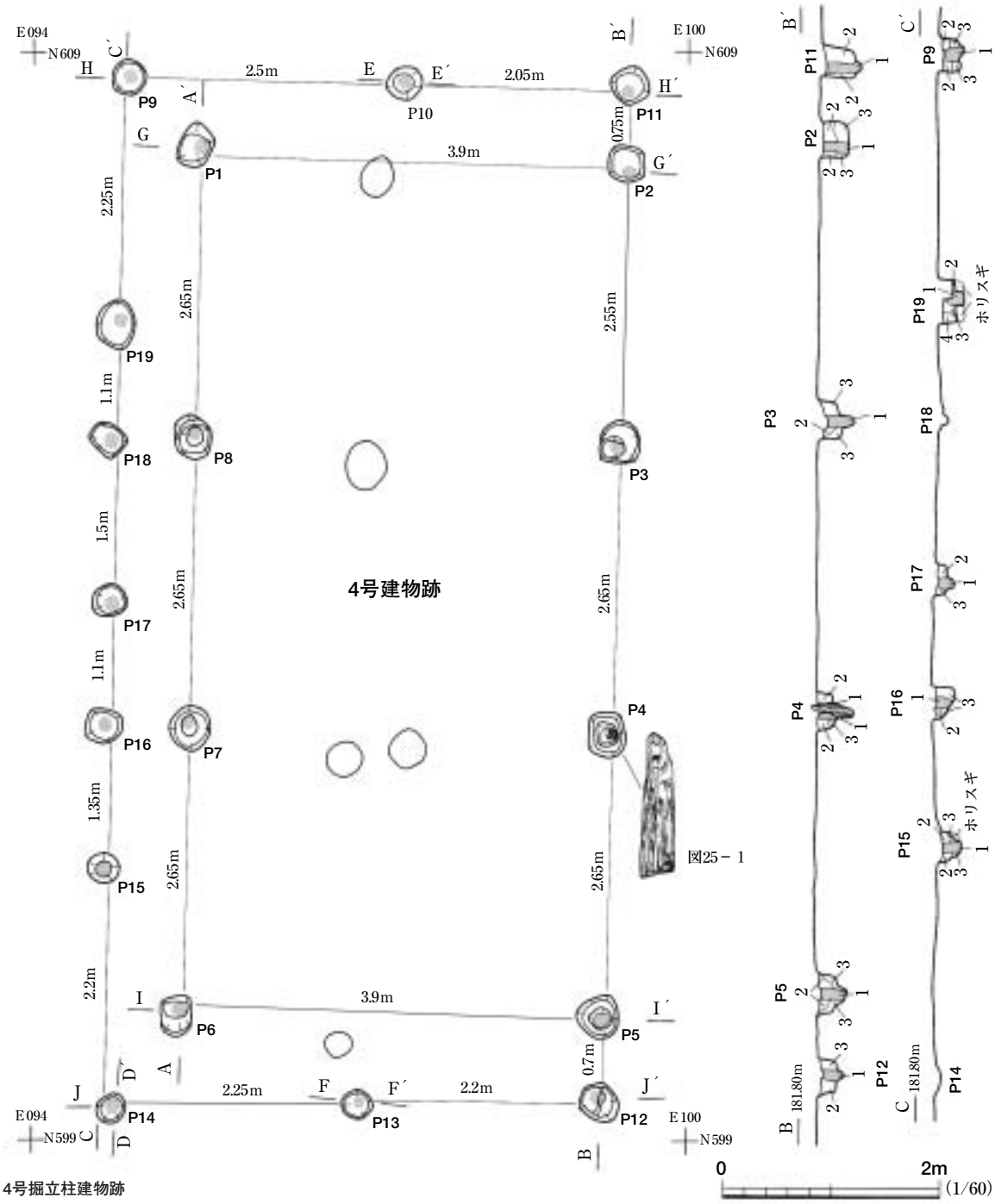
遺　　構（図11・24・25，図版７・13）

本建物跡は調査区中央部，Ｔ・Ｕ20～22グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面であるが，本来はＬ　上面で確認できたものと考えられる。現状の地形はほぼ平坦であり，確認面の標高は181.60ｍ前後でほぼ一定する。周辺遺構との位置関係を整理すれば，東に接して２・３号建物跡，南東約2.5ｍの位置に７号建物跡が存在する。２号建物跡とは軸線方向がほぼ直交し，位置関係から同時期に存在したと考えられる。５号建物跡とは位置的に重複関係にあり，柱穴の切り合いは認められないものの，本建物跡は２号建物跡と並存するとの認識から，本建物跡が後出すると思われる。また調査区内において三方を囲郭する１号溝跡の内部であり，北・西・南辺の内側からの距離はそれぞれ約35ｍ，約17ｍ，約40ｍを測る。

本建物跡は桁行き３間，梁行き１間となる南北棟の身舎に北，西，南の３面に縁の付く構造と認識できる。東桁行きを基準とした建物の主軸方向はＮ１°Ｅを示す。建物の平面積は身舎部分が30.8　，縁部分を含めると42.3　を測る。

身舎は８個の柱穴で構成される。桁行きは３間であり，東・西桁行きの平均総長は7.9ｍ，柱間寸法は平均2.63ｍ（約8.7尺）となる。梁行きは１間であり，北・南梁行きとも柱間寸法は3.9ｍ（約12.9尺）を測る。柱穴の平面プランはすべて隅丸方形を基調とし，平面規模は一辺36～42　とほぼ同規模となる。検出面からの深さは26～46　とややバラツキがみられる。柱痕は８個すべてから検出され，柱痕幅は10～15　を測る。なおＰ４には柱材の一部が遺存していた。

縁は11個の柱穴で構成される。北・南縁の平均総長は4.50ｍ，西縁の総長は9.50ｍを測る。北・南縁は２間であり，中間のＰ10・Ｐ13はともにやや東側に位置する。西縁柱列は６間を数え，中間の４間は柱間寸法が1.1～1.5ｍと狭くなる。縁の出は南北の桁方向が平均0.74ｍ，東西の梁方向が



4号掘立柱建物跡

P２（BB′）
1 10YR3/1 黒褐色シルト（柱痕）
2 10YR4/2 黒褐色シルト（褐色土塊との混土）
3 10YR4/3 灰褐色シルト（黒褐色土との混土）

P３（BB′）
1 10YR3/1 黒褐色シルト（柱痕）
2 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土塊との混土）
3 10YR6/6 明黄褐色粘土（黒褐色土との混土）

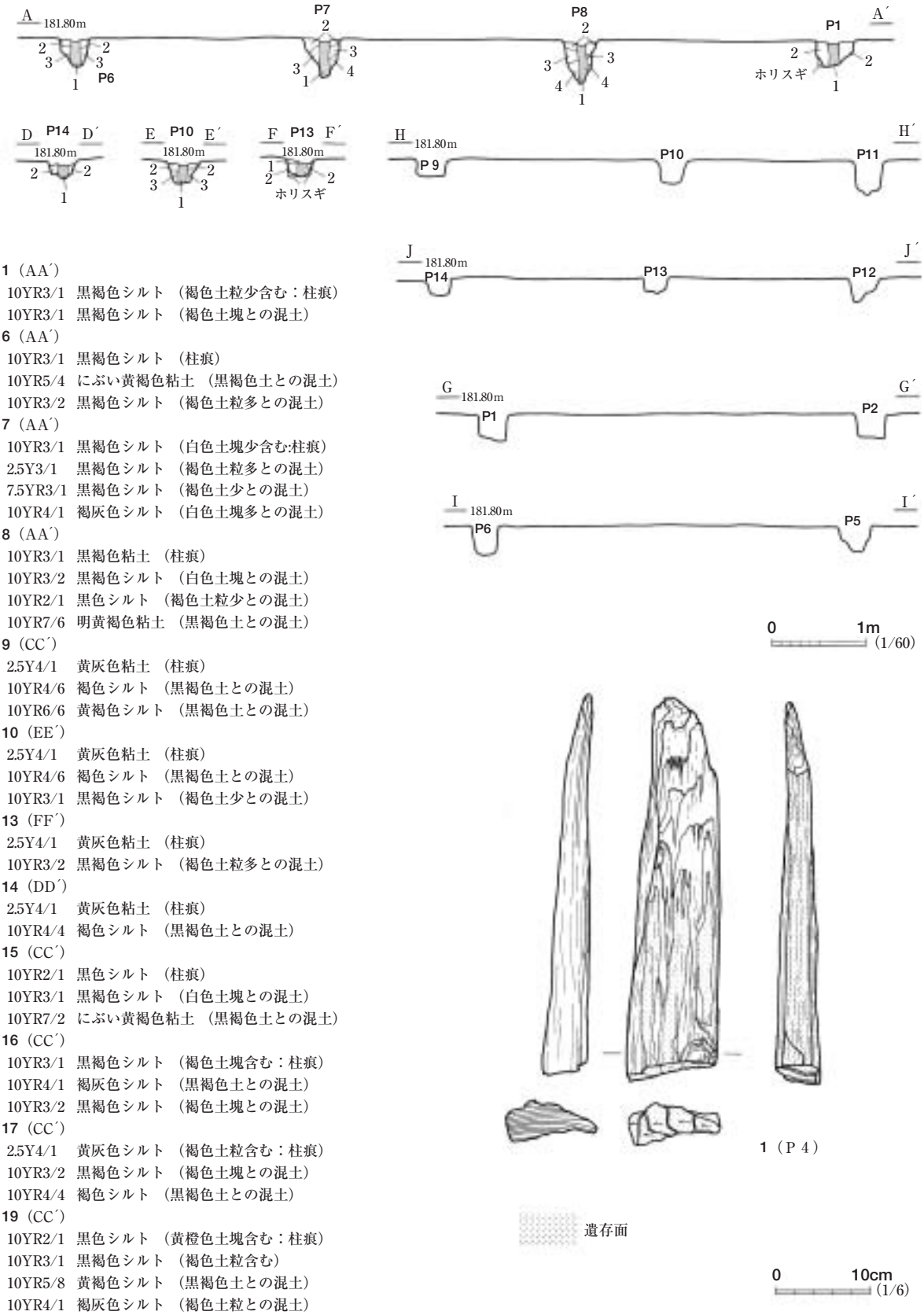
P４（BB′）
1 2.5Y4/1 黄灰色シルト（褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR4/6 黄褐色シルト（白色土塊との混土）
3 10YR6/6 明褐色シルト（白色土塊との混土）

P５（BB′）
1 2.5Y3/1 黒褐色粘土（褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR4/6 褐色シルト（白色土塊との混土）
3 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土との混土）

P11（BB′）
1 2.5Y3/1 黒褐色シルト（柱痕）
2 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土塊多との混土）

P12（BB′）
1 2.5Y3/1 黒褐色粘土（柱痕）
2 10YR3/1 黒褐色シルト（白色土塊多との混土）

図24　４号掘立柱建物跡（１）



P１（AA´）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土塊との混土）

P６（AA´）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （柱痕）
2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 （黒褐色土との混土）
3 10YR3/2 黒褐色シルト （褐色土粒多との混土）

P７（AA´）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （白色土塊少含む:柱痕）
2 2.5Y3/1 黒褐色シルト （褐色土粒多との混土）
3 7.5YR3/1 黒褐色シルト （褐色土少との混土）
4 10YR4/1 褐灰色シルト （白色土塊多との混土）

P８（AA´）
1 10YR3/1 黒褐色粘土 （柱痕）
2 10YR3/2 黒褐色シルト （白色土塊との混土）
3 10YR2/1 黒色シルト （褐色土粒少との混土）
4 10YR7/6 明黄褐色粘土 （黒褐色土との混土）

P９（CC´）
1 2.5Y4/1 黄灰色粘土 （柱痕）
2 10YR4/6 褐色シルト （黒褐色土との混土）
3 10YR6/6 黄褐色シルト （黒褐色土との混土）

P10（EE´）
1 2.5Y4/1 黄灰色粘土 （柱痕）
2 10YR4/6 褐色シルト （黒褐色土との混土）
3 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土少との混土）

P13（FF´）
1 2.5Y4/1 黄灰色粘土 （柱痕）
2 10YR3/2 黒褐色シルト （褐色土粒多との混土）

P14（DD´）
1 2.5Y4/1 黄灰色粘土 （柱痕）
2 10YR4/4 褐色シルト （黒褐色土との混土）

P15（CC´）
1 10YR2/1 黒色シルト （柱痕）
2 10YR3/1 黒褐色シルト （白色土塊との混土）
3 10YR7/2 にぶい黄褐色粘土 （黒褐色土との混土）

P16（CC´）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土塊含む：柱痕）
2 10YR4/1 褐灰色シルト （黒褐色土との混土）
3 10YR3/2 黒褐色シルト （褐色土塊との混土）

P17（CC´）
1 2.5Y4/1 黄灰色シルト （褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR3/2 黒褐色シルト （褐色土塊との混土）
3 10YR4/4 褐色シルト （黒褐色土との混土）

P19（CC´）
1 10YR2/1 黒色シルト （黄橙色土塊含む：柱痕）
2 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土粒含む）
3 10YR5/8 黄褐色シルト （黒褐色土との混土）
4 10YR4/1 褐灰色シルト （褐色土粒との混土）

図25　４号掘立柱建物跡（２），出土遺物

平均0.74mとなり，ほぼ等しくなる。柱穴の平面形は隅丸方形を基調とし，規模は１辺28～34　を測る。Ｐ19のみ隅丸長方形を呈し，長辺が40　とやや大きくなる。検出面からの深さはＰ11を除いて20　前後とほぼ一定するが，Ｐ11のみ深く，36　を測る。柱痕は11個すべてから検出され，柱痕幅は10～13　となる。縁部の柱穴は規模，深さ，柱痕幅のいずれにおいても，身舎の柱穴に比して一回り小さく，浅いことが指摘できる。

遺　　物（図25，表9，図版51）

Ｐ４からは柱材の一部が出土している。１はその柱材である。樹種はスギ，木取りは二方柾となる角柱である。木口部分には製材時と思われる工具痕が明瞭に残る。

この他Ｐ15の　３（掘形埋土）から土師器杯の細片が出土しているが，図示しえない。また遺構外出土遺物のうち，本建物跡敷地内，及び周辺から古代の土師器，須恵器の細片が少量出土しているが，本建物跡に伴うものとは考えにくい。

ま　と　め

本建物跡は３間×１間の身舎に３面の縁が付く南北棟の建物跡である。５号建物跡とは位置的に重複しており，東に隣接する２号建物跡との関係から，本建物跡は５号建物跡を建て替えたものと考えられる。建物の主軸方向から２号建物跡とは並置されていたと推定され，館における付属屋的な建物との評価をしておきたい。（横須賀）

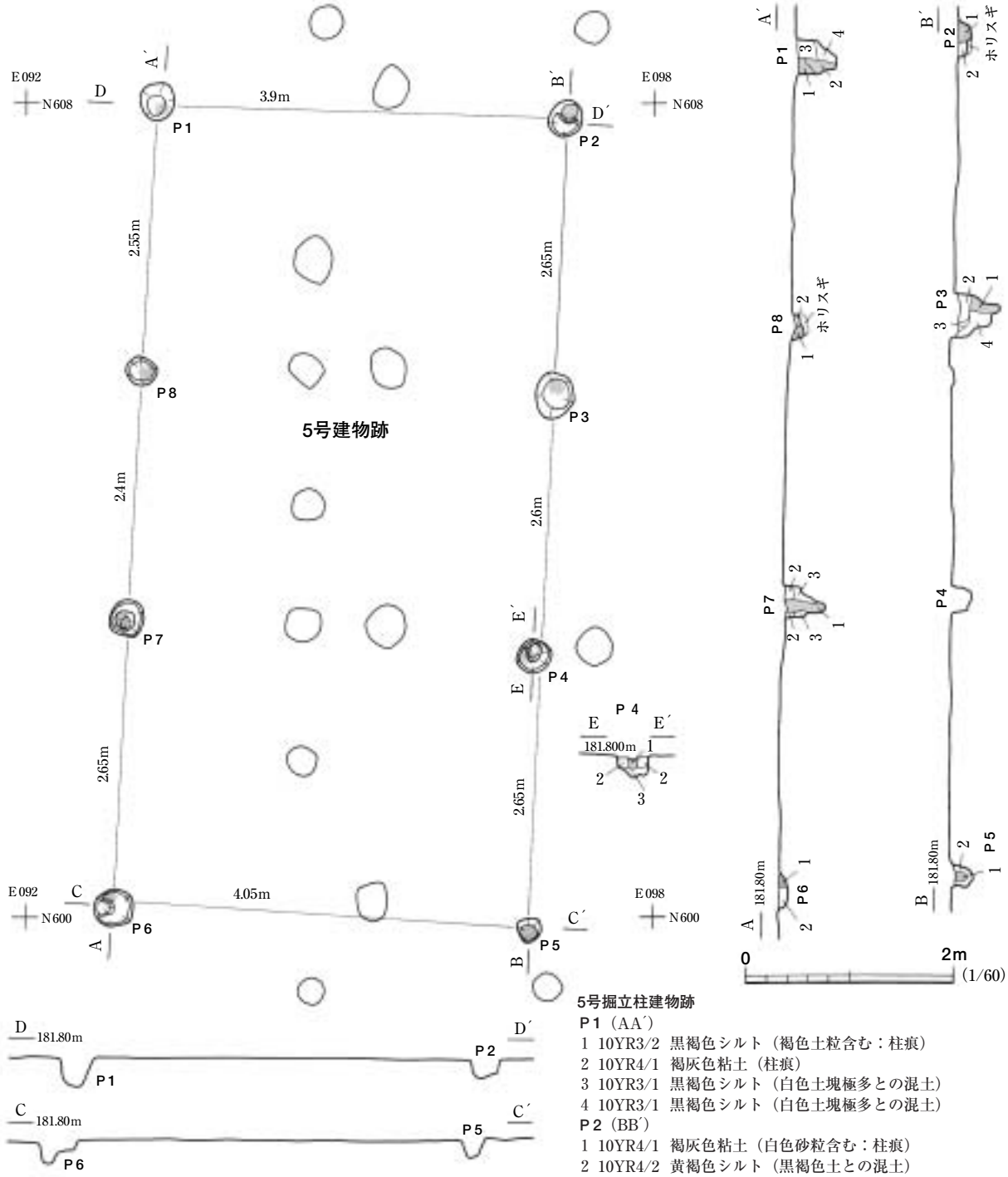
５号掘立柱建物跡　ＳＢ05

遺　　構（図11・26，図版７・14）

本建物跡は調査区中央部，Ｓ・Ｔ21・22グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面であるが，本来はＬ　上面で確認できたものと考えられる。現状の地形はほぼ平坦であり，確認面の標高は181.60m前後でほぼ一定する。４号建物跡とは柱穴の切り合いはないが，位置的に重複関係にある。本建物跡は建物の主軸方向から３号建物跡と並存していたと推定され，本建物跡が４号建物跡に先行すると認識している。周辺遺構との関係を整理する。東３ｍの位置には２・３号建物跡，南東５ｍの位置には７号建物跡が近接し，南へ12ｍの位置に６号建物跡がやや離れて存在する。また調査区内において三方を囲郭する１号溝跡の内部にあり，北・西・南辺の内側からの距離はそれぞれ約36m，約17m，約41mを測る。

本建物跡は桁行き３間，梁行き１間の南北棟側柱建物跡であり，西桁行きを基準とした建物の主軸方向はＮ４°Ｅを指す。建物跡は８個の柱穴で構成される。東・西桁行きの総長は平均7.75ｍを測り，桁行きの柱間寸法は平均2.58m（約8.5尺）となる。梁行きは１間であり，南・北梁行きの計測値は平均3.98m（約13.0尺）である。以上の計測値により建物の平面積は30.8　となる。建物規模や柱間寸法は建て替え後と考えられる４号建物跡の身舎部分とほぼ一致しており，縁の有無を除いて同一の設計基準が用いられている。

柱穴の平面プランは隅丸方形や隅丸長方形を基調とする。柱穴の平面規模はＰ５が最小で一辺24



5号掘立柱建物跡

P１（AA´）
1 10YR3/2 黒褐色シルト（褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR4/1 褐灰色粘土（柱痕）
3 10YR3/1 黒褐色シルト（白色土塊極多との混土）
4 10YR3/1 黒褐色シルト（白色土塊極多との混土）

P２（BB´）
1 10YR4/1 褐灰色粘土（白色砂粒含む：柱痕）
2 10YR4/2 黄褐色シルト（黒褐色土との混土）

P３（BB´）
1 2.5Y4/1 黄灰色シルト（柱痕）
2 10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色土塊多含む）
3 10YR7/4 にぶい黄褐色粘土（黒褐色土との混土）
4 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土（黒褐色土との混土）

P４（EE´）
1 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（黒褐色土との混土）
3 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（灰白色土との混土）

P５（BB´）
1 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土粒多含む：柱痕）
2 10YR4/6 褐色シルト（黒褐色土との混土）

P６（AA´）
1 2.5Y4/1 黄灰色シルト（褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土粒多との混土）

P７（AA´）
1 2.5Y3/1 黒褐色粘土（柱痕）
2 2.5Y6/4 にぶい黄色粘土（黒褐色土との混土）
3 2.5Y4/1 黄灰色シルト（褐色土との混土）

P８（AA´）
1 10YR3/1 黒褐色シルト（柱痕）
2 2.5Y4/1 黄灰色シルト（褐色土との混土）

図26　５号掘立柱建物跡

，Ｐ３が最大で長辺42　と開きがみられるが，概ね30　前後のものが多い。検出面からの深さはＰ１・Ｐ３・Ｐ７が特に深く40～44　，他の５個は10～20　と浅く両者には大きな差が認められる。柱痕はすべての柱穴から検出され，柱痕幅は10～16　を測る。柱穴規模に大小が認められることについて，その位置からは規則性が見出せず，現状においてその理由を推測するには至っていない。

本建物跡に伴う柱穴から遺物の出土はみられない。遺構外出土遺物のうち，本建物跡の敷地内及び周辺から古代の土師器，須恵器の細片が少量出土しているが，本建物跡に伴うものとは考えにくい。柱材などの建築用材も認められなかった。

ま　と　め

本建物跡は３間×１間となる南北棟の建物跡である。本建物跡と重複し，建て替え後の建物跡と推定される４号建物跡の身舎部分とは全体の規模や柱間寸法がほぼ一致する。このため２棟の建物跡は建て替え前後で同一の設計基準が用いられたと推測される。本建物跡は館跡の主屋とした３号建物跡と並存していたと考えられ，これに付随する付属屋的建物との性格を推定している。帰属年代を直接判断できる材料に恵まれないが，３号建物跡で示した年代観に沿っておきたい。（横須賀）

６号掘立柱建物跡　ＳＢ06

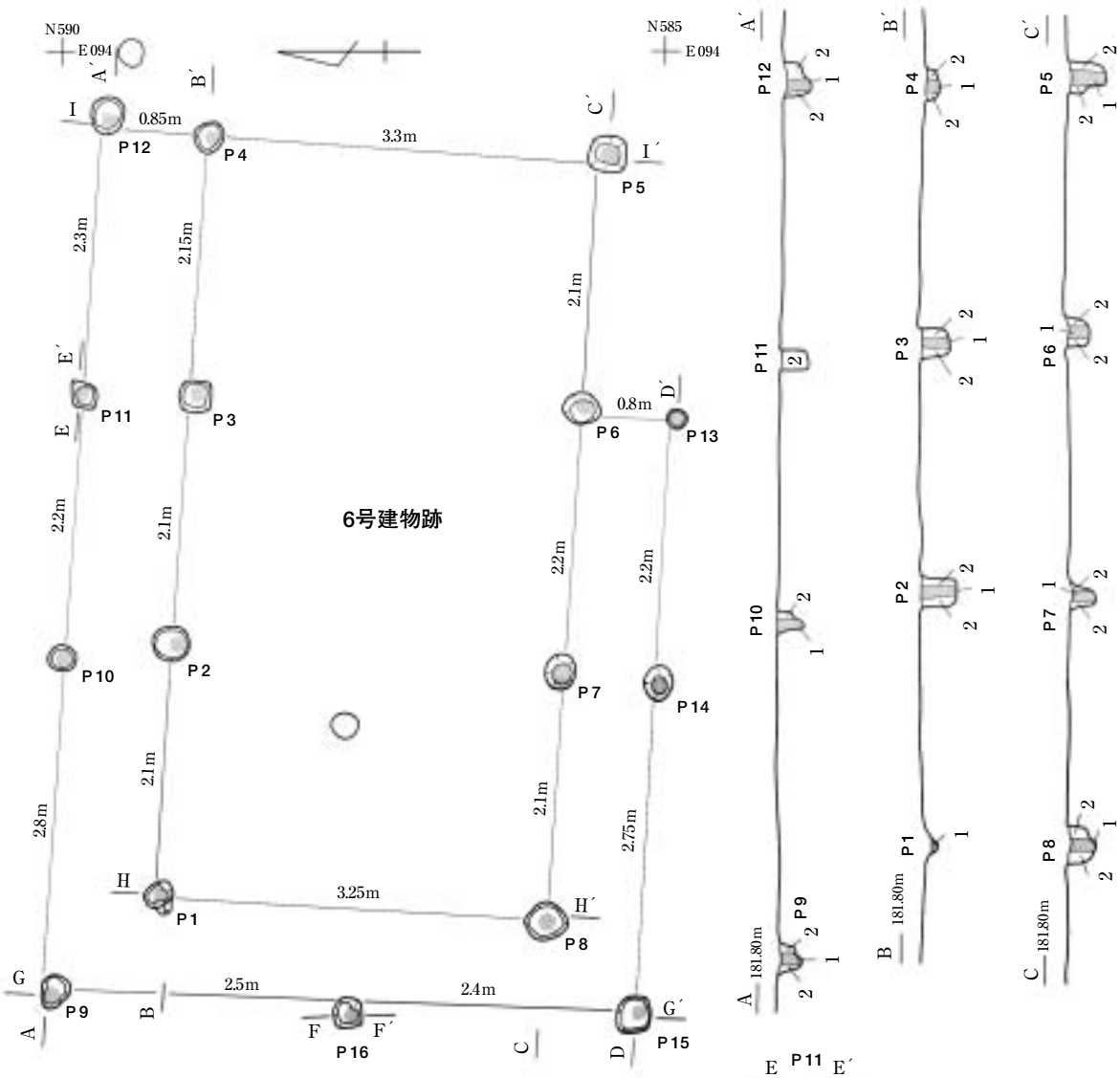
遺　　構（図11・27・28，図版15）

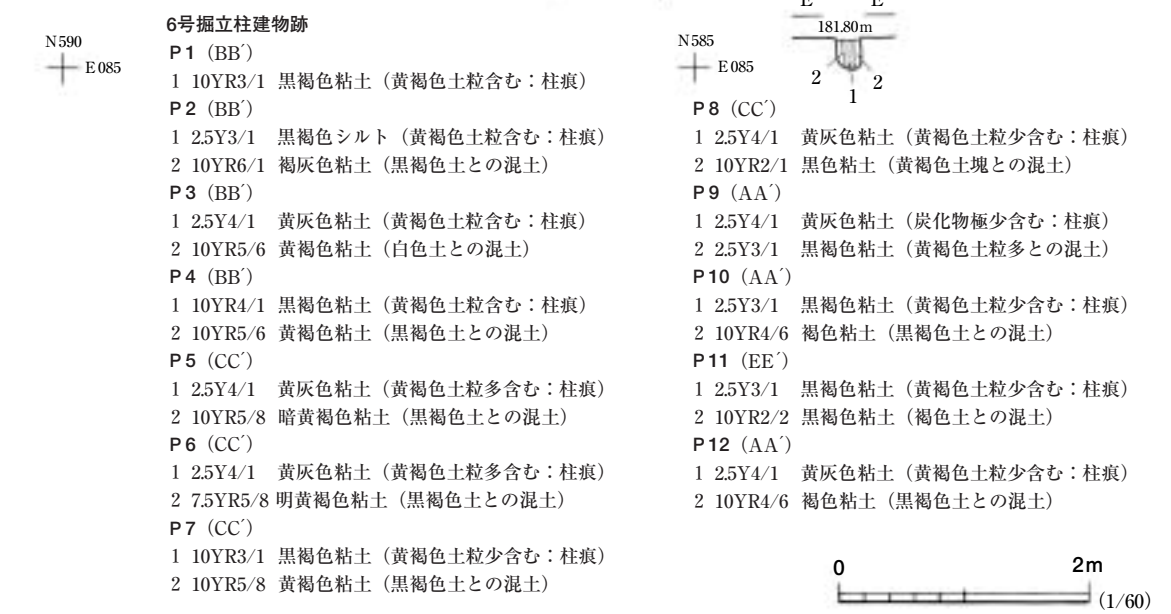
本建物跡は調査区中央からやや南へ下がる，Ｒ・Ｓ18グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面であるが，本来はＬ　上面で確認できたものと考えられる。現状の地形はほぼ平坦であり，確認面の標高は181.60ｍ前後で一定する。本建物跡は他の建物跡とはやや独立して存在し，北東約８ｍに２～５・７号建物跡，南約８ｍに11号建物跡が位置する。本建物跡の東に接しては１号土坑，２号井戸跡が重複して存在している。また，調査区内において三方を囲郭する１号溝跡の内側に位置し，北・西・南辺からの距離はそれぞれ約52ｍ，約６ｍ，約26ｍを測る。

本建物跡は桁行き３間，梁行き１間となる東西棟の身舎に，北，西，南の各辺に縁が付く構造である。南縁は東端まで到達せず，１間分短くなる。柱筋の通る身舎の北桁行きを基準とした建物の主軸方向はＮ86°Ｗを指す。身舎の平面積は20.9　，縁を含めた総面積は33.7　となる。

身舎は８個の柱穴で構成される。南・北桁行きの総長は平均6.38ｍを測り，桁行きの柱間寸法は平均2.13ｍ（約7.0尺）である。梁行きは１間であり，東・西梁行きの平均長は3.28ｍ（10.8尺）となる。柱穴の平面プランは隅丸方形を基調とし，柱穴の平面規模は１辺25～30　とほぼ同形，同大である。検出面からの深さはＰ１，Ｐ４が15　前後，他の６個は25～35　を測り，南桁行きでは両端の２個（Ｐ５・Ｐ８），北桁行きでは中間の２個（Ｐ２・Ｐ３）が深くなる。柱痕は８個すべての柱穴から検出された。柱痕幅は10～14　を測り，11，12　となるものが多い。

縁は８個の柱穴で構成される。北縁は３間であり総長は7.30ｍ，南縁は１間分短いため総長4.95ｍとなる。西縁はほぼ中間にＰ16がくるため２間となり，総長は4.90ｍを測る。縁の出は身舎の西梁行きから平均0.80　，身舎の南北桁行きからは平均0.83　を測り，建物の妻・平側ともほぼ等し





6号掘立柱建物跡

P１（BB′）
1 10YR3/1 黒褐色粘土（黄褐色土粒含む：柱痕）
P２（BB′）
1 2.5Y3/1 黒褐色シルト（黄褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR6/1 褐灰色粘土（黒褐色土との混土）
P３（BB′）
1 2.5Y4/1 黄灰色粘土（黄褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR5/6 黄褐色粘土（白色土との混土）
P４（BB′）
1 10YR4/1 黒褐色粘土（黄褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR5/6 黄褐色粘土（黒褐色土との混土）
P５（CC′）
1 2.5Y4/1 黄灰色粘土（黄褐色土粒多含む：柱痕）
2 10YR5/8 暗黄褐色粘土（黒褐色土との混土）
P６（CC′）
1 2.5Y4/1 黄灰色粘土（黄褐色土粒多含む：柱痕）
2 7.5YR5/8 明黄褐色粘土（黒褐色土との混土）
P７（CC′）
1 10YR3/1 黒褐色粘土（黄褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR5/8 黄褐色粘土（黒褐色土との混土）
P８（CC′）
1 2.5Y4/1 黄灰色粘土（黄褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR2/1 黒色粘土（黄褐色土塊との混土）
P９（AA′）
1 2.5Y4/1 黄灰色粘土（炭化物極少含む：柱痕）
2 2.5Y3/1 黒褐色粘土（黄褐色土粒多との混土）
P10（AA′）
1 2.5Y3/1 黒褐色粘土（黄褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR4/6 褐色粘土（黒褐色土との混土）
P11（EE′）
1 2.5Y3/1 黒褐色粘土（黄褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR2/2 黒褐色粘土（褐色土との混土）
P12（AA′）
1 2.5Y4/1 黄灰色粘土（黄褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR4/6 褐色粘土（黒褐色土との混土）

図27　６号掘立柱建物跡（１）

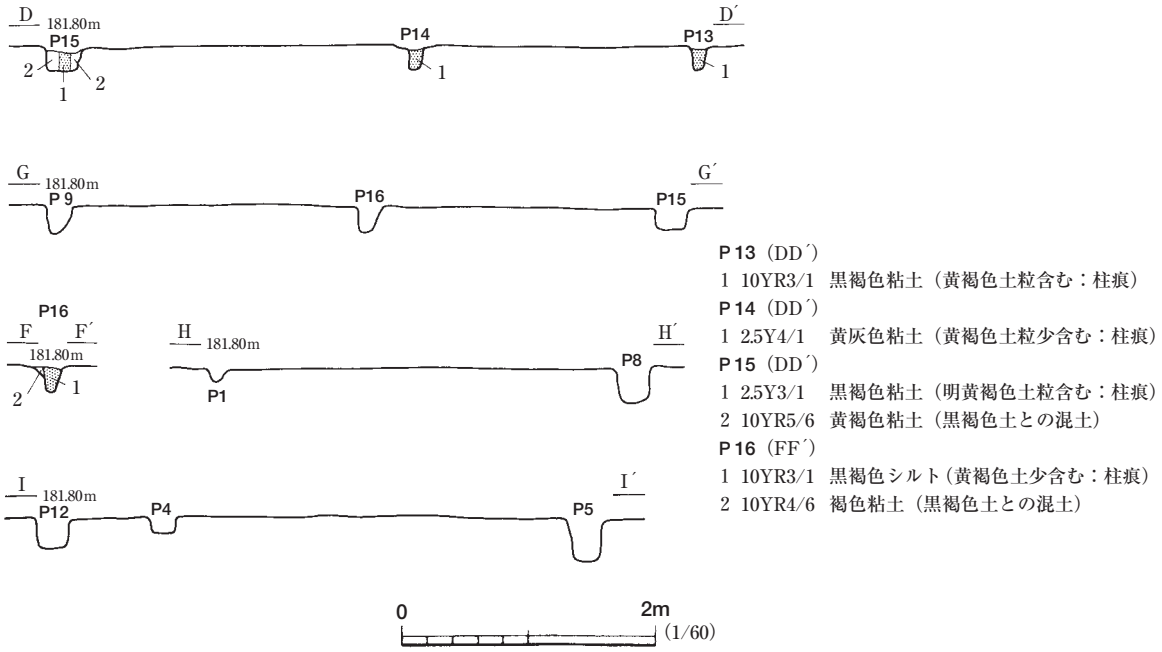


図28　６号掘立柱建物跡（２）

くなる。柱穴の平面プランは隅丸方形を基調とする。柱穴の平面規模は隅柱となるＰ９・Ｐ12・Ｐ15が１辺30　弱と大きく，Ｐ10・Ｐ11・Ｐ13・Ｐ14・Ｐ16の５個は1辺が13～17　と小さくなる。ただし検出面からの深さについては８個とも20～26　を測り，大きなバラツキは認められない。柱痕は８個すべてから検出され，柱痕幅は９～13　である。

本建物跡に伴う柱穴から遺物は出土していない。遺構外出土遺物のうち，周辺から出土した古代の土師器，須恵器の細片が少量存在するが，本建物跡に伴うものとは考えにくい。

ま　と　め

本建物跡は３間×１間の身舎に，北，西，南に縁の付く構造となる。南側の縁は東端まで到達せず，北縁より１間分短い。他の建物群とやや離れて位置し，隣接して存在する２号井戸跡とは何らかの関連が予想される。そのため井戸跡との関係を積極的に評価すれば，館跡における厨的な性格を考えることができる。

帰属する年代については直接的に判断できる材料に恵まれない。しかし，３・５号建物跡とは建物の主軸方向がほぼ平行，あるいは直交しており，これらの建物跡とは並存していたと推定される。よって３号建物跡で示した年代観に沿い，本建物跡は15世紀末～16世紀前半に機能していたと考えておきたい。

（横須賀）

７号掘立柱建物跡　ＳＢ07

遺　　構（図11・29，図版７・16）

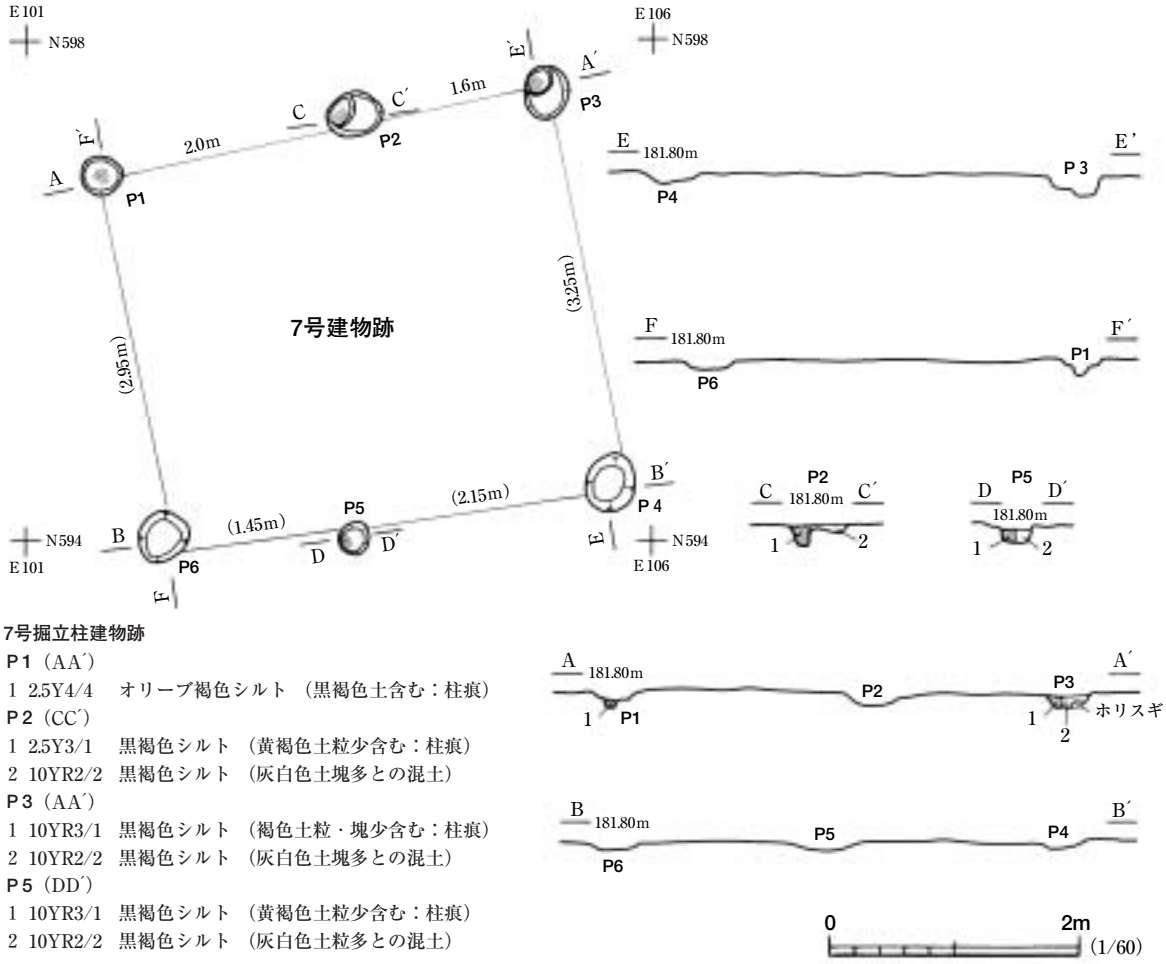
本建物跡は調査区の西部中央，Ｕ・Ｖ19・20グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面であるが，本来はＬ　上面で確認できたものと考えられる。現状の地形はほぼ平坦であり，確認面の標高

は181.60m前後を測る。周辺は建物跡が集中する範囲であり，北４ｍの位置に２・３号建物跡，北西2.5mの位置に４・５号建物跡が位置する。またやや離れて南西８ｍの位置には６号建物跡，２号井戸跡，１号土坑が存在する。調査区内において三方を囲郭する１号溝跡の内側であり，北・西・南辺の内側からの距離はそれぞれ約44m，約22m，約35mを測る。

本建物跡は桁行き２間，梁行き１間となる東西棟の側柱建物跡である。北桁行きを基準とした建物の主軸方向はN78°Eを指す。平面積は11.2　を測る小型の建物跡である。建物跡は６個の柱穴で構成され，北・南桁行きの総長はともに3.60mを測るが，柱間寸法は北桁行きが2.0m，1.6m，南桁行きが1.45m，2.15mと一定しない。これは中間のＰ２・Ｐ５の位置が不規則でやや外側に飛び出すためである。梁行きは１間であり，西梁行きは2.95m，東梁行きは3.25mと一致しない。

柱穴の平面プランは遺存状況が悪いため判然としないものが多いが，隅丸方形，隅丸長方形を基調とするようである。柱穴の平面規模はＰ５が最も小さく１辺20　程，Ｐ１は１辺30　程，他の４個はいずれも長辺で40　前後を測る。検出面からの深さは最も深いＰ２が17　，他は数　程度のものもあり遺存状態はよくない。柱痕は４個から検出され，柱痕幅は８～13　を測る。

本建物跡に伴う柱穴から遺物の出土はみられない。また遺構外出土遺物のうち，本建物跡周辺か



7号掘立柱建物跡

Ｐ１（AA´）
1　2.5Y4/4　オリーブ褐色シルト（黒褐色土含む：柱痕）
Ｐ２（CC´）
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト（黄褐色土粒少含む：柱痕）
2　10YR2/2　黒褐色シルト（灰白色土塊多との混土）
Ｐ３（AA´）
1　10YR3/1　黒褐色シルト（褐色土粒・塊少含む：柱痕）
2　10YR2/2　黒褐色シルト（灰白色土塊多との混土）
Ｐ５（DD´）
1　10YR3/1　黒褐色シルト（黄褐色土粒少含む：柱痕）
2　10YR2/2　黒褐色シルト（灰白色土粒多との混土）

図29　７号掘立柱建物跡

らは古代の土師器，須恵器が若干出土しているが，本建物に伴うものとは考えにくい。また，柱材などの建築用材も認められなかった。

ま　と　め

本建物跡は２間×１間の小型の建物跡である。梁行きや桁行きの柱間寸法は不規則であり，桁行きの柱筋もきれいには通らず，厳密な設計規格は感じられない。帰属する年代については直接に伴う遺物が出土しておらず，建物の主軸方向も近似するものがないため判断が難しい。しかし，建物跡の集中域に存在すること，柱穴の形態や規模などから，館跡を構成する建物跡と同時期と評価しておきたい。建物としては規模やつくりから簡素な倉庫などの性格が推定される。　（横須賀）

８号掘立柱建物跡　ＳＢ08

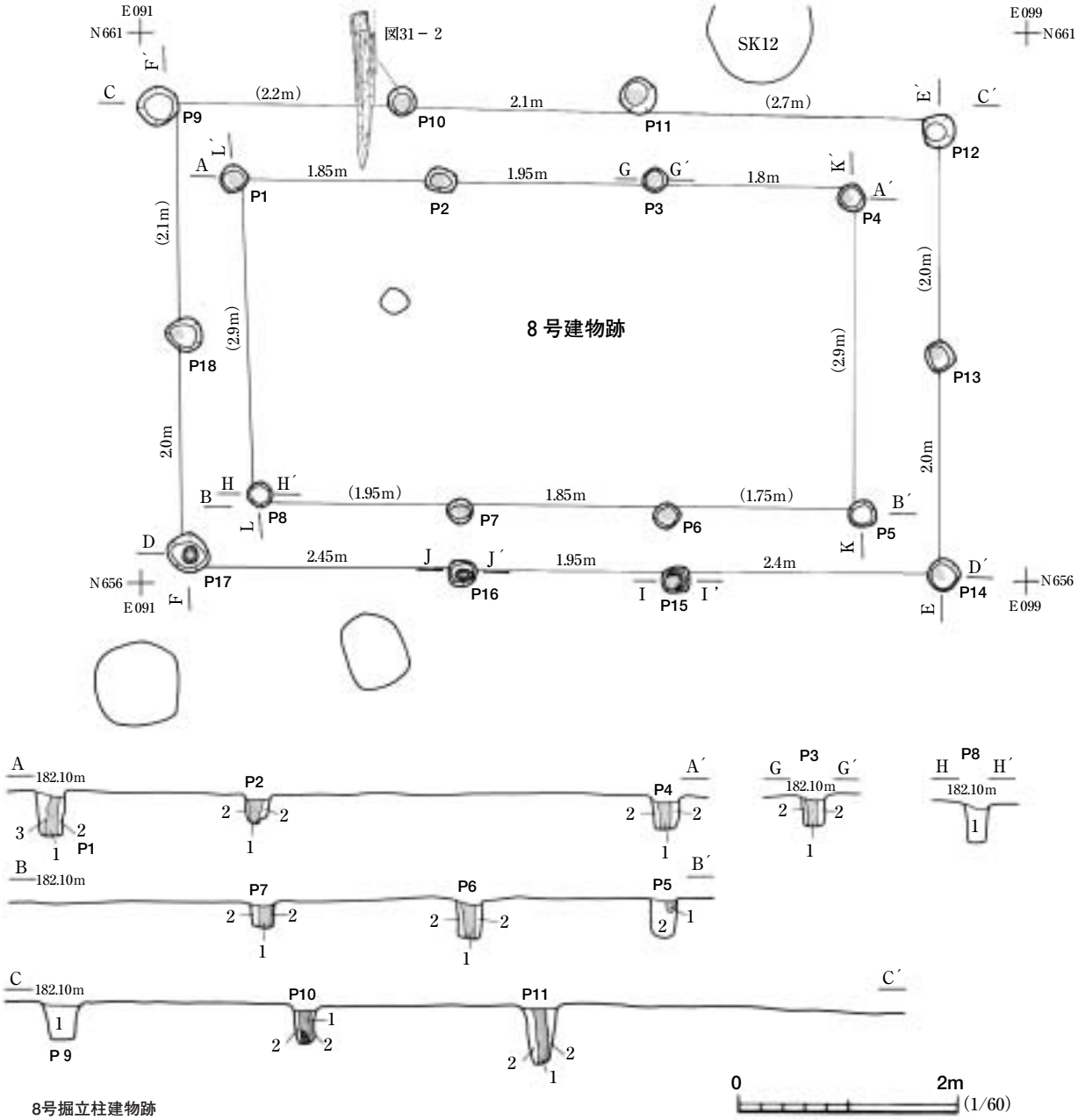
遺　　構（図10・30・31，図版17・18）

８号建物跡は，調査区北端のＳ・Ｔ32・33グリッドに位置している。12号建物跡の北東３ｍ，12号土坑の北西３ｍの場所にある。遺構検出面はＬ　上面であるが，本来はＬ　上面で確認できたものと考えられる。確認面の標高は182.00ｍ弱で，現状は平坦な地形をしている。

本建物跡は，二重に巡る柱列からなる。第一（内側）の柱列は８個の柱穴，第二（外側）の柱列は10個の柱穴により構成されている。第一柱列の北西隅の柱穴をＰ１とし，時計回りにＰ２，Ｐ３…Ｐ８とした。北桁行きはＰ１～Ｐ４の5.6ｍ，南桁行きはＰ５～Ｐ８の5.6ｍである。東梁行きはＰ４－Ｐ５の2.9ｍ，西梁行きはＰ８－Ｐ１の2.9ｍである。第一柱列は縁を有する建物の身舎と考えられ，その大きさは東西5.6ｍ×南北2.9ｍ，面積は16.2　を測る。北桁行きを基準とした建物の長軸方向はＮ89°Ｗである。

各柱穴の柱間寸法は，桁行きのＰ１～Ｐ４及びＰ５～Ｐ８で1.8ｍ～1.95ｍとほぼ一様である。桁行を柱穴の柱間寸法の平均は，北桁行き1.87ｍ，南桁行き1.85ｍである。また，梁行きについては先に述べたように，Ｐ４－Ｐ５及びＰ８－Ｐ１ともに2.9ｍである。柱穴の平面形は，Ｐ１，Ｐ３，Ｐ７は円形，他は方形をしている。それぞれの直径及び辺の大きさは，20～26　の範囲にあり，その深さは24～38　の間にある。柱穴掘形の底面標高は，181.52ｍ～181.66ｍの範囲にあり，その標高差は14　である。Ｐ１～Ｐ４及びＰ６，Ｐ７に直径10　あまりの柱痕を認めた。柱痕は，すべて黒褐色シルトである。柱痕の認められないものについては，柱を抜取り埋め戻したものと考えられる。身舎の柱穴から遺物は出土しなかった。

第二柱列の北西隅の柱穴をＰ９として，時計回りにＰ10，Ｐ11…Ｐ18とした。北側柱列はＰ９～Ｐ12の7.0ｍ，南側柱列はＰ14～Ｐ17の6.8ｍ，東側柱列はＰ12～Ｐ14の4.0ｍ，西側柱列はＰ17・Ｐ18・Ｐ９の4.1ｍである。これらは身舎に付属する縁と考えられる。縁の出は，南に56　，北に76　，東に78　，西に64　である。四面ともに概ね２尺の出となっている。各柱穴の柱間寸法は，北側柱列Ｐ９～Ｐ12で2.1～2.7ｍ，平均2.33ｍ。南側柱列Ｐ14～Ｐ17は，1.95～2.45ｍで，平均は2.27ｍである。東側柱列Ｐ12～Ｐ14と西側柱列Ｐ17～Ｐ９は，ほぼ２ｍと一定している。柱穴の平面形



8号掘立柱建物跡

P１（AA´）
1 7.5YR2/1 黒色シルト （柱痕）
2 7.5YR3/2 黒褐色シルト
3 7.5YR4/3 褐色シルト

P２（AA´）
1 7.5YR2/2 黒褐色シルト （柱痕）
2 7.5YR3/1 黒褐色シルト

P３（GG´）
1 7.5YR3/1 黒褐色シルト （柱痕）
2 10YR2/2 黒褐色シルト

P４（AA´）
1 7.5YR3/1 黒褐色シルト （柱痕）
2 10YR2/3 暗褐色シルト

P５（BB´）
1 7.5YR4/4 褐色シルト
2 10YR2/3 黒褐色シルト

P６（BB´）
1 7.5YR2/2 黒褐色シルト （柱痕）
2 10YR3/4 暗褐色シルト

P７（BB´）
1 7.5YR3/1 黒褐色シルト （柱痕）
2 7.5YR4/4 褐色シルト

P８（HH´）
1 10YR3/3 暗褐色シルト

P９（CC´）
1 10YR3/3 暗褐色シルト （にぶい黄褐色土との混土）

P10（CC´）
1 7.5YR3/2 黒褐色シルト （柱痕）
2 10YR3/2 黒褐色シルト （明褐色土との混土）

P11（CC´）
1 10YR2/2 黒褐色シルト（にぶい黄褐色土含む：柱痕）
2 7.5YR3/2 黒褐色シルト

図30　８号掘立柱建物跡（１）

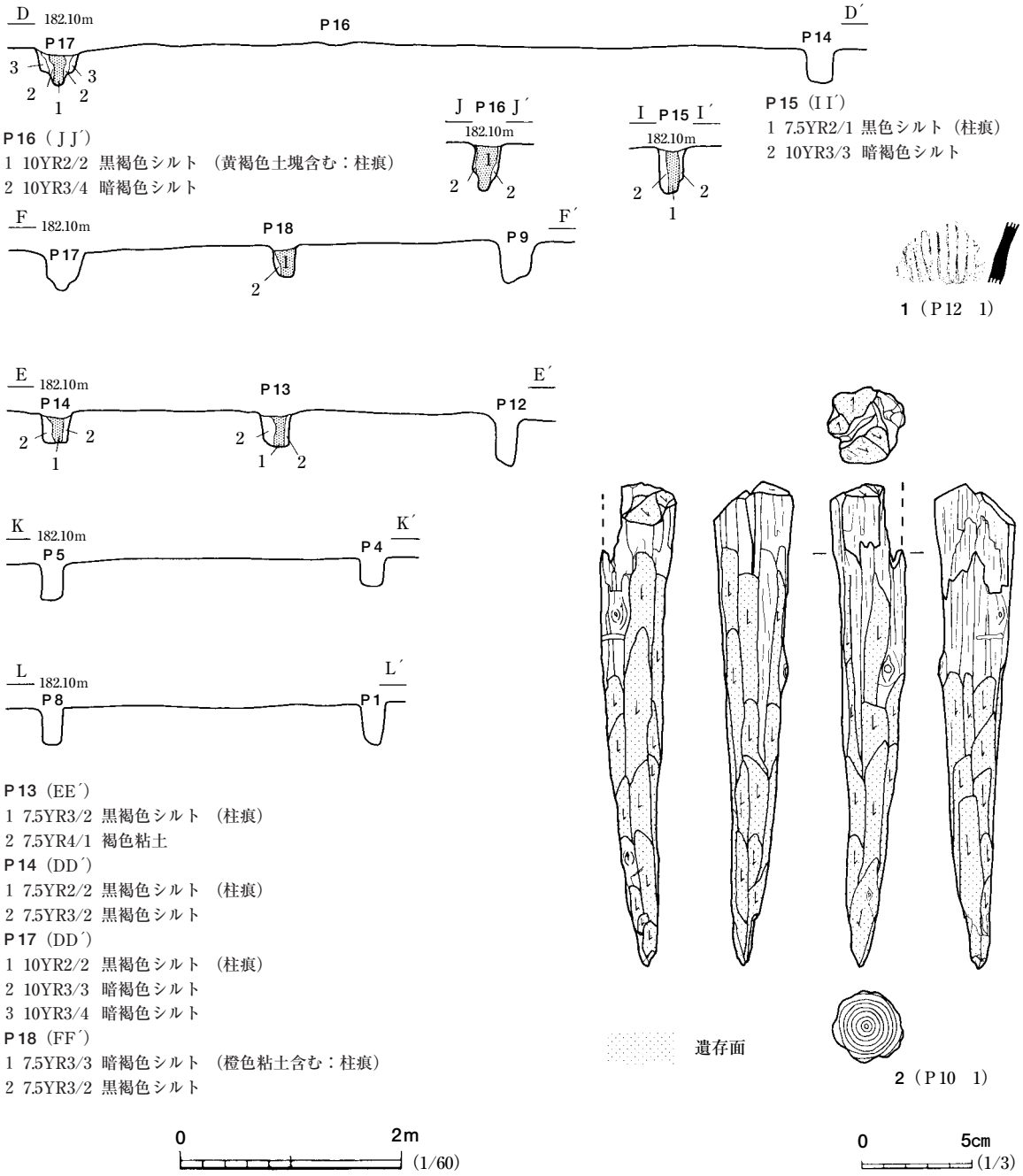


図31　８号掘立柱建物跡（２），出土遺物

は，Ｐ11は楕円形，Ｐ15は円形をしており，その他は方形である。柱穴の大きさは，辺々23～34の範囲にあり，それぞれの深さは26～56　を測る。総じて，身舎を構成する柱穴より大きく深い傾向がみられる。柱穴掘形底面の標高は，181.40～181.66ｍの範囲にあり，その標高差は26　である。黒褐色シルト又は暗褐色シルトの柱痕を，Ｐ10，Ｐ11及びＰ13～Ｐ18で認めた。柱痕のないものについては，堆積土が乱れていることから，柱を抜き取った後に埋め戻したものと考えられる。

遺　　物（図31，表6・9，図版48）

８号建物跡に伴う遺物を図31に示した。１はＰ12　１から出土した須恵器甕の体部片である。外

面にタタキの痕跡が残っている。２はＰ10の柱痕より出土した木杭である。樹種はクリ，遺存長は21.8　，最大径は3.5　を測る。掘形の堆積状況を調べるための半截作業中に，検出面から20　の深さで柱痕の中に杭の頂部を確認した。杭は掘形底面より６　あまり深く入り込んでいた。杭全体に丁寧な加工痕を認めることができる。柱材を安定させるため，あるいは傾きを調整するために打ち込まれたものと考えられる。

ま　と　め

本遺構は，柱列が二重に巡ることから，四面縁をもつ建物跡と考えられる。身舎は東西３間×南北１間，縁を含めた建物全体の面積は27.9　である。南と北の縁は，身舎の桁行きに対応し３間である。これに対し，東と西の縁は２間となり，中央に柱が建つことから平入りの建物であったと考えられる。柱筋はきれいに通らず，建物建築時における厳密な設計規格は感じられない。

出土遺物から所属時期を明確にすることはできないものの，柱穴の掘形の規模から，１号溝跡の内側にある建物群と同時期に属するものと考えられる。（斎藤）

９号掘立柱建物跡　ＳＢ09

遺　　構（図10・32，図版19・20）

本建物跡は調査区の北東部，Ｘ・Ｙ32グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面であるが，一部Ｌ　，Ｌ　を除去してしまいＬ　上面が確認面となってしまった範囲が存在する。Ｌ　上面は標高182.00ｍ前後であり，現状の地形はほぼ平坦となる。本建物跡に重複関係は認められないが，すぐ北に接して10号建物跡が存在する。調査区内において三方を囲郭する１号溝跡の外側北方に位置し，北辺の外側からは約11ｍの距離を有する。

本建物跡は桁行き２間，梁行き１間となる東西棟の側柱建物跡である。南桁行きを基準とした建物の主軸方向はＮ88°Ｗを指す。小型の建物跡であり，平面積は9.5　となる。柱穴は総計６個を数え，北・南桁行きの平均総長は3.33ｍ，柱間寸法の平均は北桁行き1.63ｍ（約5.4尺），南桁行き1.70ｍ（約5.6尺）を測る。東・西梁行きは平均2.85ｍ（約9.4尺）となる。

柱穴の平面形は隅丸方形を基調とする。規模は遺存状況の良くないＰ１を除き，隅柱となるＰ３，Ｐ４，Ｐ６が一辺30～38　と大きく，桁行きの中間に位置するＰ２，Ｐ５は一辺20～24　とやや小さいことが指摘できる。柱穴底面の標高は南桁行きが181.40ｍ～181.60ｍ，北桁行きが標高181.60ｍ～181.70ｍに達し，南桁行きがやや深く掘り込まれていた可能性がある。柱痕はＰ１を除く５個から検出され，柱痕幅は10～12　を測るものが多い。

本建物跡を構成する柱穴から遺物の出土は認められなかった。

ま　と　め

本建物跡は２間×１間の小型の建物跡である。北に隣接する10号建物跡とは建物の軸線方向がほぼ一致し，並存していたと考えられる。遺物の出土はなく直接的に年代を判断する材料に恵まれないが，隣接する10号建物跡，１号溝跡内側の２・４号建物跡とは軸線方向，柱穴形態や規模が近似

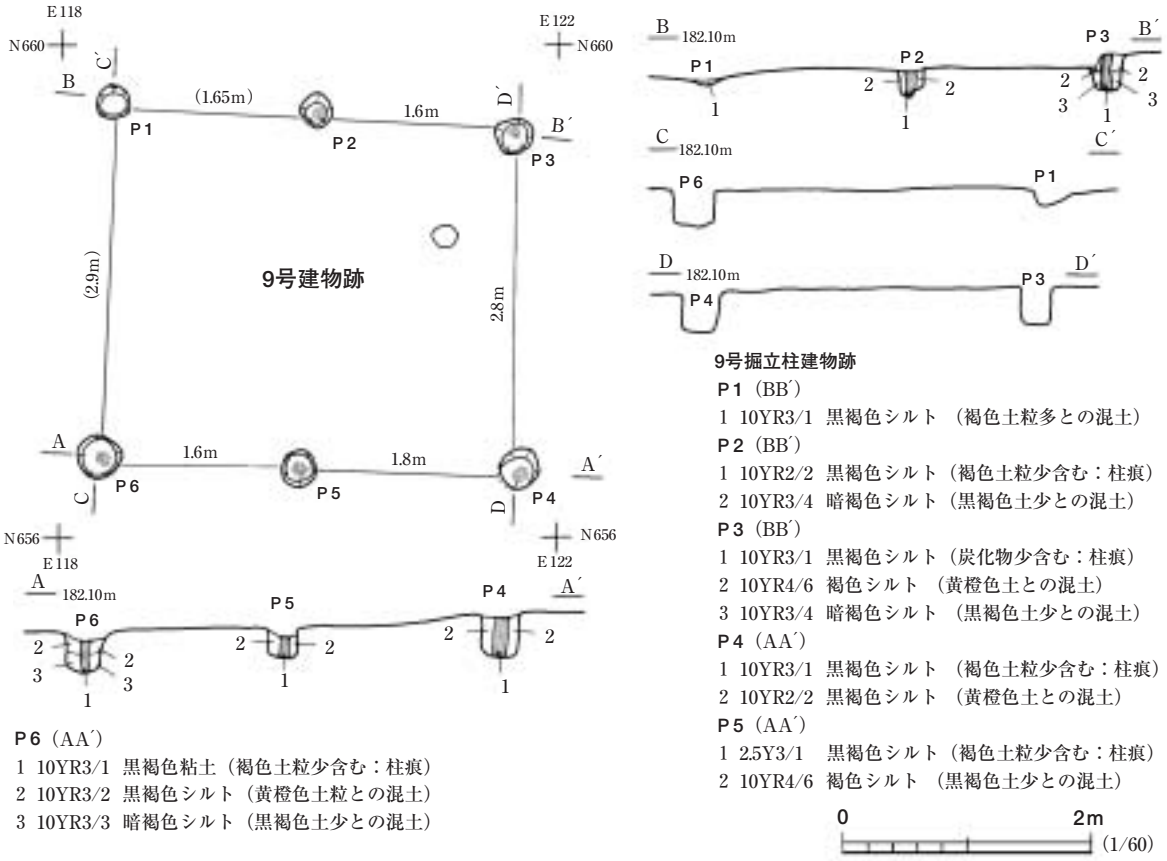


図32　９号掘立柱建物跡

し，同時期の遺構と考えて大過ない。建物の性格としては，小規模であり簡素な倉庫などとして用いられていたと推定している。（横須賀）

10号掘立柱建物跡　ＳＢ10

遺　　構（図10・33～35，図版19・21・22）

本建物跡は調査区北東部，Ｗ～Ｙ33・34グリッドに位置する。北側が現況で農業用道路となっていたため，南側（南縁，身舎南側柱列）をまず調査し，その後北側の表土除去・検出・調査という手順を踏んだ。遺構確認面はＬ　上面であるが，南側についてはＬ　，Ｌ　を除去してしまい，Ｌ　上面が検出面となっている。確認面の標高はＬ　上面で182.00ｍ前後であり，現状でほぼ平坦となる。１号柱列跡とは柱穴の切り合いはないが，柱穴の位置から重複関係にある。すぐ南には接するように９号建物跡が軸線を同一にして位置し，両者は並存していたと推測される。本建物跡は調査区中央を囲郭する１号溝跡の外部北方に位置し，溝跡北辺の外側からは約13ｍの距離を有する。この他ほぼ同時期，あるいは近接した時期の遺構と考えられる８号建物跡が西約13ｍ，12号建物跡が西約23ｍの位置に存在し，１号溝跡の北側外に位置する建物群を構成する。

本建物跡は桁行き４間，梁行き１間となる東西棟の身舎に四面縁が付く。調査を２段階に分けて行ったためピット番号は不順だが，Ｐ１～Ｐ５，Ｐ11～Ｐ15を身舎の柱穴，Ｐ16～Ｐ19をＰ12～Ｐ

15の柱抜取り穴，その他を縁に伴う柱穴に付した。柱筋の通る身舎南桁行きを基準とした建物の主軸方向はN88°Wを指す。建物の平面積は身舎部分が34.1　，縁部分を含めると62.9　を測る。

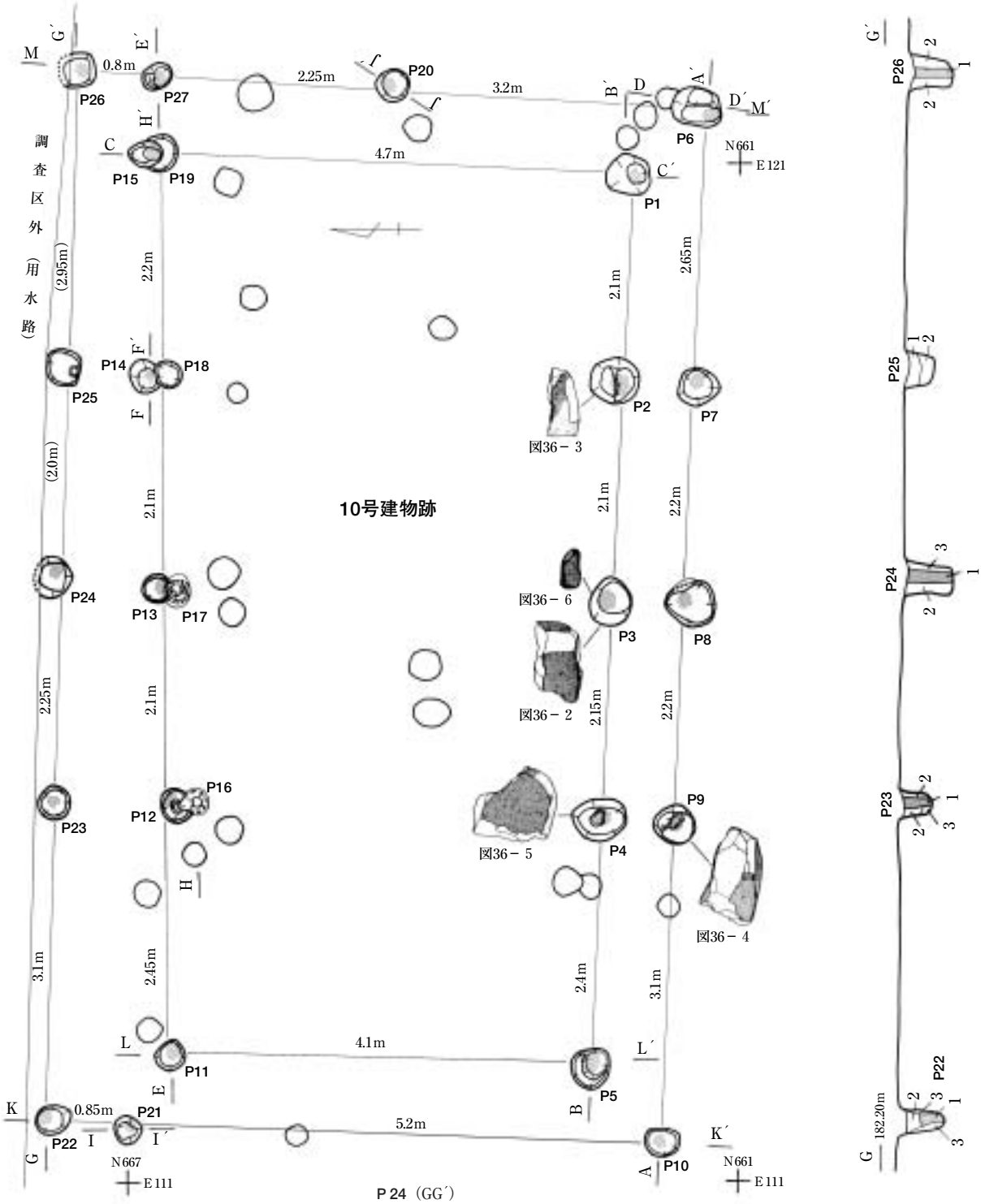
身舎は10個の柱穴で構成され，南・北桁行きの平均総長は8.80mを測る。梁行きは東側4.7m（約15.5尺），西側4.1m（約13.5尺）とやや開きがみられ，身舎の形態は西梁行きがやや窄まる逆台形状を呈する。桁行きの柱間寸法は北・南桁行きともに最も西側の１間がやや広くなり平均2.43m（約8.0尺），他は2.1～2.2m（平均2.13m，約7.0尺）の範囲に収まる。柱穴の平面プランは隅丸方形や隅丸長方形を基調とする。規模は南桁行きの４個がやや大きく長辺38～50　，北桁行きの４個は27～34　と差がみられる。柱穴底面の標高は南桁行きで181.20m～181.40m，北桁行きは181.50m～181.80mを測り，南桁行きがやや深く掘り込まれていた可能性が高い。また北桁行きのＰ12～Ｐ15は柱を抜き取った掘り込み（Ｐ16～Ｐ19）と重複しており，Ｐ12～Ｐ14は南から，Ｐ15は北から抜き取られたとみられる。ただしＰ12～Ｐ15の堆積土中にはしまりの弱い不整合面（　１）が認められ，これを柱痕と認識している。他の６個の柱穴にも柱痕が認められ，柱痕幅はＰ２，Ｐ５では22～24　，他は10～15　を測る。なおＰ２～Ｐ４における柱痕の中位～上位からは被熱した石材を検出している。柱穴の規模，深さ，柱痕幅において，南桁行きが北桁行きを相対的に上回る。

縁は13個の柱穴で構成される。柱穴は西・東縁において，身舎の北桁行きの延長上に１個ずつ，また東縁においてほぼ中間に１個が配置され，シンメトリーとはならない。身舎北桁行きの延長上に２個の柱穴がくる配置は，身舎北桁行きの柱穴が南桁行きの柱穴に比して小規模，脆弱であることに起因するものであろうか。北・南縁とも４間となり，北縁の総長は10.3m，南縁の総長は10.15mを測る。北・南縁とも東西２間の柱間寸法が広く平均2.95m（約9.7尺），中間の２間は平均2.16m（約7.1尺）となる。西縁は２間で総長6.05m，東縁は３間で総長6.25mである。縁の出は身舎梁行きから東に平均0.71m，西に平均0.73m，身舎桁行きから北に平均0.98　（北東隅0.74　，北西隅1.22　），南に平均0.74　を測る。身舎が西に向かって窄まるため，縁の出は北西隅が広がり，縁を含めた建物の形状はほぼ長方形をなす。柱穴の平面プランは隅丸方形を基調とする。規模はＰ１のみ長辺46　と大きく，身舎北桁行きの延長上２個（Ｐ21，Ｐ27），東縁の中間に位置する１個（Ｐ20）は長辺30　前後と小さい。他は長辺34～39　を測り比較的規模が揃う。柱穴底面の標高は181.50m～181.70mの幅に集中し，大きなバラツキは認められない。柱痕はＰ25を除いた12個から検出され，柱痕幅は10～13　に集中する。なおＰ９の柱痕中位から被熱した石材を検出している。

遺　　物（図36，表6・10，図版49）

本建物跡に伴う遺物としては，Ｐ２～Ｐ４，Ｐ９の柱痕から出土した石材が挙げられる。これらはいずれも底面ではなく，柱痕の中位～上位における検出のためその性格付けに迷った。しかし検出状況から後世の混入とは考えられず，また意図的な被熱が認められ，さらにＰ２とＰ３の石材が接合するという状況から，柱の「根継ぎ」が行われ，その際の礎盤（根石）と判断し報告する。

１はＰ15の掘形埋土より出土した土師器の杯であり，柱穴を埋める際の混入と考えられる。底部が遺存し，底径は4.0　を測る。外面底部周辺は手持ちケズリ，内面はミガキで調整され，内面黒



10号掘立柱建物跡

P 22（GG´）
1　10YR3/1　黒褐色シルト　（褐色土粒少含む：柱痕）
2　10YR3/2　黒褐色シルト　（黄褐色土塊との混土）
3　10YR2/2　黒褐色シルト　（黄褐色土塊との混土）

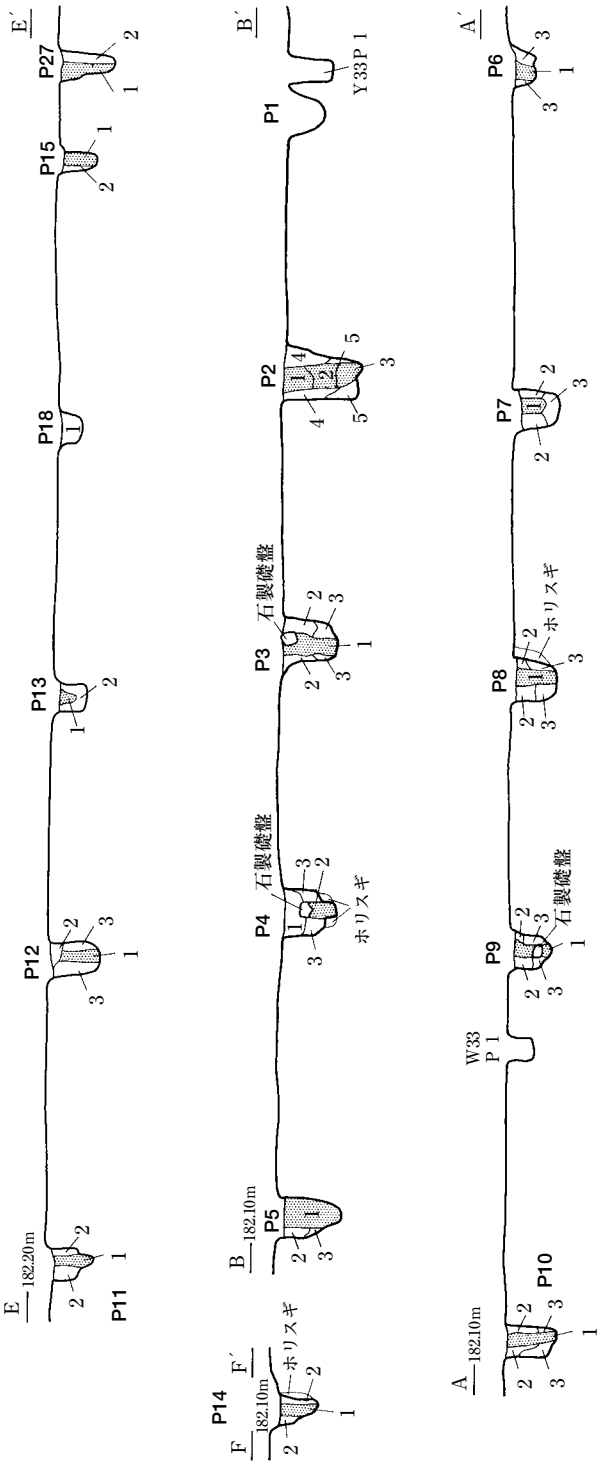
P 23（GG´）
1　10YR2/2　黒褐色シルト　（柱痕）
2　10YR3/2　黒褐色シルト　（褐色土との混土）
3　10YR5/6　黄褐色粘土　（黒褐色土との混土）

P 24（GG´）
1　2.5Y3/2　黒褐色シルト　（黄褐色土塊含む：柱痕）
2　10YR3/2　黒褐色シルト　（黄褐色土塊との混土）
3　10YR3/2　黒褐色シルト　（黄褐色土塊との混土）

P 25（GG´）
1　10YR3/1　黒褐色シルト　（褐色土粒少との混土）
2　10YR4/4　褐色砂質土　（黒褐色土との混土）

P 26（GG´）
1　10YR2/2　黒褐色シルト　（柱痕）
2　10YR3/2　黒褐色土　（黄褐色土塊多との混土）

図33　10号掘立柱建物跡（１）



P２（BB′）
1 10YR3/1 黒褐色粘土 （黄褐色土粒多含む：柱痕）
2 10YR4/2 灰黄褐色粘土 （褐色土粒少含む：柱痕）
3 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土 （褐色土多含む：柱痕）
4 2.5Y4/2 灰黄褐色粘土 （黒褐色土少との混土）
5 2.5Y5/3 黄褐色粘土 （黒褐色土少との混土）

P３（BB′）
1 10YR2/2 黒褐色シルト （褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR2/2 黒褐色シルト （黄褐色土塊多との混土）
3 10YR3/3 暗褐色シルト （褐色土との混土）

P４（BB′）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土粒極少含む）
2 2.5Y3/1 黒褐色シルト （褐色土粒多含む：柱痕）
3 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘土 （黒褐色土との混土）

P５（BB′）
1 2.5Y3/1 黒褐色粘土 （褐色土少含む：柱痕）
2 10YR2/2 黒褐色シルト （黄褐色土塊多との混土）
3 7.5YR5/8 明黄褐色粘土 （黒褐色土少との混土）

P６（AA′ DD′）
1 10YR3/2 黒褐色粘土 （炭化物極少含む：柱痕）
2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 （黒褐色土との混土）
3 10YR2/2 黒褐色粘土 （黄橙色土塊との混土）
4 10YR5/6 黄褐色粘土 （黒褐色土極少量含む）

P７（AA′）
1 10YR3/1 黒褐色粘土 （褐色土やや多含む：柱痕）
2 10YR3/4 暗褐色シルト （黒褐色土との混土）
3 10YR4/2 灰黄褐色シルト （黒褐色土との混土）

P８（AA′）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR2/3 黒褐色シルト （黄橙色土粒との混土）
3 10YR4/4 褐色粘土 （黒褐色土との混土）

P９（AA′）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土粒多含む：柱痕）
2 10YR2/3 黒褐色シルト （褐色土との混土）
3 10YR3/3 暗褐色シルト （黒褐色土少との混土）

P１０（AA′）
1 10YR3/3 暗褐色シルト （褐色土含む：柱痕）
2 10YR2/3 黒褐色シルト （褐色土多との混土）
3 10YR5/6 黄褐色粘土 （黒褐色土少との混土）

P１１（EE′）
1 10YR2/2 黒褐色シルト （柱痕）
2 10YR2/3 黒褐色シルト （褐色土塊との混土）

P１２（EE′）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土粒少含む，しまり弱い）
2 10YR2/3 黒褐色シルト （褐色土塊多との混土）
3 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土塊との混土）

P１３（EE′）
1 10YR3/2 黒褐色シルト （褐色土粒少含む，しまり弱い）
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂 （暗褐色土との混土）

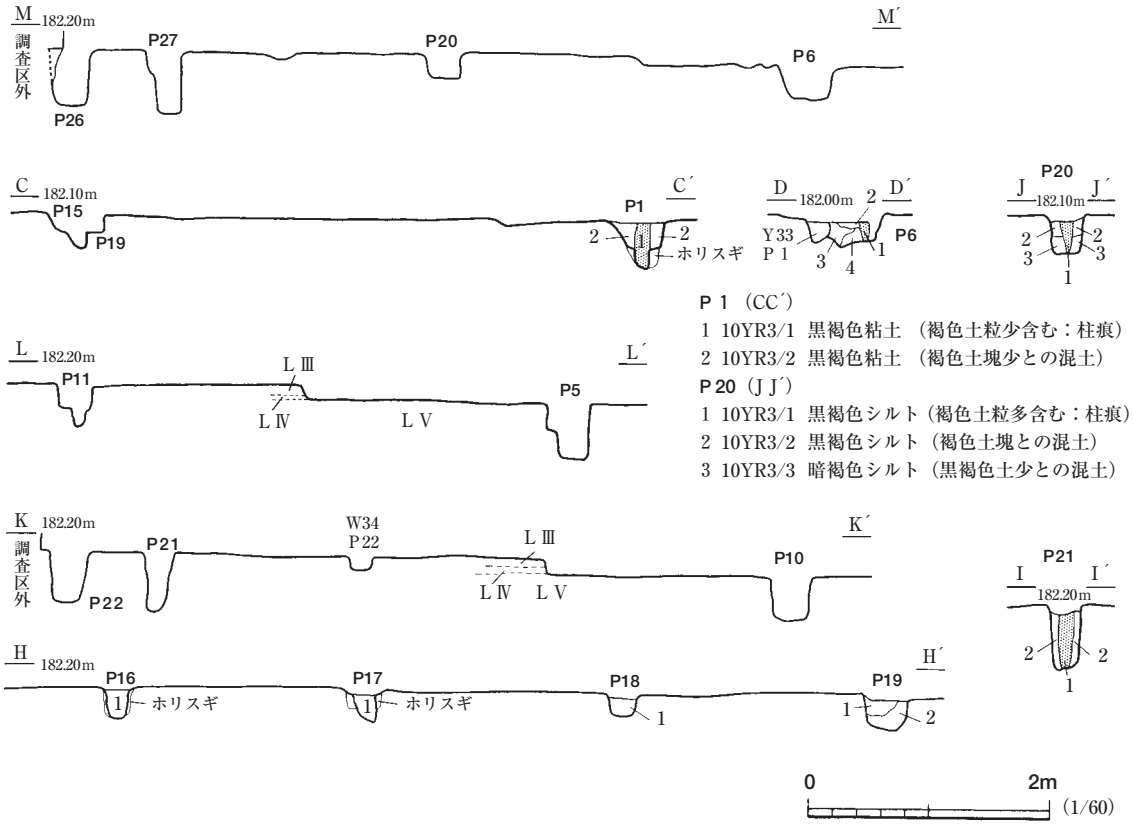
P１４（FF′）
1 10YR3/2 黒褐色シルト （しまり弱い）
2 10YR3/2 黒褐色シルト （褐色土粒少含む）

P１５（EE′）
1 10YR3/2 黒褐色シルト （しまり弱い）
2 10YR2/2 黒褐色シルト （褐色土粒少含む）

P２７（EE′）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （柱痕）
2 10YR3/2 黒褐色シルト （褐色土粒含む，しまる）

0　2m
（1/60）

図34　10号掘立柱建物跡（２）



P１（CC′）
1 10YR3/1 黒褐色粘土 （褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR3/2 黒褐色粘土 （褐色土塊少との混土）
P20（ＪＪ′）
1 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土粒多含む：柱痕）
2 10YR3/2 黒褐色シルト（褐色土塊との混土）
3 10YR3/3 暗褐色シルト（黒褐色土少との混土）

P16（HH′）
1 10YR2/3 黒褐色シルト （褐色土塊含む）
P17（HH′）
1 10YR2/3 黒褐色シルト （褐色土塊含む）
P18（HH′）
1 10YR2/3 黒褐色シルト （褐色土塊含む）
P19（HH′）
1 10YR2/2 黒褐色シルト （褐色土塊多との混土）
2 10YR3/3 暗褐色シルト （褐色土塊との混土）
P21（ＩＩ′）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR2/2 黒褐色シルト （褐色土塊含む）

図35　10号掘立柱建物跡（３）

色処理されている。底部は回転糸切り無調整である。

２～５は石製礎盤（根石）と判断している。長さ13.8　～19.4　，幅5.9　～16.5　，厚さ7.1～9.0を測る礫である。４点とも一部～全面が被熱しており，いずれも検出時は被熱した面を上に向けていた。２は３と接合し，本来同一の石材を被熱させた後，打ち割って使用している。また４は接合しないものの２，３と本来同一個体であったと考えられる。６はＰ３の掘形埋土から検出した。自然礫であるが，片面に被熱が認められたため掲載した。用途については不明である。

この他，Ｐ12の柱痕からは柱材の一部と推定される木片が出土しており，樹種はスギであった。

ま　と　め

本建物跡は４間×１間となる東西棟の身舎に四面の縁が付く，比較的大型の建物跡である。身舎は西側の梁行きが窄まる逆台形状を呈するが，縁を含めた全体の形状は長方形となる。４個のピットからは被熱した石材が検出され，これらがいずれも柱痕の中位～上位より出土したため，柱の「根継ぎ」が行われたと判断している。

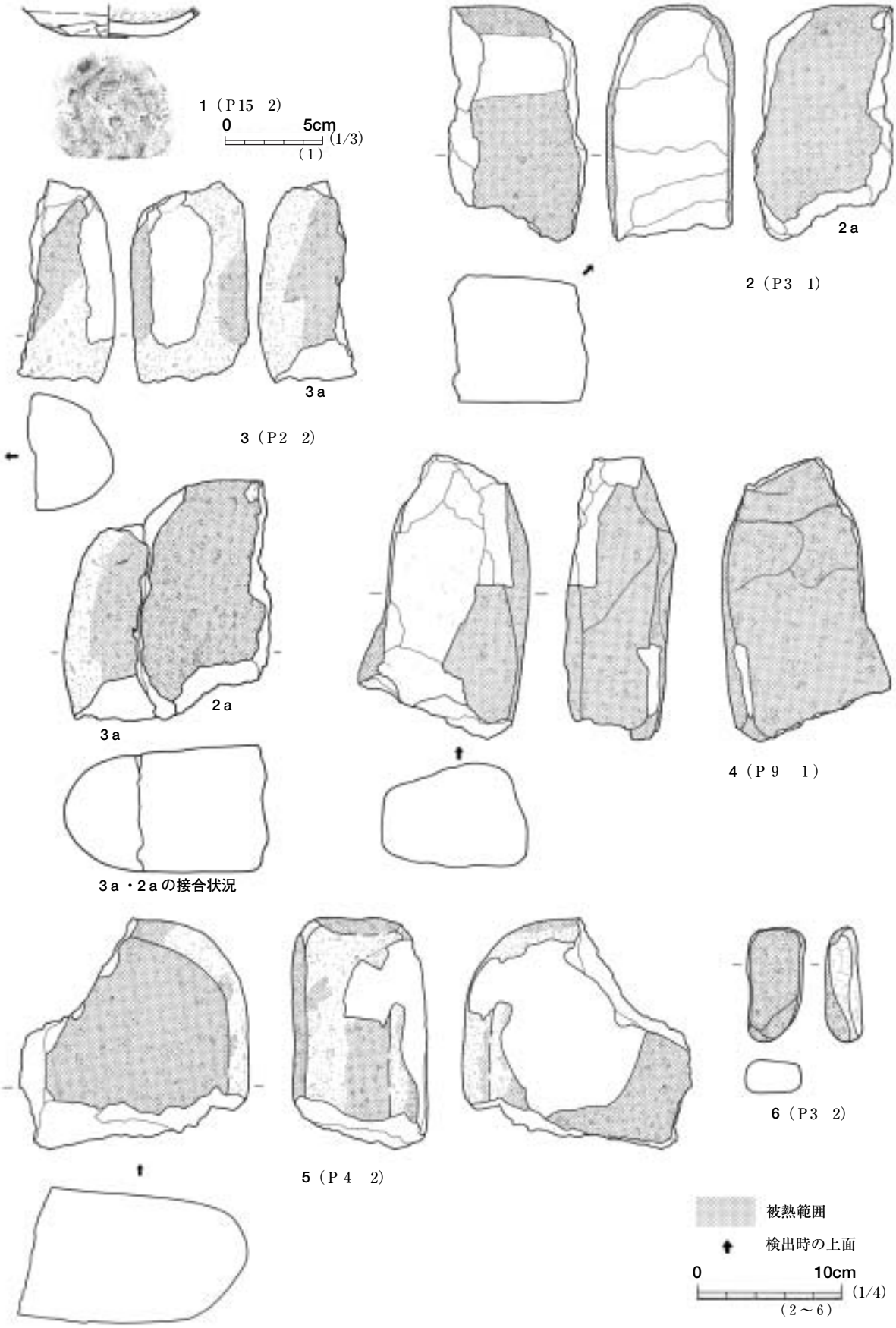


図36　10号掘立柱建物跡出土遺物

本建物跡について，直接年代を導く材料には恵まれていない。ただし，柱穴の規模，形状，また軸線を同一にする建物跡の年代観から16世紀中頃～後半代に機能していたと考えたい。本来１号柱列跡とは重複関係にあるが，先後関係を判断する材料がなく不明とせざるをえない。本建物跡は四面縁付大型建物であるが，調査区中央を囲郭する１号溝跡の外側に存在し，館跡における性格的な位置付けには慎重を要する。今後の課題となろう。（横須賀）

11号掘立柱建物跡　ＳＢ11

遺　　構（図11・37，図版23）

本建物跡は調査区南部，Ｒ・Ｓ15・16グリッドに位置する。当初から建物跡として調査を行ったのではなく，ピット群として精査しその後建物跡と認識したものである。遺構確認面はＬ　上面，確認面の標高は181.70m前後を測り，現状ではほぼ平坦な地形を呈している。他の建物跡とはやや離れた位置にあり，最も近い６号建物跡は北約８ｍに存在する。また本建物跡より南に他の建物跡は認められない。周囲には２・６号溝跡，６～８号土坑が近接している。調査区中央部を囲郭する１号溝跡の内部に位置し，北・西・南各辺の内側からの距離は，それぞれ約65m，約９ｍ，約14mを測る。

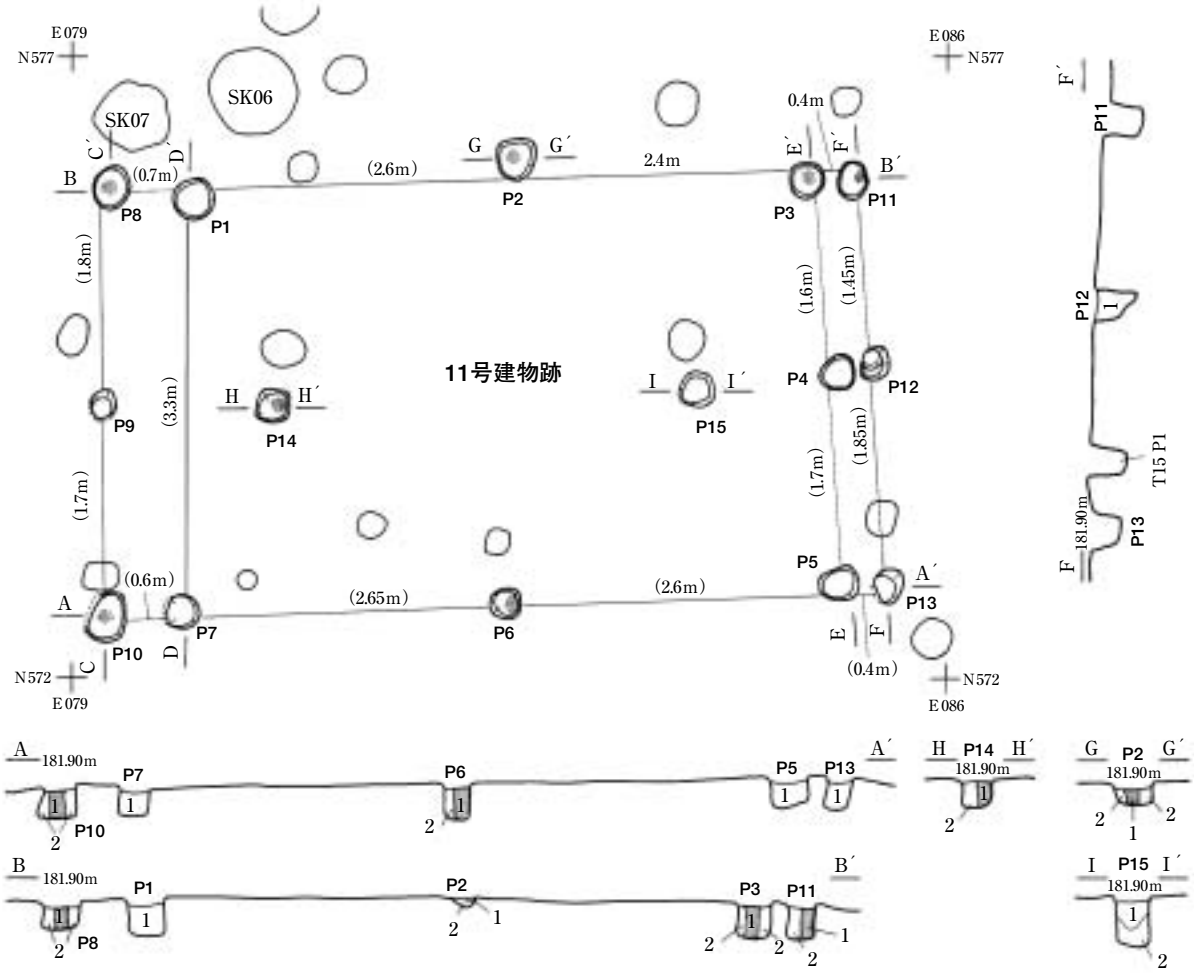
本建物跡は桁行き２間，西梁行き１間，東梁行き２間となる東西棟の身舎に，東・西の二面に縁の付く構造と認識できる。東・西縁を含めた北柱列を基準として，建物の主軸方向を示せばＮ88°Ｗとなる。平面積は身舎部分のみで16.9　，東西の縁を含めた総面積は21.0　を測る。

身舎は７個の柱穴で構成される。北桁行きは総長5.0m，南桁行きは総長5.25ｍを測り，柱間寸法の平均は2.56m（約8.5尺）となる。東・西梁行きとも総長3.3m（10.9尺）であるが，東梁行きはほぼ中間に柱穴１個が置かれ，２間となる。身舎の内部，梁行きの中間の位置には東西に２個の柱穴（Ｐ14・Ｐ15）が認められ，位置から棟持柱の可能性が高い。柱穴の平面プランは隅丸方形，隅丸長方形を基調とする。規模は長辺25～34　と大きなバラツキは認められない。検出面からの深さは25～40　を測るが，主に30　前後に集中する。柱痕は４個から検出され，柱痕幅は12　前後を測る。

縁は西・東縁とも２間であり，合計６個の柱穴で構成される。西縁柱列の総長は3.5m，東縁柱列の総長は3.3ｍを測り，柱間寸法の平均は1.70m（約5.6尺）となる。縁の出は身舎西梁行きからは平均0.65m，身舎東梁行きからは0.40mと西縁の規模がやや大きくなる。柱穴の平面プランは隅丸方形，隅丸長方形を基調とする。規模は四隅の４個はやや大きく長辺28～38　，中間の２個（Ｐ９・Ｐ12）は長辺21　，25　とやや小さくなる。検出面からの深さは30　前後に集中し，大きなバラツキは認められない。柱痕は３個から検出され，柱痕幅は11～13　を測る。本建物跡を構成する柱穴から遺物の出土は認められていない。

ま　と　め

本建物跡は２間×１間となる東西棟の身舎に東西二面の縁が付く。身舎内部には棟持柱と考えら



11号掘立柱建物跡

P１（BB´）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土粒少含む）
P２（BB´ GG´）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （炭化物粒極少含む：柱痕）
2 10YR4/4 黒褐色粘土 （黒褐色土との混土）
P３（BB´ EE´）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （柱痕）
2 10YR4/4 黒褐色粘土 （黒褐色土との混土）
P４（EE´）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土粒多との混土）
P５（AA´）
1 10YR3/2 黒褐色シルト （黄褐色土粒少との混土）
P６（AA´）
1 2.5Y3/1 黒褐色シルト （黄褐色土粒多含む：柱痕）
2 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土 （明黄褐色土塊との混土）
P７（AA´）
1 10YR4/4 褐色粘土 （黒褐色土との混土）
P８（BB´）
1 2.5Y3/1 黒褐色シルト （褐色土粒少含む：柱痕）
2 2.5Y4/6 オリーブ褐色粘土 （黒褐色との混土）
P９（CC´）
1 2.5Y3/1 黒褐色シルト （褐色土粒多含む）
P10（AA´）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （明黄褐色土多含む：柱痕）
2 10YR4/4 褐色粘土 （黒褐色土との混土）

P11（BB´）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （柱痕）
2 10YR4/4 褐色粘土 （黒褐色土との混土）
P12（FF´）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土粒多との混土）
P13（AA´）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土粒多との混土）
P14（HH´）
1 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR3/2 黒褐色シルト （褐色土粒・塊との混土）
P15（II´）
1 2.5Y3/2 黒褐色粘土 （黄褐色土塊含む）
2 10YR4/4 褐色粘土 （黒褐色土との混土）

0　2m　(1/60)

図37　11号掘立柱建物跡

れる２個の柱穴があり，上屋構造は寄棟式であった可能性が高い。直接年代を決定する材料に恵まれないが，柱穴の形態及び規模や軸線を近似させる建物群の年代観から16世紀中頃～後半代に機能していたものと考えている。本建物跡は１号溝跡の内側に位置するが，比較的小規模であり，独立して存在する。よって建物の性格としては館跡における離れ屋などが考えられる。　　（横須賀）

12号建物跡　ＳＢ12

遺　　構（図10・38，図版24）

12号建物跡は，調査区北西隅近くのＱ・Ｒ32・33グリッドに位置している。本建物跡の南西隅は，遺物包含層としたＬ　に覆われており，南３ｍに１号建物跡，北東４ｍに８号建物跡が位置している。遺構確認面はＬ　上面，確認面における標高は181.80ｍである。

本遺構は，長軸を東西方向とする。北桁行きＰ１－Ｐ４は6.3ｍを測り，これに対応する南桁行きＰ６－Ｐ９は6.3ｍを測る。東梁行きＰ４－Ｐ６は2.6ｍ，西梁行きＰ９－Ｐ１は2.3ｍである。本遺構の平面積は15.4　を測る。北桁行きを基準とした建物の長軸はＮ88°Ｗの方向である。

本遺構は10個の柱穴からなる。北西隅の柱穴をＰ１とし，時計回りにＰ２，Ｐ３…Ｐ10とした。４隅の柱穴は北西隅から時計回りにＰ１，Ｐ４，Ｐ５，Ｐ９である。それぞれの柱穴の柱間寸法は，北桁行きＰ１－Ｐ２－Ｐ３－Ｐ４は2.75－1.40－2.15ｍ，南桁行きＰ９－Ｐ８－Ｐ７－Ｐ６は2.40－1.45－2.45ｍである。東梁行きを構成するＰ４～Ｐ６の柱間寸法はそれぞれ1.3ｍ，西梁行きを構成するＰ９～Ｐ１のそれは1.0ｍと1.3ｍである。これをもとに建物を復元すると，建物中央に東西1.5ｍ×南北2.6ｍの空間を持ち，その東西に東西2.4ｍ×南北2.3～2.6ｍとほぼ方形となる空間を有する建物となる。

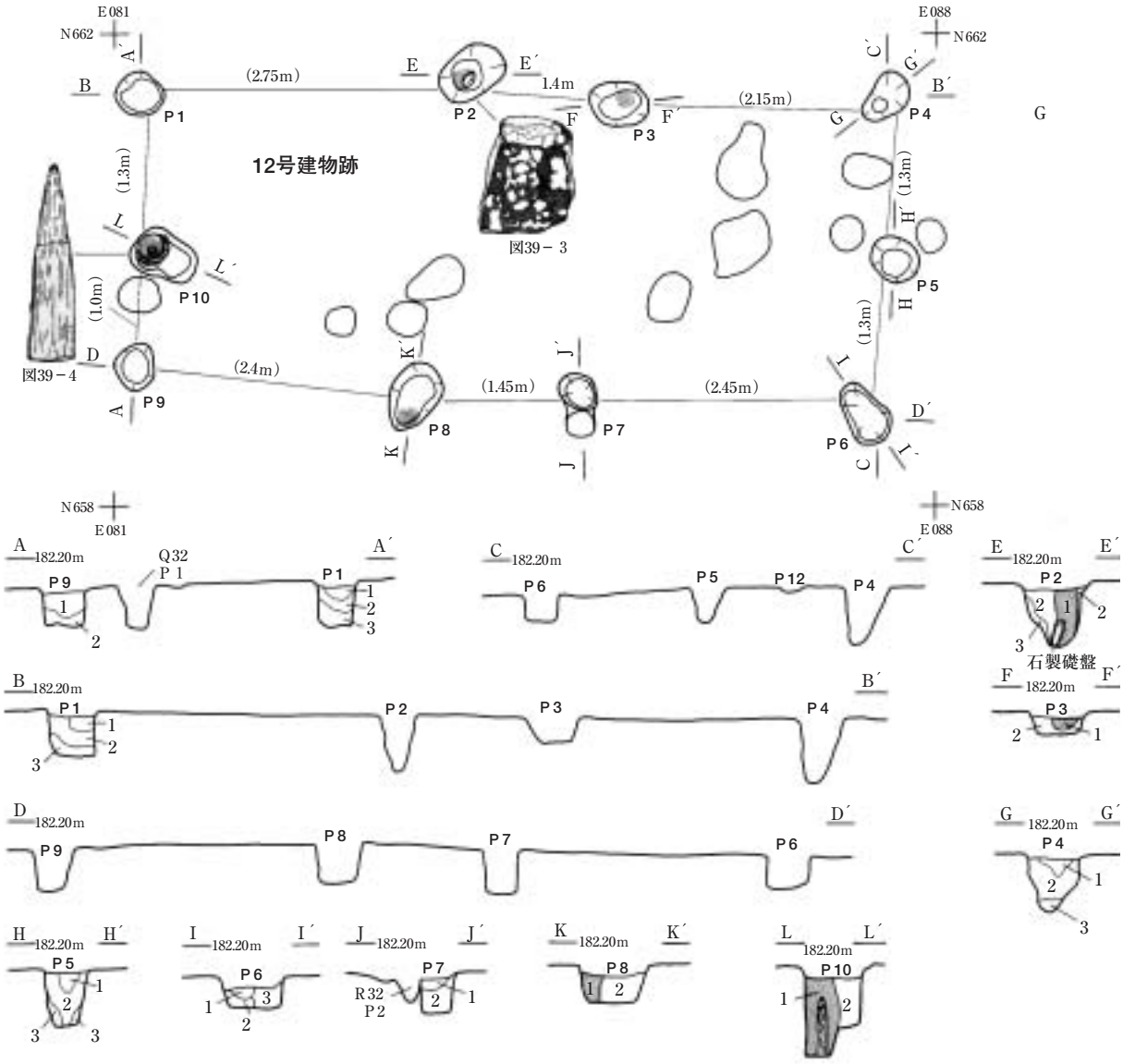
柱穴の平面形は，Ｐ１・Ｐ２・Ｐ９・Ｐ10は隅丸の四辺形，Ｐ３・Ｐ５・Ｐ７は楕円形を基調とし，その他は不整形を呈している。柱穴の長辺（長径）は，38～60　で50　台のものが４個と最も多い。短辺（短径）は，26～42　を測り，30　台のものが６個と最も多い。検出面からの深さは，24～75　とバラツキが大きく，30　台と40　台がともに３個で最も多い。掘形底面の標高は，181.07ｍ～181.58ｍで51　の標高差がある。180.40ｍ代のものが４個と最も多い。

柱痕はＰ２・Ｐ３・Ｐ８・Ｐ10に認められた。柱痕の堆積土は黒褐色シルト，その大きさは18～24　である。柱痕はＰ３を除いて掘形底面に達している。柱痕が遺存しない柱穴は，柱を抜いた後，埋め戻されたものと考えられる。

遺　　物（図39，表6・9・10，図版49・51）

本遺構から出土した遺物を図39に示した。１はＰ３　２より出土した土師器杯の口縁部である。口縁はわずかに外反している。推定口径は13.0　を測る。内面はミガキの後に黒色処理が施され，外面はロクロナデにより調整している。２はＰ４　２より出土した須恵器長頸瓶の口縁部であり，推定口径12.9　である。内外面ともにロクロナデが施されている。

３はＰ２の底面より出土した石製品である。Ｐ２の柱痕の中心やや東よりに，柱痕に半ば埋もれ



12号掘立柱建物跡

P1（AA′ BB′）
1 10YR2/1 黒色シルト
2 7.5YR4/2 灰褐色シルト
3 10YR4/4 褐色シルト

P2（EE′）
1 10YR2/2 黒褐色シルト（柱痕）
2 7.5YR2/2 黒褐色シルト（褐色土との混土）
3 10YR5/6 黄褐色粘土

P3（BB′）
1 10YR3/1 黒褐色シルト（黒褐色土含む：柱痕）
2 10YR3/4 暗褐色シルト

P4（GG′）
1 10YR4/3 にぶい褐色粘土（黄褐色土含む）
2 10YR2/2 黒褐色シルト
3 10YR4/2 灰黄褐色シルト

P5（HH′）
1 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土（黒褐色土含む）
2 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土との混土）
3 7.5YR5/6 明黄褐色粘土

P6（I I′）
1 10YR2/2 黒褐色シルト
2 10YR2/3 黒褐色シルト
3 7.5YR4/3 褐色粘土

P7（J J′）
1 10YR3/3 暗褐色シルト
2 10YR2/2 黒褐色シルト

P8（KK′）
1 7.5YR3/2 黒褐色シルト（褐色土含む：柱痕）
2 10YR2/3 黒褐色シルト（黄褐色土との混土）

P9（AA′）
1 10YR2/2 黒褐色シルト
2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト

P10（LL′）
1 10YR2/2 黒褐色シルト（柱痕）
2 10YR2/1 黒色シルト

0　2m（1/60）

図38　12号掘立柱建物跡

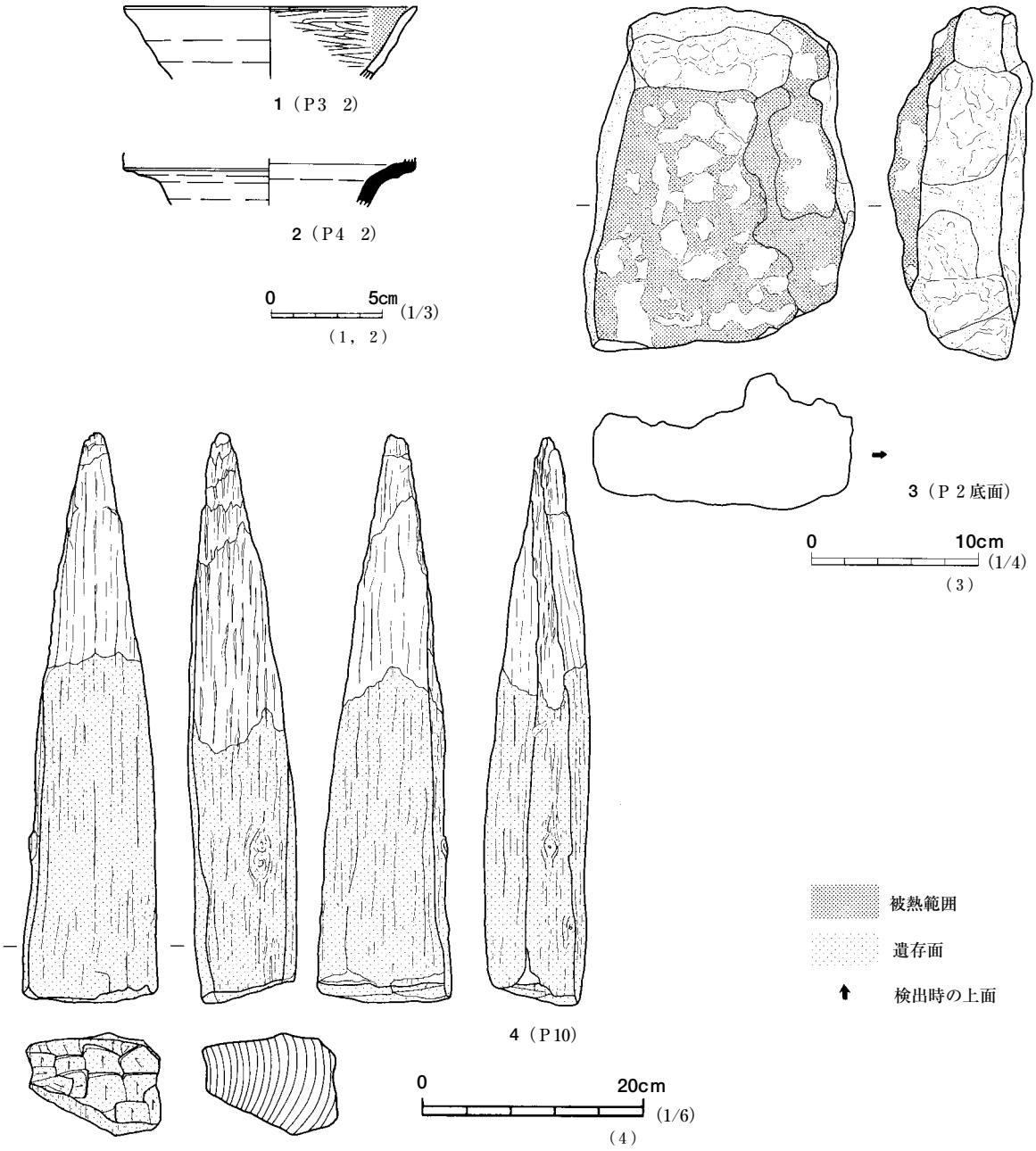


図39　12号掘立柱建物跡出土遺物

るように起立した状態で出土した。縦20.9　×横15.3　の長方形を呈しており，その厚さは8.1　を測る。片面のみ被熱し，その被熱面は柱痕側に向いていた。柱の押さえとして立てて使用したものか，礎盤として柱の下に敷いたものが何らかの力で立ち上がったものか不明である。

４はＰ10から出土した角柱である。Ｐ10柱痕の中央にほぼ垂直に起立した状態で出土した。遺存長51.3　，最大幅12.2　，厚さは9.3　を測る。樹種はサワラ，木取りは二方柾である。柱材の下端には製材の際の工具痕が認められる。

ま　と　め

本遺構は，南北１間×東西３間の東西棟の掘立柱建物跡である。柱穴の掘形形態に１号溝跡の内

側から検出した掘立柱建物群と共通点が認められる。建物跡の配置や軸線等も考慮すると，本建物跡は１号溝跡内側の建物群とほぼ同時期に機能していたと考えられる。

本建物跡の空間構成を柱穴の配置から復元すると，建物の東西に１間×１間のほぼ正方形の空間を配し，中央にやや細長い空間を持つ形態となる。柱筋の通りが悪いため厳密な規格性は感じられず，規模・形態及び位置関係から，居住に供した施設ではなく，倉庫や厩等の施設であった可能性が高いと考えている。本建物跡の柱穴配置から推定される建物形態からは，内部空間のあり方に特異性が看取され，それぞれに機能的な差異が存在したことを想起させる。　（斎藤）

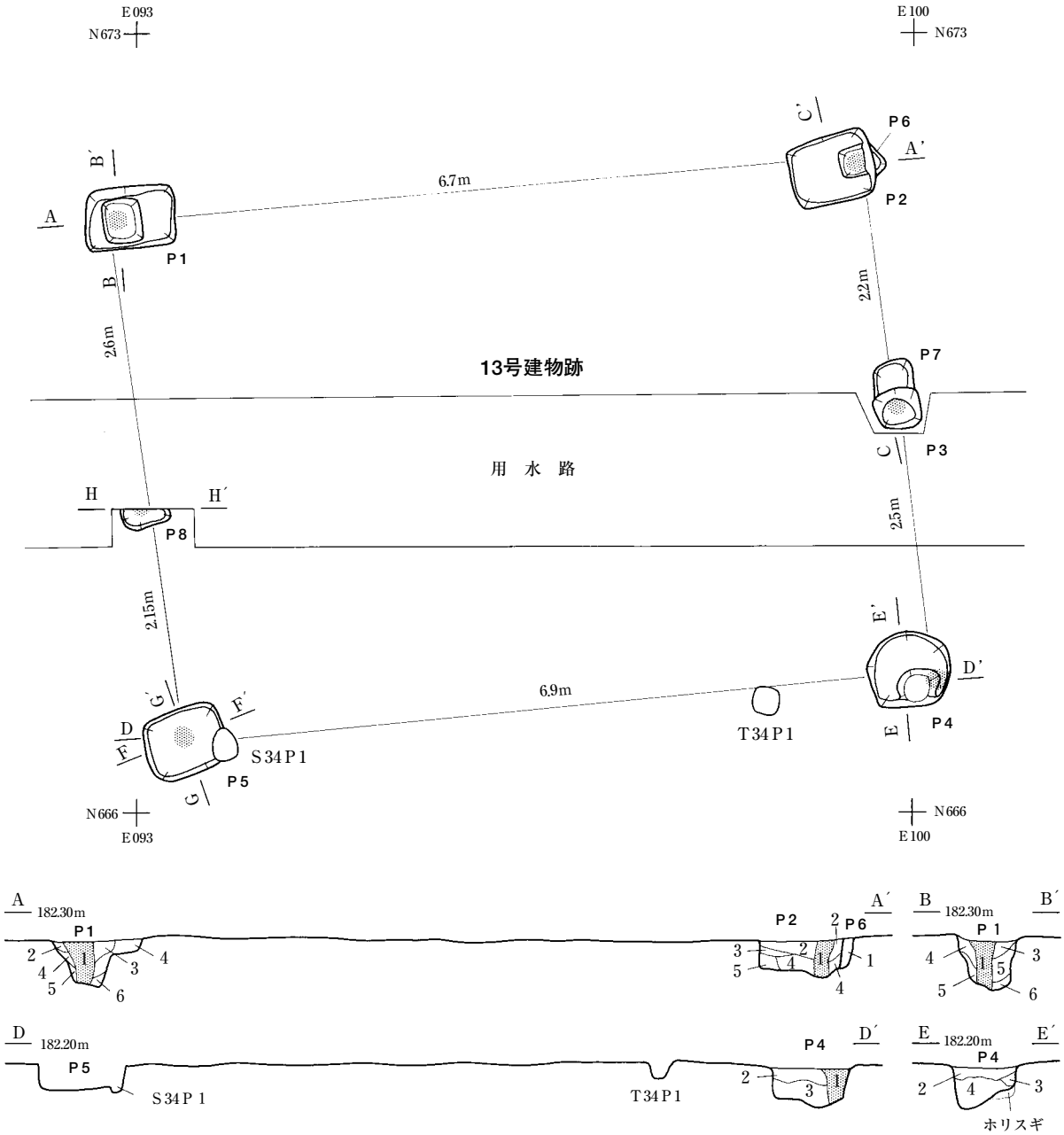
13号掘立柱建物跡　ＳＢ13

遺　　構（図10・40・41，図版25・26）

本建物跡は調査区北部，Ｓ・Ｔ34・35グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面，確認面の標高は182.00ｍ～182.10ｍを測り，現状ではほぼ平坦な地形となっている。本建物跡は調査区北部を東西に横切る用水路を跨いで存在し，調査の都合上遺構の南半を先に精査し，その後北半の検出，精査という手順を踏んでいる。そのため建物跡と認識しえたのは北半の検出後であった。周囲における状況を整理する。本建物跡と軸線をほぼ等しくし，時期的に近接すると考えられる１号建物跡が約10.5ｍ南西に，14号建物跡が約7.5ｍ西に位置している。また本建物跡の南西側一帯には古代の遺物包含層が広がり，多数の土師器片，須恵器片を検出しえた。さらに周辺の遺構密度は高く，１号建物跡との中間に８・12号建物跡，12・13号土坑，７・10号溝跡が存在する。

本建物跡は桁行き１間，梁行き２間となる東西棟の側柱建物跡である。柱筋の良く通る東柱列を基準とし，建物の桁行きで主軸方向を示せばＮ81°Ｅとなる。建物の平面積は32.1　を測る。南・北桁行きともに１間であり，柱間寸法は北桁行き6.7ｍ（約22.1尺），南桁行き6.9ｍ（約22.8尺）を測る。桁行きは柱間寸法が大きく広がり，中間に１個あるいは２個の柱穴が存在すると予想されたが，検出されなかった。検出した６個の柱穴は遺存状況が良く，桁行き中間の柱穴が削平により消失したとは考えられない。東・西梁行きはともに２間であり，東梁行き総長4.7ｍ，西梁行き総長4.75ｍを測る。西梁行きのＰ８は中間からやや南に，東梁行きのＰ３は中間からやや北に寄り，柱間寸法の平均は広い側で平均2.55ｍ（約8.4尺），狭い側で平均2.18ｍ（約7.2尺）となる。なおＰ２，Ｐ３については柱穴が重複しており，古いものをそれぞれＰ６，Ｐ７とした。建物の一部で柱を据え替えたものと考えられる。

柱穴の平面形は四隅の柱穴が隅丸長方形，梁行きの中間に位置するＰ３は隅丸方形を基調とする。隅柱４個はいずれも掘形の長軸方向を建物の桁行き方向と一致させている。柱穴の規模は隅柱４個が大きく長辺72～80　，短辺55～68　，梁行き中間のＰ３・Ｐ８は一辺40　前後を測る。柱穴の底面はＰ３・Ｐ５・Ｐ８はほぼ平坦に，Ｐ２・Ｐ４は柱痕周辺をやや低位につくり，Ｐ１は柱痕周囲を一段深く掘り込んでいる。検出面からの深さは，隅柱４個が35～50　と深く，Ｐ３，Ｐ８はそれぞれ20　，30　とやや浅くなる。柱痕はＰ６・Ｐ７を除いたすべての柱穴から検出され，隅柱４個



13号掘立柱建物跡

P1（AA´ BB´）
1 10YR3/1 黒褐色シルト（灰白色土粒少含む：柱痕）
2 10YR5/6 黄褐色粘土（黒褐色土との混土）
3 10YR3/1 黒褐色シルト（焼土塊多との混土）
4 10YR4/2 灰黄褐色シルト（黒褐色土との混土）
5 10YR3/1 黒褐色シルト（灰褐色土との混土）
6 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト（灰褐色土との混土）

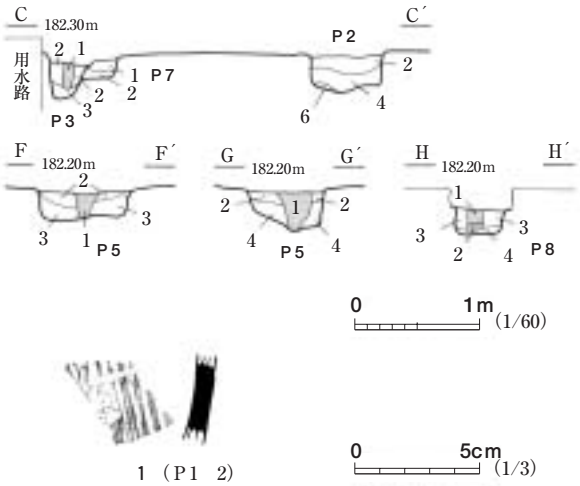
P2（AA´ CC´）
1 10YR2/2 黒褐色シルト（にぶい黄褐色土含む：柱痕）
2 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土粒少含む）
3 10YR5/2 灰黄褐色シルト（黒褐色土少との混土）
4 10YR4/2 灰黄褐色シルト（黒褐色土との混土）
5 10YR5/2 灰黄褐色シルト（黒褐色土との混土）
6 10YR4/5 にぶい黄褐色シルト（黄褐色土との混土）

P4（DD´ EE´）
1 10YR2/1 黒褐色シルト（柱痕）
2 10YR2/2 黒褐色シルト
3 10YR3/2 黒褐色シルト
4 10YR4/2 灰黄褐色シルト（黒褐色土との混土）

P6（AA´）
1 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土粒少含む）

0　2m
(1/60)

図40　13号掘立柱建物跡（１）



P3（CC´）
1　10YR2/2　黒褐色シルト（柱痕）
2　10YR2/2　黒褐色シルト（褐色土粒少含む）
3　10YR4/2　灰黄褐色シルト（黒褐色土との混土）
P5（FF´GG´）
1　10YR2/2　黒褐色シルト（褐色土塊含む：柱痕）
2　10YR2/2　黒褐色シルト
3　10YR2/1　黒色シルト（灰黄褐色土との混土）
4　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土
P7（CC´）
1　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト（黒色土との混土）
2　10YR4/2　灰黄褐色シルト（黒褐色土との混土）
P8（HH´）
1　10YR2/1　黒褐シルト（柱痕）
2　10YR2/2　黒褐色シルト（粘性強い：柱痕）
3　10YR2/2　黒褐色シルト（褐色土塊・粒含む）
4　10YR4/2　灰黄褐色シルト（黒褐色土粒との混土）

図41　13号掘立柱建物跡（２），出土遺物

の柱痕径は15～20　，Ｐ３・Ｐ８は10　前後を測る。４個の隅柱は梁行き中間のＰ３，Ｐ８に比して，柱穴の規模，復元される柱径ともに大きくなることが指摘される。

遺　　物（図41，表6，図版48）

Ｐ１の柱痕から須恵器の破片が１点出土している。１はその須恵器片であり，甕の体部片であろう。外面にはタタキ，内面はヘラナデの痕跡が残る。また外面には螺状沈線文が横走する。

ま　と　め

本建物跡は桁行き１間，梁行き２間という特異な構造となっていた。そのため門状施設とも考えたが，建物規模や他の建物跡との位置関係からその可能性は低く，他に何らかの特殊な性格が想定される。近接する１・14号建物跡とは柱穴の形態，規模が近似し，また建物の軸線方向をほぼ同一にとることから同時期に存在したものと考えられる。よって本建物跡の帰属年代は，１号建物跡の年代観から９世紀後半に求められる。（横須賀）

14号掘立柱建物跡　ＳＢ14

遺　　構（図10・42，図版27）

本建物跡は調査区の北部，Ｑ35グリッドに位置する。周囲におけるＬ　の堆積は非常に薄く，遺構確認面はＬ　上面となる。確認面の標高は182.10m前後を測り，現状ではほぼ平坦な地形となっている。周囲の遺構としては，建物の軸線方向がほぼ直交し，時期的に併行すると考えられる13号建物跡が約７ｍ東に，１号建物跡が約12.5m南に位置している。本建物跡は調査区北西際に位置し，比較的大型の柱穴２個と，小型の柱穴４ヵ所６個のみを検出しえた。Ｐ１，Ｐ２は大型であり，身舎を構成する柱穴と考えられる。時期的に併行するであろう１・13号建物跡の柱穴は長軸方向を桁行きに向ける特徴があり，本建物跡はＰ１，Ｐ２を東桁行きとする南北棟である可能性が高い。この東桁行きを基準とした建物の主軸方向はＮ10°Ｗを指す。Ｐ１，Ｐ２の柱間寸法は2.55m（約8.4尺）となる。Ｐ３～Ｐ６は身舎の東側にとりつく庇と考えられる。Ｐ７，Ｐ８についてはそれぞれ

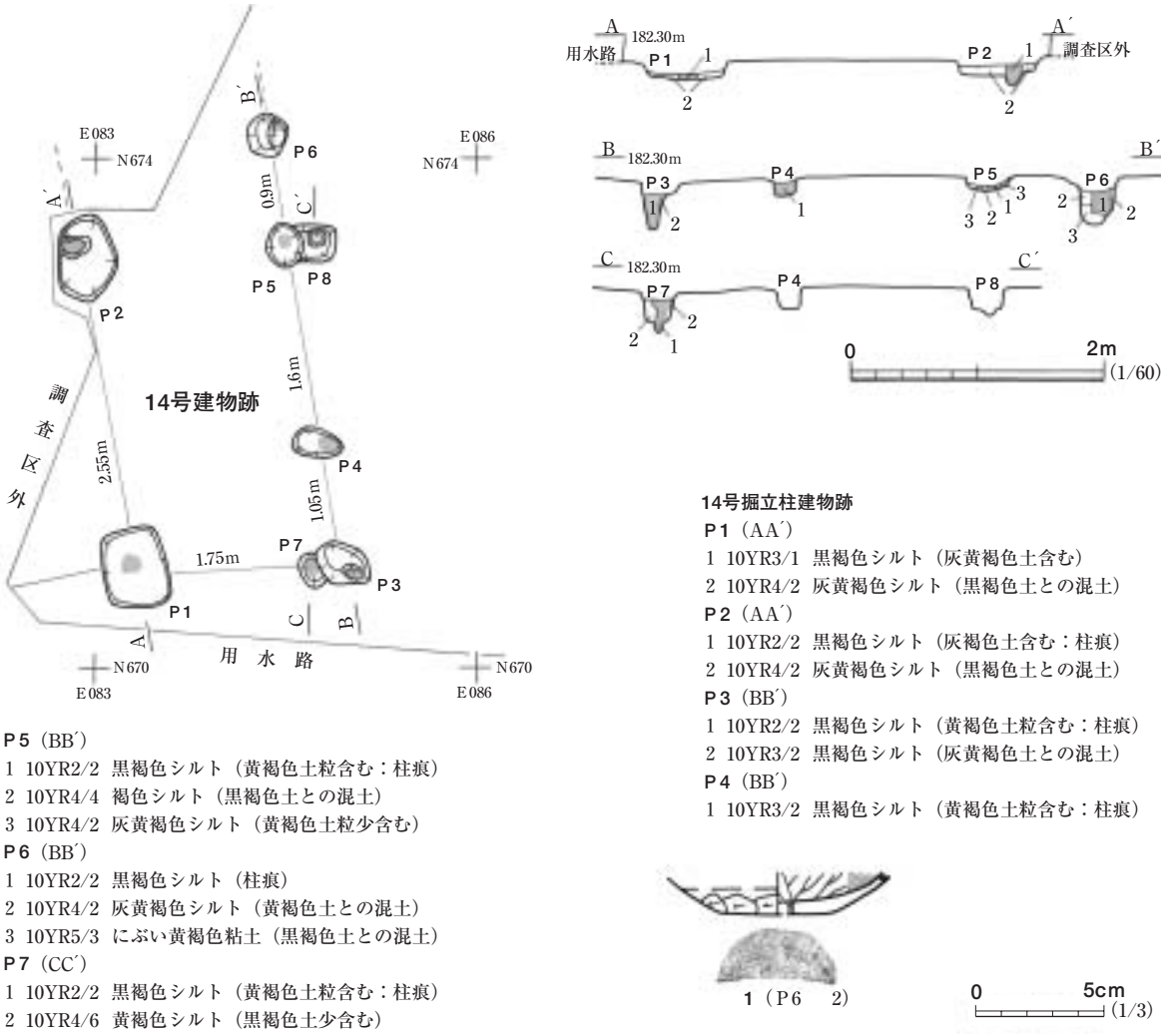


図42　14号掘立柱建物跡，出土遺物

Ｐ３，Ｐ５と重複し，柱据え替え前の掘形である可能性を考慮して本建物跡に含めた。現状でＰ３～Ｐ６の総長は3.55mを測るが，柱間寸法は一定しない。東方向への庇の出は平均1.70m（約5.6尺）となる。

身舎を構成するＰ１，Ｐ２は隅丸長方形の平面形を基調とし，規模は長辺65　前後，短辺50　前後を測る。検出面からの深さは14～18　と浅く，遺存状態は良くない。柱痕は２個ともに認められ，柱痕幅はそれぞれ15　，12　となる。庇の４個（Ｐ３～Ｐ８）は不整方形の平面プランを基調とし，規模は長辺で32～48　，検出面からの深さは14～38　とややバラツキがみられる。柱痕は４個すべてのピットから検出しており，柱痕幅は10～14　となる。

遺　　物（図42，表6）

Ｐ６の掘形埋土から土師器１点が出土した。１はその土師器である。杯の底部片であり底径は4.6　に復元される。外面底部周辺は手持ちケズリ，内面は縦方向に粗いミガキで調整された後，黒色処理されている。底部は回転糸切り後ケズリで再調整されている。

この他Ｐ６の掘形埋土及びＰ４の柱痕から土師器の細片が数点出土している。図示はしえないが，

いずれもロクロ成形，内面黒色処理された杯の細片である。

ま　と　め

本建物跡は，遺構の大半が調査区外に延びるため全容は明らかでない。しかし身舎を構成する柱穴の長軸方向から，南北棟の身舎に東庇のつく構造と推定される。桁行きに平行して片面に庇を付す建物跡は会津地方で散見され，積雪に対応した入口施設との意見も提出されている。

近接する１・13号建物跡とは建物の軸線方向が直交し，時期的に併行すると考えられる。本建物跡の帰属年代は，柱穴から出土した土師器の年代観から９世紀後半を遡りえず，軸線を同一にとる１・13号建物跡の年代観と齟齬しない。（横須賀）

１号柱列跡　ＳＡ01

遺　　構（図10・43，図版28）

本遺構は調査区北西部，Ｗ・Ｘ34グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面，確認面の標高は182.00ｍ前後を測り，現状ではほぼ平坦な地形を呈する。柱穴の直接的な切り合いはないが，10号建物跡とは位置的に重複関係にある。調査区中央を囲郭する１号溝跡の外部北方に位置し，約22ｍの距離を有する。

本遺構は３間４個の柱穴で構成され，総長は6.4ｍ，柱間寸法の平均は2.13ｍ（約7.0尺）となる。遺構の主軸方位はＮ89°Ｅを指す。柱穴の平面プランは隅丸方形を基調とし，平面規模はＰ２が若干小さく一辺20　前後，他は28　前後を測る。検出面からの深さはバラツキが大きく，最も深いＰ１は57　，最も浅いＰ２は17　となる。柱痕跡はすべてのピットから検出され，柱痕幅は7～10であった。なおＰ１の底面からは２個体が重なった状態で石製礎盤（根石）を検出している。

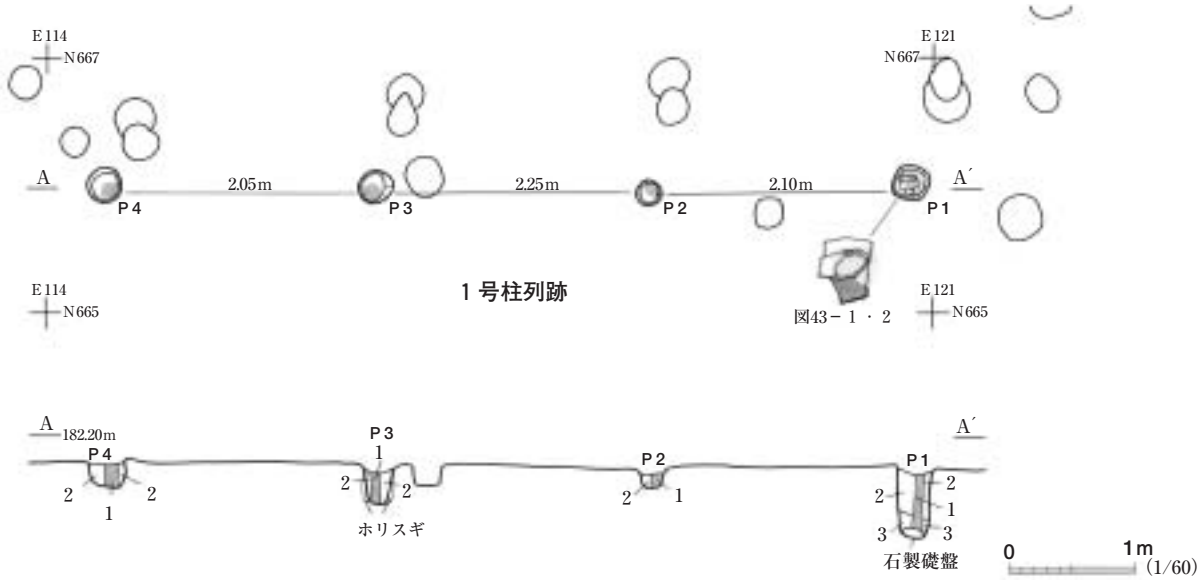
遺　　物（図43，表10，図版49）

Ｐ１の底面から石材が重なって出土しており，石製礎盤（根石）と考えられる。１・２がその石材であり，１は長さ15.7　，幅8.9　，厚さ4.0　，２は長さ20.9　，幅14.2　，厚さ4.9　を測る。２点とも片面や一部に被熱した範囲が認められ，被熱面を上にして置かれていた。この２点は接合し，本来同一の石材を被熱させた後，打ち割って用いたことが確認できる。図右上に検出時の配置状況，右端に２点の接合状況を示した。

ま　と　め

本遺構はピット４個，３間となる柱列跡であり，位置的に10号建物跡とは重複関係にある。北側に位置し東西に走る用水路部分は未調査であり，この範囲に本遺構と対応する柱列が存在する可能性が考えられる。その場合本柱列跡は建物の南側桁行きとなり，３間×１間の東西棟側柱建物に復元される。

柱穴の切り合い関係はなく，また軸線方向に10号建物跡と大きな差異はみられないため先後関係は明らかとならない。ただし10号建物跡や隣接する９号建物跡とは柱穴の形態，規模がほぼ共通しており，これらと近接した時期の所産と考えておきたい。（横須賀）



1号掘立柱建物跡

P1（AA´）
1　10YR3/2　黒褐色シルト（柱痕）
2　10YR3/2　黒褐色シルト（黄褐色土塊含む）
3　10YR3/2　黒褐色シルト（黄褐色土塊多含む）

P2（AA´）
1　10YR2/1　黒色シルト（炭化材含む：柱痕）
2　10YR3/2　黒褐色シルト（褐色土粒少含む）

P3（AA´）
1　10YR3/1　黒褐色シルト（柱痕）
2　10YR3/1　黒褐色シルト（褐色土粒含む）

P4（AA´）
1　10YR3/1　黒褐色シルト（柱痕）
2　10YR2/2　黒褐色シルト（褐色土粒含む）

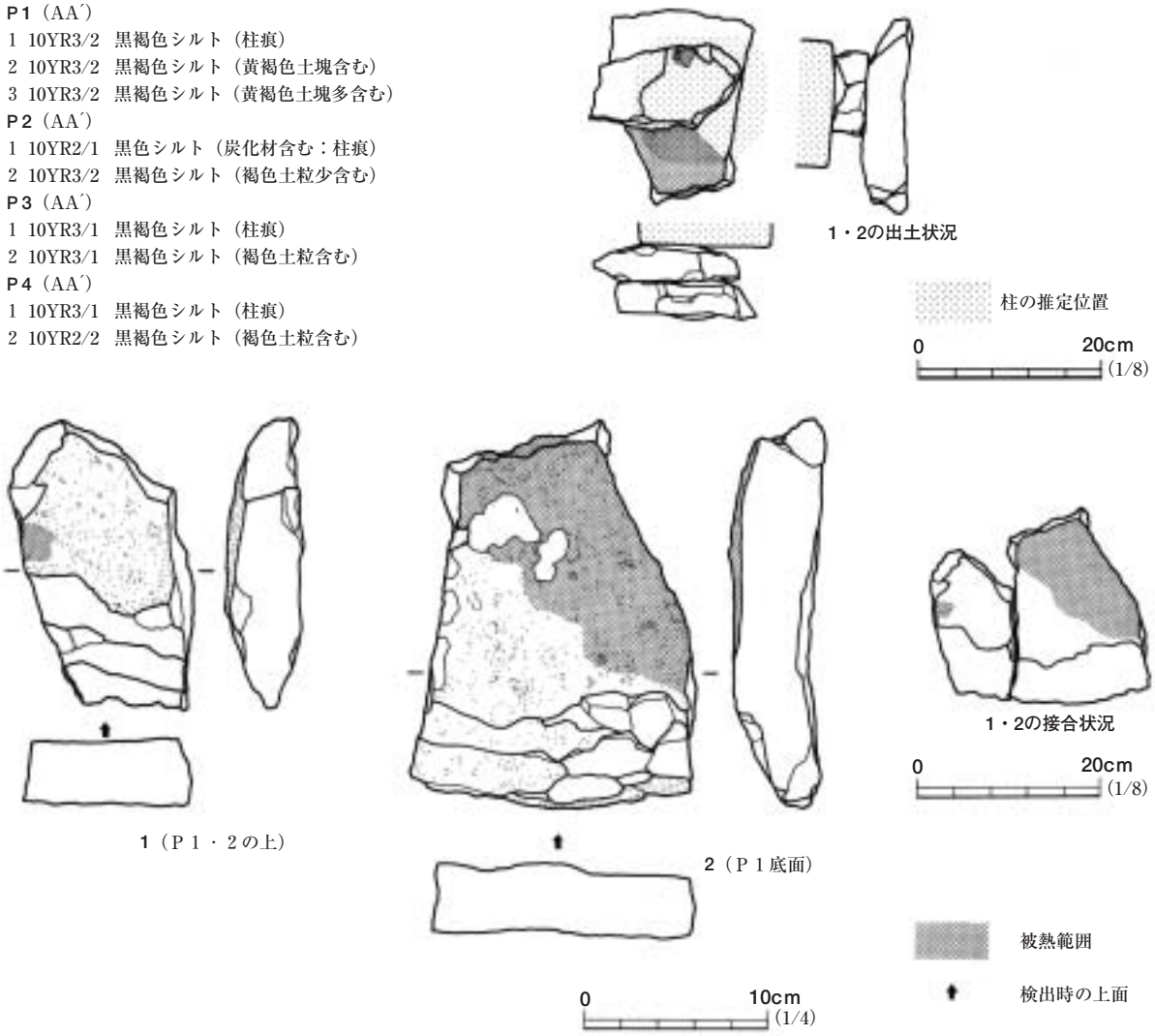


図43　１号柱列跡，出土遺物

第２節　　土　　坑

今回の調査で検出した土坑は14基を数える。これらの土坑は時期的に大きく平安時代（９世紀後半），中世末（15世紀末～16世紀代）に分けることができそうである。

前者の土坑群（１・３～５号土坑）は調査区中央部に散在しており，円形，楕円形の平面プランを基調とした浅い土坑である。一部の土坑において土師器，須恵器を伴っており，これら４基は平安時代に属するものとして報告する。

後者の土坑群（２・10号，12～14号土坑）は２種類に分けることが可能である。２・10号土坑はいわゆる中世の「竪穴状遺構」と考えられるが，周囲や底面に柱穴等の施設が伴わず，土坑として扱い，本節で報告する。12～14号土坑は円形基調であり深い掘り込みを有している。これら３基は周囲における建物跡との位置関係などから該期のものと推定した。６～９・11号土坑については根拠に乏しく，性格，年代は明らかとならない。

１号土坑　ＳＫ01（図44･47，表6，図版29･47）

本土坑は調査区中央やや南寄り，Ｔ18グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面である。確認面の標高は181.60ｍを測り，現状において周囲は平坦な地形となっている。２号井戸跡とは重複関係にあり，井戸跡により遺構西側の一部が壊されている。平面プランは円形あるいは隅丸方形を基調とし，最大径は92　を測る。底面は平坦であり，検出面からの深さは最大で８　程度と浅い。堆積土には焼土塊や炭化物を多く含んでおり，人為的に埋められたと判断できる。

堆積土中からは土師器甕の口縁部片が２点出土している。このうち１点を図示した。図47－６はロクロ成形された土師器の甕である。口縁部が強く外反し，口唇部外縁に面を有する。内外面ともロクロナデが観察され，口縁部内面に僅かにユビナデの痕跡が認められる。復元口径は19.6　である。他の１点は細片で図示しえないが，やはりロクロ成形された土師器甕の口縁部片である。

本土坑は人為的に埋められた，浅い，小規模な土坑である。２号井戸跡とは重複関係にあり，本土坑が古い。焼土を多量に含む堆積土中からの出土遺物により，本土坑は平安時代，９世紀後半代に利用されたものと考えられる。　（横須賀）

２号土坑　ＳＫ02（図45･47，表6，図版29・48）

本土坑は調査区中央やや北寄り，Ｓ・Ｔ24・25グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面であるが，本来はＬ　上面において確認できたものと考えられる。確認面の標高は181.75ｍ前後で一定し，現状では平坦な地形を呈している。８号溝跡とは重複関係にあり，本土坑が古い。調査区中央を囲郭する１号溝跡の内部に位置し，北・西辺の内側からそれぞれ約20ｍ，約14ｍの距離を有する。また南東約８ｍの位置には２～５号建物跡が存在する。

平面プラン，底面プランともに隅丸長方形を呈する。四方の壁面は中位まで急激に立ち上がった後，緩やかに検出面へと至る。堆積土はレンズ状をなす自然堆積であり，14層に分けられた。　１～　５は緩慢な堆積，　６～　14は層中の内容物から壁面の崩落を伴う早い時期の堆積と判断できる。本遺構の規模は検出面において長辺4.34m，短辺2.90m，壁面中位で長辺3.65m，短辺2.34m，底面は長辺3.31m，短辺1.98mを測る。遺構の立ち上がりや堆積土の観察から壁面の崩落は著しく，本来の規模は壁面中位から底面の数値に近いものと考えている。底面はほぼ平坦であり，検出面からは60　前後の深さを有している。遺構の周囲，及び底面から柱穴などの施設は検出されていない。

遺物は堆積土　２から須恵器片が２点出土している。そのうちの１点は９号溝跡　１から出土した破片と接合した。図47－７がその須恵器片である。破片上部には横走平行する２条の沈線と斜位にこれにぶつかる１条の沈線が認められる。内外面ともロクロナデされているが，外面には一部タタキの痕跡が遺存している。また内外面の一部には自然釉がかかる。図47－８は須恵器甕の体部片である。外面にタタキ，内面にはヘラナデが観察される。これらの土器は流れ込みによる混入と判断され，本遺構の年代を規定するものとはならない。

本土坑はその形状，規模からいわゆる「竪穴状遺構」と考えられる。周囲や底面からは本遺構に伴う施設は認められない。年代については，遺構の形状や規模，その位置，長辺の軸線方向などから１号溝跡とその内外を範囲とした館跡に伴うものと考えて大過ないであろう。性格としては火処が認められず，同様の遺構におけるこれまでの調査例から，貯蔵庫としての可能性を考えておきたい。また上屋構造については，柱穴が認められないため，四周の板壁において上屋を支えたものと推測される。（横須賀）

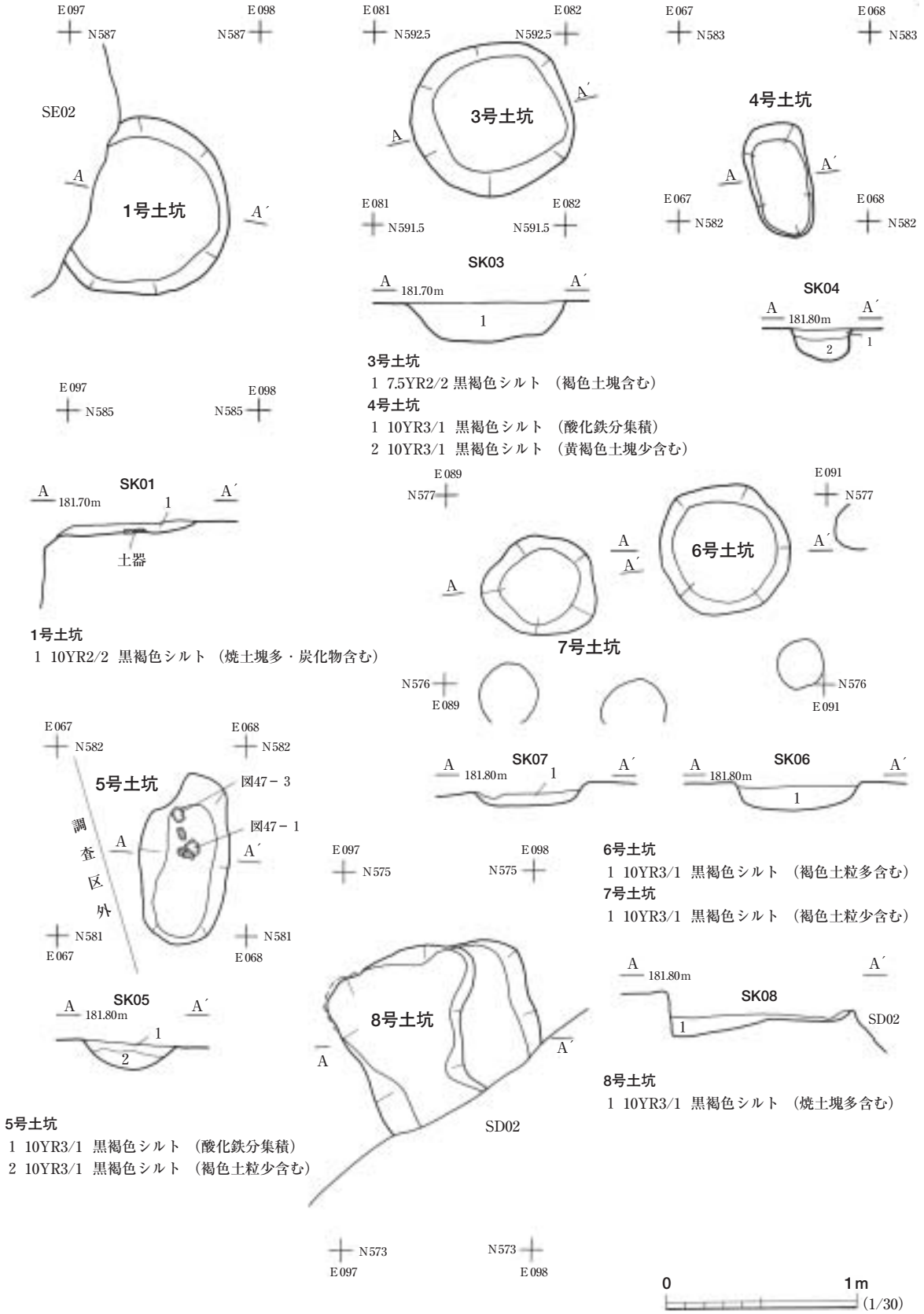
３号土坑　ＳＫ03（図44，図版29）

本土坑は調査区の中央やや南西部，Ｑ19グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面である。確認面における標高は181.55m前後と一定し，現状では平坦な地形を呈している。1.5m西側に１号溝跡が南北に走るが，他の遺構とはやや離れて位置している。平面プランは円形～隅丸方形を基調とし，一辺80　前後を測る。底面はほぼ平坦であり，検出面からの深さは最大21　である。堆積土にはＬ　起源の褐色土塊を多量に含み，人為堆積と判断している。遺物は出土していない。

本土坑跡については，その年代，性格について明らかとする材料に恵まれない。ただし，人為堆積であること，円形～隅丸方形を基調とする小型で浅い土坑であることから１号土坑と共通した性格が窺われ，これと同様の年代を考えている。（横須賀）

４号土坑　ＳＫ04（図44，図版30）

本土坑は調査区の南西部，Ｎ16グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面であり，確認面の標高は181.70mを測る。西側3.2mにはほぼ同形，同大となる５号土坑が存在する。平面プランは隅丸長方形状を呈し，規模は長辺61　，短辺32　を測る。底面は中心がやや窪み，検出面からの深さは



3号土坑
1　7.5YR2/2 黒褐色シルト　（褐色土塊含む）
4号土坑
1　10YR3/1　黒褐色シルト　（酸化鉄分集積）
2　10YR3/1　黒褐色シルト　（黄褐色土塊少含む）

1号土坑
1　10YR2/2　黒褐色シルト　（焼土塊多・炭化物含む）

6号土坑
1　10YR3/1　黒褐色シルト　（褐色土粒多含む）
7号土坑
1　10YR3/1　黒褐色シルト　（褐色土粒少含む）

5号土坑
1　10YR3/1　黒褐色シルト　（酸化鉄分集積）
2　10YR3/1　黒褐色シルト　（褐色土粒少含む）

8号土坑
1　10YR3/1　黒褐色シルト　（焼土塊多含む）

図44　１・３～８号土坑

最大33　である。堆積土は２層に分層され，堆積状況や土質から人為堆積と判断した。遺物は出土していない。

本土坑は小型の土坑であり，年代については，近接し，形状，規模の近似する５号土坑が平安時代に属するため，これと同様と考えておきたい。（横須賀）

５号土坑　ＳＫ05（図44･47，表6，図版30）

本土坑は調査区南西部，M16グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面，確認面における標高は181.46m～181.55mを測り，やや東に向かって傾斜している。西側は調査区外であり，東約3.2mに４号土坑，北約2.3mに４号溝跡が存在するのみで，周囲の遺構密度は低い。

平面プランは隅丸長方形を基調とし，長辺91　，短辺46　を測る。検出面からの深さは最大27　を測り，底面の形状は中心部がやや窪むカマボコ形となる。堆積土は２層に分けられ，堆積状況や土質から人為堆積と判断した。

２の下位，底面の直上から２個体分の土師器が出土している。いずれも完形にはならない。図47－１・３がその土師器である。１，３とも杯でそれぞれ40%，10%が遺存していた。１は小さな底部から丸みをもって立ち上がる椀形の器形である。外面はロクロナデの後底部周辺を手持ちケズリ，内面はミガキを加えた後黒色処理されている。３は内外面黒色処理された杯の底部破片である。外面及び底部全面は手持ちケズリされ，内面には単位幅の広いミガキが認められた。

本土坑は長辺が１ｍにも満たない小型の土坑である。人為的に埋め戻されており，層中には土師器が含まれていた。遺物は人為堆積土中からの出土であり，遺存状態から遺構の年代を示すものと評価したい。よって本土坑は平安時代，９世紀後半代に利用されたものとすることができる。

（横須賀）

６号土坑　ＳＫ06（図44，図版30）

本土坑は調査区南部，Ｓ16グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面，確認面における標高は181.70m前後を測り，現状でほぼ平坦な地形となっている。西に隣接して７号土坑，南に隣接して11号建物跡が存在し，周辺はピット群（Ｄ群）となっている。平面プランは円形を基調とし，直径65　を測る。底面はほぼ平坦であり，検出面からの深さは最大で15　と浅い。堆積土は単層だが，土質は均一であり，自然堆積と判断している。遺物は出土していない。

本土坑は小型で浅い土坑であり，遺物も出土していない。Ｌ　を掘り込んで構築されており，年代は10世紀を遡りえないが，明確な年代観は提示しえない。隣接する７号土坑は本土坑と共通の性格，年代が考えられる。（横須賀）

７号土坑　ＳＫ07（図44，図版30）

本土坑は調査区南部，Ｒ16グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面，確認面における標高は

181.60ｍ～181.70ｍを測り，西側にやや傾斜している。隣接して東に６号土坑，南に11号建物跡が存在し，周辺はピット群（Ｄ群）となっている。平面プランは不整円形であり，最大径は54　を測る。底面はほぼ平坦となり，検出面からの深さは最大で11　と非常に浅い。堆積土は単層だが，均質な土質から自然堆積であろう。遺物は出土していない。

隣接する６号土坑とは形状や規模が近似し，共通の性格，年代が考えられるが，その内容については判断する材料に乏しく明らかとならない。（横須賀）

８号土坑　ＳＫ08（図44，図版31）

本土坑は調査区南部，Ｔ15グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面，確認面における標高は181.70ｍを測る。２号溝跡とは重複関係にあるが，本土坑は２号溝跡を掘り込んだ際に検出したものであり，先後関係を明らかにすることができなかった。そのため遺構の南側は一部破壊してしまった可能性がある。また西には隣接して11号建物跡が位置している。

平面プランは方形を基調とし，最大で一辺115　を測る。遺構の西側がやや深く掘り込まれており，底部の中心付近において段を形成している。検出面からの深さは最大で24　となる。堆積土は単層であり，層中に焼土塊を多量に含むため人為堆積と判断される。

堆積土中からは土師器片２点，須恵器片１点が出土している。図示はしえなかったが，須恵器は壺類あるいは瓶類の体部であり，ロクロ成形されている。土師器は２点とも杯であり，そのうち１点は両面に黒色処理が施されている。

本土坑は人為的に埋め戻された不整形の土坑である。調査時の注意不足から直接的に２号溝跡との先後関係を明らかにしえなかった。堆積土中には少量の土師器，須恵器が含まれているが，本土坑はＬ　から掘り込まれており，年代は10世紀を遡りえない。（横須賀）

９号土坑　ＳＫ09（図46，図版31）

本土坑は調査区の北西部，Ｑ29グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面であるが，本来はＬ　上面において確認できたと考えられる。確認面の標高は181.70ｍを測る。１号溝跡とは重複関係にあり，本土坑が古く，遺構の南半は溝跡により壊されている。近接する遺構としては北約３ｍの位置に１号建物跡が存在する。

遺構の約半分を失っているため全体の形状は明らかでないが，隅丸方形を基調としているようである。規模は最大で１辺107　，検出面からの深さは最大で37　を測る。堆積土は単層であり，土質や内容物から人為堆積と判断している。堆積土中からは土師器が２点出土した。図示はしえないが，内面黒色処理された杯，及び筒型土器の細片である。

本土坑は人為的に埋め戻された小型で浅い土坑である。１号溝跡と重複し，本遺構が古い。年代，性格については材料に乏しく，明らかとならない。（横須賀）

10号土坑　ＳＫ10（図45･47，表6，図版31・47）

本土坑は調査区の北西際，Ｐ28・29グリッドに位置する。遺構の西側は調査区外に延びる。遺構確認面はＬ　であり，遺構の底面はＬ　上面まで達していない。そのためＬ　，Ｌ　を除去してしまった範囲，遺構の南東部分の約２／３を失ってしまった。遺構の規模・深さの計測，堆積状況の観察は主に調査区壁を利用している。遺存部分における確認面の標高は181.80ｍである。調査区中央を囲郭する１号溝跡の外側に隣接し，１号溝跡の北西部コーナーから西に1.5ｍの距離に位置する。また北約3.5ｍに11号土坑，北約６ｍに９号溝跡が存在し，古代の遺物包含層（Ｌ　）に覆われていた。

平面プランは遺存した部位から隅丸長方形に復元され，長軸を北に向ける。遺存部位と調査区壁から推定される規模は長辺4.95ｍ，短辺1.85ｍ以上である。底面はほぼ平坦であると考えられ，遺構確認面からの深さは最大で19　を測る。現状において，柱穴などの付属施設は検出されなかった。堆積土は２層に分けられ，堆積状況や土質から自然堆積と考えられる。

遺物は　１から土師器片３点が出土している。周囲には古代の遺物包含層が広がっており，これらの遺物は流れ込んだものと判断している。図47－２は杯であり口縁部の一部が遺存していた。外面はロクロナデされ，内面は横方向のミガキの後黒色処理されている。図47－４は高台杯であり，高台部，及び杯部の一部が遺存している。貼り付け高台であり，外面は全面にロクロナデが観察される。内面は摩耗が著しいが，横方向のミガキが観察され，黒色処理が認められる。図示しえなかった１点はロクロ成形，内面黒色処理された杯の破片である。

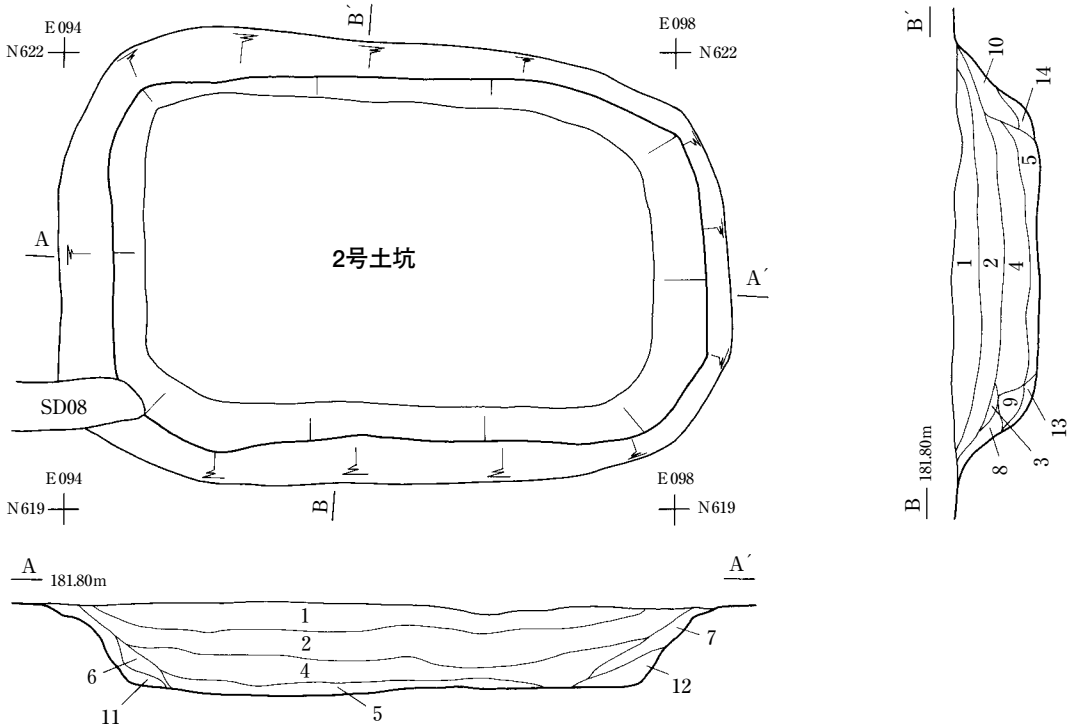
本土坑は調査時の不手際で遺構の約２／３を失っているが，本来隅丸長方形状を呈していたと推定される。復元される平面プランや規模は２号土坑と同様のものであり，本土坑についてもいわゆる「竪穴状遺構」と判断し，中世末における館の一部を構成していたものと考えられる。（横須賀）

11号土坑　ＳＫ11（図46･47，表6，図版31）

本土坑は調査区北西際，Ｐ30グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面である。確認面における標高は181.80ｍ前後を測る。周辺に近接する遺構を挙げれば，南約3.5ｍに10号土坑，北約２ｍに９号溝跡，東約５ｍに１号建物跡が存在し，約３ｍ南の位置は１号溝跡の北西コーナーに当たる。また本土坑は古代の遺物包含層（Ｌ　）に覆われていた。平面プランは隅丸方形を基調とし，規模は１辺１ｍ前後を測る。底面は概ね平坦に近く，検出面からの深さは最大で40　である。堆積土は３層に分けられ，堆積状況や土質，内容物から人為堆積と判断した。

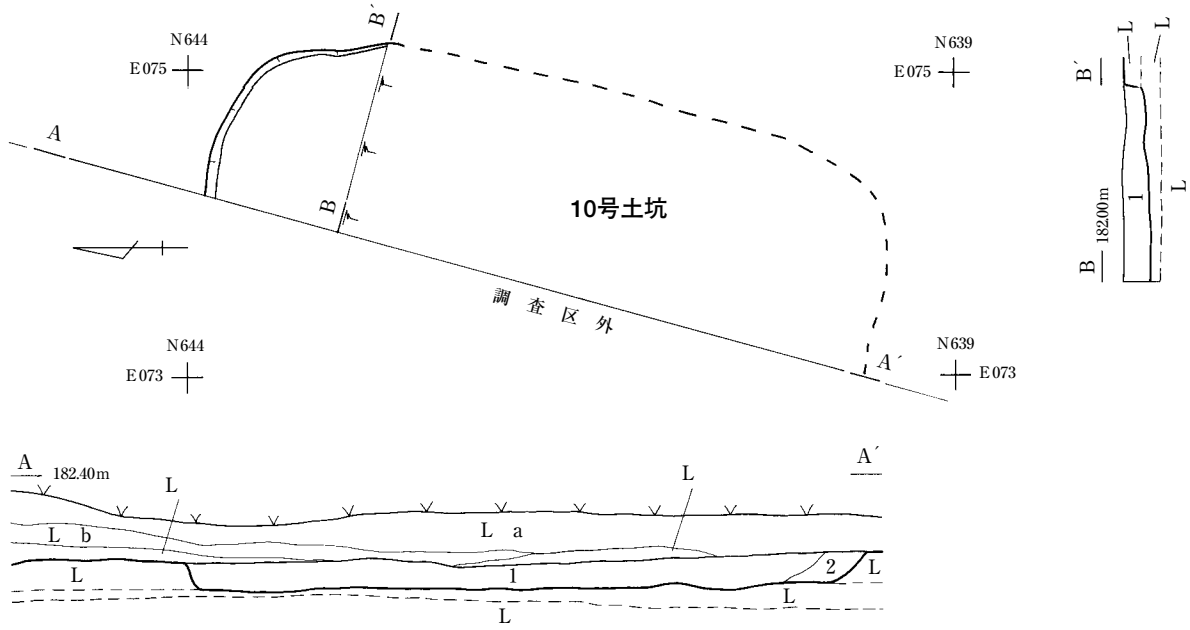
３から５点の土師器片が出土しており，１点のみ図示しえた。図47－５がその土師器であり，ロクロ成形された甕の口縁部片である。口縁部は緩やかに外反し，口唇部には面を持つ。他の４点は細片であるが２点のみロクロ成形の杯と確認できる。

本土坑は人為的に埋め戻された小型で浅い土坑である。Ｌ　から掘り込まれており，年代は10世紀を遡りえない。ただし，明確な年代観は示しえず，性格についても明らかとならない。（横須賀）



2号土坑

1	10YR3/3	暗褐色シルト	（酸化鉄分集積）	8	2.5Y3/1　黒褐色シルト　（白色砂粒少含む）
2	7.5YR3/1	黒褐色シルト	（酸化鉄分集積）	9	2.5Y3/1　黒褐色シルト　（黄橙色砂塊含む）
3	10YR3/1	黒褐色シルト	（白色砂粒少含む）	10	10YR4/1　褐灰色シルト　（褐色土粒多含む）
4	10YR2/1	黒色シルト		11	10YR3/1　黒褐色シルト　（白色砂粒含む）
5	5Y1/3	オリーブ黒色シルト		12	10YR3/1　黒褐色シルト　（褐色土粒少含む）
6	10YR2/1	黒色シルト	（褐色土粒少含む）	13	2.5Y4/1　黄灰色シルト　（褐色土多含む）
7	2.5Y3/1	黒褐色シルト	（白色砂粒少含む）	14	2.5Y4/1　黄灰色シルト　（褐色土粒多含む）



10号土坑

1　10YR3/1　黒褐色シルト　（褐色土粒少含む）
2　10YR2/3　黒褐色シルト　（褐色土粒含む）

0　1m
(1/50)

図45　2・10号土坑

12号土坑　ＳＫ12（図46，図版32）

本土坑は調査区北部，Ｔ33グリッドに位置する。検出面はＬ　上面であるが，本来はＬ　上面において確認しえたものと考えられる。確認面の標高は181.90ｍを測り，現状では平坦な地形を呈している。８号建物跡とは南に隣接しており，南西約６ｍに１号建物跡，西約８ｍに12号建物跡，北約5.5ｍに13号建物跡が位置する。平面プランは円形を基調とし，規模は直径95　前後を測る。断面形は底面に向かって窄まる三角錐状を呈し，検出面からの深さは1.6ｍと深くなる。堆積土は４層に分けられ，土質や内容物から　４は自然堆積，　１～　３は人為堆積と判断した。よってある程度自然に埋没した後，埋め戻されたものと考えられる。

遺物は　１から須恵器片１点，　２から土師器片，須恵器片が１点づつ，　３から土師器片が２点出土している。須恵器は壺か瓶類の体部，土師器は１点のみ内面黒色処理された杯と判断できる。

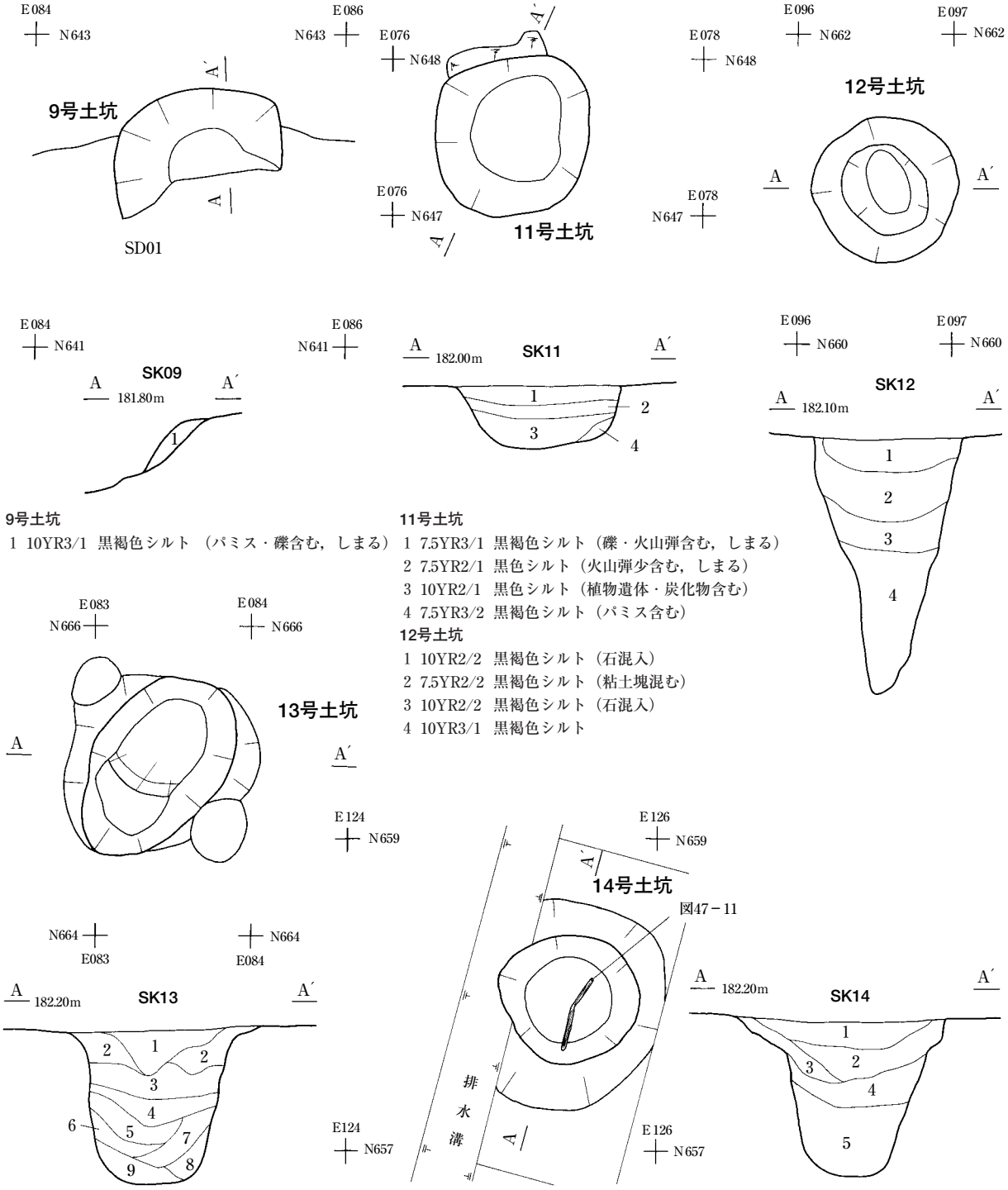
本土坑は深く掘り込まれた土坑であり，最終的には埋め戻されている。性格，年代を特定する材料には乏しいが，13・14号土坑とは平面プラン，規模ともに共通する要素が多く，近接する時期に同じ目的で造られたものと考えている。（横須賀）

13号土坑　ＳＫ13（図46･47，表6，図版32・48）

本土坑は調査区北西際，Ｑ33グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面，検出面における標高は182.00ｍ前後とほぼ一定し，現状では平坦な地形となっている。２個のピットと重複し，本土坑が古い。他に北に接するように10号溝跡，南約1.5ｍに12号建物跡が位置する。また南側一帯には古代の遺物包含層（Ｌ　）が広がっている。平面プランは楕円形を基調とし，長径は1.30ｍ，短径は0.81ｍを測る。北東側がやや深く掘り込まれており，底部中位に僅かな段を形成する。検出面からの深さは最大で102　である。堆積土は９層に分けられ，堆積状況，及び内容物や土質から　１～　３は人為堆積，　４～　９は自然堆積と判断した。中位まで埋没した後埋め戻されたものと考えられる。

遺物は　１～　３中から土師器片73点，須恵器片９点が出土している。いずれも細片であり器形の復元はできない。図47－９・10は須恵器甕の体部片である。９は外面にタタキメ，内面にヘラナデ，10は外面にタタキメ，内面に平行当具痕が観察される。この他器種を特定できたものとして，須恵器は長頸瓶２点，壺類１点，甕１点，土師器は高台杯１点，杯32点，筒型土器１点を数える。須恵器長頸瓶のリング状凸帯，土師器杯にはロクロ成形，内面黒色処理を確認できるものが存在する。出土した遺物は，上位に位置する人為堆積土中（　１～　３）にその多くが含まれており，これは周囲が遺物包含層であることに起因するものと考えられる。

本土坑は中型の規模を有し，深く掘り込まれた土坑である。ある程度自然埋没した後埋め戻されている。性格については特定する材料に乏しく明らかとならない。出土した遺物は遺存状態が悪く，層位からも時期を示す材料にはなりえない。12・14号土坑とは平面プランや規模，建物との位置関係などに共通する要素が多く，３基の土坑はほぼ近接した時期に同じ目的で造られたものであろう。



9号土坑

1 10YR3/1 黒褐色シルト （パミス・礫含む，しまる）

11号土坑

1 7.5YR3/1 黒褐色シルト（礫・火山弾含む，しまる）
2 7.5YR2/1 黒色シルト（火山弾少含む，しまる）
3 10YR2/1 黒色シルト（植物遺体・炭化物含む）
4 7.5YR3/2 黒褐色シルト（パミス含む）

12号土坑

1 10YR2/2 黒褐色シルト（石混入）
2 7.5YR2/2 黒褐色シルト（粘土塊混む）
3 10YR2/2 黒褐色シルト（石混入）
4 10YR3/1 黒褐色シルト

13号土坑

1 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土塊，粒含む）
2 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土塊密に含む）
3 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土塊含む）
4 10YR2/2 黒褐色シルト（明黄褐色土含む）
5 10YR3/2 黒褐色シルト（明黄褐色土粒含む）
6 10YR3/1 黒色砂質土（しまり弱い）
7 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（しまり弱い）
8 10YR2/3 黒褐色シルト（褐色土粒少含む）
9 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土粒少含む）

14号土坑

1 10YR2/3 黒褐色シルト（酸化鉄分集積）
2 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土粒少含む）
3 10YR3/2 黒褐色シルト（黄褐色土粒多含む）
4 10YR2/1 黒褐色粘土（褐色土塊含む）
5 10YR3/1 黒褐色粘土

図46　9・11～14号土坑

本土坑は中世末と推測されるピットに切られており，このピットを掘り込むため埋め戻されたと考えれば，両者は時期的に近接する。また３基の土坑は同時期の建物跡に対応する位置にあり（ＳＢ12－ＳＫ13，ＳＢ08－ＳＫ12，ＳＢ09・10－ＳＫ14），建物跡との有機的な関係を想定することが可能である。さらにＬ　が確認面であり，年代は10世紀を遡りえない。性格については判然とせず，弱い根拠ではあるが，本土坑を含めた３基の土坑の年代は16世紀代に収まるものと考えておきたい。

（横須賀）

14号土坑　ＳＫ14（図46･47，図版32）

本土坑は調査区の北東際，Ｚ32グリッドに位置する。調査区際に排水溝を設けた際に検出し，一部調査区を拡張し精査したものである。確認面はＬ　上面，標高は181.80ｍを測る。東側は調査区

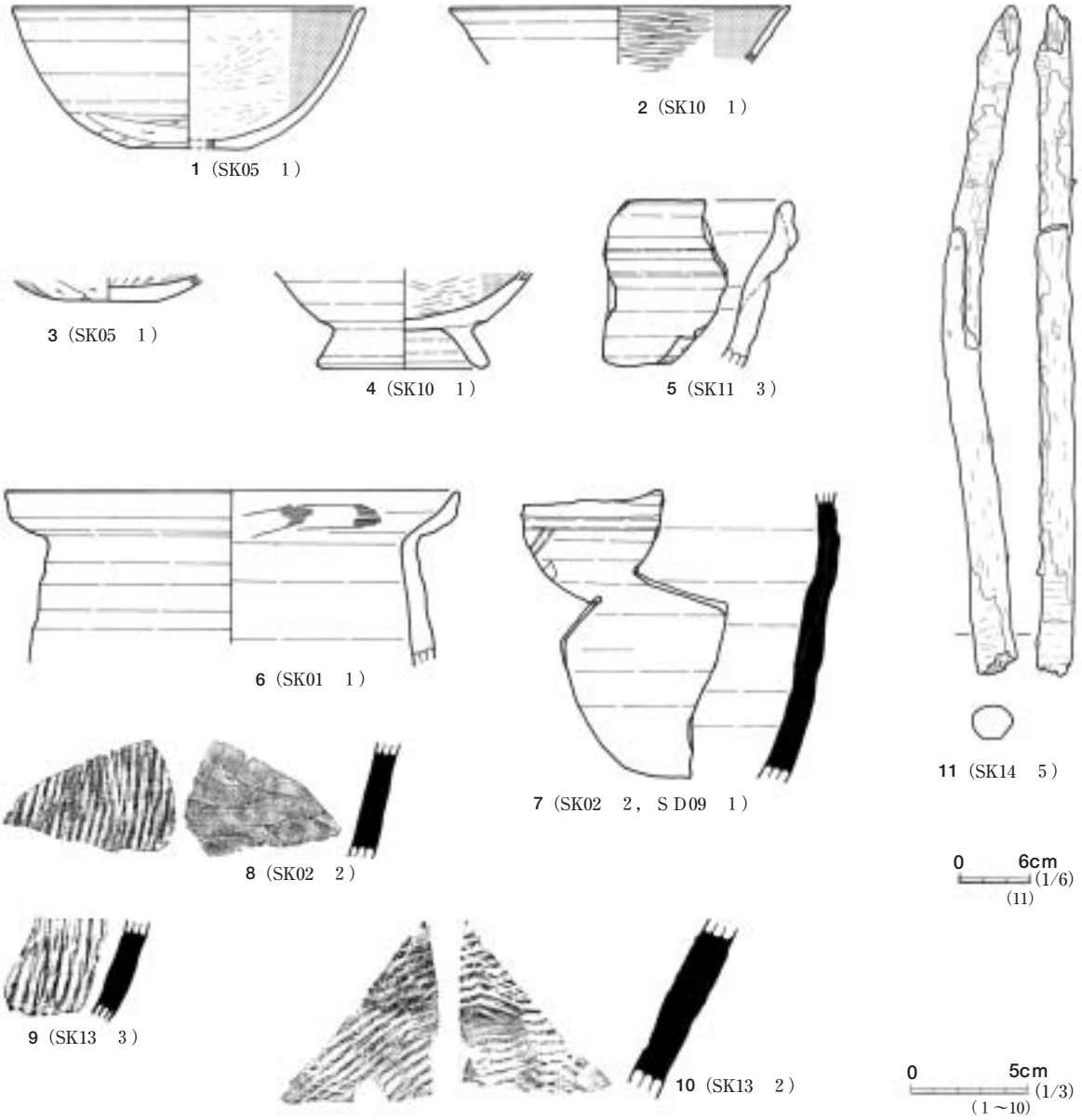


図47　土坑出土遺物

外となるが，西側には隣接して９・10号建物跡が存在する。平面プランは円形を基調とし，規模は上位部分の崩落を考慮すると直径90　前後となる。底面はほぼ平坦に近く，検出面からの深さは最大で104　に達する。堆積土は５層に分けられ，堆積状況や土質から自然堆積と判断できる。

遺物としては　５から木材が出土しており，図47－11に示した。材質はサクラであり，表面には樹皮が残る。加工した痕跡は認められないが，先端は鋭利となっており，サクラの枝を折り，そのまま杭として用いた可能性が考えられる。

本土坑は中型の規模を有し，深く掘り込まれている。12・13号土坑とは平面プランや規模に共通した要素が認められ，これと同様の性格，近接した年代を考えている。（横須賀）

第３節　井　戸　跡

井戸跡は２基調査されている。調査区中央を囲郭する１号溝跡の内外に１基ずつ位置し，いずれも周辺に掘立柱建物跡を伴う。直接的な判断材料はないが，本遺跡において中世末に機能した館跡に伴う遺構と考えられる。２基ともに素掘りの井戸跡であり，２号井戸跡からは著しい湧水が認められている。

１号井戸跡　ＳＥ01

遺　　構（図48，表6，図版42）

本井戸跡は調査区北部，Ｒ31グリッドに位置する。試掘調査時に検出された遺構であり，一部に確認のためのサブトレンチが入っている。遺構確認面はＬ　上面であるが，本来はＬ　上面において確認できたものと考えられる。確認面の標高は181.70ｍ前後を測り，現状では平坦な地形に立地している。１号建物跡の敷地内ほぼ中央に位置するが，本遺構が１号建物跡に伴う施設とは考え難い。調査区中央を囲郭する１号溝跡の外側に位置しており，周囲には北東約５ｍに８号建物跡，北西約４ｍに12号建物跡が存在する。

平面プランは円形を基調とし，規模は径1.80ｍ前後，底部径は0.92ｍ前後を測る。検出面からの深さは1.56ｍ，断面形は逆台形を呈する。遺構の上部は壁面の崩落が認められ，本来は平面規模がやや小さく，断面形は円筒形に近くなると考えられる。堆積土は２層に分けられ，堆積状況から自然埋没したものと判断できる。堆積土中にはＬ　やＬ　起源の壁面崩落土が含まれていた。

遺　　物（図48・49）

遺物は　１から土師器片１点，須恵器片１点が出土している。図49－３は須恵器甕の体部片である。外面にタタキメ，内面にはロクロナデの痕跡が残る。いずれも流れ込みと判断され，本井戸跡に直接伴う遺物は出土していない。

ま　と　め

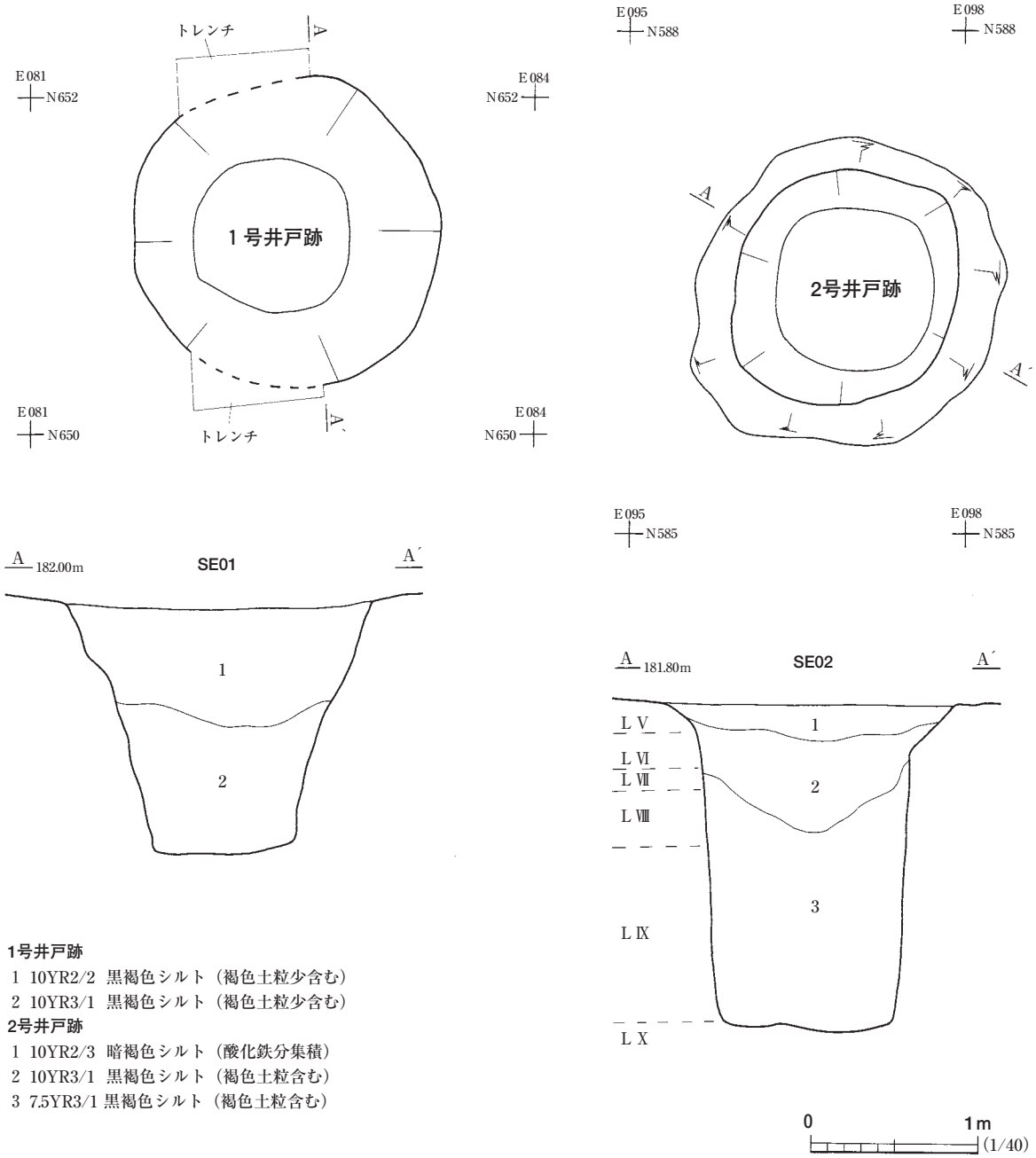
本遺構は円形，素掘りの井戸跡である。現状において湧水は認められない。直接的に年代を判断

する材料を持たないが，周囲の遺構との関係から堀跡（ＳＤ01）の北外側一帯に展開する建物群との関係が窺われ，中世末の館跡に伴う遺構と考えている。（横須賀）

２号井戸跡　ＳＥ02

遺　　構（図48，表6・9，図版42）

本井戸跡は調査区中央東寄り，Ｔ18グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面であるが，本来はＬ　上面において確認できたものと考えられる。確認面の標高は181.60m前後を測り，現状ではほぼ平坦な地形に位置している。１号土坑と重複関係にあり，本井戸跡が新しい。また西には接し



1号井戸跡
1　10YR2/2　黒褐色シルト（褐色土粒少含む）
2　10YR3/1　黒褐色シルト（褐色土粒少含む）
2号井戸跡
1　10YR2/3　暗褐色シルト（酸化鉄分集積）
2　10YR3/1　黒褐色シルト（褐色土粒含む）
3　7.5YR3/1 黒褐色シルト（褐色土粒含む）

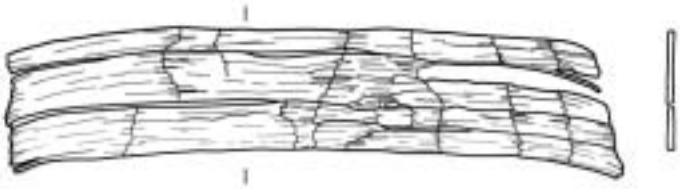
図48　１・２号井戸跡

1（SE02　2）

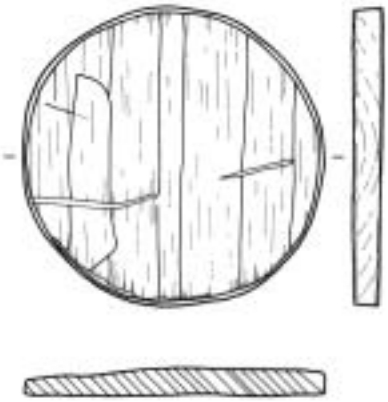
2（SE02　2）

3（SE01　1）

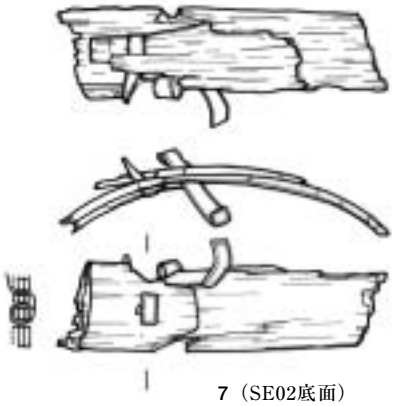
0　5cm（1/3）
（1～3）



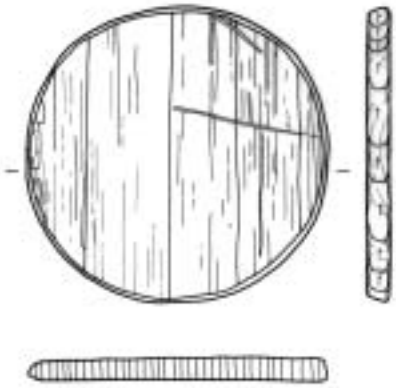
4（SE02底面）

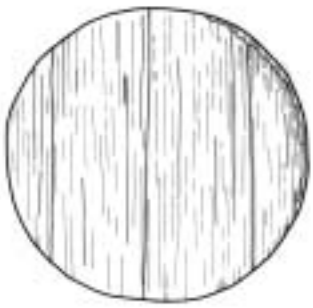


5（SE02底面）



7（SE02底面）





6（SE02底面）

8（SE02底面）

0　5cm（2/5）
（4～8）

図49　井戸跡出土遺物

て６号建物跡が存在する。

平面プランは円形を基調とする。断面形は上部壁面にわずかな崩落が認められるが，ほぼ円筒形を呈している。平面規模は崩落部分を除いて，径1.35～1.40m，底面径は0.93mを測る。検出面からの深さは1.93mに達する。堆積土は３層に分けられ，自然埋没したものと判断できる。基盤層であるＬ　～Ｌ　を掘り込んでおり，砂層となるＬ　まで達していた。調査中，堆積土の中位まで掘り込んだ時点で著しい湧水が認められ，水位は常に検出面近くまで及んでいた。

遺　　物（図49，図版52）

土師器片６点，曲物１組が出土している。曲物は著しい湧水のため出土地点の確認はできなかったが，底面まで掘り抜いた時点の出土であり，底面出土と判断した。土師器は堆積土中からの出土である。土師器は２点のみ図示しえた。１は杯の底部片である。外面底部周辺は手持ちケズリ，内面はミガキの後黒色処理されている。底部は手持ちケズリで再調整されるが，回転糸切りの痕跡が僅かに残る。２は小型甕の口縁部である。口唇部に面を持ち，内外面ともロクロナデされている。

曲物は本来完存していたものを，取上げ時に破損してしまったと思われる。４は側板の一部である。材はスギ，木取りは柾目であり，厚さ２　を測る。一部に綴皮を通した穴が確認される。内外面にケビキは認められない。５・６は円形の板材である。両者とも木取りは柾目，両面及び６は側面に整形痕が確認される。大きさはほぼ同大であるが，５が僅かに厚い。また片面が僅かに小さくなっており，６は特に顕著である。５はヒノキと確認されている。５・６とも側板を固定する際の綴皮を通した穴や木釘の打たれた痕跡は認められない。底板をクレゾコとし側板と箍で締め付けて固定したものであろうか。この円形板材は蓋板か底板と考えられるが，５が僅かに厚いことを除けばほぼ同形，同大であり，側板を綴じ付けた痕跡や付属物もなく，用途を分離，特定することは難しい。７は側板に綴皮が遺存したものである。側面から観察すると３重になっており，側板を合わせた箇所の外側に箍を巻き，一緒に綴じ合わせた部分と判断できる。最も内側の板材，側板の端と考えられる部分は先端に行くに従い薄くなるよう削ぎ落としてある。また綴付けは外側を起点としている。８は遊離した綴皮であり，幅0.6　，厚さ0.075　につくる。

ま　と　め

本遺構は円形，素掘りの井戸跡であり，現在でも豊富な湧水が認められる。底面から出土した曲物は種類を特定できないものの，本井戸跡に伴う遺物である。本井戸跡の年代を直接判断する材料に恵まれないが，周囲に存在する遺構群から中世末の館跡に伴うものと考えられ，隣接する６号建物跡との位置関係を評価すれば，厨とそれに伴う井戸とも復元できよう。（横須賀）

第４節　溝　跡

今回の調査において検出された溝跡は11条である。特筆すべきは調査区中央部において三方を囲郭し，調査区東側外に延びる１号溝跡であろう。中世末に機能した館跡に伴う堀跡と考えられる。

また調査区南側を南西方向に走る２号溝跡は古代以前の流路と判断している。他の９条の溝跡は年代や性格を議論する材料に乏しいが，位置関係や規模から７・８・11号溝跡は本来同一遺構である可能性を考える必用がありそうである。

なお報告に際しては，底面の標高を平面図に記載している。

１号溝跡　ＳＤ01（図50～52，表6・7・9・10，図版33～36・53～55・59）

本溝跡は調査区の中央一帯，Ｐ～Ｙ12～29グリッドの範囲に存在する。調査区内では北・西・南辺が確認され，Ｐ29グリッド，及びＰ12グリッドをそれぞれ北西・南西コーナーとし，ほぼ直角に折れる。北辺はＹ29グリッド，南辺はＵ12グリッドにおいて調査区東外へ延びている。検出面は主にＬ　上面であったが，削平の著しい南西部を除いて，本来はＬ　上面において確認できたものと考えられる。そのため遺構の掘り込みがＬ　に達していない南辺東側についてはその大部分を壊してしまう結果となってしまった。

初めに重複関係を整理しておく。本来は南西コーナー付近において２号溝跡と重複するが，この範囲は近世以降における削平や用水路の敷設などのため遺構が破壊されており，明らかとならない。ただし２号溝跡は内容から古代以前に属すると考えられ，本遺構が新しいと判断している。Ｐ25グリッドでは８号溝跡，Ｑ29グリッドでは９号土坑と重複し，ＳＫ09→ＳＤ01→ＳＤ08となる。

各辺毎に概要を述べる。北辺は現状で長さ43.8ｍを測り，東調査区外に延びる。底面の中心を基準とした軸線方向はＮ89°Ｅを示す。底面はほぼ平坦であり，断面は逆台形状を呈する。幅は検出面で1.9ｍ前後，底面は95　前後を測る。検出面からの掘り込みは44～55　と深い。底面の標高は181.20ｍ～181.30ｍとほぼ一定する。堆積土の様相は土層断面図Ｇ～Ｌにおいてほぼ共通し，　１～　６に分けられる。堆積状況から　２～　６は自然堆積と考えられる。　１はＬ　起源と考えられるブロックを多量に含み，土質に締まりが観察されたため人為的な埋土と判断した。溝跡がほぼ自然埋没した後，上部の窪みを埋めて平坦にしたものと考えられる。堆積土中からは流れ込んだと考えられる土師器，須恵器の他，主に　４下位から木製品が数点出土している。

西辺は南側の一部を失っているが，推定外側全長87.6ｍ，内側83.3ｍを測る。底面の中心を基準とした軸線方向はＮ１°Ｗを示す。底面はほぼ平坦であり，断面は逆台形状を呈する。幅長，深さは南に下がるに従い減じ，北端の幅は1.8ｍ前後，深さは40　程，南端の幅は1.1ｍ前後，深さは20　弱程度となる。底面幅は95　前後と一定し，底面の標高は181.34ｍ～181.46ｍと北辺よりは若干高くなる。土層の堆積状況は土層断面図Ｃ～Ｆに示し，いずれも自然堆積と判断している。

南辺は近世以降における削平や用水路の敷設により東側，Ｌ　，Ｌ　を除去してしまったことにより西側の大部分を失っている。ただしＲ12グリッドにおいて遺構の一部を，また調査区東壁において断面を検出し，おおよそのプランを復元することができた。長さは調査区壁までで推定22ｍ，底面の中心を基準とした軸線方向はＮ88°Ｅを示す。調査区壁における断面（Ａ－Ａ′）から底面幅は1.2ｍ，Ｌ　上面における幅は2.2ｍ以上，底面の標高は181.36ｍを測る。底面は平坦，断面形は逆

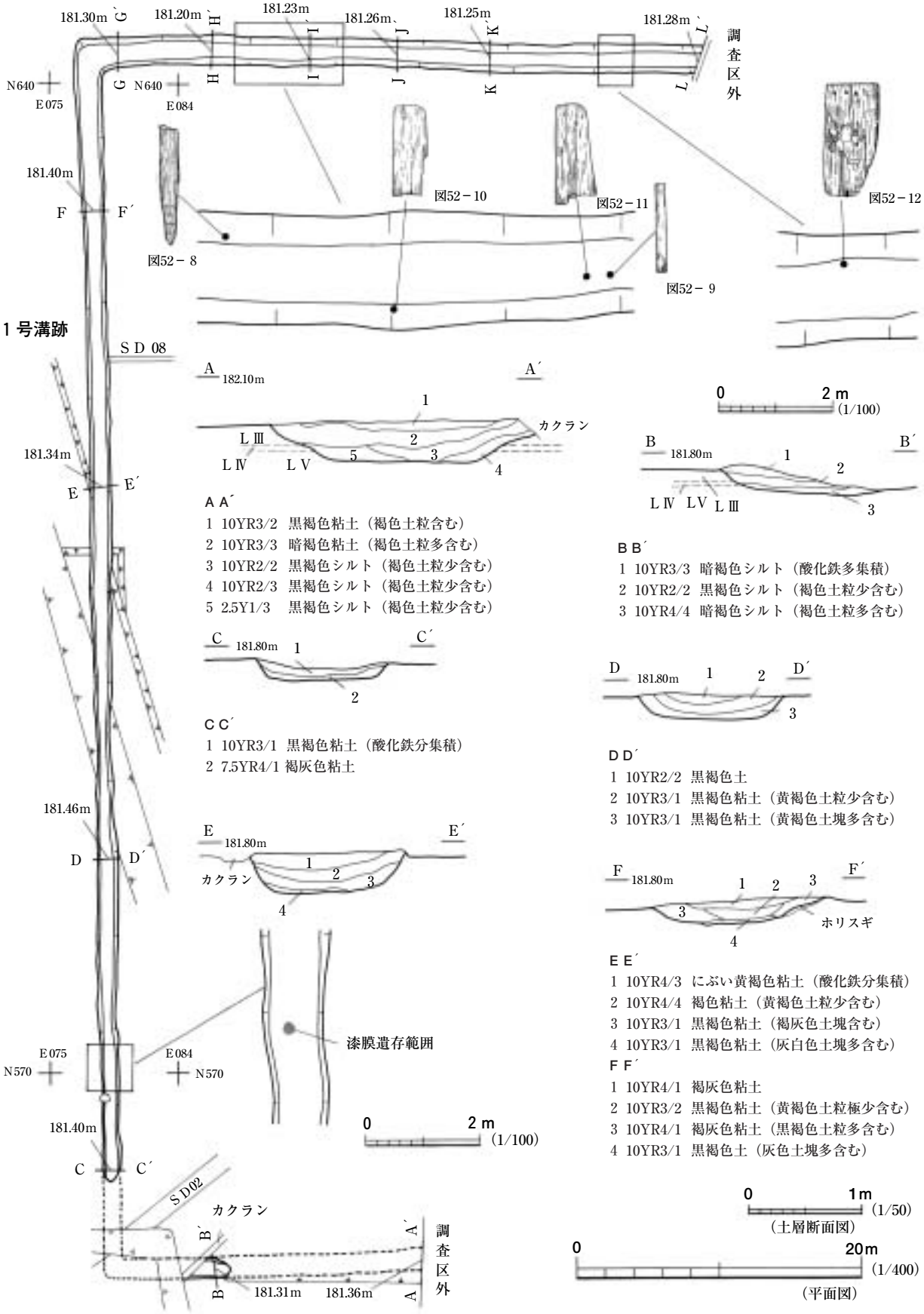
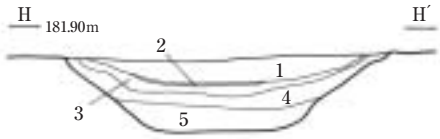
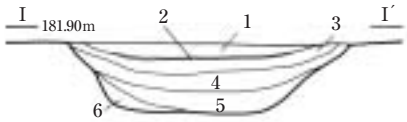

181.30m
181.20m
181.23m
181.26m
181.25m
181.28m
調査区外
N640
E075
N640
E084
181.40m
F
F´
図52－10
図52－11
図52－12
図52－8
図52－9
1号溝跡
SD08
A
182.10m
A´
カクラン
LⅢ
LⅣ
LⅤ
181.34m
E
E´
AA´
1 10YR3/2 黒褐色粘土（褐色土粒含む）
2 10YR3/3 暗褐色粘土（褐色土粒多含む）
3 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土粒少含む）
4 10YR2/3 黒褐色シルト（褐色土粒少含む）
5 2.5Y1/3 黒褐色シルト（褐色土粒少含む）
0 2m
(1/100)
B
181.80m
B´
LⅣ LⅤ LⅢ
BB´
1 10YR3/3 暗褐色シルト（酸化鉄多集積）
2 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土粒少含む）
3 10YR4/4 暗褐色シルト（褐色土粒多含む）
C
181.80m
C´
CC´
1 10YR3/1 黒褐色粘土（酸化鉄分集積）
2 7.5YR4/1 褐灰色粘土
D
181.80m
D´
DD´
1 10YR2/2 黒褐色土
2 10YR3/1 黒褐色粘土（黄褐色土粒少含む）
3 10YR3/1 黒褐色粘土（黄褐色土塊多含む）
181.46m
E
181.80m
E´
カクラン
F
181.80m
F´
ホリスギ
EE´
1 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土（酸化鉄分集積）
2 10YR4/4 褐色粘土（黄褐色土粒少含む）
3 10YR3/1 黒褐色粘土（褐灰色土塊含む）
4 10YR3/1 黒褐色粘土（灰白色土塊多含む）
FF´
1 10YR4/1 褐灰色粘土
2 10YR3/2 黒褐色粘土（黄褐色土粒極少含む）
3 10YR4/1 褐灰色粘土（黒褐色土粒多含む）
4 10YR3/1 黒褐色土（灰色土塊多含む）
漆膜遺存範囲
E075
N570
E084
N570
181.40m
C
C´
SD02
カクラン
B´
A´
B
181.31m
181.36m
A
調査区外
0 1m
(1/50)
(土層断面図)
0 20m
(1/400)
(平面図)

図50　１号溝跡（１）

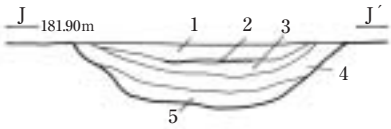
ＧＧ´
1 10YR2/2 黒褐色土（明黄褐色土との混土）
2 10YR3/1 黒褐色土
3 10YR2/2 黒褐色土（黄褐色土との混土）
4 10YR3/2 黒褐色粘土（黄褐色土粒極少含む）
5 10YR4/1 褐灰色粘土（黒褐色土粒多含む）
6 10YR2/3 黒褐色土（黄褐色土塊多含む）



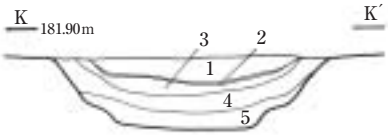
ＨＨ´
1 10YR2/2 黒褐色土（明黄褐色土との混土）
2 10YR3/1 黒褐色土
3 10YR4/1 褐灰色粘土（黄褐色土との混土）
4 10YR3/2 黒褐色粘土（黄褐色土極少粒含む）
5 10YR4/1 褐灰色粘土（黒褐色土粒多含む）



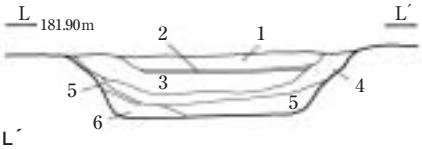
ＩＩ´
1 10YR2/2 黒褐色土（明黄褐色土との混土）
2 10YR3/1 黒褐色土
3 10YR3/2 暗褐色土（白色土塊多含む）
4 10YR3/2 黒褐色粘土（黄褐色土粒極少含む）
5 10YR4/1 褐灰色粘土（黒褐色土粒多含む）
6 10YR2/2 黒褐色シルト（にぶい黄褐色土含む）



ＪＪ´
1 10YR2/2 黒褐色土（明黄褐色土との混土）
2 10YR3/1 黒褐色土
3 10YR4/1 褐灰色粘土（黄褐色土との混土）
4 10YR3/2 黒褐色粘土（黄褐色土粒極少含む）
5 10YR4/1 褐灰色粘土（黒褐色土粒多含む）

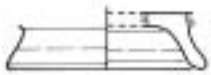


ＫＫ´
1 10YR2/2 黒褐色土（明黄褐色土との混土）
2 10YR3/1 黒褐色土
3 10YR4/1 褐灰色粘土（黄褐色土との混土）
4 10YR3/2 黒褐色粘土（黄褐色土粒極少含む）
5 10YR4/1 褐灰色粘土（黒褐色土粒多含む）



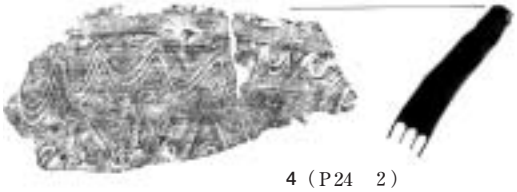
ＬＬ´
1 10YR2/2 黒褐色土（明黄褐色土との混土）
2 10YR3/1 黒褐色土
3 10YR4/1 褐灰色粘土（黄褐色土との混土）
4 10YR3/2 黒褐色粘土（黄褐色土粒極少含む）
5 10YR4/1 褐灰色粘土（黒褐色土粒多含む）
6 10YR3/1 黒褐色粘土（にぶい黄橙色土含む）

0　1m (1/50)


1（Q29　4）

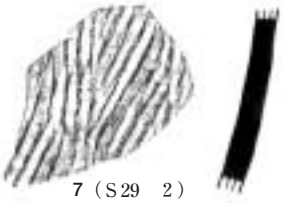
2（Q29　4）

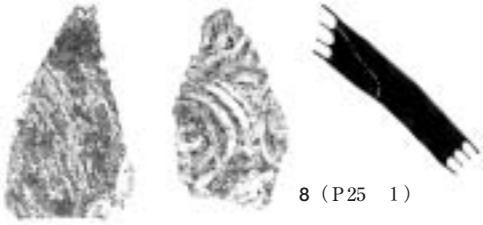
3（P27　1）


4（P24　2）

5（U29　4）

6（Q29　4）


7（S29　2）


8（P25　1）

0　5cm (1/3)

図51　１号溝跡（２），出土遺物（１）

台形状を呈する。堆積土の観察からは自然埋没したものと判断される。調査区内における本溝跡中やその周辺からは，これに付随する柵列や土塁，橋，建物などの施設は確認されていない。

遺物は土師器や須恵器，木製品，漆膜などを検出している。土器類は北西コーナー部を中心とした範囲に多く認められ，すべての層位に疎らに含まれていた。この土器類の出土状況は本溝跡の北西一帯が古代の遺物包含層であることに起因すると考えられる。土器類の総点数を挙げれば，土師器片177点，須恵器片36点である。器種を特定できるものは多くないが，須恵器は甕や壺，瓶類がほとんどであり，土師器は内面黒色処理されたロクロ成形の杯・高台杯が多い。木製品はほとんどが北辺　４の下位から出土し，本遺構の年代に近い遺物と考えられる。西辺Ｐ15グリッド付近の底面よりやや浮いたレベルからは漆膜が検出されているが，形状を留めてはいなかった。

以下図示した遺物について述べる。図51－１は土師器高台杯の高台部である。貼り付け高台であり，内外面ともロクロナデされている。図51－２は須恵器瓶類の口縁部である。細片であり器形は復元できないが口唇部直下に「ハ」の字状にヘラ書きが認められる。図51－３は須恵器甕の口縁部であろう。「く」の字状に強く外反し，先端を鋭くつくる。図51－４は須恵器甕の口縁部と考えられ，口縁部上端は欠損している。外面には２条の櫛描波状文が認められる。図51－５は須恵器甕の底部片である。底部周辺に粘土をナデツケており，内面にはヘラナデ痕が残る。図51－６～８は須恵器甕の体部片である。すべて外面にはタタキメが残り，６には平行する２条の螺状沈線文が認められる。８の外面には自然釉がかかり，内面には同心円状の当具痕が残る。図52－１～６も須恵器甕の体部片である。すべて外面にはタタキメが遺存し，１には螺状沈線文，４には横方向にカキメが走る。内面は４，５に平行，６に弧状の当具痕が残る。

図52－７は自然礫であるが，片面全面に熱を受けている。出土位置に近い10号建物跡から、同様の被熱した自然礫が出土していることを指摘しておく。

図52－８～12は木製品である。樹種は８がスギ，９，10，12はサワラである。８は杭の先端部分であり，上から下に先端を削り出している。９は木札状を呈する。表裏とも墨書は認められない。10，11は用途不明の木製品である。いずれも下方の一部を欠損しているが，上部左側に円孔が１孔空けられている。両者とも左隅は直角におとされ，右隅は弧状につくられ幅を増しながら下がる。12も用途不明木製品である。全体的に長方形状であるが，右下隅は弧状につくられる。正面上部には平行，ほぼ等間隔に５個の貫通孔が空けられ，３本の木釘が遺存している。また正面には右側面に沿って２個の孔が認められ，上位の孔は未貫通である。右側面，下側木口面にはそれぞれ３個，２個の孔が認められ，やはり木釘１本が遺存する。なお正面中央部には２箇所の窪みがあり，ここを中心に強く炭化していた。火鑽板として転用した可能性が考えられる。

本溝跡は調査区内において北，西，南の三方を区画する大型の遺構である。内外に存在する建物跡などの遺構群とは有機的な関連性が窺われ，本遺構は館を内外に区画する堀跡と考えられる。西辺は推定全長87.6mを測り，北辺，南辺は調査区外に延びる。詳しくは考察編に譲るが，堀は館を長方形状に囲郭しているものと推定され，北・南辺の全長を70m前後とすれば，堀跡内部の面積は

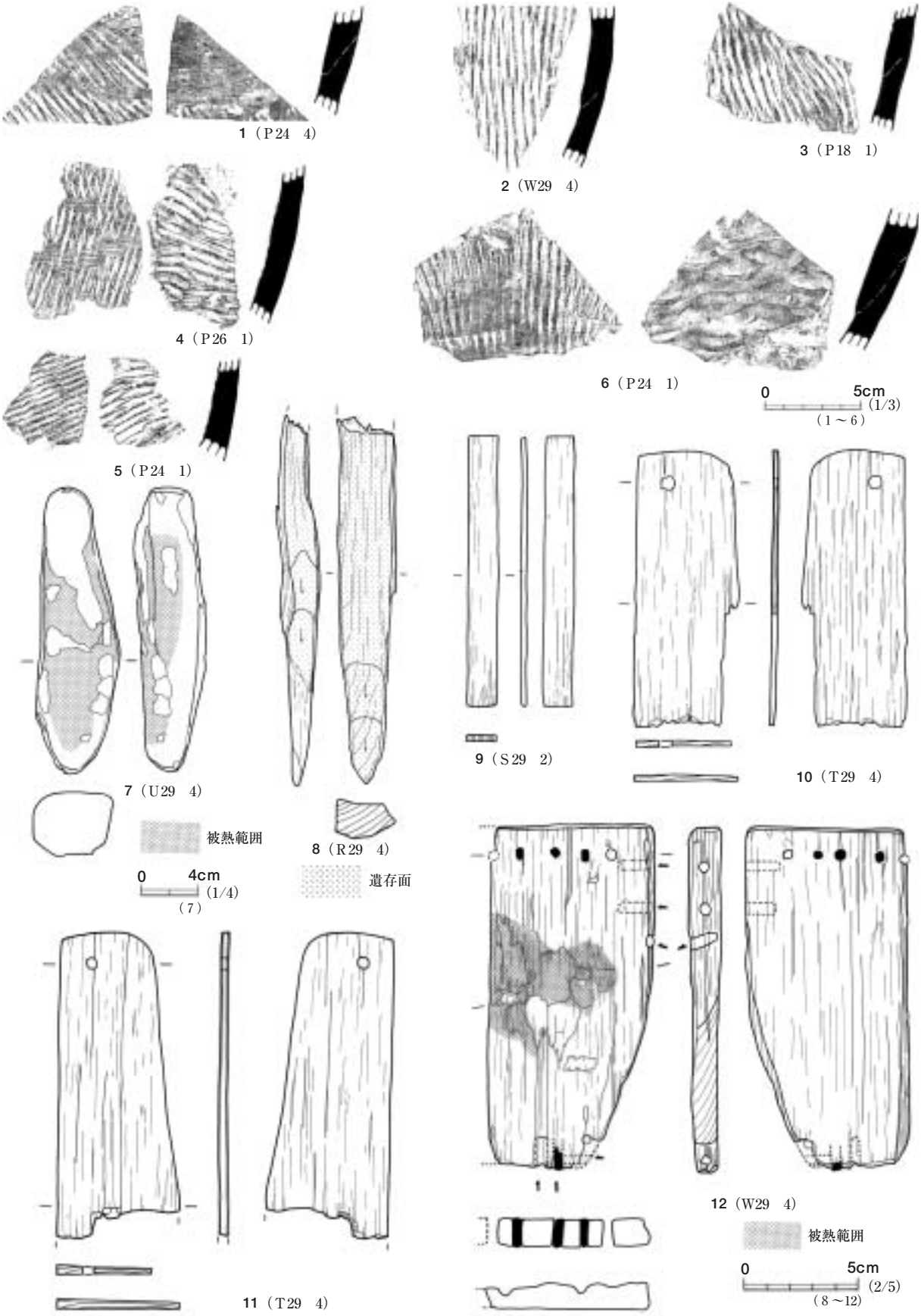


図52　１号溝跡出土遺物（２）

およそ5300　となる。現状で遺構内外に土塁や橋，柵列などの施設は認められず，堀跡内部への入口は東側調査区外にあるものと考えられる。（横須賀）

２号溝跡　ＳＤ02（図53･54，表7，図版37・53）

本溝跡は調査区南部，Ｏ～Ｕ11～16グリッドの範囲に存在する。遺構確認面は主にＬ　上面である。遺構の南西側は近世以降に削平を受け，遺存状態はよくない。確認面における標高は北東側が181.70ｍ前後，南西側は181.50ｍとなっている。1号溝跡とは本来重複関係にあるが，削平と用水路の存在により切り合い関係は確認されなかった。８号土坑とも重複関係にあるが，検出時の注意不足から先後関係については明らかにしえなかった。

本溝跡は調査区内を東西に貫いており，41.5ｍの長さが確認できる。軸線方向はＮ53°Ｅを示す。検出面における幅は最大で2.0ｍ，概ね1.4ｍ前後となる部分が多い。南西側の幅は上部を削平され狭い。断面はＵ字形を呈し，検出面からの深さは最深で60　，底面の標高は181.16ｍ～181.35ｍを測る。堆積土には砂層や礫層が認められ，遺構の下位は水成堆積と判断できる。土層断面図Ａ～Ｃをみると，砂礫層とシルト層が互層になっており，２時期の流水が確認できる。遺構上位は流れ込みによる自然堆積である。底面の標高は概ね南西側に向かって低くなっており，水流は北東から南西方向に流れていたと考えられる。また砂礫層の上面や上位からは植物枯遺体を確認している。

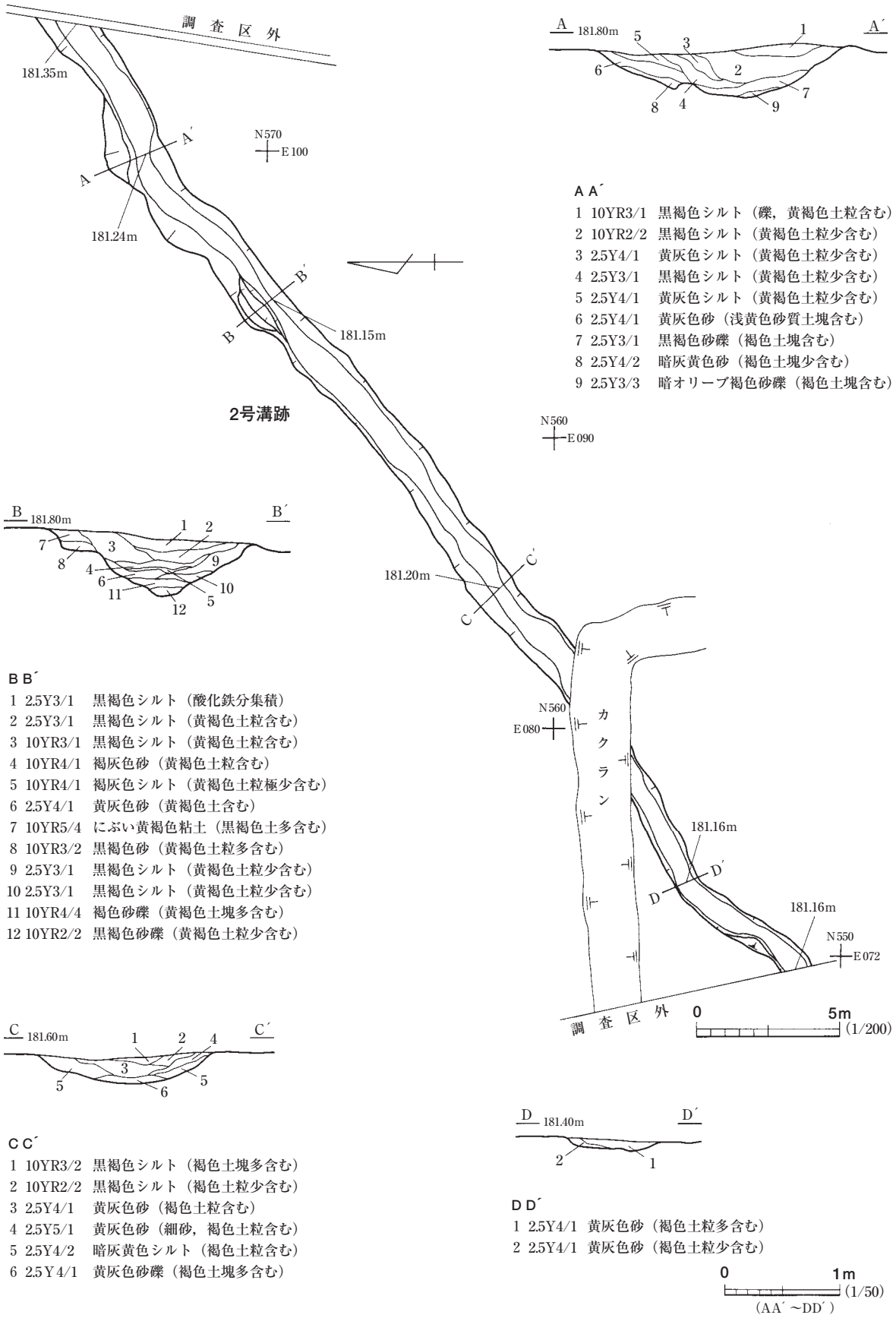
遺物は砂礫層中からは検出されず，すべて自然堆積と考えられる堆積土中に含まれていた。土器類がそのほとんどであり，点数を挙げれば土師器片71点，須恵器片10点となる。10点のみ図示しえた。１～４は土師器杯である。４点とも内面はミガキの後黒色処理されている。１は外面の再調整が認められないが，２～４は底部周辺を手持ちケズリする。３は身の深い椀形の器形を呈し，内面には漆が付着している。底部は３が回転糸切り無調整，２・４は手持ちケズリで再調整されている。５は土師器高台杯の高台部である。貼り付け高台であり，杯部の内面はミガキの後黒色処理されている。６は土師器の堝である。体部は直線的に外傾し，面を有する口唇部へと至る。７は土師器甕の底部であり，ロクロ成形である。

８は須恵器の杯である。体部は直線的に外傾し，底部には回転ヘラ切り痕が残る。９は須恵器の甕である。肩部から体部にかけて遺存する。10は須恵器甕の肩部であろう。

本溝跡は堆積土の観察，及び遺物の内容や出土状況から古代以前の流路と判断される。堆積状況からは２度の流水が確認できる。また砂礫層の上位からは植物枯遺体が確認され，流水が停止した後，しばらく湿地帯となっていた可能性が考えられる。（横須賀）

３号溝跡　ＳＤ03（図55，図版38）

本溝跡は調査区の南西部，Ｐ12・13グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面であり，確認面の標高は181.60ｍを測る。検出面からの深さは最大でも８　であり，遺存状態はよくない。遺存部分の中位は用水路に横断され，南側は近世以降の削平で消失している。



AA′
1 10YR3/1　黒褐色シルト（礫，黄褐色土粒含む）
2 10YR2/2　黒褐色シルト（黄褐色土粒少含む）
3 2.5Y4/1　黄灰色シルト（黄褐色土粒少含む）
4 2.5Y3/1　黒褐色シルト（黄褐色土粒少含む）
5 2.5Y4/1　黄灰色シルト（黄褐色土粒少含む）
6 2.5Y4/1　黄灰色砂（浅黄色砂質土塊含む）
7 2.5Y3/1　黒褐色砂礫（褐色土塊含む）
8 2.5Y4/2　暗灰黄色砂（褐色土塊少含む）
9 2.5Y3/3　暗オリーブ褐色砂礫（褐色土塊含む）

BB′
1 2.5Y3/1　黒褐色シルト（酸化鉄分集積）
2 2.5Y3/1　黒褐色シルト（黄褐色土粒含む）
3 10YR3/1　黒褐色シルト（黄褐色土粒含む）
4 10YR4/1　褐灰色砂（黄褐色土粒含む）
5 10YR4/1　褐灰色シルト（黄褐色土粒極少含む）
6 2.5Y4/1　黄灰色砂（黄褐色土含む）
7 10YR5/4　にぶい黄褐色粘土（黒褐色土多含む）
8 10YR3/2　黒褐色砂（黄褐色土粒多含む）
9 2.5Y3/1　黒褐色シルト（黄褐色土粒少含む）
10 2.5Y3/1　黒褐色シルト（黄褐色土粒少含む）
11 10YR4/4　褐色砂礫（黄褐色土塊多含む）
12 10YR2/2　黒褐色砂礫（黄褐色土粒少含む）

CC′
1 10YR3/2　黒褐色シルト（褐色土塊多含む）
2 10YR2/2　黒褐色シルト（褐色土粒少含む）
3 2.5Y4/1　黄灰色砂（褐色土粒含む）
4 2.5Y5/1　黄灰色砂（細砂，褐色土粒含む）
5 2.5Y4/2　暗灰黄色シルト（褐色土粒含む）
6 2.5Y4/1　黄灰色砂礫（褐色土塊多含む）

DD′
1 2.5Y4/1　黄灰色砂（褐色土粒多含む）
2 2.5Y4/1　黄灰色砂（褐色土粒少含む）

図53　2号溝跡

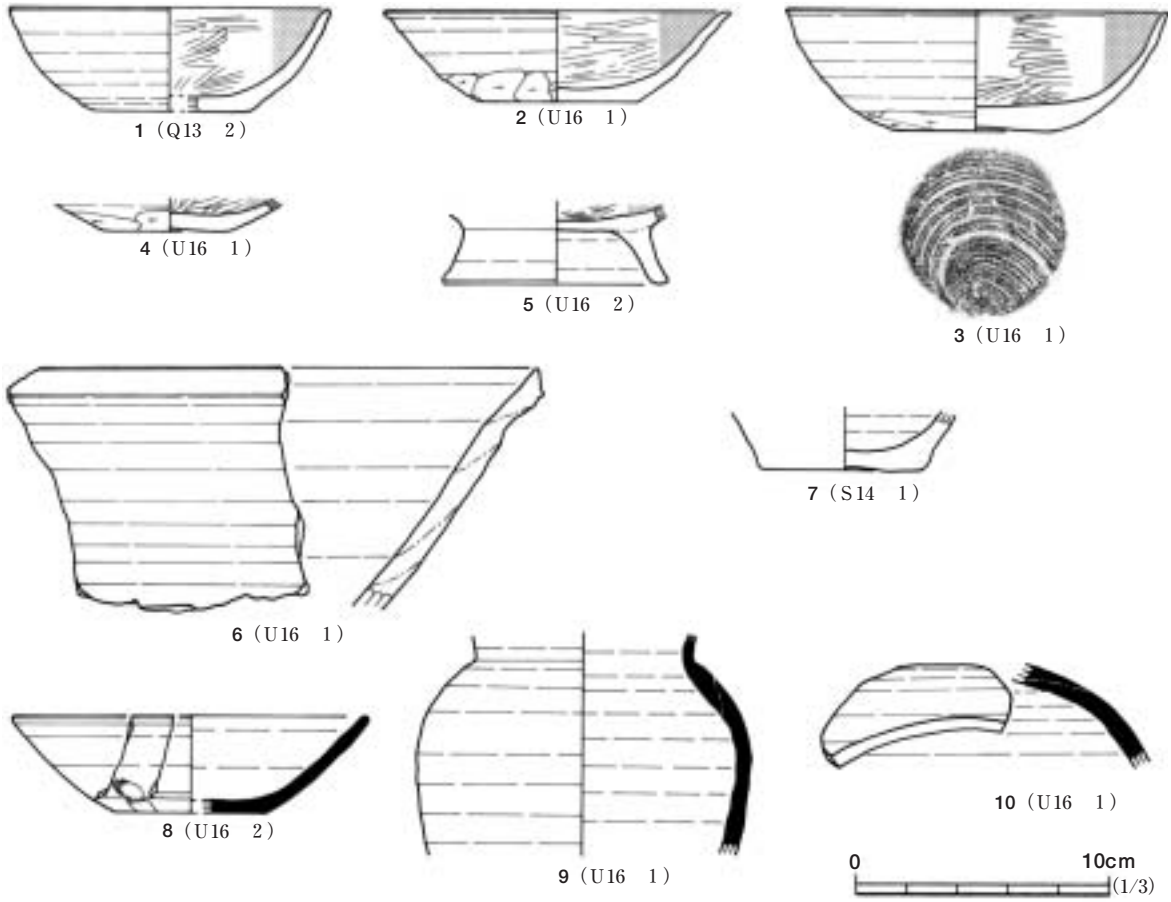


図54　２号溝跡出土遺物

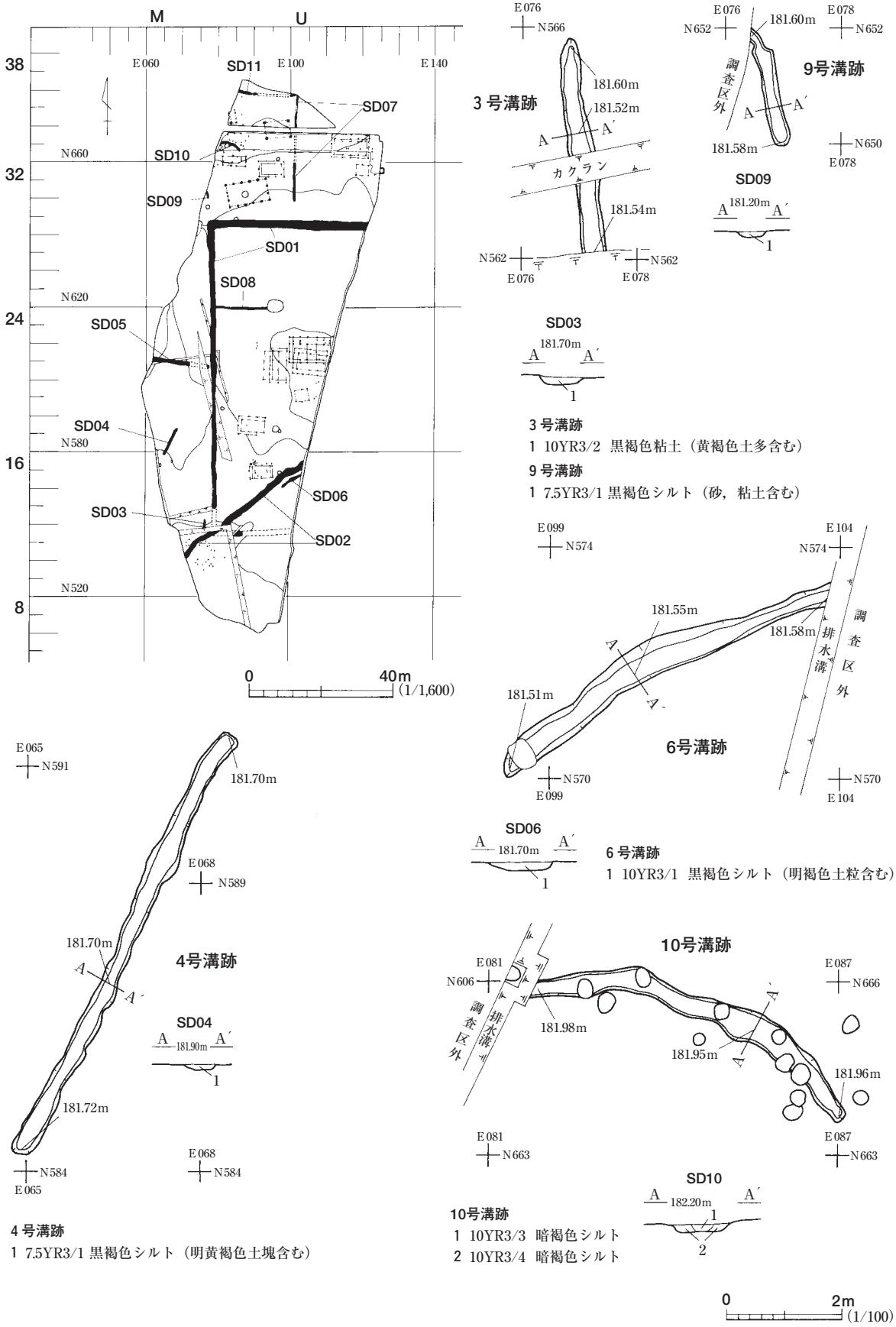
本遺構の規模は，範囲長3.8m，最大幅は45　を測る。遺構の主軸方向はＮ６°Ｗを示す。遺存深度は浅いが，底面はほぼ平坦であり，断面はカマボコ状となる。底面の標高は181.52m～181.60mを測り，遺構の中位付近が最も低い。堆積土は単層であり情報に乏しいが，土質から自然堆積と判断している。

遺物は出土しておらず，調査時の所見から本溝跡の性格，年代について明らかにする材料は得られていない。（横須賀）

４号溝跡　ＳＤ04（図55，図版38）

本溝跡は調査区の南西部，Ｎ16～18グリッドの範囲に位置する。遺構確認面はＬ　上面である。確認面の標高は181.85m前後で一定し，周辺はほぼ平坦な地形を呈している。重複する遺構はなく，南に４・５号土坑が近接する。

遺構の規模は確認された範囲において，長さ8.0m，最大幅50　を測る。遺構の主軸方向はＮ26°Ｅを示す。検出面からの深さは最深で６　と遺存状態は良くない。底面はほぼ平坦であり，断面はカマボコ状となる。底面の標高は181.70m～181.72mとほぼ一定している。堆積土は単層であるが，土質から自然堆積と判断している。



3 号溝跡
1　10YR3/2　黒褐色粘土（黄褐色土多含む）

9 号溝跡
1　7.5YR3/1 黒褐色シルト（砂，粘土含む）

6 号溝跡
1　10YR3/1　黒褐色シルト（明褐色土粒含む）

4 号溝跡
1　7.5YR3/1 黒褐色シルト（明黄褐色土塊含む）

10号溝跡
1　10YR3/3　暗褐色シルト
2　10YR3/4　暗褐色シルト

図55　３・４・６・９・10号溝跡

遺物は出土しておらず，調査時の所見から本溝跡の性格，年代を明らかとする材料は得られなかった。（横須賀）

５号溝跡　ＳＤ05（図56，図版39）

本遺構は調査区西部中央，Ｍ～Ｐ21・22グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面であり，確認面の標高は181.65m～181.75mとほぼ一定し，周辺はほぼ平坦な地形を呈している。他遺構との重複関係は認められないが，本溝跡の東側はその大部分を大型の用水路（遠田貝沼用水）により壊されている。遺構の西側は調査区外へと延び，東側は１号溝跡に達する前に消失している。

確認される規模は，長さ16.42m，最大幅1.20mを測る。遺構の主軸方向はN84°Ｗを示す。検出面からの深さは20　前後となる部位が多く，遺存状況は良くない。底面の標高は181.51m～181.55mとほぼ一定する。底面西側は中心部が一段低い凸形をなし，東に行くに従い段が消失し平坦に近くなる。堆積土は黒褐色を基調としたシルト質土であり，レンズ状を呈する堆積状況から自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

本溝跡は検出時において，その位置関係から１号溝跡に伴う排水施設などの遺構と考えられた。しかし遺構内の堆積状況に流水の痕跡は認められず，また底面標高もほぼ平坦となる数値を示す。さらに現代の用水路などによって遺構の一部が破壊され，西側は調査区外へ延びる。他の遺構との重複関係もなく，遺物も出土していないなど，調査所見からは１号溝跡との関連は窺えない。ここでは本遺構の性格，年代については不明としておきたい。（横須賀）

６号溝跡　ＳＤ06（図55，図版39）

本溝跡は調査区南東部，Ｔ・Ｕ15グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面であり，その標高は181.60m前後を測る。東側は調査区外に延び，西側は6.35mの長さで消失している。形状は僅かにカーブを描いている。ピット１個と重複し，本溝跡が古い。北側にはほぼ平行して２号溝跡が走り，位置的に互いの関連が想定される。

規模は最大幅60　，最小幅23　を測り，検出面からの深さは最大でも５　程と浅い。底面の標高は181.51m～181.58mであり，西側へ僅かに傾斜している。単層となる堆積土は自然堆積と考えられるが，得られる情報は少ない。遺物は出土していない。

本溝跡からは遺物が出土しておらず，また遺存状態もよくないため，直接性格，年代を明らかにする材料を持たない。しかし２号溝跡とほぼ平行し底面がやや西に傾斜していること，形状が不整であること，中世以降と考えられるピットに切られていることから，２号溝跡における水流が，一時的に分流した痕跡である可能性が高いと考えている。（横須賀）

７号溝跡　ＳＤ07（図57，表7，図版40）

本溝跡は調査区北部，Ｕ30～36グリッドに位置する。北側は調査区外へと延び，中央部分及び南

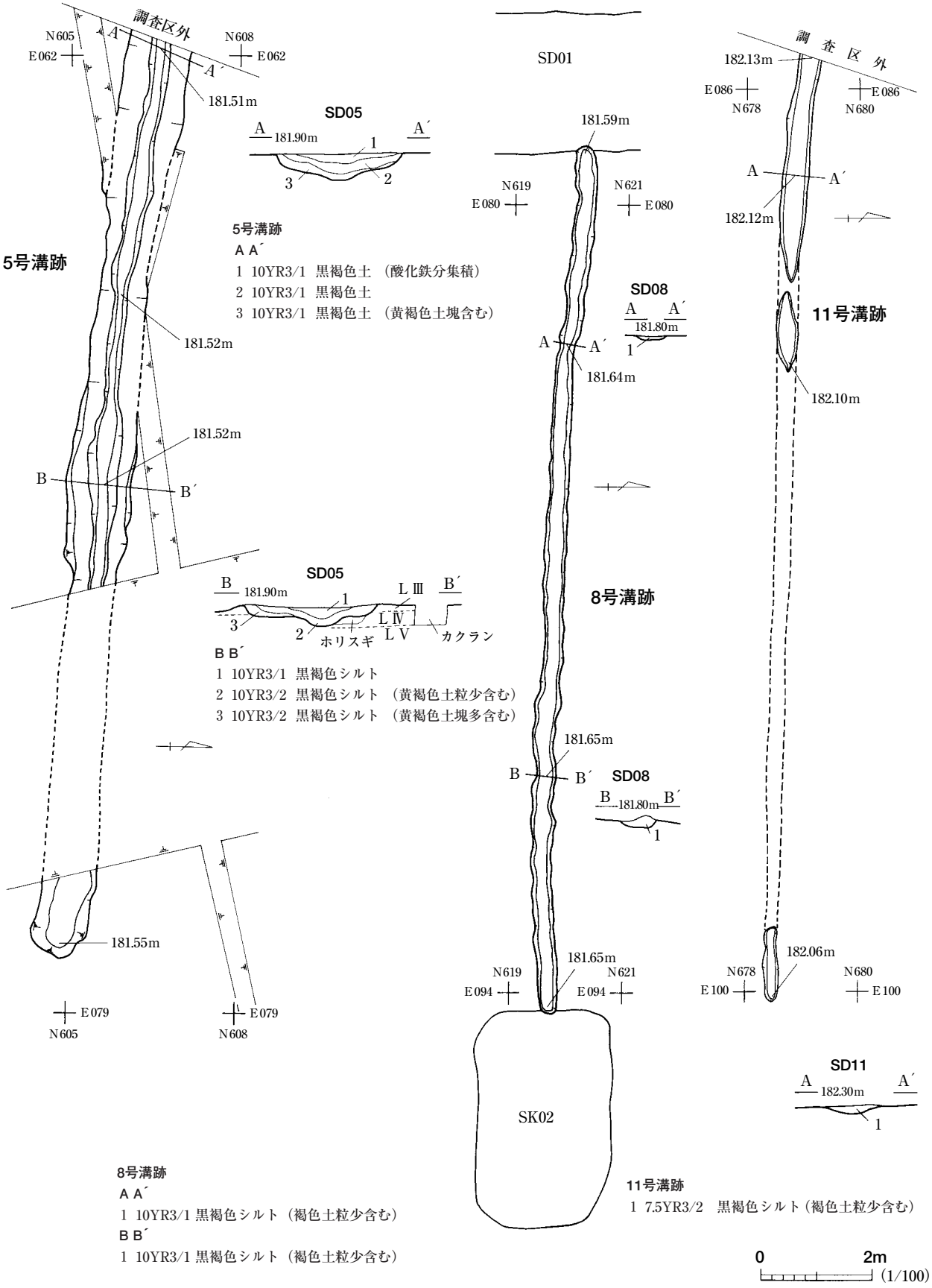

調査区外
N605
E062
N608
E062
A
A´
181.51m
SD05
A
181.90m
A´
1
2
3
5号溝跡
A A´
1 10YR3/1 黒褐色土 （酸化鉄分集積）
2 10YR3/1 黒褐色土
3 10YR3/1 黒褐色土 （黄褐色土塊含む）
5号溝跡
181.52m
181.52m
B
B´
SD05
B
181.90m
B´
1
LⅢ
LⅣ
LⅤ
3
2
ホリスギ
カクラン
B B´
1 10YR3/1 黒褐色シルト
2 10YR3/2 黒褐色シルト （黄褐色土粒少含む）
3 10YR3/2 黒褐色シルト （黄褐色土塊多含む）
181.55m
E079
N605
E079
N608
SD01
181.59m
N619
E080
N621
E080
SD08
A
A´
181.80m
1
A
A´
181.64m
8号溝跡
181.65m
B
B´
SD08
B
181.80m
B´
1
181.65m
N619
E094
N621
E094
SK02
8号溝跡
A A´
1 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土粒少含む）
B B´
1 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土粒少含む）
調査区外
182.13m
E086
N678
E086
N680
A
A´
182.12m
11号溝跡
182.10m
182.06m
N678
E100
N680
E100
SD11
A
182.30m
A´
1
11号溝跡
1 7.5YR3/2 黒褐色シルト（褐色土粒少含む）
0
2m
(1/100)

図56　５・８・11号溝跡

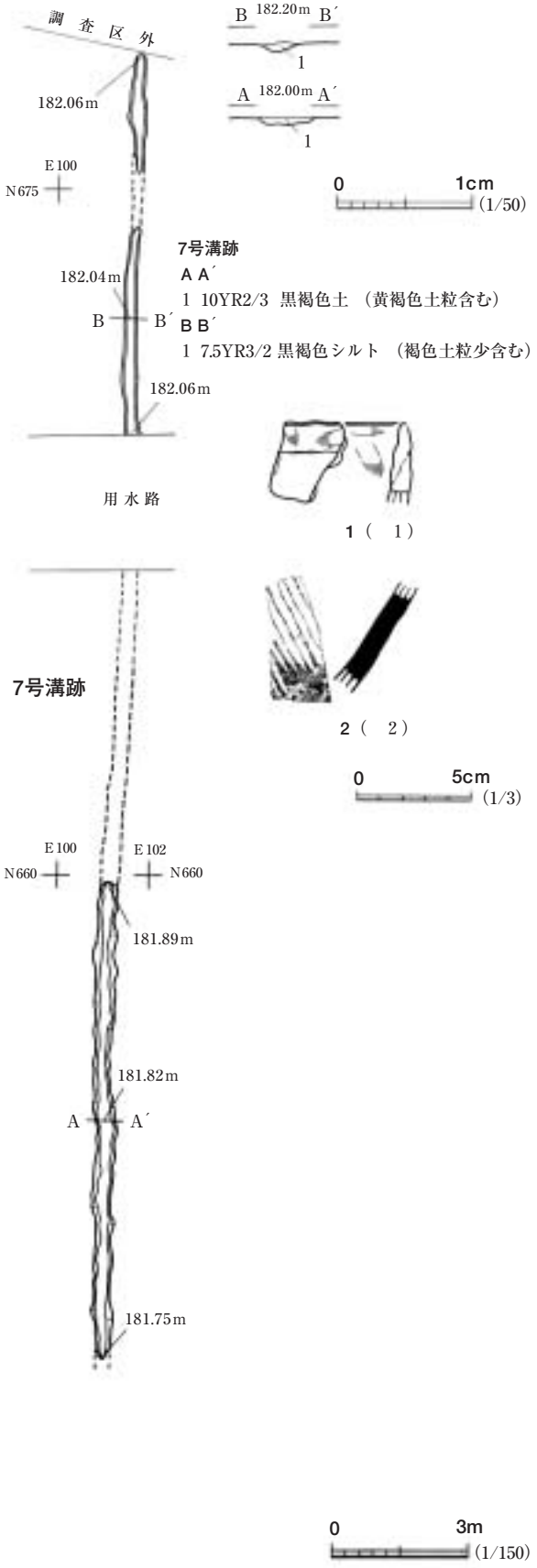


図57　７号溝跡・出土遺物

側が消失している。またＵ34グリッド部分には用水路が東西に走っている。遺構確認面は大部分がＬ　上面であるが，本来はＬ　上面において確認できたものと考えられる。重複する遺構はないが，西側には１・８・13号建物跡などが存在する。

調査区北際から現存する遺構の南端までの長さは28.8m，幅は40　前後を測る。遺構の主軸方向はＮ1.5°Ｅを示す。底面の標高は181.75m～182.06mと31　の比高差を有し，南に傾斜している。断面形はＵ字形～カマボコ状となる。堆積土は薄く，判然としないが，土質から自然堆積と判断している。

遺物は堆積土中から土師器，須恵器の細片が計44点出土しており，本遺構の遺存状態から考えれば多量である。これは西側一帯が古代の遺物包含層であることに起因すると考えられる。２点のみ図示しえた。１は土師器筒型土器の口縁部片である。内外面に雑なユビナデが観察される。２は須恵器甕の体部片である。外面にはタタキメ，内面にはヘラナデ痕が残る。

本溝跡は軸線方向をほぼ南北にとり，８・11号溝跡とは軸線がほぼ直交する。遺跡を俯瞰すれば，３条の溝跡は位置関係や規模から本来同一遺構であり，方形区画を形成する可能性が高い。ただし北東コーナーは調査区外に延び，南東コーナーは遺存していない。３条の溝跡が同一遺構と仮定すれば，８号溝跡が１号溝跡，２号土坑より新しく，本遺構は近世以降に機能していたとすることができる。性格は区画溝，あるいは底面が南に傾斜していることから用水路などの水利施設と考えることができる。　（横須賀）

８号溝跡　ＳＤ08（図56，図版40・41）

本溝跡は調査区中央，Ｐ～Ｓ24・25グリッドに位置している。遺構確認面はＬ　上面であるが，本来はＬ　であったと考えられる。確認面の標高は181.62m～181.69mと僅かだが西に傾斜している。１号溝跡，２号土坑とは重複関係にあり，本溝跡が新しい。

遺構は東西に延び，西は１号溝跡，東は２号土坑と重なる位置で消失している。確認された規模は長さ15.4m，幅35　前後を測り，遺構の主軸方向はＮ87.5°Ｗを示す。検出面からの深さは最大でも６　程であり，遺存状態はよくない。底面の標高は181.59m～181.65mを測り，僅かであるが西に傾斜している。遺構の断面形はカマボコ状に近い。単層の堆積土は薄く観察が十分でないが，土質から自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

本溝跡は軸線方向をほぼ東西にとり，軸線が７号溝跡とはほぼ直交，11号溝跡とはほぼ平行する。この３条の溝跡は位置関係や規模から本来同一遺構であり，方形区画を形成する可能性が高い。年代については１号溝跡，２号土坑より新しく，近世以降とすることができる。性格は区画溝，あるいは用水路などの水利施設を想定している。（横須賀）

９号溝跡　ＳＤ09（図55，図版41）

本溝跡は調査区北西部，Ｐ31グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面である。確認面の標高は181.64m前後と周囲はほぼ平坦な地形を呈している。遺構の北側は調査区外へ延び，南側は調査区際から2.0mの位置で消失している。周囲は古代の遺物包含層であり，この他南に11号土坑，東に１号建物跡が近接する。

規模は幅が最大で30　，検出面からの深さは最深で５　程となる。底面はほぼ平坦であり，遺構の断面形はカマボコ状を呈する。単層となる堆積土は薄く，観察が十分でないが，土質から自然堆積と判断している。堆積土中からは須恵器が１点出土し，２号土坑出土の破片と接合している（図47－７）。

Ｌ　上面から掘り込まれているため，年代については10世紀を遡りえない。しかし，遺物は流れ込みと考えられ，調査所見から正確な年代，性格を判断するのは困難である。（横須賀）

10号溝跡　ＳＤ10（図55，図版41）

本溝跡は調査区の北西際，Ｑ・Ｒ33・34グリッドに位置する。遺構確認面はＬ　上面である。確認面の標高は182.05m前後を測り，周辺はほぼ平坦な地形を呈している。多数のピットと重複しており，いずれのピットも本溝跡上から掘り込まれたものである。この他南に13号土坑，12号建物跡，北に14号建物跡と近接する。

遺構の西側は調査区外へと延び，東は調査区際から6.3mの位置で消失する。遺構の形状は南に向かってややカーブし，確認された全長は6.15mを測る。幅は26～55　と一定しない。検出面から

の深さは最深で10　程であり，遺存状態はよくない。底面の標高は181.95m～181.98mと大きなバラツキはなく，底面はほぼ平坦である。遺構の断面形はカマボコ状を呈する。堆積土は２層に分けられ，堆積状況から自然堆積と判断される。遺物は出土していない。

遺物の出土がなく，限られた調査内容から本遺構の性格を判断することは難しい。帰属年代について遺構確認面がＬ　であること，中世末と考えられるピットに壊されていることから，少なくとも10世紀以降，中世末以前と捉えることができる。（横須賀）

11号溝跡　ＳＤ11（図56，図版41）

本溝跡は調査区の北端，Ｒ～Ｕ36グリッドに位置する。本遺構の位置する調査区北西端周辺は，Ｌ　，Ｌ　の堆積が非常に薄く，遺構確認面はＬ　，及び一部がＬ　上面であった。確認面の標高は181.09m～181.19mと僅かに東へ傾斜している。遺構の西端は調査区外へ延び，東端はＵ36グリッド付近で消失する。本来は調査区北端を東西に横断するが，Ｓ～Ｔ36グリッド部分については遺存していない。重複関係にある遺構はないが，東端が７号溝跡に近接し，両者は調査区外において接続する可能性が高いと考えている。

検出しえた東端から調査区西際までの遺存長は14.5m，遺構の軸線方向はＮ88°Ｗを示す。幅は最大で47　，検出面からの深さは最深で６　程である。底面の標高は182.06m～182.13mを測り，東側に向かって僅かに傾斜している。遺構の断面形はＵ字形～カマボコ状を呈する。堆積土は薄く，観察は十分でないが，土質から自然堆積と判断している。遺物は出土していない。

本溝跡は軸線方向をほぼ東西にとり，軸線が７号溝跡とはほぼ直交，８号溝跡とはほぼ平行する。位置関係や規模からこの３条の溝跡を同一遺構と捉えれば，年代は８号溝跡の年代観から近世以降，性格は区画溝，あるいは用水路などの水利施設を考えることができる。（横須賀）

第５節　ピット群

掘立柱建物跡，柱列跡などの遺構として認識できず，個々に調査したピット135個について本節で報告する。ピットは分布範囲から５群に分けることが可能であり，これをＡ～Ｅ群とする。Ｅ群を除いた４ヶ所のピット群はいずれも周辺やその範囲内に軸線をほぼ東西，あるいは南北にとる掘立柱建物跡が存在し，これらの建物群と併行あるいは近接した時期の所産として大過ない。Ｅ群についても，ピットの形状，規模から他の４群とほぼ同時期と考えられる。なおＥ群のピット（Ｏ12Ｐ１）からは灰釉天目茶碗片が出土しており，堀跡（1号溝跡）及び掘立柱建物跡などで構成される館跡の年代を示す資料の一つとなる。

報告に際しては以下の①～⑤の方法を採った。①平面図上の煩雑さを避けるため，遺構の下端は表現しない。②同様の理由で平面図，土層断面図ともにＡＡ´というアルファベットを用いた記載方法を採らず，土層断面図作成方向，写真撮影方向の起点を▲で示し，平面図上に記載した。③平

面図にはグリッド線を被せ，左上にグリッド番号を記載した。④調査区内での各ピット群の位置を図左上（Ｂ群は左中央）に示した。⑤遺構確認面が異なる場合があるため，ピットの深さは底面の標高値で示し，表５にまとめた。

ピットＡ群（図58・59・65，表5・9，図版43・56）

調査区北西部，Ｑ32～34，Ｒ32～35，Ｓ33・34グリッドの範囲に位置する50個のピットをＡ群とする。遺構確認面はＱ32Ｐ１～Ｐ５，Ｒ32Ｐ１・Ｐ２，Ｒ33Ｐ９～Ｐ13がＬ　上面，他はＬ　上面であるが，本来すべてＬ　が確認面と考えられる。検出面の標高はＬ　上面で182.10m前後を測り，地形は僅かに南東方向に傾斜している。Ｑ34Ｐ２・Ｐ６・Ｐ８，Ｒ34Ｐ８，Ｒ33Ｐ３・Ｐ４の６個は10号溝跡と重複し，いずれも溝跡より新しい。Ｑ34Ｐ１，Ｑ33Ｐ４は13号土坑と重複し，２個のピットが新しい。Ｓ34Ｐ１は13号建物跡Ｐ５と重複し，これより新しい。また位置的に12号建物跡とＱ32Ｐ１～Ｐ５，Ｒ33Ｐ９～Ｐ12，Ｒ32Ｐ１の10個は重複関係にある。各ピット間の重複関係を整理すれば，Ｑ34Ｐ５・Ｑ33Ｐ７→Ｑ34Ｐ４，Ｒ33Ｐ２→Ｒ33Ｐ１，Ｑ32Ｐ２→Ｑ32Ｐ５となる。

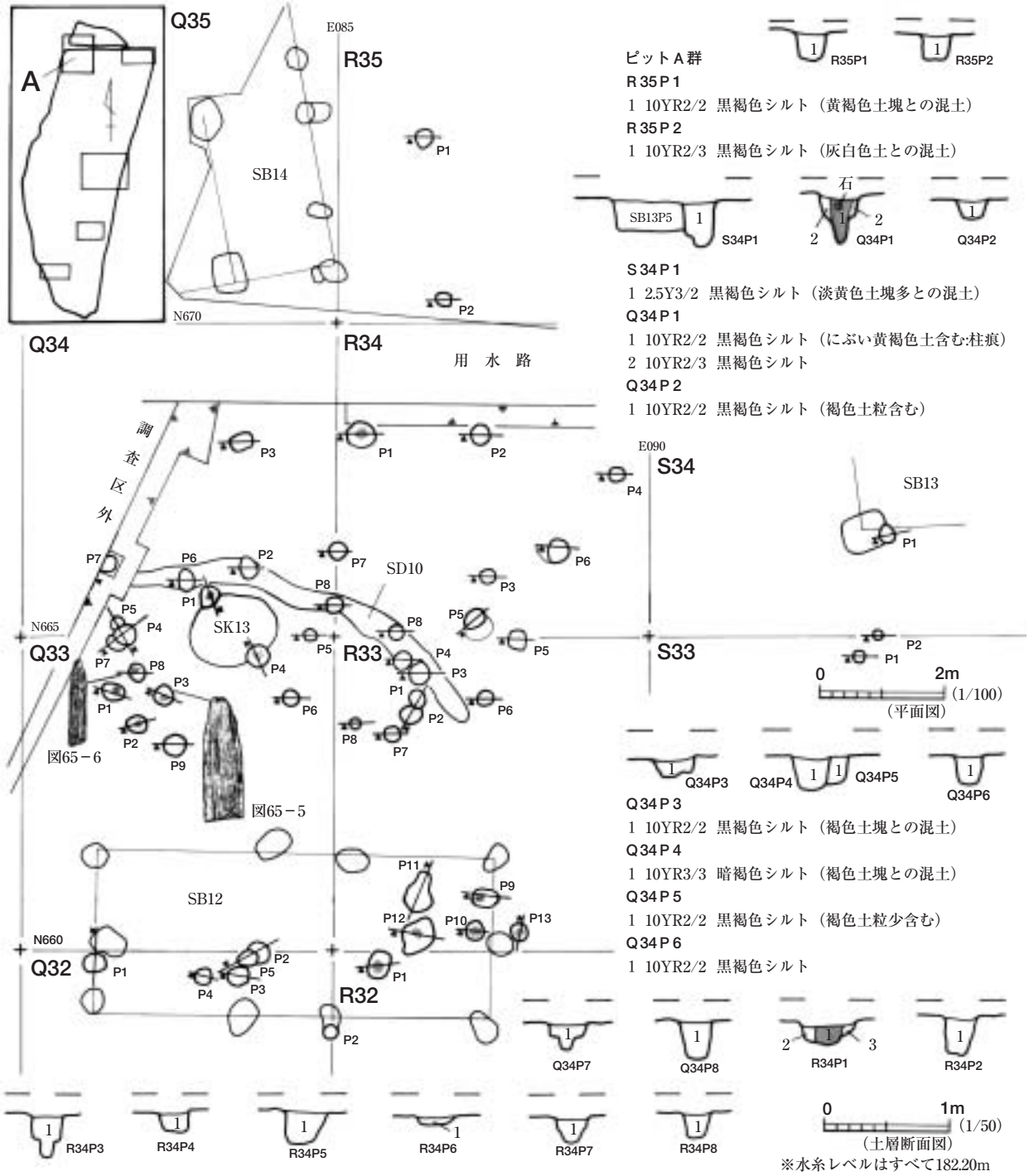
平面プランはＱ33Ｐ10・Ｐ12が不整形となる以外は隅丸方形～隅丸長方形が基調となる。規模は不整形のＲ33Ｐ11・Ｐ12がやや大きく，Ｓ33Ｐ１・Ｐ２，Ｒ33Ｐ８が一辺16　前後と小さくなり，他の45個は長辺20～42　の範囲内に収まる。深さについては位置によってややまとまる傾向にあり，標高181.82m～181.89mのものはＥ085ラインの東西に，181.72m～181.81mのものはＮ665ラインの南北に，181.71m以下のものはＮ665ライン以南，特に12号建物跡周辺に集中する。柱痕は12個のピットから確認され，柱痕幅は10～20　を測る。

遺物はＱ33Ｐ３・Ｐ８からは柱材が検出されている。図65－５は角柱であり，木取りは四方柾である。遺存状態は良好であり，すべての面が確認できた。辺材部分を利用しており，四面のうち一面は外辺をそのまま用いている。最大幅は11.8　，現存長は36.1　を測る。側面には整形痕が残り，単位幅は3.2　を測る。木口には単位幅５　の工具痕が残り，切断時の痕跡と考えられる。６は検出状況から柱材と確認できるが，遺存状態は極めて悪い。僅かに面が確認され，角柱と考えられる。樹種はクリ，木取りは二方柾である。

本群のピットは現状で建物跡などの遺構とは認識しえないが，底面の標高値にある程度の集中域がみられる。検出した柱材はいずれも角柱であり，中世末とした建物跡から検出したものと同様である。本群に属するピットは，形状や規模，及び他の遺構との重複関係から時期的に限定されると推定され，およそ中世末と考えられる。ピット群の範囲はさらに調査区外西側へ広がっており，一部は建物跡の柱穴となる可能性が高い。

ピットＢ群（図60・65，表5・9，図版46・56）

調査区北東部，Ｗ～Ｙ33・34，Ｚ33グリッドに位置する24個のピットをＢ群とする。遺構確認面はW33Ｐ１～Ｐ３，Ｙ33Ｐ１～Ｐ３がＬ　上面，他はＬ　上面であるが，本来すべてＬ　が確認面



※水糸レベルはすべて182.20m

ピットＡ群

Ｒ35Ｐ1
1　10YR2/2　黒褐色シルト（黄褐色土塊との混土）

Ｒ35Ｐ2
1　10YR2/3　黒褐色シルト（灰白色土との混土）

Ｓ34Ｐ1
1　2.5Y3/2　黒褐色シルト（淡黄色土塊多との混土）

Ｑ34Ｐ1
1　10YR2/2　黒褐色シルト（にぶい黄褐色土含む:柱痕）
2　10YR2/3　黒褐色シルト

Ｑ34Ｐ2
1　10YR2/2　黒褐色シルト（褐色土粒含む）

Ｑ34Ｐ3
1　10YR2/2　黒褐色シルト（褐色土塊との混土）

Ｑ34Ｐ4
1　10YR3/3　暗褐色シルト（褐色土塊との混土）

Ｑ34Ｐ5
1　10YR2/2　黒褐色シルト（褐色土粒少含む）

Ｑ34Ｐ6
1　10YR2/2　黒褐色シルト

Ｑ34Ｐ7
1　10YR2/2　黒褐色シルト

Ｑ34Ｐ8
1　10YR3/3　黒褐色シルト

Ｒ34Ｐ1
1　10YR2/1　黒色シルト（柱痕）
2　10YR3/4　暗褐色シルト
3　10YR3/3　暗褐色シルト

Ｒ34Ｐ2
1　10YR2/1　黒褐色シルト（パミス極少含む）

Ｒ34Ｐ3
1　10YR3/1　黒褐色シルト（褐色土粒・パミス少含む）

Ｒ34Ｐ4
1　10YR2/1　黒色シルト（明褐色土・パミス少含む）

Ｒ34Ｐ5
1　10YR3/1　黒褐色シルト（褐色土粒との混土）

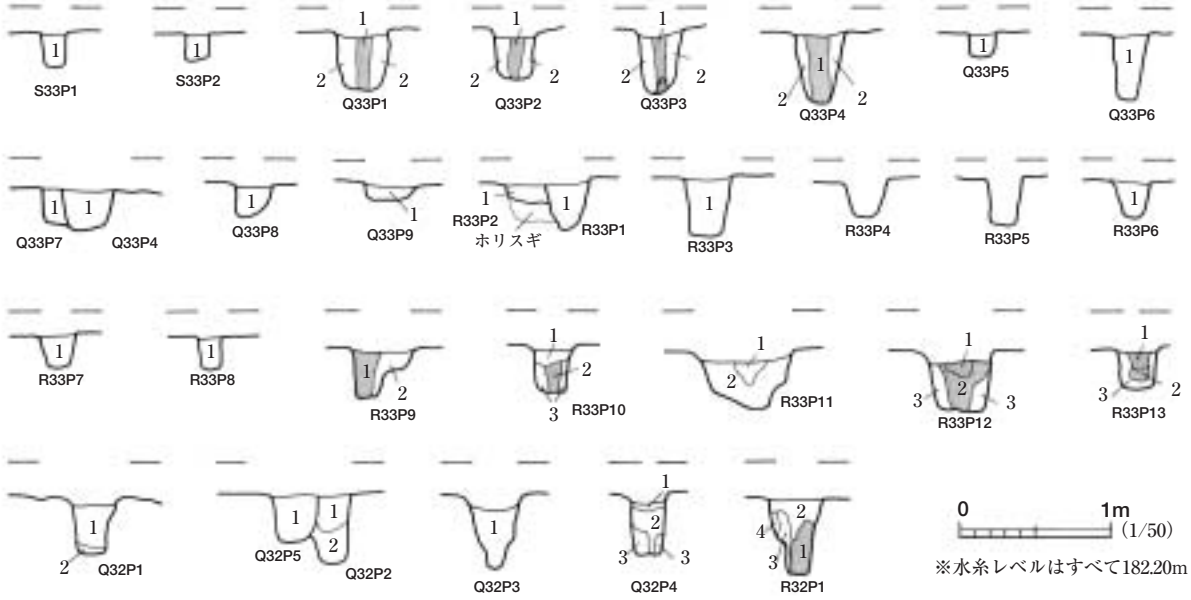
Ｒ34Ｐ6
1　10YR2/1　黒色シルト（パミス多量含む）

Ｒ34Ｐ7
1　10YR2/3　黒褐色シルト

Ｒ34Ｐ8
1　10YR3/2　黒褐色シルト（褐色土粒含む）

図面作成・写真撮影方向

図58　ピットA群（１）



S33P1
1 2.5Y3/2　黒褐色シルト（パミス少含む）
S33P2
1 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土粒極少含む）
Q33P1
1 10YR3/4 暗褐色シルト（柱痕）
2 10YR2/2 黒褐色シルト（にぶい黄褐色土含む）
Q33P2
1 10YR2/2 黒褐色シルト（柱痕）
2 10YR3/4 暗褐色シルト（褐色土との混土）
Q33P3
1 10YR2/2 黒褐色シルト（柱痕）
2 10YR3/4 暗褐色シルト（黒褐色土との混土）
Q33P4
1 10YR2/3 黒褐色シルト（褐色シルト含む:柱痕）
2 7.5YR3/2 黒褐色シルト（明褐色土との混土）
Q33P5
1 10YR2/3 黒褐色シルト（褐色土粒含む）
Q33P6
1 10YR2/3 黒褐色シルト（褐色土粒多含む）
Q33P7
1 10YR2/3 黒褐色シルト
Q33P8
1 10YR3/2 黒褐色シルト（褐色土粒・パミス含む）
Q33P9
1 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土粒・パミス含む）
R33P1
1 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色粘土塊含む）
R33P2
1 7.5YR3/2 黒褐色シルト
R33P3
1 10YR2/3 黒褐色シルト（褐色土粒少含む）
R33P6
1 10YR2/3 黒褐色シルト（パミス・褐色土粒少含む）
R33P7
1 10YR3/2 黒褐色シルト（褐色土粒・パミス少含む）
R33P8
1 10YR3/2 黒褐色シルト（褐色土粒・パミス少含む）
R33P9
1 10YR3/1 黒褐色シルト（粘土塊との混土）
2 10YR3/3 暗褐色シルト
R33P10
1 7.5YR2/2 黒褐色シルト（褐色土含む）
2 10YR3/2 暗褐色シルト（柱痕）
3 7.5YR5/6 明褐色粘土
R33P11
1 10YR3/2 黒褐色シルト（褐色土粒との混土）
2 7.5YR3/4 暗褐色シルト（褐色土との混土）
R33P12
1 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト（黒褐色土含む:柱痕）
2 7.5YR3/3 暗褐色シルト（柱痕）
3 7.5YR4/6 褐色粘土
R33P13
1 7.5YR3/1 黒褐色シルト（柱痕）
2 7.5YR2/2 黒褐色シルト（柱痕）
3 10YR3/4 暗褐色シルト
Q32P1
1 10YR2/2 黒褐色シルト
2 10YR6/4 にぶい黄橙色粘土
Q32P2
1 7.5YR3/2 黒褐色シルト
2 10YR2/3 黒褐色シルト
Q32P3
1 7.5YR2/2 黒褐色シルト
Q32P4
1 7.5YR2/1 黒色シルト
2 7.5YR3/2 黒褐色シルト
3 7.5YR5/6 明褐色粘土
Q32P5
1 7.5YR4/4 褐色粘土
R32P1
1 10YR3/3 暗褐色シルト（柱痕）
2 10YR2/2 黒褐色シルト
3 7.5YR4/6 褐色粘土
4 7.5YR3/2 黒褐色シルト

図59　ピットA群（2）

と考えられる。検出面の標高はＬ　上面で182.00ｍ前後を測り，現状の地形は僅かに南東方向に傾斜している。Ｙ33Ｐ３は10号建物跡Ｐ６と重複し，建物跡が新しい。またＹ33Ｐ４～Ｐ８・Ｐ10，Ｚ33Ｐ１以外の16個は位置的に10号建物跡と重複関係にある。各ピット間の切り合い関係を整理すれば，W33Ｐ３→W33Ｐ２，Ｙ33Ｐ６→Ｙ33Ｐ５となる。

平面プランは隅丸方形～隅丸長方形を基調とし，平面規模は長辺20～36　の範囲に収まる。深さについては底面の標高値が181.75ｍ以上は９個，181.66ｍ～181.74ｍは８個，181.65ｍ以下は７個となるが，いずれも位置的なまとまりは看取できない。深さを有する７個の中でもＹ34Ｐ１，Ｘ33Ｐ１・Ｐ２，Ｙ33Ｐ10，Ｚ33Ｐ１の５個は，位置関係から互いの結び付きは否定されるものの，柱痕が確認され，掘形の規模もやや大きく，造りもしっかりしている。柱痕は８個のピットにおいて確認された。柱痕幅は８～14　を測る。

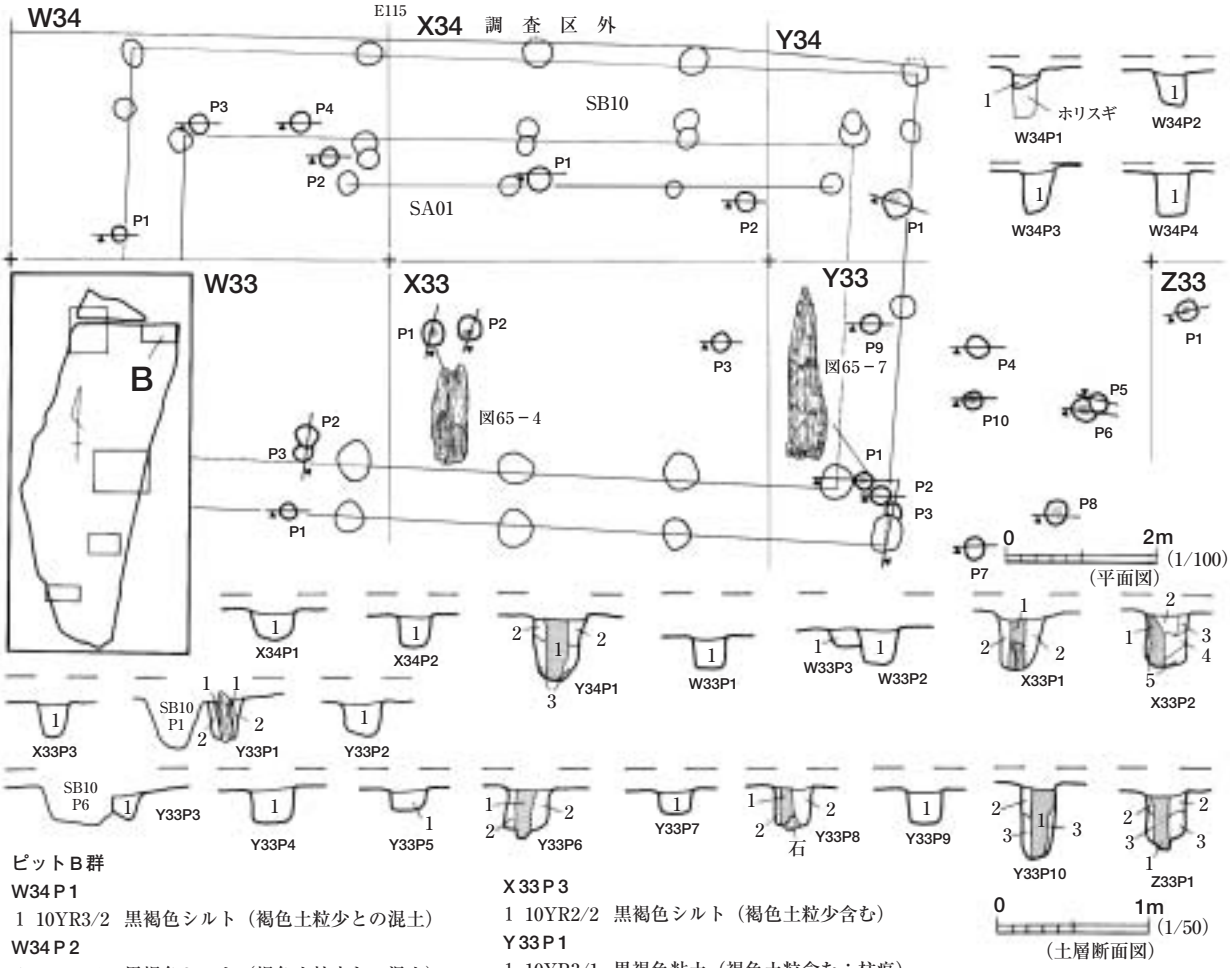
遺物はＸ33Ｐ１，Ｙ33Ｐ１から柱材が，Ｙ33Ｐ８底面から石製礎盤が検出されている。図65－４は柱材である。遺存状態は悪いが，現存の形状から角柱であることは確認できる。樹種同定の結果，材質はモクレン属であり，二方柾に木取りされている。図65－７も柱材であり，断面から角柱であることが確認できる。現状で最大幅は8.9　を測り，木取りは二方柾である。工具痕は遺存していない。Ｙ33Ｐ８における石製礎盤は15　四方の自然礫であり，平坦な面を上に向けていた。

本群のピットは平面プランや平面規模がほぼ共通する。底面の標高値にはバラツキがあるが，値の近似するピット間の位置に相関関係は認め難い。検出した柱材はいずれも角柱であり，２号建物跡やピットＡ群から検出したものと同様である。（横須賀）

ピットＣ群（図61・62，表5）

調査区中央東部，Ｓ22・23，Ｔ21，Ｕ21・23，Ｖ・W21～23グリッドに位置する24個のピットをＣ群とする。遺構確認面はＬ　上面であるが，本来すべてＬ　が確認面と考えられる。検出面の標高は181.60ｍ前後で一定し，現状の地形はほぼ平坦となっている。Ｕ21Ｐ２は３号建物跡Ｐ19と，Ｕ23Ｐ１は２号建物跡Ｐ２と重複し，いずれも建物跡が新しい。また位置的にＴ21Ｐ１は４号建物跡と，Ｕ21Ｐ１・Ｐ２，Ｖ21Ｐ１・Ｐ２は３号建物跡と，Ｖ22Ｐ１，Ｖ23Ｐ１～Ｐ３，W22Ｐ１・Ｐ２，W23Ｐ１～Ｐ３は２号建物跡と，Ｖ22Ｐ２は２・３号建物跡とそれぞれ重複関係にある。

平面プランは，W22Ｐ１が長楕円形となる以外は隅丸方形～隅丸長方形を基調とする。平面規模はＵ23Ｐ１，Ｖ22Ｐ２，W22Ｐ１の３個が長辺，及び長径50～65　とやや大きく，Ｓ23Ｐ１・Ｐ２，Ｓ22Ｐ１，Ｖ22Ｐ１の４個が長辺20　以下と小さくなり，他の17個は長辺20～40　の幅に収まる。底面の標高値はほとんどが181.40ｍ～181.50ｍの範囲に収まるが，Ｔ21Ｐ１，Ｕ21Ｐ１，Ｖ20Ｐ２，Ｖ22Ｐ２，W21Ｐ１の５個は181.30ｍ～181.35ｍと低くなる。柱痕は４個のピットから確認され，柱痕幅は10～14　を測る。本群のピットから遺物は出土していない。本群のピットは建物跡と重複，近接するものが多い。位置的に建物跡に伴うピットから除外したが，規模や深さが近似するものについては建物跡との関連を考慮する必要があるかもしれない。（横須賀）



※水糸レベルはすべて182.10m

図面作成・写真撮影方向

ピットＢ群

W34Ｐ1
1 10YR3/2 黒褐色シルト（褐色土粒少との混土）

W34Ｐ2
1 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土粒少との混土）

W34Ｐ3
1 10YR3/2 黒褐色シルト（褐色土塊多との混土）

W34Ｐ4
1 10YR3/2 黒褐色シルト（黄褐色土塊との混土）

Ｘ34Ｐ1
1 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土粒多との混土）

Ｘ34Ｐ2
1 10YR2/2 黒褐色シルト（炭化物含む混土）

Ｙ34Ｐ1
1 10YR3/2 黒褐色シルト（褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土粒多との混土）
3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（黒褐色土との混土）

W33Ｐ1
1 10YR3/2 黒褐色シルト（褐色土塊との混土）

W34Ｐ2
1 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土との混土）

W33Ｐ3
1 10YR3/2 黒褐色シルト（炭化物含む混土）

Ｘ33Ｐ1
1 10YR3/2 黒褐色シルト（褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR3/2 黒褐色シルト（灰白色土との混土）

Ｘ33Ｐ2
1 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土塊含む：柱痕）
2 10YR4/4 褐色シルト（灰白色土との混土）
3 10YR3/2 黒褐色シルト（灰白色土との混土）
4 10YR3/2 黒褐色シルト（褐色土塊多との混土）
5 10YR5/6 黄褐色粘土（黒褐色土との混土）

Ｘ33Ｐ3
1 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土粒少含む）

Ｙ33Ｐ1
1 10YR3/1 黒褐色粘土（褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR4/4 褐色粘土（黒褐色土少との混土）

Ｙ33Ｐ2
1 10YR3/3 暗褐色シルト（黒褐色土少との混土）

Ｙ33Ｐ3
1 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土粒少含む）

Ｙ33Ｐ4
1 10YR3/2 黒褐色シルト（炭化物含む混土）

Ｙ33Ｐ5
1 10YR3/2 黒褐色シルト（褐色土塊との混土）

Ｙ33Ｐ6
1 10YR2/1 黒褐色シルト（褐色土粒少含む：柱痕）
2 10YR3/3 暗褐色シルト（褐色土との混土）

Ｙ33Ｐ7
1 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土粒多含む）

Ｙ33Ｐ8
1 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR3/3 暗褐色シルト（褐色土粒との混土）

Ｙ33Ｐ9
1 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土粒多含む）

Ｙ33Ｐ10
1 10YR2/2 黒褐色シルト（柱痕）
2 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土粒少含む）
3 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土塊多との混土）

Ｚ33Ｐ1
1 10YR3/2 黒褐色シルト（褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR3/2 黒褐色シルト（褐色土塊多との混土）
3 10YR3/2 黒褐色シルト（褐色土塊多との混土）

図60　ピットB群

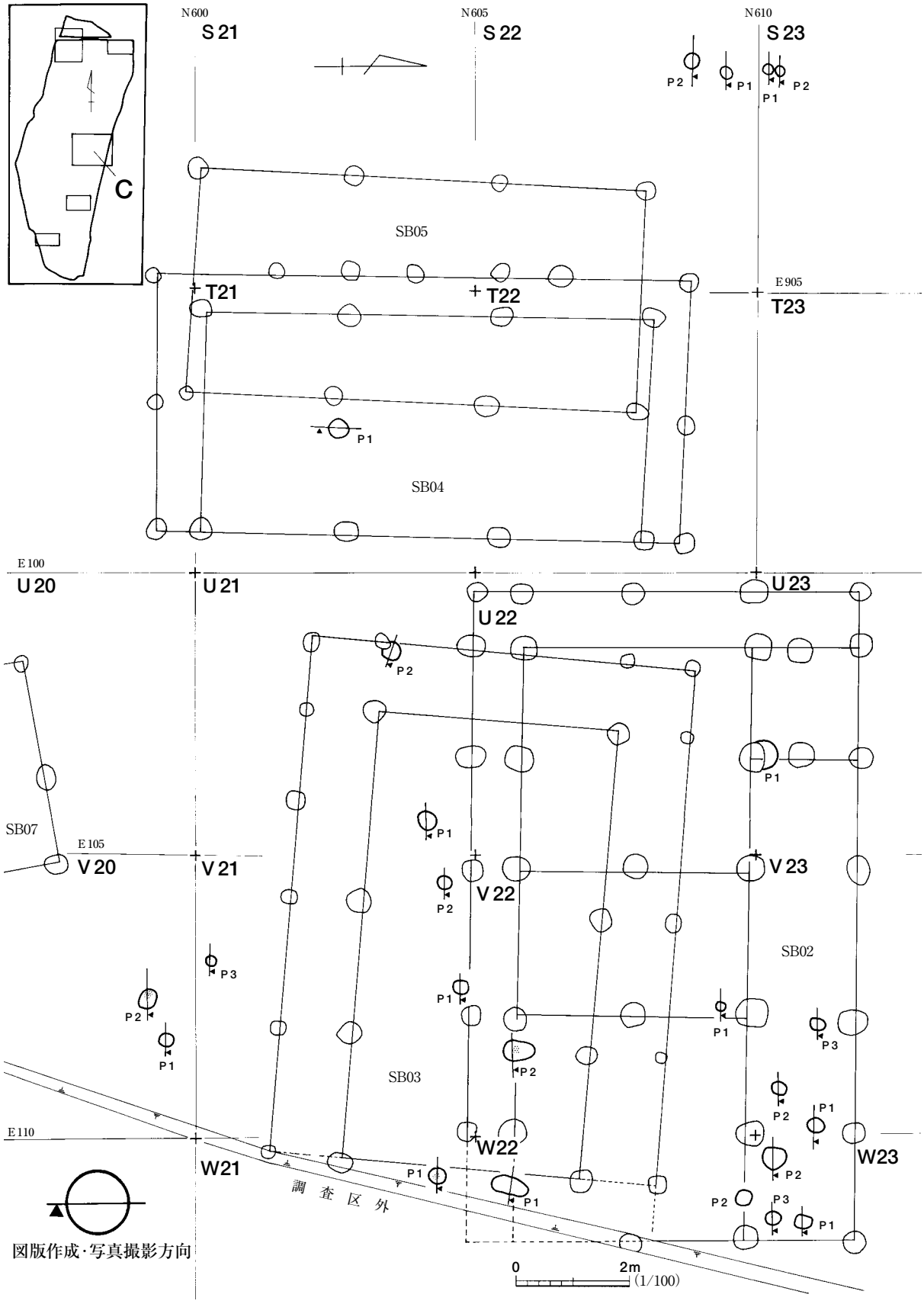
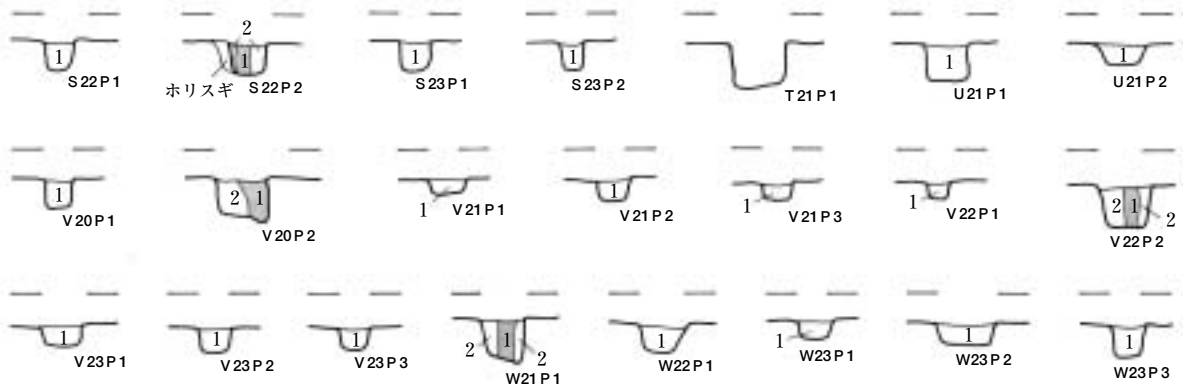

N600
S 21
N605
S 22
N610
S 23
C
SB05
T21
T22
E 905
T23
SB04
E 100
U 20
U 21
U 22
U 23
SB07
E 105
V 20
V 21
V 22
V 23
SB02
SB03
E 110
W21
W22
W23
調 査 区 外
図版作成･写真撮影方向
0
2m
(1/100)

図61　ピットC群（１）



ピットＣ群
Ｓ22Ｐ1
1 10YR3/1 黒褐色シルト（灰白色土塊との混土）
Ｓ22Ｐ2
1 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土塊含む：柱痕）
2 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土との混土）
Ｓ23Ｐ1
1 10YR2/1 黒色シルト（褐色土粒少含む）
Ｓ23Ｐ2
1 10YR3/1 黒褐色シルト
Ｕ21Ｐ1
1 2.5Y3/1 黄灰色粘土（灰白色土塊との混土）
Ｕ21Ｐ2
1 2.5Y4/1 黄灰色粘土（黒褐色土との混土）
Ｖ20Ｐ1
1 10YR3/2 黒褐色シルト（灰白色土塊との混土）
Ｖ20Ｐ2
1 10YR2/2 黒褐色シルト（灰白色土含む：柱痕）
2 10YR4/4 褐色粘土（黒褐色土との混土）
Ｖ21Ｐ1
1 7.5YR2/4 暗褐色シルト
Ｖ21Ｐ2
1 7.5YR3/3 褐色シルト（黒褐色土との混土）
Ｖ21Ｐ3
1 7.5YR2/3 黒褐色シルト（褐色土粒多含む）
Ｖ22Ｐ1
1 10YR2/3 黒褐色シルト（褐色土粒との混土）
Ｖ22Ｐ2
1 10YR3/1 黒褐色粘土（炭化物含む：柱痕）
2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土（褐色土との混土）
Ｖ23Ｐ1
1 7.5YR4/4 褐色砂（小礫含む）
Ｖ23Ｐ2
1 10YR3/1 黒褐色シルト（炭化物含む混土）
Ｖ23Ｐ3
1 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土粒との混土）
Ｗ21Ｐ1
1 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR2/2 黒褐色シルト（褐色土塊との混土）
Ｗ22Ｐ1
1 2.5Y3/1 黒褐色シルト（灰白色土塊との混土）
Ｗ23Ｐ1
1 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土粒多含む）
Ｗ23Ｐ2
1 10YR3/1 黒褐色シルト（灰白色土塊との混土）
Ｗ23Ｐ3
1 10YR3/2 黒褐色シルト（炭化物含む混土）

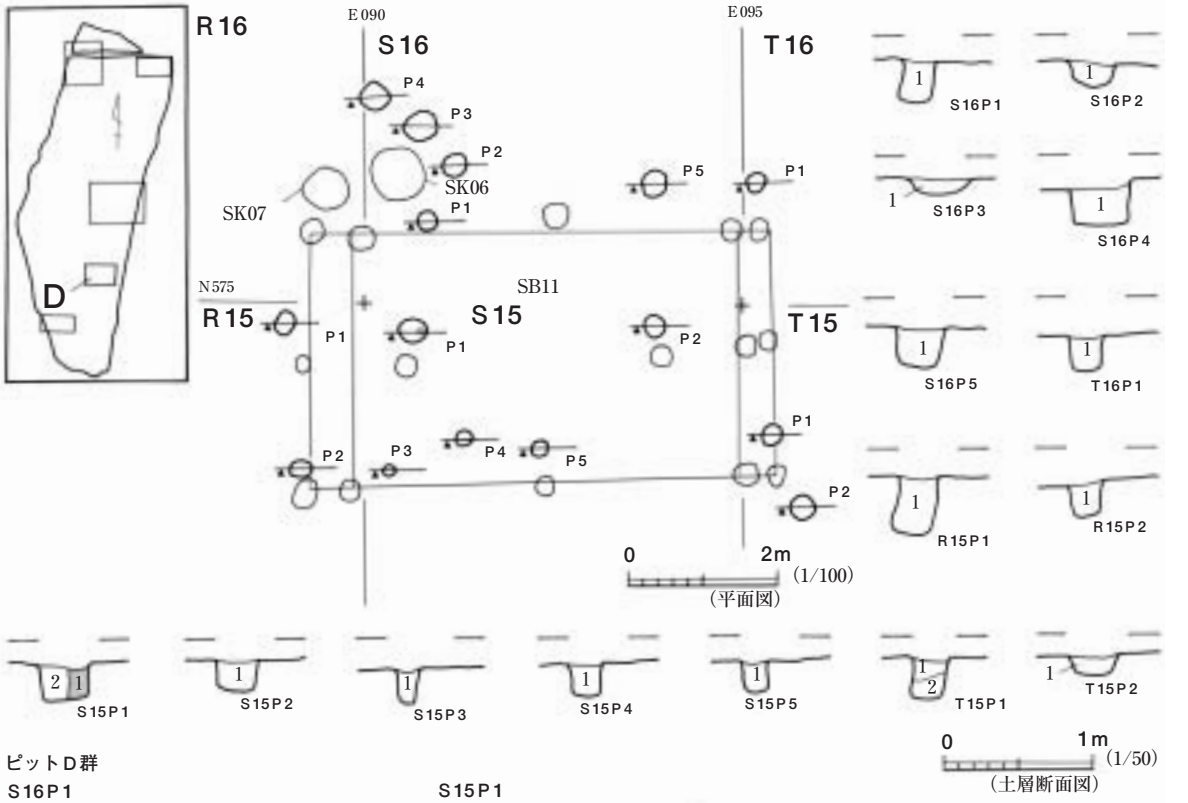
0　1m
(1/50)
※水糸レベルはすべて181.80m

図62　ピットＣ群（２）

ピットＤ群（図63，表5，図版44）

調査区の南西部，Ｓ・Ｔ16，Ｒ～Ｔ15グリッドに位置する15個のピットをＤ群とする。遺構確認面はＬ　上面である。検出面の標高は181.70m前後を測り，周辺の地形はほぼ平坦となる。他の遺構や各ピット間の切り合い関係は認められないが，位置的にＲ15Ｐ２，Ｓ15Ｐ１～Ｐ５，Ｔ15Ｐ１の７個は11号建物跡と重複関係にある。

平面プランは隅丸方形～隅丸長方形を基調とする。平面規模はＳ16Ｐ３・Ｐ４がやや大きく長辺40　以上，Ｓ15Ｐ３・Ｐ５がやや小さく一辺20　以下となり，他の11個は長辺23　～35　の範囲に収まる。底面の標高値はＳ16Ｐ４・Ｐ５，Ｒ15Ｐ１，Ｔ15Ｐ１の４個が低く181.44m以下，Ｓ16Ｐ３，Ｔ15Ｐ２の２個は181.65m以上と高くなり，他の９個は181.46m～181.56mの範囲に収まる。柱痕はＳ15Ｐ１から検出され，柱痕幅は13　を測る。本群のピットから遺物は出土していない。



※水糸レベルはすべて181.90m

図面作成・写真撮影方向

ピットＤ群

Ｓ16Ｐ1
1 10YR4/2 褐灰色砂

Ｓ16Ｐ2
1 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土粒含む）

Ｓ16Ｐ3
1 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土粒少含む）

Ｓ16Ｐ4
1 10YR3/1 黒褐色シルト（褐色土粒少含む）

Ｓ16Ｐ5
1 2.5Y3/1 黒褐色シルト（褐色土粒含む）

Ｔ16Ｐ1
1 10YR2/3 暗褐色シルト（褐色土塊含む）

Ｒ15Ｐ1
1 2.5Y3/1 黒褐色シルト（炭化物少含む）

Ｒ15Ｐ2
1 2.5Y3/1 黒褐色シルト（炭化物極少含む）

Ｓ15Ｐ1
1 2.5Y3/1 黒褐色シルト（炭化物少含む：柱痕）
2 2.5Y3/1 黒褐色シルト（炭化物含む混土）

Ｓ15Ｐ2
1 10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色土塊との混土）

Ｓ15Ｐ3
1 2.5Y3/1 黒褐色シルト（酸化鉄分集積）

Ｓ15Ｐ4
1 2.5Y4/1 黄灰色シルト（黄褐色土塊との混土）

Ｓ15Ｐ5
1 10YR3/2 黒褐色シルト（黄褐色土塊との混土）

Ｔ15Ｐ1
1 10YR4/1 褐灰色シルト（黄褐色土塊との混土）
2 10YR4/6 褐色粘土（黒褐色土との混土）

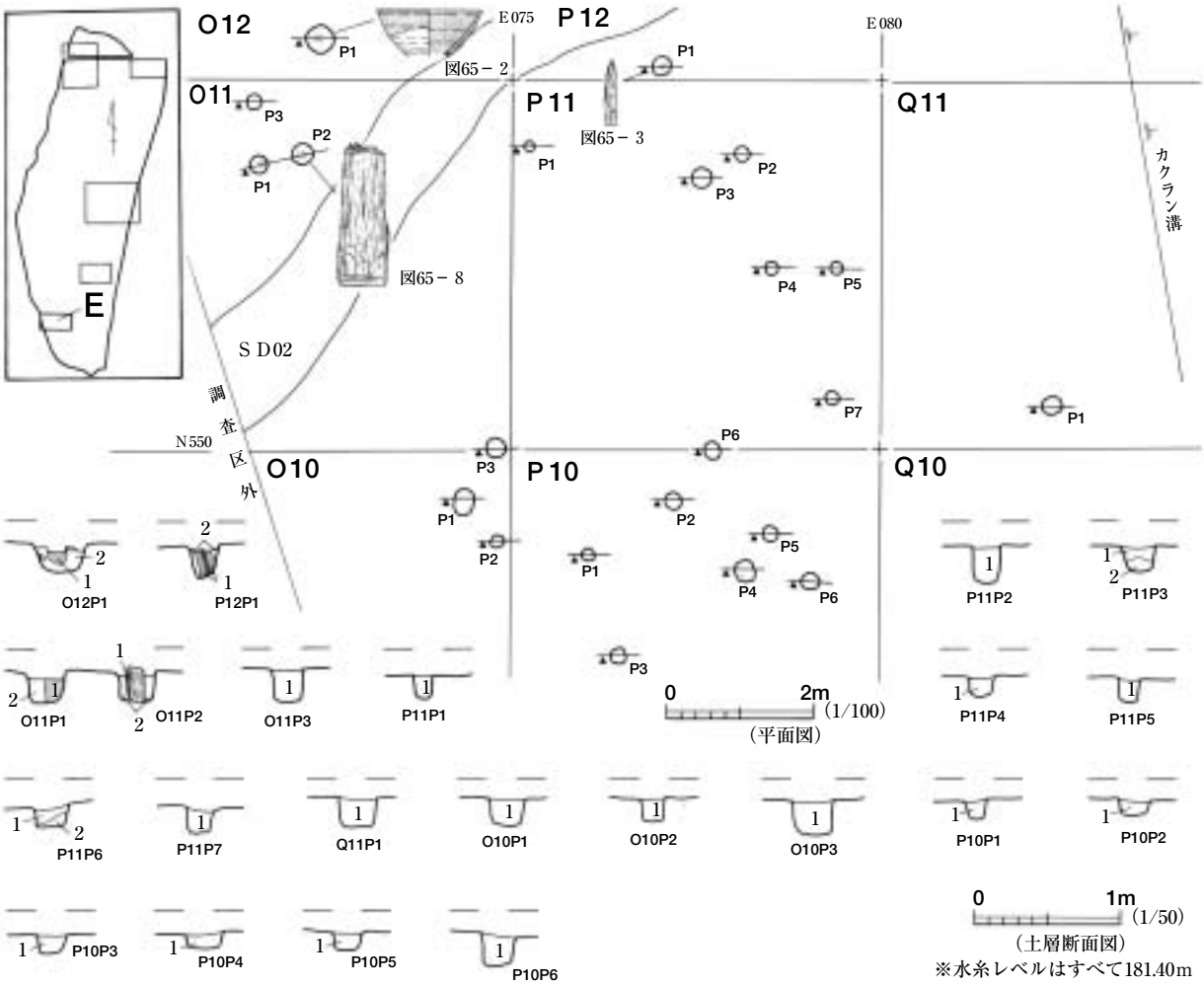
Ｔ15Ｐ2
1 10YR2/1 黒色シルト（黄褐色土塊との混土）

図63　ピットＤ群

本群のピットは狭い範囲にまとまり，11号建物跡と重複，あるいは近接して存在するため，建物跡との関係を考慮する必要がある。特にＳ15Ｐ１・Ｐ２は11号建物跡の棟持柱としたＰ14，Ｐ15と平行する位置にあり，建物跡に伴うピットとしての可能性は残る。（横須賀）

ピットＥ群（図64・65，表5・7・9，図版45・46）

調査区南西部，Ｏ・Ｐ10～12，Ｑ11グリッドに位置する22個のピットをＥ群とする。周辺は近世以降に削平を受けており，遺構確認面はＬ　，検出面の標高は181.25m前後である。範囲内には２号溝跡が東西方向に走り，北・東側は近代の用水路が走る。他の遺構や各ピット間の切り合い関係は認められない。



ピットＥ群

O12P1
1 10YR2/1 黒色粘土 （褐色土粒含む：柱痕）
2 10YR2/1 黒色粘土 （褐色土塊との混土）

P12P1
1 10YR3/1 黒褐色粘土 （褐色土含む：柱痕）
2 10YR4/4 褐色粘土 （黒褐色土少との混土）

O11P1
1 10YR2/2 黒褐色シルト （褐色土含む：柱痕）
2 10YR4/6 褐色シルト （黒褐色土少との混土）

O11P2
1 10YR3/1 黒褐色粘土 （粘性強い）
2 10YR2/1 黒色粘土 （褐色土粒との混土）

O11P3
1 10YR3/2 黒褐色シルト （褐色土との混土）

P11P1
1 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土粒との混土）

P11P2
1 10YR3/2 黒褐色シルト （褐色土粒多含む）

P11P3
1 10YR3/2 黒褐色シルト （褐色土との混土）
2 10YR4/4 褐色シルト （黒褐色土少との混土）

P11P4
1 10YR3/1 黒褐色粘土 （褐色土粒少との混土）

P11P5
1 10YR4/6 褐色シルト （黒褐色土との混土）

P11P6
1 10YR5/8 黄褐色シルト （黒褐色土との混土）
2 10YR2/1 黒色粘土

P11P7
1 10YR4/1 褐灰色粘土 （褐色土粒少含む）

Q11P1
1 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土粒との混土）

O10P1
1 10YR4/4 褐色シルト （黒褐色土との混土）

O10P2
1 10YR3/1 黒褐色シルト （褐色土少との混土）

O10P3
1 10YR4/4 褐色シルト （黒褐色土との混土）

P10P1
1 10YR3/1 黒褐色シルト （炭化物粒含む）

P10P2
1 10YR4/6 褐色シルト （黒褐色土との混土）

P10P3
1 10YR3/2 黒褐色シルト （褐色土粒多含む）

P10P4
1 10YR3/1 黒褐色シルト （灰白色土との混土）

P10P5
1 10YR2/2 黒褐色シルト （褐色土粒少含む）

P10P6
1 10YR4/1 黒褐色シルト （褐色土粒少含む）

図面作成・写真撮影方向

図64　ピットＥ群

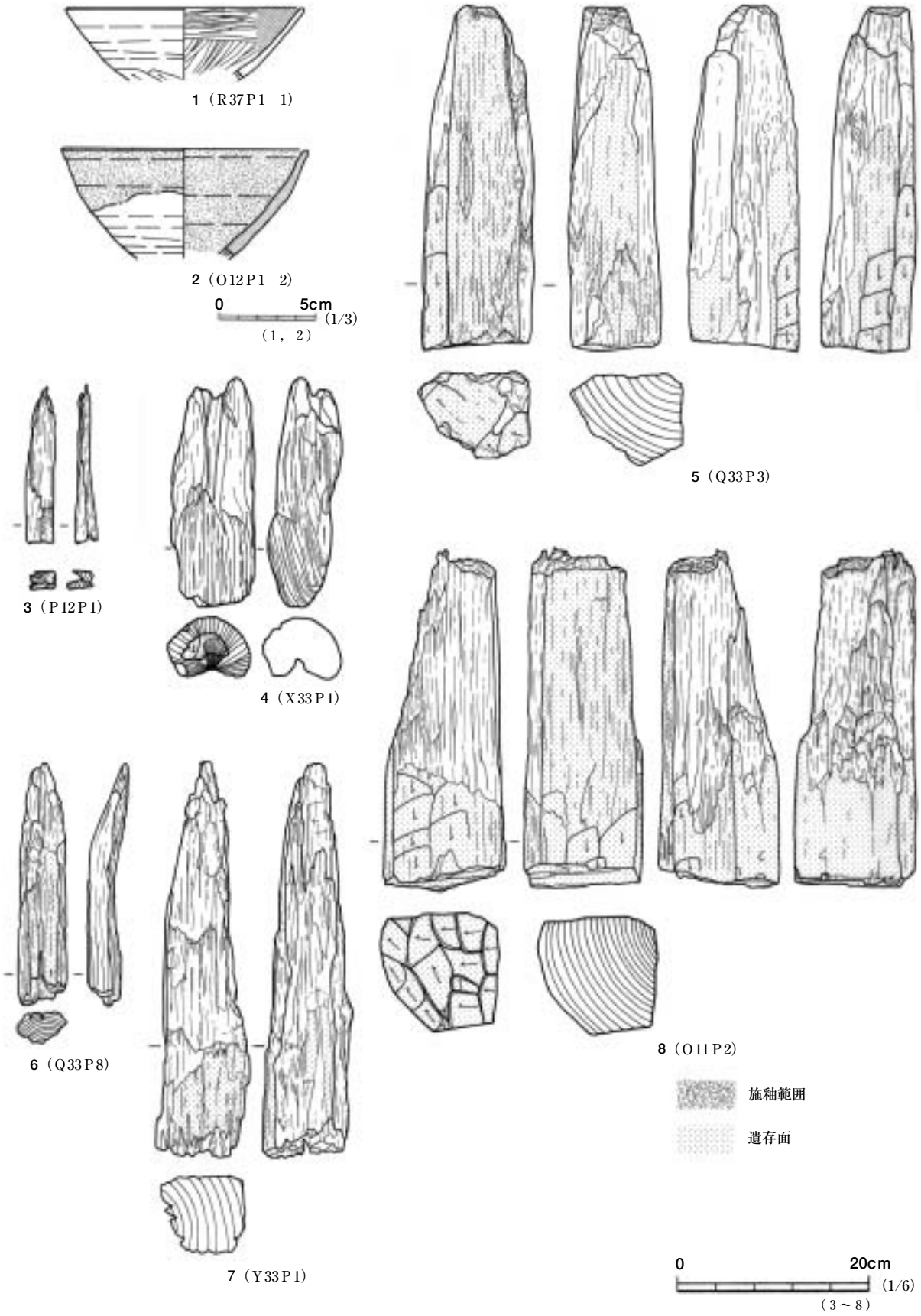


図65　ピット群出土遺物

表5　ピット群底面標高一覧

群	グリッド	ピットNo.	底面標高（m）	切り合い関係	出土遺物
A群	R35	1	181.89		
		2	181.88		
	S34	1	181.66	SB13P 5 →	
	Q34	1	181.70	SK13→	
		2	181.89	SD10→	
		3	181.84		
		4	181.73	Q34P 5 →	
		5	181.78	→Q34P 4	
		6	181.78	SD10→	
		7	181.81		
		8	181.73	SD10→	
	R34	1	181.85		
		2	181.78		
		3	181.79		
		4	181.91		
		5	181.80		
		6	181.96		
		7	181.83		
		8	181.86	SD10→	
	S33	1	181.80		
		2	181.85		
	Q33	1	181.67		
		2	181.74		
		3	181.65		柱材
		4	181.58	SK13→	
		5	181.87		
		6	181.60		
		7	181.76	→Q34P 4	
		8	181.83		柱材
		9	181.95		
	R33	1	181.72	R33P 2 →	
		2	181.91	→R33P 1	
		3	181.68	SD10→	
		4	181.82	SD10→	
		5	181.78		
		6	181.82		
		7	181.83		
		8	181.82		
		9	181.64		
		10	181.66		
		11	181.56		
		12	181.54		
		13	181.70		
	Q32	1	181.60		
		2	181.54	→Q32P 5	
		3	181.52		
		4	181.60		
		5	181.68	Q32P 2 →	
	R32	1	181.47		
		2	181.72		
B群	W34	1	181.90		
		2	181.76		
		3	181.76		
		4	181.74		
	X34	1	181.79		
		2	181.74		
	Y34	1	181.53		
	W33	1	181.65		
		2	181.66	W33P 3 →	
		3	181.78	→W33P 2	
	X33	1	181.60		柱材
		2	181.63		
		3	181.71		
	Y33	1	181.68		柱材
		2	181.72		
		3	181.75	→SB10P 6	
		4	181.75		
		5	181.83	Y33P 6 →	
		6	181.65	→Y33 P 5	
		7	181.81		
		8	181.71		
		9	181.74		
		10	181.50		
	Z33	1	181.56		
C群	S22	1	181.42		
		2	181.41		
	S23	1	181.42		
		2	181.42		
	T21	1	181.31		
	U21	1	181.35		
		2	181.47	→SB03P19	
	U23	1	181.34	→SB02P 2	
	V20	1	181.42		
		2	181.33		
	V21	1	181.50		
		2	181.47		
		3	181.48		
	V22	1	181.49		
		2	181.30		
	V23	1	181.47		
		2	181.43		
		3	181.44		
	W21	1	181.34		
	W22	1	181.42		
		2	181.28		
	W23	1	181.50		
		2	181.46		
		3	181.40		
D群	S16	1	181.47		
		2	181.46		
		3	181.65		
		4	181.43		
		5	181.44		
	T16	1	181.40		
	R15	1	181.34		
		2	181.46		
	S15	1	181.50		
		2	181.56		
		3	181.46		
		4	181.51		
		5	181.53		
	T15	1	181.48		
		2	181.67		
E群	O12	1	181.06		灰釉天目茶碗
	P12	1	181.03		柱材
	O11	1	181.05		
		2	181.04		柱材
		3	181.04		
	P11	1	181.08		
		2	180.99		
		3	181.06		
		4	181.08		
		5	181.04		
		6	181.08		
		7	181.04		
	Q11	1	181.08		
	O10	1	181.09		
		2	181.12		
		3	181.03		
	P10	1	181.14		
		2	181.17		
		3	181.12		
		4	181.15		
		5	181.14		
		6	181.03		

平面プランは隅丸方形～隅丸長方形を基調とする。平面規模はＯ12Ｐ１，Ｏ10Ｐ１の２個が長辺36　と大きく，Ｐ11Ｐ１・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ７，Ｐ10Ｐ１の５個は一辺14～19　と小さくなり，他の15個は長辺20～28　の範囲に収まる。底面の標高値は180.99m～181.17mに収まり，大きなバラツキは認められない。柱痕は４個のピットにおいて確認され，このうちＰ12Ｐ１，Ｏ11Ｐ２には柱材が遺存していた。柱痕幅は12～14　を測る。

遺物は柱材の他，陶器片が１片出土している。図65－２はＯ12Ｐ１の掘形埋土より出土した灰釉天目茶椀片である。口縁部から体部にかけて，全体の約20％程が遺存している。復元口径は12.8　となり，現存の器高は5.7　を測る。体部はやや直線的に開き，口縁部の屈曲は弱い。器壁は比較的薄くつくられる。内外面には灰釉が施され，内面は全面に，外面は中位まで及ぶ。外面下半は露胎となる。施釉方法は外面が「ツケガケ」，内面は「ナガシガケ」であろう。図65－３は柱材である。遺存状態は悪く，現状において角柱，丸柱の区別は困難である。図65－８も柱材である。遺存状態は非常に良好であり，角柱と確認できる。現状で最大幅は12.7　を測る。樹種はスギ，木取りは四方柾である。辺材部分を利用しており，側面四面のうち１面は外辺をそのまま用いている。木口部分には5.4　超幅の工具痕が確認され，切断時の痕跡と考えられる。また側面の一部には単位幅4.2　の釿痕が残る。

本ピット群は，周囲に同時期と考えられる建物跡を伴わないが，一部のピットは調査区外へと繋がる可能性がある。ピットの形態や規模，検出した柱材から他のピット群と併行する時期と考えて大過ない。Ｏ12Ｐ１より出土した灰釉天目茶碗は器形の特徴から瀬戸・美濃系大窯期前半のものと考えられ，堀とその内外に展開する館跡の年代を示す資料となりうる。（横須賀）

第６節　遺物包含層（図66～68，図版57・59）

今回の調査では，調査区北西部の狭い範囲において黒褐色土の堆積が確認され，層中には比較的多量の土師器，須恵器が含まれていた。これを遺物包含層と認識し本節で報告する。

調査区の北西部，Ｐ28～32，Ｑ29～32の範囲において確認された平安時代（９世紀後半代）の遺物包含層である。包含層はこの狭い範囲にのみ認められた黒褐色土層であり，基本土層Ｌ　としている。このＬ　はＰ31グリッド付近が最も厚く，北，東，南のそれぞれの方向に向かって薄くなり，消失している。調査区内の現状における地形は平坦，あるいは緩やかに南東方向に傾斜しているが，本来はやや起伏があり，僅かに窪んだ狭い範囲にＬ　が厚く堆積したものと考えられる。包含層の認められた範囲の北～北東方向には出土した遺物と時期的にほぼ併行する掘立柱建物跡が３棟存在しており，該期の集落は主に調査区北西外に主体があったと推測され，包含層は主にこの方向から形成されたものと考えられる。図66右はグリッドと層位を表記して取り上げた遺物の点数を数字で示したものであり，図66左のＬ　堆積範囲と出土遺物点数の多いグリッドがほぼ対応していることが読み取れる。なおテフラ同定分析の結果，直下のＬ　は10世紀以降に形成された層（第１章第２

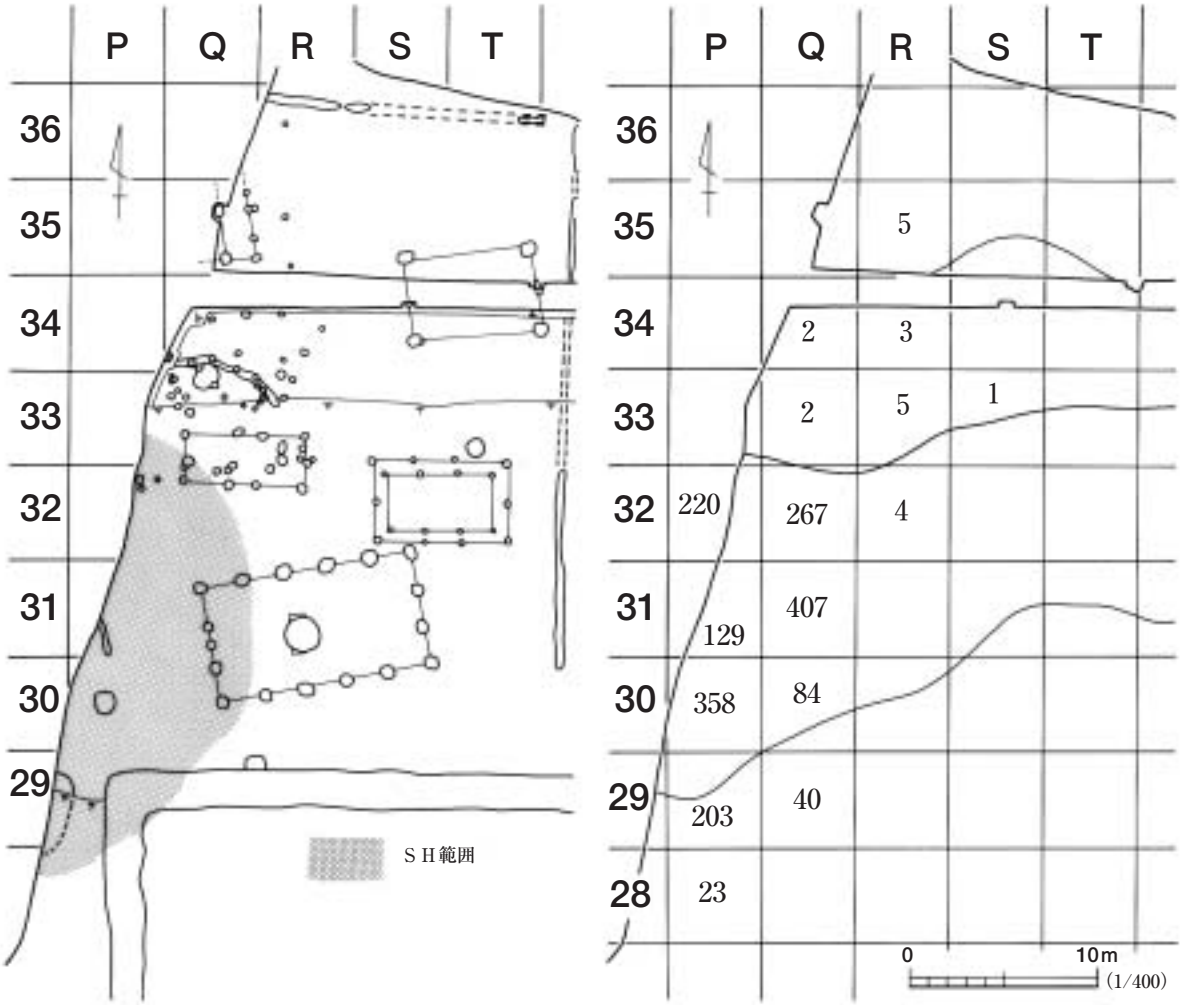


図66　遺物包含層範囲，出土遺物分布図

節参照）との見解が得られており，本層は再堆積層と考えられる。

出土した遺物は，極僅かに石製品や鉄製品が認められるものの，ほぼ土師器，須恵器によって占められている。土器類の総点数を示せば，土師器1,543点，須恵器210点を数える。ほとんどが細片であり図示しえた35点について図67・68に掲載した。図67－１～17は土師器である。１・２はロクロ成形された杯の底部片である。１は底部及び外面底部周辺の再調整は認められず，底部は回転糸切り痕が観察される。底部は離し糸切りされ僅かだが突出している。２は外面底部周辺を手持ちケズリ，内面はミガキの後黒色処理している。３～12の10点は高台杯である。３・５～10は杯底部が遺存し，７点とも内面はミガキの後黒色処理されている。すべて外面，高台部内面にはロクロナデが観察され，高台部はすべて貼り付け高台である。高台径により３・４は小型（復元径5.2～6.4　），５～10は中型（復元径7.8～9.2　），11は大型（復元径10.6　）に分けられ，また器形からは高台部端の形状により，端部に面をつくり踏ん張りを持たせるもの（６～10），端部に面を持たないもの(３～５，11）の２種が認められる。13はロクロ成形された甕の口縁部である。口縁部はやや強く外反し，口唇部に面を持つ。14は堝である。体部は直線的に外傾し，わずかに口縁部が外反して面を持つ口唇部へと至る。内外面ともロクロナデが観察される。15・16は甕の底部である。外面にはケズ

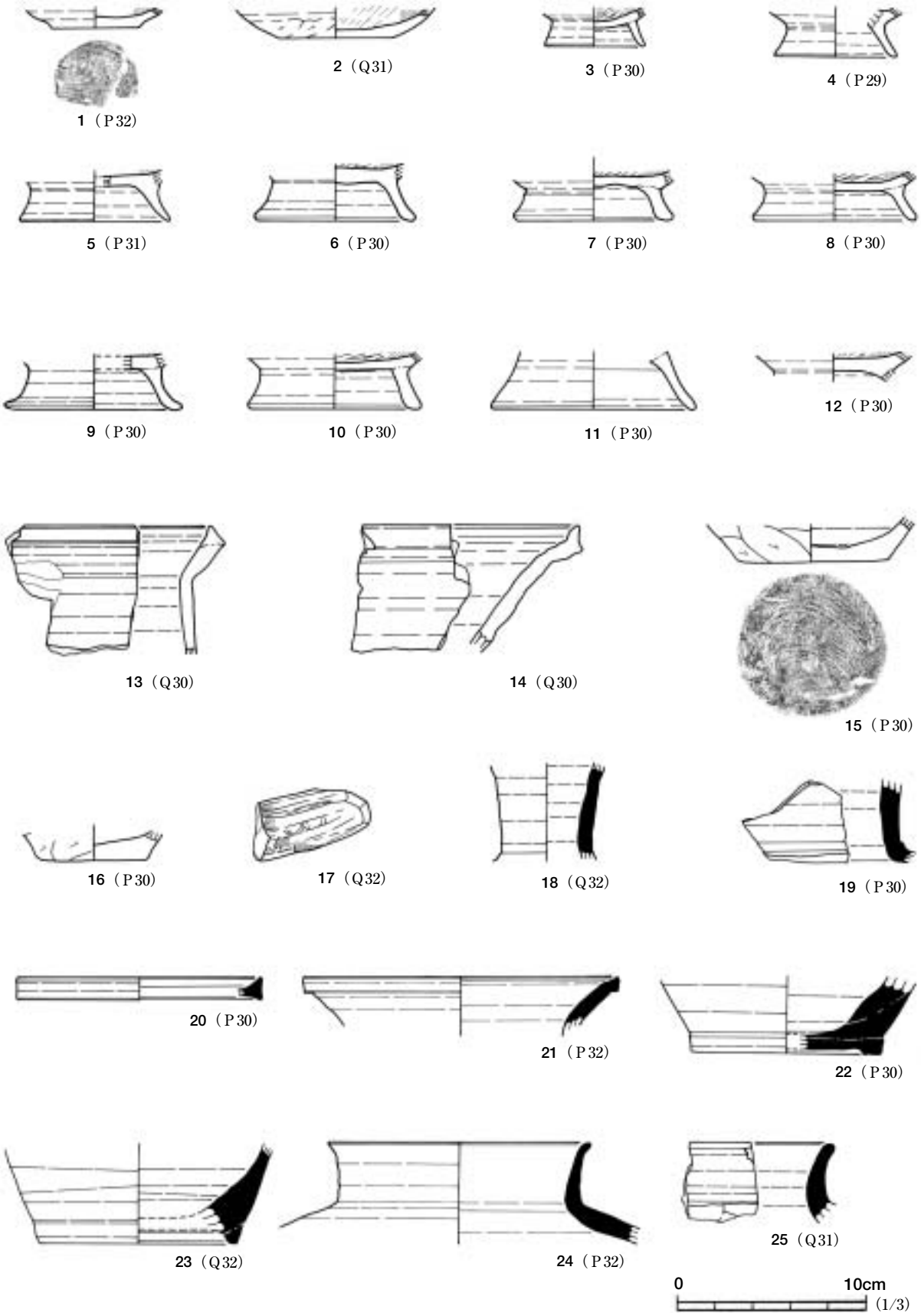


図67　遺物包含層出土遺物（１）

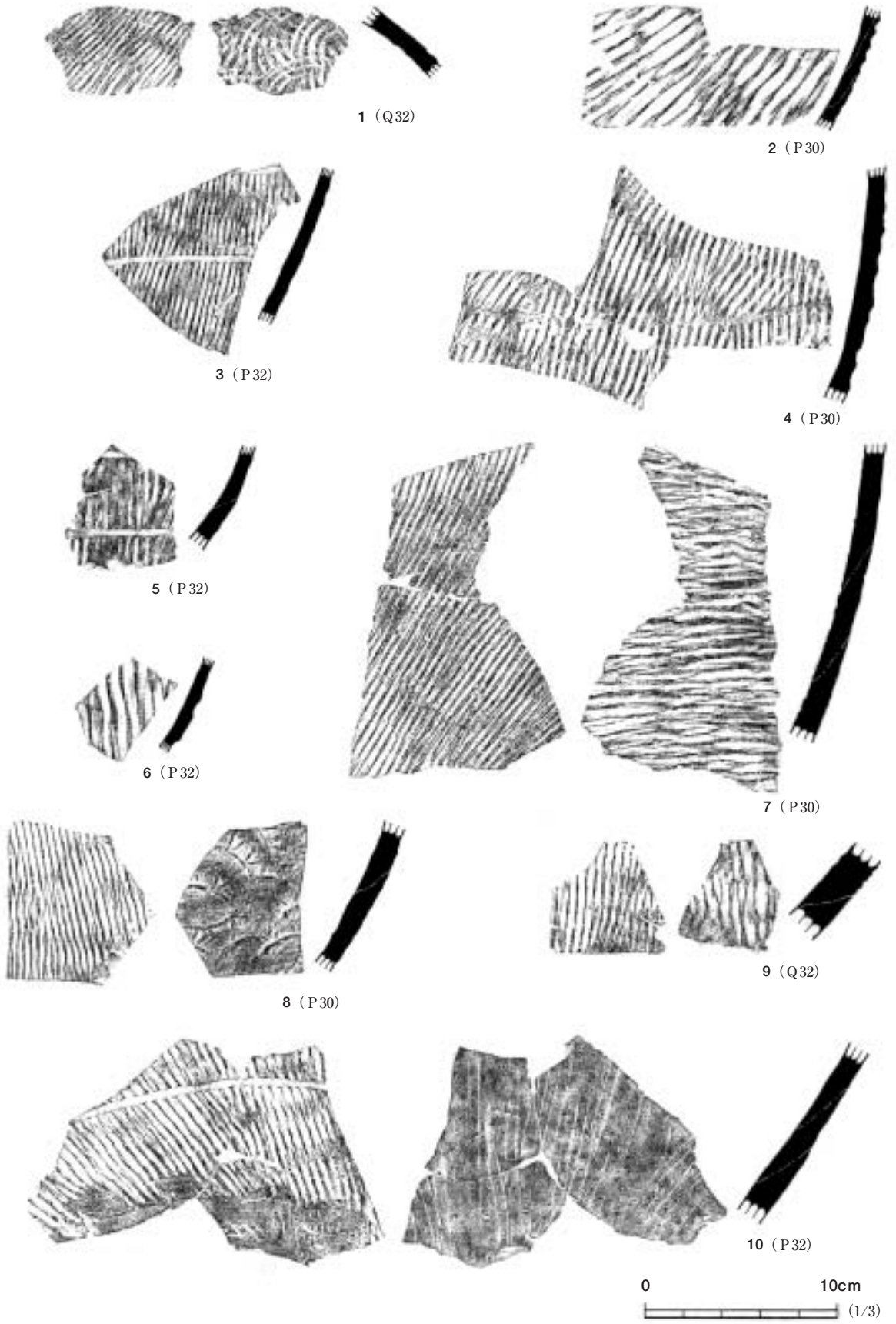


図68　遺物包含層出土遺物（２）

リが認められる。15の底部には回転糸切り痕が残る。17は甑の把手部分である。全面にユビナデ，ユビオサエが観察される。

図67－18～25は須恵器の瓶類，甕である。18・19は長頸瓶の頸部であり，18は復元頸部径4.7を測る。２点とも肩部との境にリング状凸帯を巡らせている。19は胎土が精良である。20は長径瓶の口縁部であり，復元径は12.8　を測る。受け口状の口縁部であり，ラッパ状に開くものであろう。21は復元径16.4　を測り，広口瓶の口縁部となる。頸部からラッパ状に開き口縁部に至る器形であり，受け口は曲線的である。22・23は瓶類の底部であり，復元径はそれぞれ9.8　，10.2　を測る。いずれも高台部の断面形は逆台形状となる。24・25は甕の口縁部と判断した。いずれも口縁部は短く外反し，先端を比較的鋭くつくる。24は復元口径13.6　を測る。

図68－１～10は須恵器甕の破片であり，すべて外面にはタタキメが残る。３～５・10は外面に横位の螺状沈線文，７にはカキメが認められる。１～３・７～９には内面に当具痕が観察され，１は同心円状，８は菊花状，２・３・７・９は平行の痕跡が残る。２・３はさらに当具痕をナデ消している。10は底部周縁の破片であり，内面のヘラナデが明瞭に確認できる。

この他は細片であり器種や器形を特定できるものは少ないが，土師器杯は内面黒色処理の確認されるものがほとんどを占め，また高台杯が比較的多いことも指摘できる。須恵器は杯がほとんど認められず，瓶類，壺，甕などが主であった。

本包含層は約200　程の狭い範囲に限定される。出土した遺物の年代は，須恵器は大戸窯編年でＭＨ19～ＫＡ112併行期に比定され，土師器杯の内容からも９世紀後半代に収まると判断している。よって今回調査された３棟の掘立柱建物跡を含めて本包含層の北～北西の位置に９世紀後半代の集落が営まれており，その遺物が黒褐色土とともに地形的にやや窪んだこの範囲に流れ込んだものと推測される。（横須賀）

第７節　遺構外出土遺物（図69，図版58）

今回の調査において，調査前に表採したもの，表土除去作業中に表土中から出土したもの，用水路などのカクランから出土したものを遺構外出土遺物として報告する。遺物は原則的に出土位置，及び層位を記録して取り上げた。

遺構外出土として取り上げた遺物は，土師器143点，須恵器52点，陶磁器12点，石器２点，銭貨３点を数える。出土位置としては，Ｑ18グリッド周辺，及びＮ・Ｏ14グリッドの用水路跡から比較的多くの遺物が出土している。図示しえたものは土師器２点，須恵器７点，陶器１点，銭貨３点である。

１はロクロ成形された土師器の杯である。器面は著しく摩耗しており，内外面の調整及び黒色処理は観察しえない。２は土師器高台杯である。杯底部と高台部が遺存しており，高台径は8.4　を測る。高台部は高く直線的に開き，端部には面を有している。貼り付け高台であり，杯底部には回転

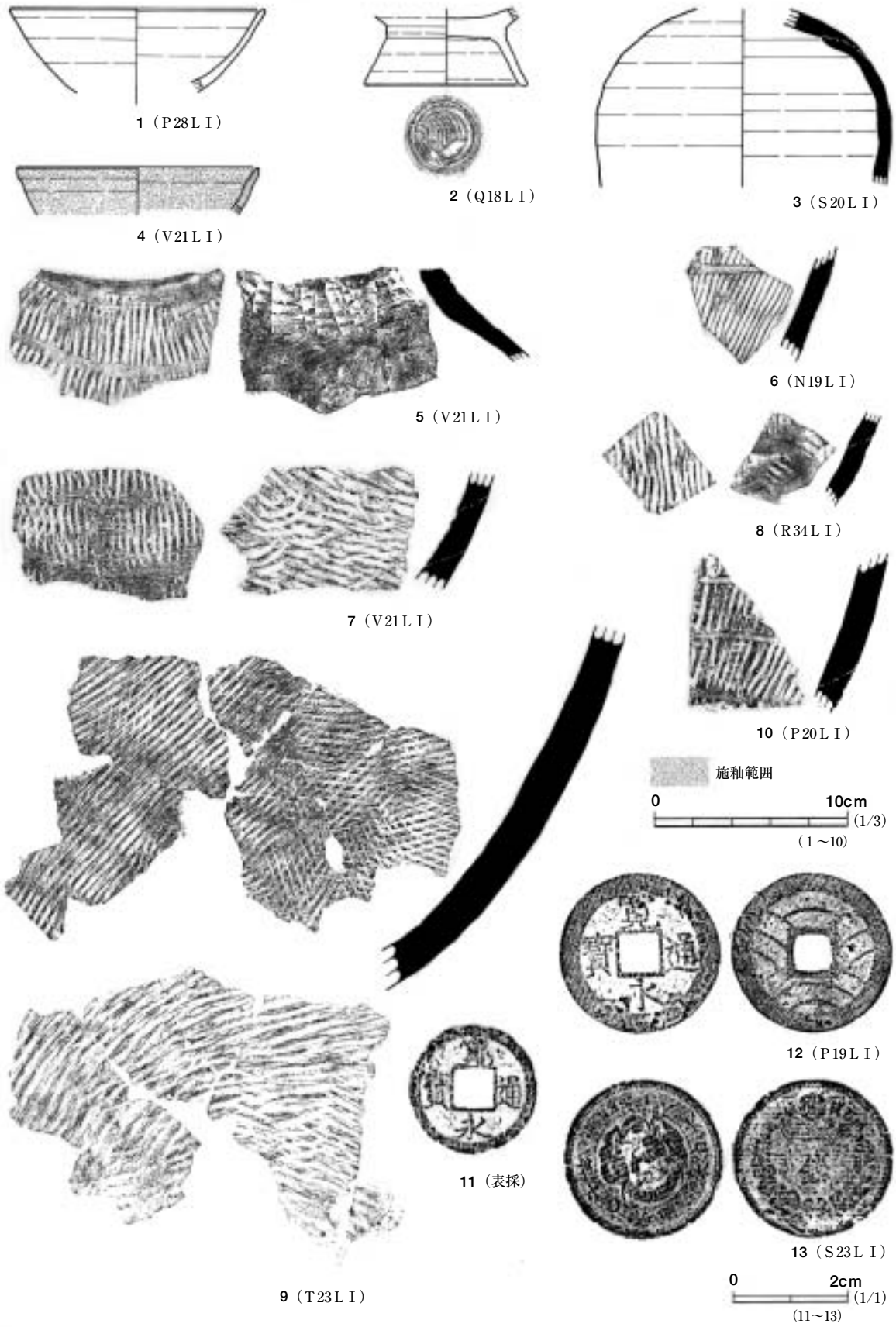

1（P28LⅠ）
2（Q18LⅠ）
3（S20LⅠ）
4（V21LⅠ）
5（V21LⅠ）
6（N19LⅠ）
7（V21LⅠ）
8（R34LⅠ）
10（P20LⅠ）
施釉範囲
0
10cm
(1/3)
（1～10）
12（P19LⅠ）
11（表採）
13（S23LⅠ）
9（T23LⅠ）
0
2cm
(1/1)
(11～13)

図69　遺構外出土遺物

糸切り痕がそのまま残る。杯部内面の調整は観察しえない。

３・５～10は須恵器を示した。３は須恵器長頸瓶の肩部片である。頸部は２段接合となり，頸部径は５　程となろう。５は須恵器甕の肩部片である。外面はタタキメと横位の螺状沈線文，内面の頸部周辺には平行当具痕が残る。６～８・10は須恵器甕の体部片である。４点とも外面にはタタキメが残り，６・10は横位に螺状沈線文，７は横位にカキメを施す。７の内面には平行→同心円状当具痕，８の内面には菊花状の当具痕が観察される。９は須恵器甕の底部周辺の破片であり，外面は平行タタキメと一部に格子状タタキメ，内面は平行の当具痕が観察される。

４は陶器である。表土中からの出土だが，３号建物跡の範囲中に当たる。口縁部の破片であり，復元口径は12.6　を測る。内外面には鉄釉が施される。口縁部のくびれは弱く，器壁は薄くつくられている。器形の特徴などから，瀬戸・美濃系大窯期のものと考えている。

11～13は銭貨を図示した。11，12は「寛永通寶」である。11は銅一文銭であり，背面は無文である。字体から元禄10年（1697年）以降，天明元年（1781年）まで鋳造された新寛永と判断される。12は真鍮四文銭であり，背面には11波の波紋が描かれている。真鍮四文銭は明和５年（1768年）以降，安政６年（1859年）まで鋳造が行われている。13は明治17年の記銘の入った一銭銅貨である。

（横須賀）

表6　土器観察表（1）

（）…復元値，〔〕…現存値，単位；cm

挿図 No.	種別 器種	位置 層位	遺存部位 遺存度	計測値 口径	計測値 底径	計測値 器高	調整 内面	調整 外面	備考
13－1	土師器 杯	SB01 P11　1	底部 10%	－	(4.7)	〔2.5〕	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ・回転ケズリ 黒色処理	底部ケズリ再調整
13－2	土師器 杯	SB01 P4　1	30%	(13.5)	(4.5)	4.1	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 手持ちケズリ	
13－3	土師器 杯	SB01 P2　1	85%	14.1	5.0	4.5	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 手持ちケズリ	底部ケズリ再調整
13－4	土師器 杯	SB01 P12　1	底部 10%	－	(4.9)	〔1.7〕	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 手持ちケズリ	底部ケズリ再調整
13－5	土師器 高台杯	SB01 P2　2	杯部底部 20%	－	－	〔2.3〕	ミガキ・黒色処理 ロクロナデ（高台）	ロクロナデ	底部回転糸切り 高台貼り付け
13－6	土師器 高台杯	SB01 P17　1	85%	14.0	高台径 8.2	6.3	ミガキ・黒色処理 ロクロナデ（高台）	ロクロナデ	高台貼り付け
13－7	須恵器 甕？	SB01 P3　2	頸～肩部 5%	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	
13－8	須恵器 瓶類	SB01 P4　1	頸～肩部 5%	頸部径 (7.8)	－	－	ロクロナデ ユビナデ	ロクロナデ	
13－9	須恵器 瓶類	SB01 P5　1	底部付近 3%	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ 回転ケズリ	
13－10	須恵器 甕	SB01 P1　2	体部片 1%	－	－	－	当具痕（菊花）	タタキ	
13－11	須恵器 甕	SB01 P7　1	体部片 1%	－	－	－	ヘラナデ	タタキ	螺状沈線文
31－1	須恵器 甕	SB08 P12　1	体部片 1%	－	－	－	－	タタキ	
36－1	土師器 杯	SB10 P15　2	底部 40%	－	4.0	〔1.6〕	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 手持ちケズリ	底部回転糸切り
39－1	土師器 杯	SB12 P3　2	口縁部 5%	(13.0)	－	〔3.2〕	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ	
39－2	須恵器 長頸瓶	SB12 P4　2	口縁部 5%	(12.9)	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	
41－1	須恵器 甕	SB13 P1　2	体部片 1%	－	－	－	ヘラナデ	タタキ	螺状沈線文
42－1	土師器 杯	SB14 P6　2	底部 20%	－	(4.6)	〔1.7〕	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 手持ちケズリ	底部回転糸切り後 底部ケズリ再調整
47－1	土師器 杯	SK05 1	40%	(14.7)	(5.0)	6.0	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 手持ちケズリ	
47－2	土師器 杯	SK10 1	口縁部 3%	(14.4)	－	〔2.4〕	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ	
47－3	土師器 杯	SK05 1	底部 10%	－	4.1	〔1.1〕	ミガキ 黒色処理	手持ちケズリ 黒色処理	底部ケズリ再調整
47－4	土師器 高台杯	SK10 1	底部 25%	－	高台径 7.2	〔4.2〕	ミガキ・黒色処理 ロクロナデ（高台）	ロクロナデ	高台貼り付け
47－5	土師器 甕	SK11 3	口縁部 1%	－	－	〔7.0〕	ロクロナデ	ロクロナデ	
47－6	土師器 甕	SK01 1	口縁部 3%	(19.6)	－	〔7.5〕	ロクロナデ ユビナデ	ロクロナデ	
47－7	須恵器 甕	SK02　2 SD09　1	体部片 2%	－	－	－	ロクロナデ	タタキ ロクロナデ	沈線３条 自然釉
47－8	須恵器 甕	SK02 2	体部片 1%	－	－	－	当具痕（平行）	タタキ	
47－9	須恵器 甕	SK13 3	体部片 1%	－	－	－	ヘラナデ	タタキ	
47－10	須恵器 甕	SK13 2	体部片 1%	－	－	－	当具痕（平行）	タタキ	
49－1	土師器 杯	SE02 2	底部 15%	－	5.6	〔1.8〕	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 手持ちケズリ	底部回転糸切り後 ケズリ再調整
49－2	土師器 甕	SE02 2	口縁部 2%	(17.2)	－	〔2.2〕	ロクロナデ	ロクロナデ	
49－3	須恵器 甕	SE01 1	体部片 1%	－	－	－	ロクロナデ	タタキ	
51－1	土師器 高台杯	SD01 Q29　4	高台部 3%	－	高台径 (7.6)	〔2.2〕	ロクロナデ（高台）	ロクロナデ	高台貼り付け
51－2	須恵器 瓶類	SD01 Q29　4	口縁部 1%	－	－	〔2.4〕	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ書き
51－3	須恵器 甕	SD01 P27　1	口縁部 2%	－	－	〔4.4〕	ロクロナデ	ロクロナデ	
51－4	須恵器 甕	SD01 P24　2	口縁部 3%	－	－	〔6.0〕	ロクロナデ	ロクロナデ	波状文２条
51－5	須恵器 甕	SD01 U29　4	底部付近 2%	－	－	〔4.9〕	ヘラナデ	ロクロナデ ヘラナデ	底部粘土貼り付け
51－6	須恵器 甕	SD01 Q29　4	体部片 1%	－	－	－	ロクロナデ	タタキ	螺状沈線文
51－7	須恵器 甕	SD01 S29　2	体部片 1%	－	－	－	ロクロナデ	タタキ	

表7　土器観察表（２）

（）…復元値，〔〕…現存値，単位；㎝

挿図 No.	種別 器種	位置 層位	遺存部位 遺存度	計測値 口径	計測値 底径	計測値 器高	調整 内面	調整 外面	備考
51－8	須恵器 甕	SD01 P25　1	肩部付近 1%	－	－	－	当具痕（同心円）	タタキ	自然釉
52－1	須恵器 甕	SD01 P24　4	体部片 1%	－	－	－	当具痕（平行） ロクロ・ヘラナデ	タタキ	螺状沈線文
52－2	須恵器 甕	SD01 W29　4	体部片 1%	－	－	－	ロクロナデ	タタキ	
52－3	須恵器 甕	SD01 P18　1	体部片 1%	－	－	－	ロクロナデ	タタキ	
52－4	須恵器 甕	SD01 P26　1	体部片 1%	－	－	－	当具痕（平行）	タタキ	カキメ
52－5	須恵器 甕	SD01 P24　1	体部片 1%	－	－	－	当具痕（平行）	タタキ	
52－6	須恵器 甕	SD01 P24　1	底部付近 1%	－	－	－	当具痕（弧状） ユビナデ	タタキ	
54－1	土師器 杯	SD02 Q13　2	15%	(12.5)	(6.1)	4.1	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ	底部ケズリ再調整
54－2	土師器 杯	SD02 U16　1	60%	13.6	6.2	3.6	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 手持ちケズリ	底部ケズリ再調整
54－3	土師器 杯	SD02 U16　1	55%	(14.9)	6.2	4.8	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 手持ちケズリ	底部回転糸切り 内面漆付着
54－4	土師器 杯	SD02 U16　1	底部 20%	－	4.9	〔1.3〕	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 手持ちケズリ	底部ケズリ再調整
54－5	土師器 高台杯	SD02 U16　2	高台部 25%	－	高台径 8.8	〔3.1〕	ミガキ・黒色処理 ロクロナデ（高台）	ロクロナデ	高台貼り付け
54－6	土師器 堝	SD02 U16　1	口縁部 3%	－	－	〔3.1〕	ロクロナデ	ロクロナデ	
54－7	土師器 甕	SD02 S14　1	底部 3%	－	6.2	〔2.3〕	ロクロナデ	－	磨耗顕著
54－8	須恵器 杯	SD02 U16　2	20%	(14.0)	(6.0)	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	底部回転ヘラ切り
54－9	須恵器 甕	SD02 U16　1	頸～肩部 20%	頸部径 (8.5)	－	〔8.7〕	ロクロナデ	ロクロナデ	
54－10	須恵器 瓶類	SD02 U16　1	肩部 2%	－	－	〔4.1〕	ロクロナデ	ロクロナデ	
57－1	土師器 筒形土器	SD07 1	口縁部 1%	－	－	〔3.5〕	ユビナデ	ユビナデ	
57－2	須恵器 甕	SD07 1	体部片 1%	－	－	－	ヘラナデ	タタキ	
65－1	土師器 杯	R37P1 1	口縁部 3%	(12.6)	－	〔3.7〕	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 手持ちケズリ	
65－2	陶器 灰釉天目茶碗	O12P1 2	口縁部 20%	(12.8)	－	〔5.7〕	ロクロナデ	ロクロナデ	内面全面灰釉 外面灰釉，３／５露胎
67－1	土師器 杯	SH P32L	底部 5%	－	4.5	〔1.1〕	－	ロクロナデ	底部回転糸切り 離し糸切り
67－2	土師器 杯	SH Q31L	底部 15%	－	5.8	〔1.6〕	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 手持ちケズリ	
67－3	土師器 高台杯	SH P30L	高台部 10%	－	高台径 (5.2)	〔2.1〕	ミガキ・黒色処理 ロクロナデ（高台）	ロクロナデ	高台貼り付け
67－4	土師器 高台杯	SH P29L	高台部 5%	－	高台径 (6.4)	〔2.6〕	ロクロナデ（高台）	ロクロナデ	高台貼り付け
67－5	土師器 高台杯	SH P31L	高台部 10%	－	高台径 (7.8)	〔2.6〕	黒色処理 ロクロナデ（高台）	ロクロナデ	高台貼り付け
67－6	土師器 高台杯	SH P30L	高台部 10%	－	高台径 (8.4)	〔2.9〕	ミガキ・黒色処理 ロクロナデ（高台）	ロクロナデ	高台貼り付け
67－7	土師器 高台杯	SH P30L	高台部 15%	－	高台径 (8.4)	〔2.6〕	ミガキ・黒色処理 ロクロナデ（高台）	ロクロナデ	高台貼り付け
67－8	土師器 高台杯	SH P30L	高台部 20%	－	高台径 8.4	〔2.5〕	ミガキ・黒色処理 ロクロナデ（高台）	ロクロナデ	高台貼り付け
67－9	土師器 高台杯	SH P30L	高台部 10%	－	高台径 (9.2)	〔2.8〕	ミガキ・黒色処理 ロクロナデ（高台）	ロクロナデ	高台貼り付け
67－10	土師器 高台杯	SH P30L	高台部 20%	－	高台径 (9.0)	〔2.9〕	ミガキ・黒色処理 ロクロナデ（高台）	ロクロナデ	高台貼り付け
67－11	土師器 高台杯	SH P30L	高台部 5%	－	高台径 (10.6)	〔3.0〕	ロクロナデ（高台）	ロクロナデ	高台貼り付け
6－12	土師器 高台杯	SH P30L	杯底部 10%	－	－	〔1.5〕	ミガキ・黒色処理	ロクロナデ	高台貼り付け
67－13	土師器 甕	SH Q30L	口縁部 2%	－	－	〔6.7〕	ロクロナデ	ロクロナデ	
67－14	土師器 堝	SH Q30L	口縁部 2%	－	－	〔6.6〕	ロクロナデ	ロクロナデ	
67－15	土師器 甕	SH P30L	底部 5%	－	7.6	〔2.4〕	ロクロナデ	手持ちケズリ	底部回転糸切り
67－16	土師器 甕	SH P30L	底部 3%	－	5.7	〔1.9〕	ロクロナデ	手持ちケズリ	

表8　土器観察表（３）

（）…復元値，〔〕…現存値，単位；㎝

挿図 No.	種別 器種	位置 層位	遺存部位 遺存度	計測値 口径	計測値 底径	計測値 器高	調整 内面	調整 外面	備考
67－17	土師器 甑	SH Q32L	把手部 2%	長さ 5.9	厚さ 3.3	－	－	ユビオサエ ユビナデ	
67－18	須恵器 長頸瓶	S H Q32L	頸部 3%	頸部径 (4.7)	－	〔5.1〕	ロクロナデ	ロクロナデ	リング状凸帯
67－19	須恵器 長頸瓶	SH P30L	頸部 2%	－	－	〔4.3〕	ロクロナデ	ロクロナデ	リング状凸帯
67－20	須恵器 長頸瓶	SH P30L	口縁部 2%	(12.8)	－	〔1.1〕	ロクロナデ	ロクロナデ	
67－21	須恵器 広口瓶	SH P32L	口縁部 1%	(16.4)	－	〔3.1〕	ロクロナデ	ロクロナデ	
67－22	須恵器 瓶類	SH P30L	底部 2%	－	(9.8)	〔4.1〕	ロクロナデ	ロクロナデ	高台貼り付け
67－23	須恵器 瓶類	SH Q32L	底部 2%	－	(10.2)	〔5.2〕	ロクロナデ	ロクロナデ	高台貼り付け
67－24	須恵器 甕	SH P32L	口縁部 2%	(13.6)	－	〔5.3〕	ロクロナデ	ロクロナデ	
67－25	須恵器 甕	SH Q31L	口縁部 1%	－	－	〔4.2〕	ロクロナデ	ロクロナデ	
68－1	須恵器 甕	SH Q32L	体部片 1%	－	－	－	当具痕（同心円）	タタキ	
68－2	須恵器 甕	SH P30L	体部片 1%	－	－	－	当具痕（平行） ロクロ･ヘラナデ	タタキ	
68－3	須恵器 甕	SH P32L	体部片 1%	－	－	－	当具痕（平行） ロクロ･ヘラナデ	タタキ	螺状沈線文
68－4	須恵器 甕	SH P30L	体部片 2%	－	－	－	ロクロ･ヘラナデ	タタキ	螺状沈線文
68－5	須恵器 甕	SH P32L	体部片 1%	－	－	－	ロクロナデ	タタキ	螺状沈線文
68－6	須恵器 甕	SH P32L	体部片 1%	－	－	－	ロクロ･ヘラナデ	タタキ	
68－7	須恵器 甕	SH P30L	体部片 2%	－	－	－	当具痕（平行）	タタキ	カキメ
68－8	須恵器 甕	SH P30L	体部片 1%	－	高台径 8.4	－ －	当具痕（菊花）	タタキ	
68－9	須恵器 甕	SH Q32L	体部片 1%	－	－	－	当具痕（平行）	タタキ	
68－10	須恵器 甕	SH P32L	底部付近 2%	－	－	－	ヘラナデ	タタキ ヘラナデ	螺状沈線文
69－1	土師器 杯	P28 L	口縁部 10%	(13.2)	－	〔4.4〕	ロクロナデ	ロクロナデ	磨耗顕著
69－2	土師器 高台杯	Q18 L	高台部 20%	－	高台径 8.4	〔3.9〕	ロクロナデ（高台）	ロクロナデ	杯底部回転糸切り 高台貼り付け
69－3	須恵器 長頸瓶	S20 L	肩部 15%	－	－	〔9.2〕	ロクロナデ	ロクロナデ	
69－4	陶器 天目茶碗	V21 L	口縁部 2%	(12.6)	－	〔2.5〕	ロクロナデ	ロクロナデ	内外面に鉄釉
69－5	須恵器 甕	V21 L	肩部 2%	－	－	－	当具痕（平行） ヘラナデ	タタキ	螺状沈線文
69－6	須恵器 甕	N19 L	体部片 1%	－	－	－	ナデ	タタキ	螺状沈線文
69－7	須恵器 甕	V21 L	体部片 1%	－	－	－	当具痕（平行・同心円） ナデ	タタキ	カキメ
69－8	須恵器 甕	R34 L	体部片 1%	－	－	－	当具痕（菊花） ナデ	タタキ	
69－9	須恵器 甕	T23 L	底部付近 2%	－	－	－	当具痕（平行）	タタキ （一部格子状）	
69－10	須恵器 甕	P20 L	底部付近 1%	－	－	－	ヘラナデ	タタキ	螺状沈線文
8－1	須恵器 甕	範囲確認 1TL	肩部 1%	－	－	－	ロクロナデ	タタキ ロクロナデ	
8－2	須恵器 甕	範囲確認 1TL	体部片 1%	－	－	－	当具痕（平行）	タタキ ヘラナデ	カキメ
8－3	須恵器 甕	範囲確認 4TL	体部片 1%	－	－	－	ナデ	タタキ	螺状沈線文
8－4	須恵器 甕	範囲確認 4TL	体部片 1%	－	－	－	当具痕（平行）	タタキ	カキメ
8－5	須恵器 甕	範囲確認 2TL	体部片 1%	－	－	－	当具痕（平行）	タタキ	
8－6	須恵器 甕	範囲確認 6TL	体部片 1%	－	－	－	当具痕（平行） ヘラナデ	タタキ	螺状沈線文
8－7	須恵器 甕	範囲確認 1TL	体部片 1%	－	－	－	当具痕（平行）	タタキ	

表9　木製品観察表

〔 〕…現存長，単位：cm

挿図No.	種別	位置 層位	木取り	計測値 長さ	計測値 幅	計測値 厚さ	樹種	遺存整形痕 部位：刃幅	備　考
18－1	木製礎盤（礎板）	SB02 P14底面	－	15.7	8.7	2.4	クリ	表面：2.4cm 木口：－	
18－2	木製礎盤（礎板）	SB02 P20底面	板目	23.2	7.6	2.0	クリ	－	
18－3	木製礎盤（礎板）	SB02 P21底面	柾目	28.8	9.6	2.8	－	全面：9.6cm超	整形に台鉋使用?
19－1	柱材	SB02 P3	四方柾	〔48.3〕	10.2	11.1	－	木口：8.5cm超	角柱
19－2	柱材	SB02 P27	四方柾	〔45.4〕	12.9	8.0	クリ	木口：－	角柱
19－3	柱材	SB02 P19	二方柾	〔53.3〕	12.8	10.9	クリ	木口：5.4cm	角柱
19－4	柱材	SB02 P5	二方柾	〔48.7〕	14.5	〔10.3〕	クリ	木口：5.4cm	角柱
20－1	柱材	SB02 P6	二方柾	〔69.8〕	11.1	11.6	クリ	木口：4.7cm	角柱
25－1	柱材	SB04 P4	二方柾	〔40.8〕	9.7	〔4.5〕	スギ	木口：－	角柱
31－2	杭	SB08 P10　1	芯持ち	〔21.8〕	最大径3.5	－	クリ	周縁：1.3cm 木口：－	
39－4	柱材	SB12 P10	二方柾	〔51.3〕	12.2	9.3	サワラ	木口：3.7cm	角柱
47－11	自然木	SK14 5	－	〔112.2〕	最大径3.5	－	サクラ属	－	杭として利用？
49－4	曲物 側板	SE02 底面	柾目	〔34.4〕	〔4.0〕	0.2	スギ	－	
49－5	曲物 底板or蓋板	SE02 底面	柾目	10.0	9.9	0.9	ヒノキ	表，裏面：3.0cm	
49－6	曲物 底板or蓋板	SE02 底面	柾目	10.0	9.8	0.7	－	表，裏面：3.6cm超 側面：－	
49－7	曲物 側板，箍	SE02 底面	柾目	〔11.7〕	〔3.1〕	3枚分 0.7	スギ	－	綴皮×2遺存
49－8	曲物 綴皮	SE02 底面	－	3.7	0.6	0.075	－	－	
52－8	杭	SD01 R29　4	ミカン割り	〔15.9〕	〔2.6〕	〔1.6〕	スギ	表，側面：－	一部炭化
52－9	板状木製品	SD01 S29　2	柾目	11.7	1.3	0.25	サワラ	－	
52－10	板状木製品	SD01 T29　4	板目	〔12.1〕	4.5	0.25	サワラ	－	径6mmの貫通孔×1
52－11	板状木製品	SD01 T29　4	板目	〔13.4〕	5.3	0.4	－	－	径5mmの貫通孔×1
52－12	曲物？ 底板？	SD01 W29　4	柾目	15.0	7.1	1.3	サワラ	－	表面：貫通孔×6，未貫通孔×3 側面：未貫通孔×5，木製釘×4遺存 一部炭化
65－3	柱材	P12 P1	－	〔16.6〕	〔2.6〕	〔2.0〕	－	－	
65－4	柱材	X33 P1	二方柾	〔24.1〕	〔8.7〕	〔6.3〕	モクレン属	木口：5.4cm	角柱
65－5	柱材	Q33 P3	四方柾	〔36.1〕	11.8	9.6	－	表面：3.2cm超 木口：5.0cm	角柱 辺材部分利用
65－6	柱材	Q33 P8	二方柾	〔25.6〕	〔5.0〕	〔3.1〕	クリ	－	角柱
65－7	柱材	Y33 P1	二方柾	〔41.2〕	〔8.9〕	〔8.1〕	－	－	角柱
65－8	柱材	O11 P2	四方柾	〔35.7〕	12.7	12.6	スギ	表面：4.2cm 木口：5.4cm超	角柱 辺材部分利用

表10　石製品観察表

単位：cm

挿図No.	種別	位置 層位	計測値 長さ	計測値 幅	計測値 厚さ	備　考
18－4	石製礎盤（根石）	SB02 P23底面	24.2	17.8	7.4	一部被熱
36－2	石製礎盤（根石）	SB10 P3　2	16.1	9.5	8.8	一部被熱，柱痕中位から出土 ＳＢ10Ｐ３出土（図36－３）石製礎盤と接合
36－3	石製礎盤（根石）	SB10 P2　2	13.8	5.9	8.0	自然面全面被熱，柱痕上位から出土 ＳＢ10Ｐ２出土（図36－２）石製礎盤と接合
36－4	石製礎盤（根石）	SB10 P9　1	19.4	16.5	7.1	自然面全面被熱 柱痕下位から出土
36－5	石製礎盤（根石）	SB10 P4　2	16.1	15.7	9.0	自然面４／５被熱 柱痕上位から出土
36－6	自然礫	SB10 P3　2	7.8	4.0	2.4	片面のみ被熱 柱穴掘り方埋土から出土，用途不明
39－3	石製礎盤（根石）	SB12 P2底面	20.9	15.3	8.1	片面のみ被熱 柱痕中，立位の状態で出土
43－1	石製礎盤（根石）	SA01 P1底面	15.7	8.9	4.0	一部被熱，図43－２と重なり出土（上位） 図43－２と接合
43－2	石製礎盤（根石）	SA01 P1底面	20.9	14.2	4.9	片面１／２被熱，図43－１と重なり出土（下位） 図43－１と接合
52－7	自然礫	SD01 U29　4	19.8	5.5	4.6	片面のみ被熱

第４章　考　　察

第１節　平安時代の遺構と遺物

１，遺物について

平安時代とした遺物には土師器，須恵器がある。これらは遺構内堆積土中や遺物包含層中から出土した破片資料が中心であり，年代的な定点となる一括資料は得られていない。そのため，ここでは器形や製作技法を概観し，その年代的な幅を示すことを主眼としたい。

器種分類とその特徴（図70）

〔土師器〕　杯，高台杯，甕，堝，筒型土器，甑が認められる。

杯　体部形態から直線的に外傾するもの（２～４），及び内湾するもの（５～７）に２大別することが可能である。内面の黒色処理は全てに認められ，１のみ外面にも施されている。体部の内湾する５・６はやや大型であり，器高も高く身の入りが深い。成形は全てロクロ成形であり，製作技法については部分的な再調整に相違が認められる。底部は回転糸切り無調整（36%），及び手持ちケズリ再調整（64%）の２種，体部下端，底部周辺の再調整は回転ケズリ（７%），手持ちケズリ（80%），再調整なし（13%）の３種に分けることができる。

高台杯　遺存した高台部が主である。杯部まで遺存するものは少ないが，確認できる範囲において内面はミガキの後黒色処理が施されている。高台部の形態から，裾が僅かに外反し脚端部に面を有するもの（９～12，43%），直線的に外傾するか，あるいは僅かに外反しながら下がり，脚端部に面を持たないもの（13～15，50%），直線的に外傾し，高台高の高いもの（16，７%）の３種が認められる。また高台径からは小型（径6.9　以下，14%），中型（径7.0～10.0　，79%），大型（径10.0　以上，７%）に分けることが可能である。

甕　ロクロ成形であり，口唇部端には面を有する。底部は平底のものが確認でき，回転糸切り痕が観察できる。

その他　堝は口唇部端に面を有し，体部は直線的に外傾する。筒型土器と考えられる破片は数点認められるが，器形を復元できたものは少ない。甑は把手部分のみ確認している。

〔須恵器〕　杯，瓶類，甕が認められる。

杯　１点のみ確認され，小さい底部から体部が直線的に外傾する器形である。底部は回転ヘラ切り痕が残る。復元口径14.0　，復元底径6.0　，器高3.0　を測る。

瓶類　完全に器形を復元できたものはない。22～24は口縁部の破片である。口径値はいずれも復元値で，22が12.8　，23は16.4　を測る。23は口径値が大きく，ラッパ状に開く形態から広口瓶と考えられる。25・26は頸部片である。いずれも下端にリング状凸帯が認められる。27・28は肩部片である。両者とも頸部との接合は２段接合となる。29～31は底部片である。高台部の形態から，接

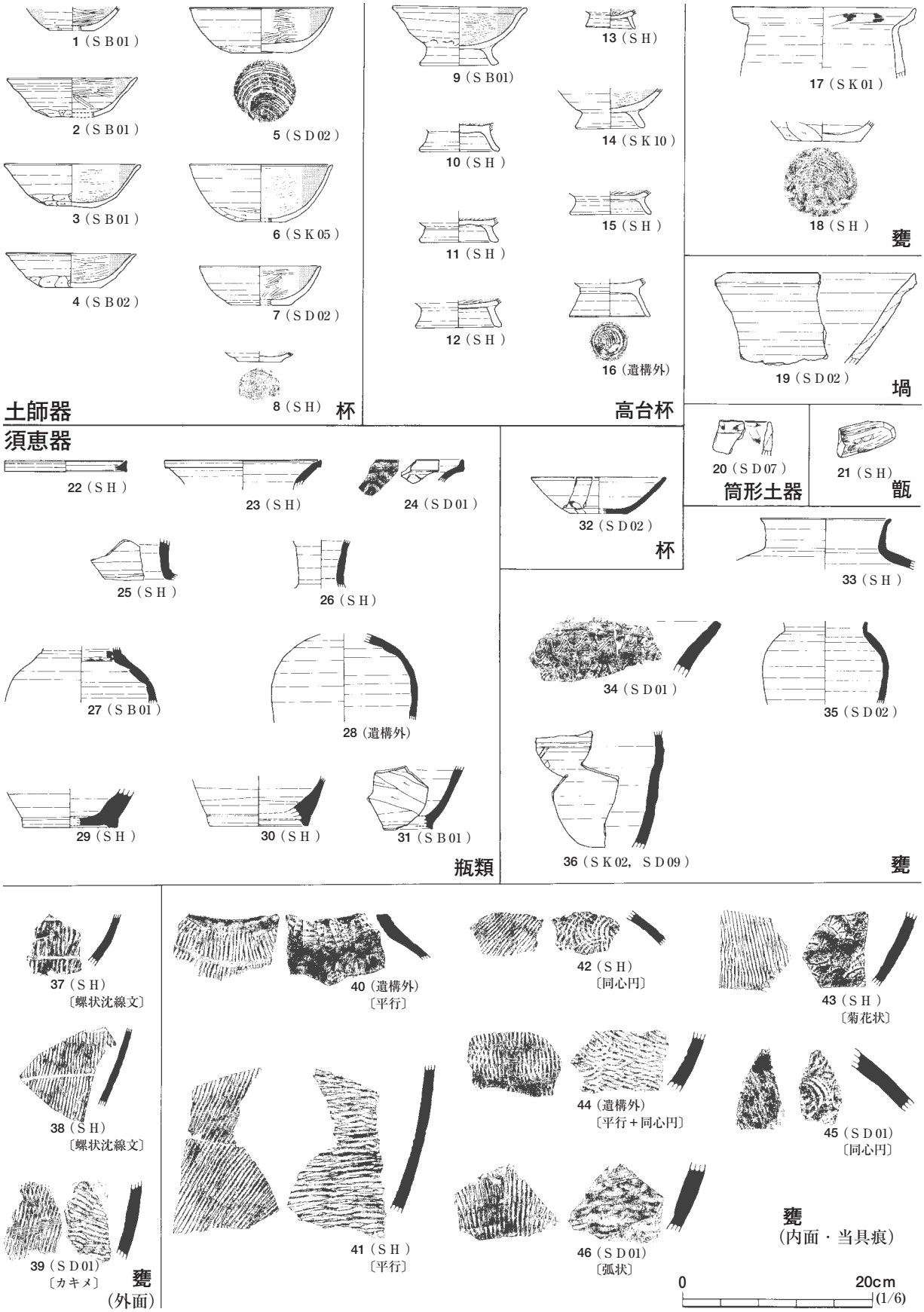


図70　平安時代の出土遺物

地面が広い断面長方形状（29），断面が逆台形～三角形状（30・31）に分けられる。

甕　特徴的な例として，34には上下二段の波状文，36には３条の沈線が認められた。37・38の外面には横位の螺状沈線文，39には横位のカキメが認められる。螺状沈線文が認められた資料は比較的数量が多い。40～46には内面の当具痕を示した。40・41は平行当具痕であり，数量的にはこれが圧倒的である。他に同心円状（42・45），菊花状（43），弧状（46），平行及び同心円の両者を用いたもの（44）を確認している。この他，底部片から平底となる例が存在することも指摘しておきたい。

編年的位置

麻生館遺跡から出土した須恵器は，杯における回転ヘラ切りや瓶類のリング状凸帯の存在，また当遺跡の位置から大戸古窯系産と考えられる。そのためここでは大戸古窯編年（石田1994）との対照を試みたい[(1)]。

古い要素から順に列記する。甕の波状文はＫＡ12式期以前とされる。瓶類におけるリング状凸帯はＫＡ12式期以降となる。瓶類の高台形は，断面長方形状のものがＫＡ12～ＭＨ19式期，逆台形～三角形のものがＫＡ107式期以降とされる。甕の外面に認められるカキメはＭＨ19式期に特徴的とされ，螺状沈線文はＭＨ19式期以降となる。瓶類における頸部と体部の接合は２段接合であり，ＭＨ19式期以降に比定される。平底の甕はＫＡ112式期以降に出現し，長頸瓶から広口瓶への転換はＫＡ107式期に始まると指摘されている。

以上の検討結果，特に螺状沈線文の卓越，瓶類の形態などから，本遺跡から出土した須恵器は，概ねＭＨ19式期からＫＡ112式期の範疇で捉えることが可能である。

次に土師器であるが，杯を年代決定の指標としたい。麻生館遺跡出土の土師器杯には内面にミガキ，黒色処理が観察され，いわゆる「赤焼き土器」「須恵系土器」は確認できない。底部は手持ちケズリ再調整が多く，回転糸切り無調整のものも一定量存在する。外面底部周辺の調整は手持ちケズリが多数を占める。

これと共通する要素を持つ一括資料に，同じ塩川町に位置する鏡ノ町遺跡Ａ，ＳＫ20・同ＳＫ53の土器群が挙げられる。ＳＫ53出土の土師器は鏡ノ町遺跡における３群土器に位置付けられ，黒笹90号窯式期に比定される灰釉陶器椀が共伴している。土師器杯における体部外面下端～底部にかけての再調整は，回転ケズリと手持ちケズリの割合が拮抗しており，麻生館遺跡資料より僅かに先行すると考えられる。これに対し，ＳＫ20出土の土師器杯は，体部外面下端～底部にかけての再調整に手持ちケズリが多用され，麻生館遺跡における土師器杯に近い様相が認められる。ただし，鏡ノ町遺跡Ａ，ＳＫ20資料には「赤焼き土器」「須恵系土器」が数点共伴する。同資料は鏡ノ町遺跡における４群土器に位置付けられ，大戸古窯編年ＫＡ107～ＫＡ112式期の須恵器が伴うとされる。

以上，麻生館遺跡出土の須恵器には，ＭＨ19式期からＫＡ112式期の時間幅が想定され，土師器は「赤焼き土器」「須恵系土器」の出現する直前段階，猿投窯黒笹90号窯式期以降とする年代が導かれた。ここにおいて須恵器，土師器の年代観に齟齬はみられない。よって当土器群は９世紀後半，大戸古窯編年ＭＨ19式期後半～ＫＡ107式期併行期に中心を置くものと考えておきたい。

２，遺構について

平安時代に属する遺構は，掘立柱建物跡３棟，土坑４基を調査した。土坑はいずれも小型であり，調査区内に散在する。これに対し，建物跡３棟は調査区北西部に集中していた。この３棟の建物跡はそれぞれに特徴的な構造を有する。今回の調査では，集落の一部が明らかとなったに過ぎないが，まず建物跡の特徴を顕在化させ，集落の内容についても若干の検討を行っておきたい。

掘立柱建物跡における柱穴配置の特異性（図71）

〔１号建物跡〕　５間×３間，平面積68　となる比較的大型の建物跡である。東側梁行きが３間となるのに対し，西側梁行きは中央に柱穴が配置され４間となる。この中央に位置する柱穴は，他と比して規模も小さく，掘り込みも浅い。これと類似した特徴をもつ建物跡として，会津若松市屋敷遺跡ＳＢ９が挙げられる。この建物跡は梁行きが２間となる点で本建物跡と異なるものの，桁行き５間，平面積61　とほぼ同程度の規模を有する。北側梁行きには，南側梁行きと非対称な位置に２個の柱穴が配置されており，この２個の柱穴は他と比して規模，掘り込みの深さとも下回る。

梁間が非対称となる建物跡については，会津地方に特徴的とされ，積雪に対応した入口施設の創出との指摘がなされている（荒木2000）。ただ，本建物跡，及び屋敷遺跡ＳＢ９については，非対称の位置に柱穴を配置することで入口空間は生じない。むしろ柱穴規模が小さく非対称位置の柱穴を除けばシンメトリーとなることを評価し，建物構築後における梁材の補強といった機能を想定することが妥当と考えている。

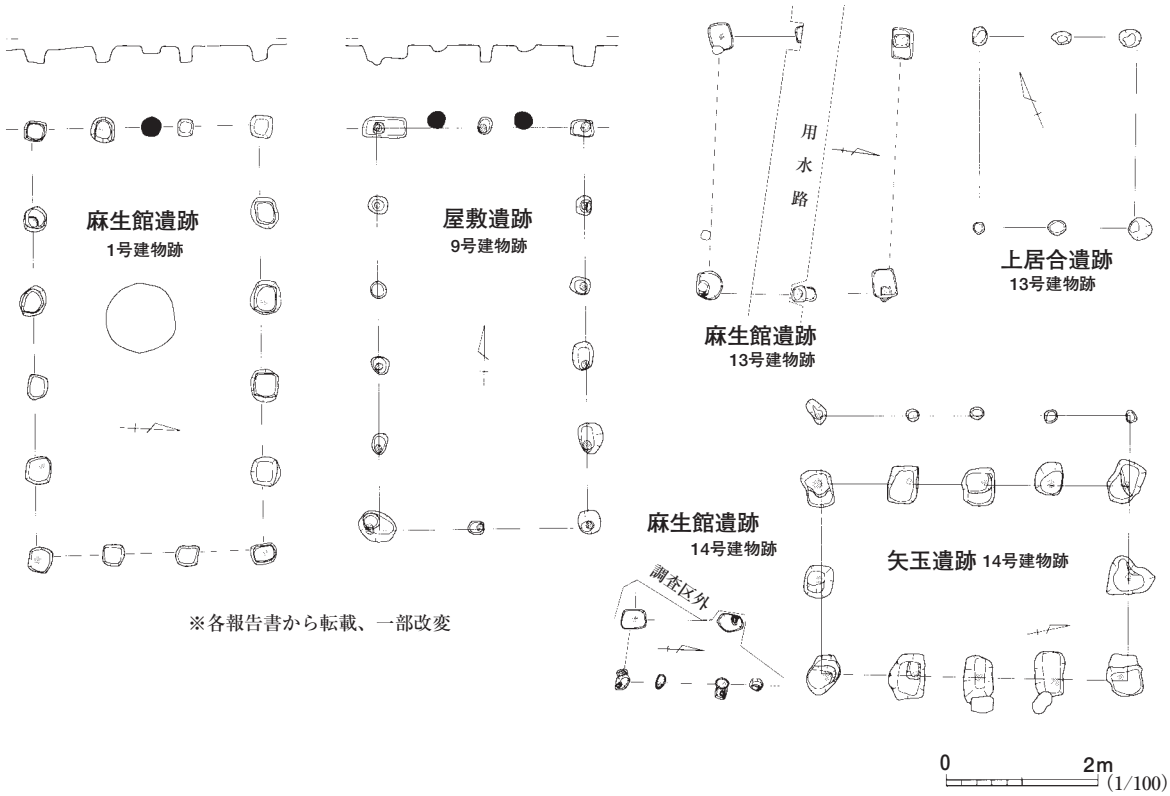


図71　掘立柱建物跡の柱穴配置

〔**13号建物跡**〕　平面積は31　を測る中型の建物跡であるが，桁行き１間，梁行き２間という特異な構造となる。また，該期集落の東端に位置すると推定される。類例に会津若松市上居合遺跡ＳＢ13が挙げられるが，集落中での位置関係は異なり，現状で性格，機能を推定する材料は持ちえなかった。

〔**14号建物跡**〕　建物の一部が調査されたに過ぎないが，身舎と考えられる柱穴に平行し，東桁側に付帯施設が取り付く。建物の片側に小型の柱穴から成る付帯施設が伴う構造は，会津若松市矢玉遺跡ＳＢ14，同屋敷遺跡ＳＢ１，同清水上遺跡ＳＢ１などで散見される。荒木氏は先の論稿において，これら付帯施設を平入り建物における，積雪に対応した雁木状施設と評価している[2]。

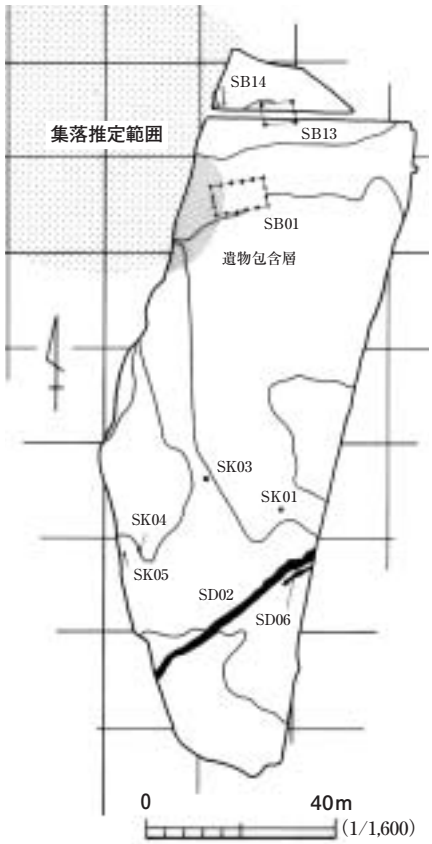


図72　平安時代以前の遺構分布

集落の範囲と存続時期（図72）

範囲確認調査の結果，集落の範囲は調査区外北側へは広がらず，該期の掘立柱建物跡が集中する調査区北西部から西側に限定される。つまり３棟の建物跡は集落の東端に位置しており，本集落に外郭施設は伴わない。集落の存続時期については包含層出土の遺物を含め，土器の年代観から９世紀後半代にほぼ限定されると思われる。調査した３棟の建物跡には，一部柱の据え替えや補強の痕跡と捉えられる状況が認められたものの[3]，建物間の重複や大規模な建て替えはなく，土器の示す時間幅と齟齬しない。

集落の位置付け

ＳＢ01は５間×３間，平面積68　と比較的大型の規模を有する。この規模の建物跡が最大となる例として，塩川町内には緑釉陶器が出土した古屋敷遺跡（ＳＢ３：59　），規格的に配置された倉庫群を検出した内屋敷遺跡（40　以下）が挙げられるが，いずれも官衙関連施設との推定がなされている（和田1999，植村2002）。荒木氏は，会津若松市内における該期の遺跡を検討する中で，建物規模からその性格について言及し，平面積45　以上の建物跡が最大となる遺跡については，「郷」中の小区分に対応した拠点集落と位置付け，具体的には「郷長」あるいはそれに相当するクラスの居宅を想定している（荒木2000）。

麻生館遺跡の建物跡３棟は軸線方向がほぼ揃い，建物配置にある程度の企画性が想定される。麻生館遺跡における大型建物跡の存在，建物配置における企画性からは，これを一般的な集落と捉えることは難しい。塩川町内では先に挙げた２遺跡の他，大型四面庇付建物跡が存在し，奈良三彩や緑釉陶器が出土した鏡ノ町遺跡Ａ・Ｂ，舘ノ内遺跡が調査されている。これら４遺跡及び麻生館遺跡は東西4.5　，南北２　の狭い範囲に集中し，盛期が９世紀後半以降にあることで共通する。特に鏡ノ町遺跡Ａ・Ｂでは，それまでの集落が９世紀後半に入るとその規模，内容において飛躍する

ことが指摘され，9世紀前半に，会津郡から耶麻郡が分置されたことに関連して地位，実力を向上させた在地有力者，かつ官人層である人物の居宅，との仮説が提示されている（和田2001）。麻生館遺跡における該期集落の変遷も，概ねこれら周辺遺跡と軌を一にしていると考えられ，現状では，郡衙などの官衙に関連した，新興在地有力者の居宅跡を含むものと考えておきたい。

近年中通り地方では，官衙風に配置された建物群に対して検討が深められている（菅原1998a・b，垣内2002など）。これら建物群は9世紀前半代を中心として，後半代には消滅してゆくのに対し，会津地方では，ほとんどが10世紀まで継続するという特徴が指摘されている（菅原1998b）。現在これら建物群の主として「富豪層」（戸田1967）という用語が当てられることが多い。ただし，9世紀代を通して反体制的であり，律令制を崩壊へと導いた「富豪浪人層」が力を蓄える反面，郡司などの官人層（体制内富豪層？）は没落していくことが指摘されている（坂上2001）。中通り地方における8世紀末からの様相は，この体制側にある有力官人層の興隆と没落という歴史的な流れを反映していると考えられる。これに対し会津地方，特に新たに分置された耶麻郡における様相は，10世紀に至るまで律令体制側の人間が力を保持していた状況が窺われ，このような状況は麻生館遺跡を居宅とした人物を体制側とした理解に帰結する。該期における会津地方は，政治的に保守的であった可能性も考えられる。（横須賀）

第2節　中世の遺構と遺物

1，遺物について（図73）

中世末の遺物は陶器片，木製品（曲物，板状木製品），建築用材（柱材，木製・石製礎盤，杭）が挙げられる。陶器片は瀬戸・美濃系天目茶碗（灰釉含む）2片のみが確認され（図73－1・2），大窯期前半代のものと判断される。この他，主な遺物は柱材などの建築用材（図73－9～20）であり，以下これについて若干の考察を行なってみたい。

木製建築用材の形状と材質

〔柱材の形状〕　柱材は建物跡から8本の他，単独ピット内から6本を確認している。このうち13本を図示し，うち形状の確認される12本すべてが角柱であった。特に主屋と考えられるＳＢ02からは，身舎，庇，縁とした各所から5本の角柱が検出されており，建物の位置に関わらず角柱が採用されていたと判断される。

寝殿造り建物で主に用いられた丸柱が角柱へ変わってゆく契機としては，建築様式が書院造りへと変質してゆく過程において，間取りの複雑化に伴う仕切り（明障子や襖障子）の採用，及び外部に面する箇所が跳ね上げ式の蔀戸から，遣戸（舞良戸）などの引違戸へ変化したことに連動し，建具の据わりを勘案したものであると説明される（太田1948，平井1998など）。つまり，ＳＢ02にみられた複雑な柱穴配置と柱材の形状は，相互を説明する上で互いに矛盾のないものとなる。

また，主屋としたＳＢ02の柱材はすべて面取りされているのに対し，単独ピットから出土した柱

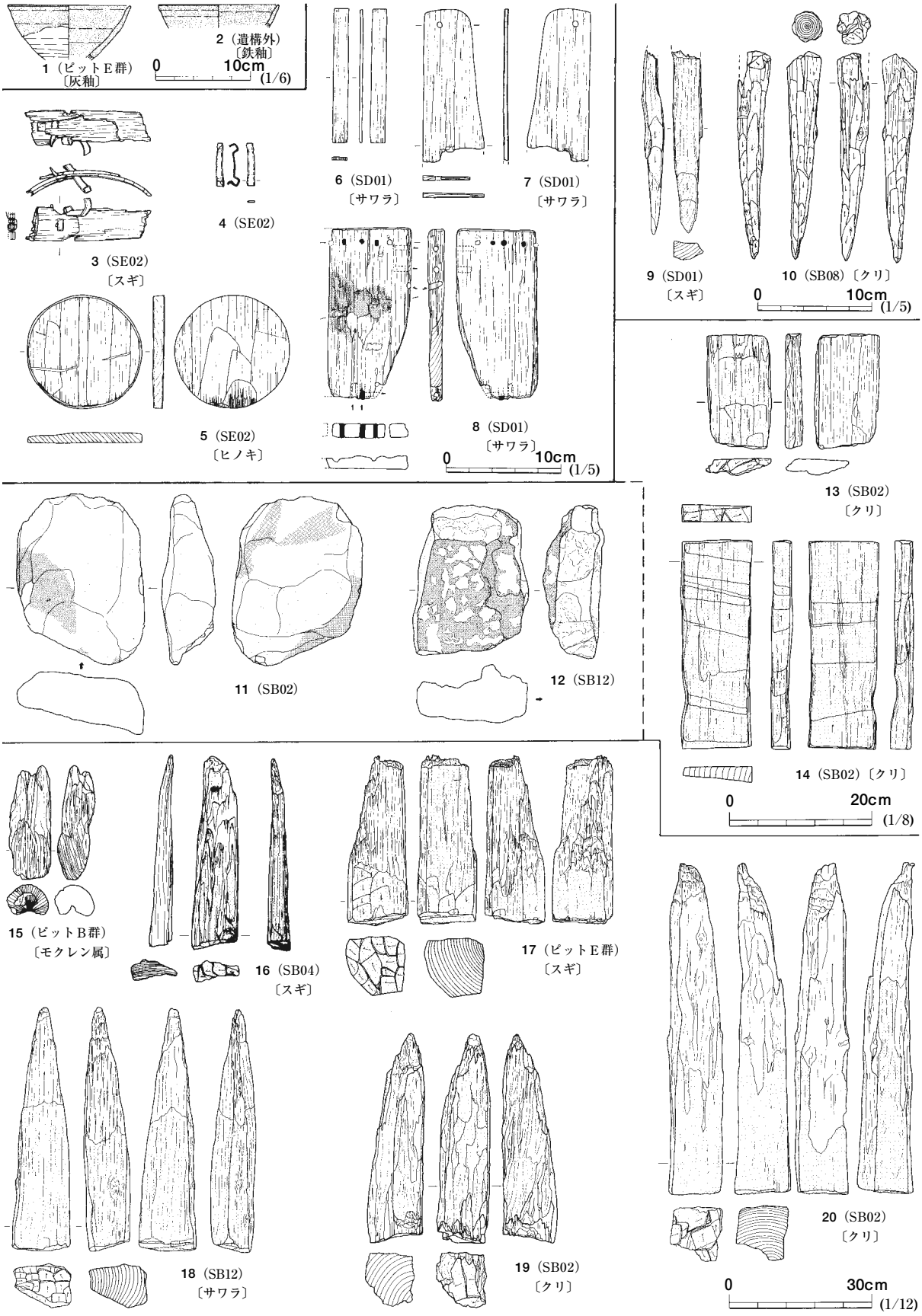


図73　中世末の出土遺物

材に，面取りせず，辺材部分をそのまま利用している資料が存在する（図73－17）。辺材部分は心材に比して腐り易く，また狂いが多いとされ，建物の性格によって製材の精粗が存在していたことを示している。

〔木製建築用材の材質〕　樹種同定の結果，広葉樹のクリ，モクレン属，針葉樹のスギ，サワラが使用されており，柱材としては普遍的な用材であった。ＳＢ02では５本の柱材，３枚の礎盤いずれにもクリが使用され，この建物については用材の統一が認められる。この他，柱材は３棟の建物跡から１本づつ検出され，ＳＢ04・10はスギ，ＳＢ12はサワラと判定された。そのため，建物ごとに用材が異なった可能性がある。しかし，16世紀まで存続した須賀川市蛭館跡のＳＢ01では広葉樹のクリと針葉樹のアスナロが不規則に配置されており（高橋他1987），該期の建物跡がそれぞれ用材を統一していた可能性は低いと考えている。むしろ，用材の統一，不統一は，柱材の形状にみられた精粗と同様，建物の性格に左右されたものと考えておきたい。

工具痕と木工具の推定

木質遺物に遺存していた工具痕は，建築用材の木口，柱材の側面，木製礎盤の表面，木製品（曲物）の表面でそれぞれ異なる。以下各々について整理し，最後に年代的な考察を加えたい。

〔建築用材の木口〕　工具の刃幅は①８　超（図73－19），②５　前後（図73－17・20），③３　前後（図73－18）に大別される。①，②は表面に著しい段差が認められ，木材伐採時の工具痕と判断できる。この工具は刃幅から与岐（ヨキ）と考えておきたい。③は刃幅が狭く木口の表面が比較的平滑となる。これは伐採後に木口を整えたものと考えられ，鑿（ノミ）による整形の痕跡と判断する。

〔柱材の側面〕　単独ピットから出土した柱材に，刃幅３～４　前後の痕跡が認められる（図73－17），この痕跡は縦に連続しており，端部は楕円形に近い。また表面にはやや凹凸を残す。よってこれは小型の釿（チョウナ）による斫り痕と推定される。

これ以外の柱材は，表面が比較的良好に遺存しているものの，釿による斫り痕や鉋の痕跡は認められない。台鉋使用の有無は判然としないが，これら柱材には製材時に鋸，特に製材用の大鋸（オガ），あるいは前挽大鋸が使用されたものと考えておきたい。

〔木製礎盤・木製品の表面〕　２種類に大別される。①刃幅2.4～４　程であり，縦に連続する。端部は楕円形に近く，表面の凹凸は少ない。②刃幅9.6　超であり，表面は非常に平滑となる。横位に直線的な痕跡が残り，間隔は一定しない。よって，刃を離さず連続的に当てたものと判断される。①は表面が平滑に仕上げられており，鉋（ヤリガンナ）による整形痕と判断される。②については端部が広く直線的になり，表面が非常に平滑となることから台鉋（ダイカンナ）を想定している。ただし，工具痕の間隔が狭く，不定なことから工具を押して使用するツキカンナであろう。

〔木工具による年代観〕　以上使用された木工具には，伐採時に与岐，製材時・整形時に鋸，釿，鑿，鉋，台鉋の使用が考えられる。次にこれらの年代的な整合性を考察する。なお逐一根拠を挙げる余裕はなく，年代的な根拠は，主に中村氏（1968），成田氏（1984）の文献に拠るものとする。

杣人が伐採に鋸を用いるようになったのは近世以降であり，それまでは与岐，鉞などのタテオノ

が主であった。スギやヒノキなどの良材が豊富であった頃は，鑿や楔による「打ち割り法」で製材され，釿で斫り，鉋で仕上げる方法が効率的であったが，良材が枯渇したことにより，製材には15世紀中頃に二人挽きの大鋸が，16世紀末には一人挽きの前挽大鋸が用いられるようになる。またこれに伴う機能的要請から，少なくとも16世紀後半には台鉋が普及するとされる。

以上簡単に木工具の変遷を整理したが，木質遺物遺存の工具痕から推定された木工具により，次の年代観を提示しておきたい。伐採には与岐が用いられており，近世以前である可能性が高い。製材に鋸を使用したとすれば，少なくとも15世紀中葉以降となる。台鉋は16世紀後半には普及した可能性が高い。よって本遺跡の木質遺物からは15世紀後半～16世紀という幅が導き出される。

２，遺構について

中世末とした遺構は掘立柱建物跡11棟，土坑（竪穴状遺構）２基，井戸跡２基，溝跡（堀跡）１条，及びピット群５箇所である。この遺構群は，堀跡（１号溝跡）内外に広がる館跡（麻生館）に伴うものと考えられる。ここではまず個々に遺構群を検討し，その特徴とその性格，年代的属性を抽出する。それを基に遺構群の変遷を整理し，可能な限り「麻生館」の復元を試みたい。

掘立柱建物跡の分類と設計規格（図74，表11）

調査成果から復元される各建物跡の柱間寸法は一致をみないが，建物跡個々に基準となる間尺が存在することは確認される。羽柴氏はこれら柱間寸法の理解として「曲尺に規制されない任意の１尺を用い，間竿に寸法を目盛ったため」であるとし，「任意の１尺の長さを見出す」方法を提示している（羽柴2001）。この手法を用い，それぞれ任意の１尺を設定して建物の設計規格を検討した結果，本遺跡の中世建物跡を３大類５小類に分類することができた。具体的な計算方法は，（基準となる柱間寸法）÷６尺＝（任意の１尺）であり，図74に個々の具体的な数値を示す。

〔**分類**〕　分類属性には身舎桁行き１間に対する梁間の割合を用いた。

Ａ類；桁行き１間（６尺）に対し，梁間が倍数比になるもの。さらに２分が可能である。

Ａ１類；桁：梁が１：２となる。（ＳＢ02・03・10）

Ａ２類；桁：梁が１：１となる。（ＳＢ12）

表11　中世末掘立柱建物跡一覧

No.	建物構造（桁×梁）	主軸方向	面積（m²）	柱材（材質）	重複	分類	時期
2	５間×１間，庇，２面縁	N89°W	80.3	角柱（クリ）×５	ＳＢ03	Ａ１	
3	４間×１間，３（４）面縁	N85°W	62.2	－	ＳＢ02	Ａ１	
4	３間×１間，３面縁	N１°E	42.1	角柱（スギ）	ＳＢ05	Ｂ１	
5	３間×１間	N４°E	30.8	－	ＳＢ04	Ｂ１	
6	３間×１間，３面縁	N86°W	33.7	－		Ｂ１	
7	２間×１間	N78°E	11.2	－		Ｃ	?
8	３間×１間，４面縁	N89°W	28.4	－		Ｂ１	
9	２間×１間	N88°W	9.5	－		Ｃ	
10	４間×１間，４面縁	N88°W	62.9	柱材（スギ）	ＳＡ01	Ａ１	
11	２間×１間，２面縁	N88°W	21.0	－		Ｂ２	
12	３間×２間	N88°W	15.4	角柱（サワラ）		Ａ２	

Ｂ類；桁行き１間（６尺）に対し，梁間が整数比になるもの。さらに２分が可能である。

Ｂ１類；桁：梁が２：３となる。（ＳＢ04～06・08）

Ｂ２類；桁：梁が３：４となる。（ＳＢ11）

Ｃ類；桁行き１間（６尺）に対し，梁間が非整数比となるもの。（ＳＢ07・09）

〔分類結果の検討〕　以下各類の要点を述べる。

Ａ１類：建物規模において上位の３棟が該当し，大型の建物に採用された設計規格とすることができる。重複するＳＢ02・03は，基準尺度は異なるものの，建て替え前後で同様の設計規格が用いられている。またＳＢ02・03は半間分（３尺），ＳＢ10は半間より狭い（2.5尺）縁が取り付く。特徴的なこととして，３棟とも桁行きの一部で柱間寸法が広くなる。身舎内部は一部を除き，梁，桁の比率から畳敷きの可能性が想定される。また複雑な柱穴配置を採るＳＢ02では，間取りの多様さが窺われる。

Ａ２類：小型で特異な形態を採るＳＢ12が該当する。中心部の柱間寸法が狭くなる。柱筋の通りは悪く，厳密な規格性は看取できない。

Ｂ１類：最も多い４棟が該当し，その内容から中規模の建物に採用された設計規格とすることができる。重複するＳＢ04・05は縁の有無を除いて，基準尺度，設計規格とも同じものが用いられている。ＳＢ05を除いた３棟には1.5～2.5尺分となる幅狭の縁が取り付く。身舎内部は梁，桁の比率から畳敷きである可能性を有する。

Ｂ２類：ＳＢ11が該当する。中程度の規模を有し，両妻側にのみ縁が取り付く。また建物内部に棟持柱が存在し，その位置及び梁，桁の比率から板敷き，寄棟式屋根であることが想定される。

Ｃ類：建物規模において下位の２棟が該当する。小型の建物に採用された設計規格との判断も可能であるが，むしろ規格性の欠如と捉えておきたい。

以上，任意の尺度を想定し設計規格から分類した結果，図らずも建物規模においてＡ１類→Ｂ類→Ａ２類→Ｃ類という序列が確認できた。これに明確な意義付けをするには至らないが，本館跡を構成する建物群は，その性格に起因する建物規模の大小により，異なる設計規格が用いられていたことが理解できる。

中世遺構群の性格

先の検討結果を合わせ，館跡を構成する遺構の性格について推測しておきたい。

〔1号溝跡〕　断面は逆台形を呈す「箱掘り」の堀跡である。調査区内では３辺が確認でき，方形に囲郭するものと考えられる。唯一確認できる西辺の長さは48間（約87m）となる。北辺の北西部には数本の杭が打たれていたが，他に明らかな堀底施設は認められない。また橋や柵列，土塁も確認できなかった。本堀跡は周辺における工事前の条里地割に合致し，館跡廃絶後は一部水利施設として利用されていたと思われる。

〔2・3号建物跡〕　堀の内側，方形区画のほぼ中心に位置すると推定される。その位置，建物規模，及び設計規格から麻生館の「主屋（主殿）」と考えられる。他の建物跡に比して，柱筋の通り

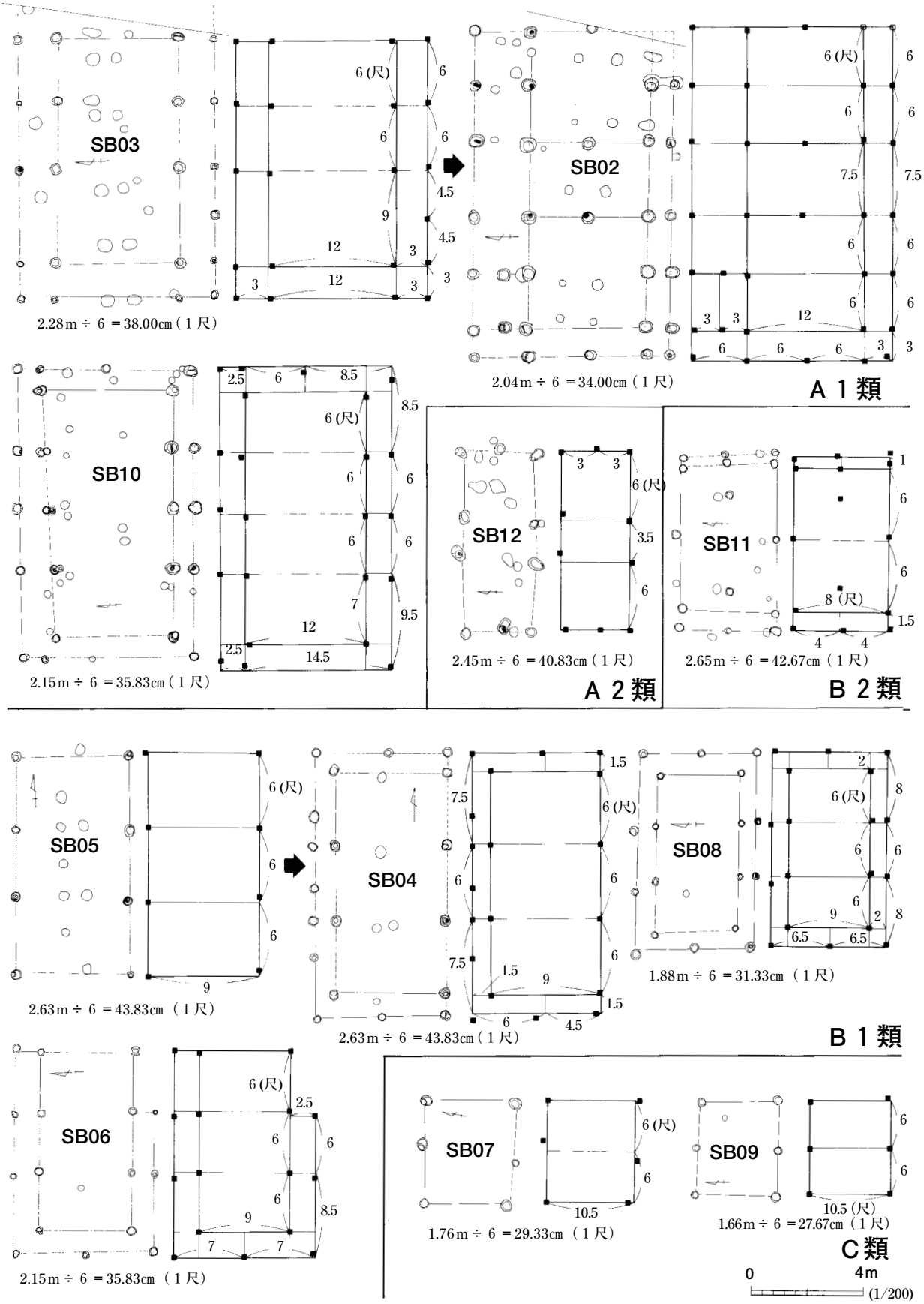


図74　中世建物跡の分類

が良く，柱間寸法にも差異が少ないなど，高い規格性が看取できる。またＳＢ02からは柱材５本を検出しているが，いずれもクリ材であり，用材の統一がなされている。また詳しくは後述するが，畳敷き，間取りの複雑性が想定され，「ハレの場」としての機能を有していた可能性が高い。

〔4・5号建物跡〕　主軸方向を直交させる形で主屋としたＳＢ02・03の西に隣接する。Ｂ１類とした設計規格が採用され，中程度の規模を有する。鎌倉時代後期以降，公的ないわゆる「ハレの場」として機能した主屋に対し，家族の生活の場としての建物が分かれると説明され（藤田1999），両建物は主屋に対する「付属屋」とすることができる。

〔8・10・11号建物跡〕　堀の内側に位置するＳＢ11は，両妻側に縁を有する中型の建物である。柱穴配置から寄棟式の上屋構造，Ｂ２類とした設計規格から板敷きが予想される。この内容と，位置的な関係から家人の居住施設と考えたい。

ＳＢ08・10は堀外側に位置し，性格付けが難しい。ＳＢ10はＡ１類とした設計規格が用いられ，四面縁を有する大型の建物跡である。規模は主屋とした建物と遜色ないが，柱筋の通りが悪く，規格性は若干劣る印象を持つ。同様のことはＢ１類の設計規格，中型の規模，四面縁を有するＳＢ08についても指摘される。堀の外側という位置についての解釈は難しいが，両者とも家人の住居などとするには規模，内容とも立派に過ぎる。宗教的な施設の可能性もあるが，堀の内側の建物に対応した機能の分散と推定し，ＳＢ10は「公」，ＳＢ08は「私」としての性格を有した「離れ屋」と評価しておきたい。なお，建物はこれ以上北には存在しないことを確認している。

〔6号建物跡〕　東側に井戸が隣接する。井戸側に縁が廻らないことから，両者の有機的関係が強いと判断され，「厨屋」としての性格を想定してみた。この場合，南側の縁が途切れる範囲，東端の１間分が土間であった可能性が高い。

〔12号建物跡〕　堀の外側に位置し，全体的に細長い形状となる。建物の位置，規模・形状から「厩屋」と考えている。中央の狭い範囲は作業場として機能したものであろうか。

〔7・9号建物跡〕　設計規格はＣ類としたが，規格性の乏しい小型の建物跡である。建物の規模，形状からは，簡便な「倉庫」としての性格が推定される。

〔2・10号土坑〕　底面積は10　にも満たない小型の竪穴である。底面や周囲に柱穴などの施設は認められない。ＳＫ02は少なくとも60　以上の深さを有する。この両者はいわゆる「竪穴状遺構」，「方形竪穴建物」と考えられ，規模・形状から保湿，保温を目的とした「貯蔵庫」としての性格を考えておきたい。

〔12～14号土坑〕　掘外側に位置する建物に，それぞれが沿うように位置する。円形，小型の土坑であるが，掘り込みは深い。いずれも中位までは自然埋没であり，機能時は開口していた可能性が高い。ＳＫ14底面からサクラの自然木（杭？）が出土したが，他に遺物は出土せず，性格については判然としない。

〔1・2号井戸跡〕　いずれも素掘りの井戸であり，ＳＥ01は堀外側に，ＳＥ02は内側に位置する。特にＳＥ02は西に隣接する建物との関係が深いと推定され，現在でも豊富な水量を有するなど，

館の主水源であった可能性がある。

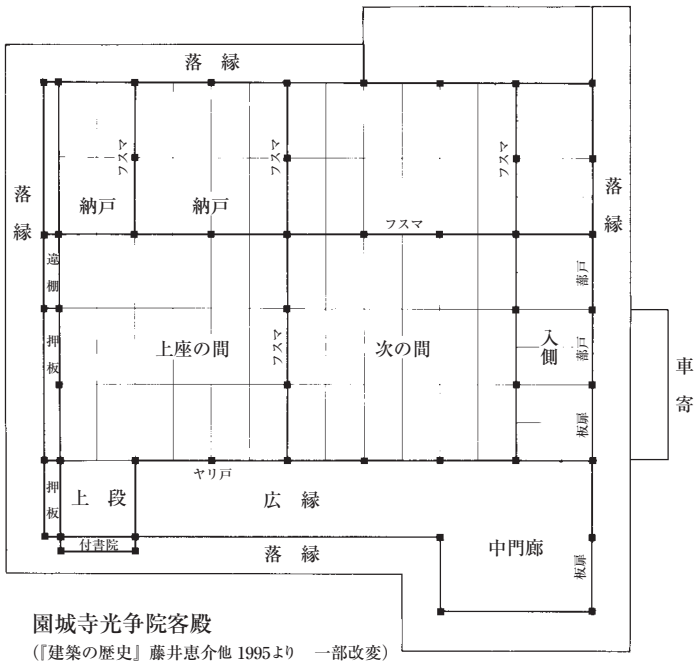
2号建物跡にみる間取りと建築様式

主屋としたＳＢ02には複雑な柱穴配置が認められ，一部建築用材の出土がみられた。そのためこれらから復元される建築様式を検討し，年代的な位置付けの一助とする。

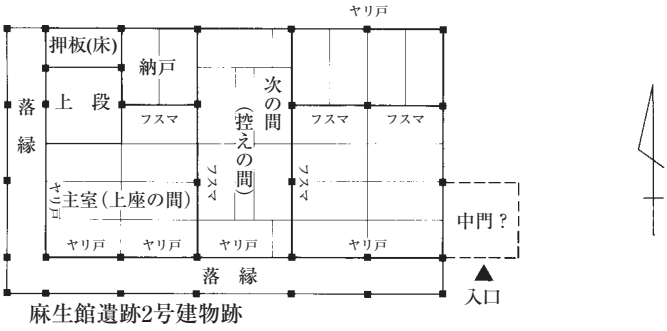
〔2号建物跡の建築様式的特色〕　以下①～⑦としてまとめる。①報告に際しては，南側５間×２間を身舎，北側５間×１間を庇としたが，ここでは一つの建物内部空間（桁行き５間×梁行き３間）として理解する。半間幅の縁が西，南側に取り付くという認識は変わらない。②設計規格はＡ１類に分類され，桁行き１間に対する梁行き１間の長さは１：１の等比となる。ただし，桁行き中央の１間のみ7.5尺分となり，幅が広がる。③Ｐ14・15の存在から建物中央に間仕切の存在が推定される。④建物北西部にはＰ23・24が存在し，非常に狭い空間を作り出している。⑤出土した柱材はいずれも角柱である。⑥木製礎盤に台鉋のものと考えられる工具痕が残る。⑦隣接して付属屋（ＳＢ04）が西側に並立する。

以上をまとめれば，②，③から内部空間は中央の１間により２分され，少なくとも一方は畳敷きと想定される。また，③からは間仕切による空間区分が推定され，⑤と併せて引違戸（襖障子，明障子）が用いられていたと考えられる。④により作り出される空間は狭く，特別の意図が考えられる。⑦の存在から西側は館の裏側に当たり，建物の入口は東側，調査区外に取り付くものと思われる。また縁を望む南側には庭が配されていた可能性が高い。⑥の推定が正しければ，本建物跡の年代は16世紀代以降となる。

〔建築様式的位置〕　中世以来寝殿造りが変化し，16世紀末に完成したとされる書院造り建築の特徴については，以下の点が挙げられる（太田1948，藤井1995，藤田1999など）。①建築構造の進展により，身舎，庇の区分がなくなり，建物内部が部屋割りされる。②畳敷きであり，天井が張られ，舞良戸や襖障子などの引



園城寺光争院客殿
（『建築の歴史』藤井恵介他 1995より　一部改変）



麻生館遺跡2号建物跡

図75　2号建物跡における部屋割りの復元

違戸が用いられる。③角柱を用いる。④接客用の部屋に座敷飾りを取り付ける。⑤客用と家族用に敷地，建物を分ける。また，藤田氏は完成された近世書院と比して過渡期に当たる室町期のものは，書院造りの一時期として「室町期書院造」あるいは「主殿造り」と定義すべきと述べている。

ＳＢ02にみられる様式的特徴は，ある程度上記の①～⑤を満たしており，建築様式の観点からは室町期の主殿と考えて齟齬はない。重複するＳＢ03は建物構造の複雑性といった点で劣り，ＳＢ02よりは先行するとの認識が導かれる。

〔部屋割りの復元〕　規模は大きく異なるが，初期の書院造り建物として現存する園城寺光浄院客殿（1601年再建）の平面図を参考とし，間取りの復元を試みたい（図75）。

主屋（主殿）において，「ハレの場（表向き）」となるのは南半であり，北半は生活の場（内向き）となる。また客は庭を望めるよう南を向いて正対するとされる（平井1998）。この理解から，やや桁行きの広がる中央１間により東西に分け，西側の12畳分を接客用の主室（上座の間）とした。12畳分のうち，北東を納戸，北西の狭い範囲を押板（床）とし，押板の手前に上段の間を想定している。中央の部屋は次の間（控えの間）とし，間仕切には引違いの襖障子を用いている。また，桁行きの寸法から畳は追い回し敷き，あるいは板敷きであろう。外に面した箇所には引違いの遣戸（舞良戸）が入れられる。入口は南縁入り，あるいは東側に中門が付く可能もある。西，南には落縁が廻り，建物の南側には庭が配されていたと考えられる。以上座敷飾りの有無は判然としないが，小規模ながら「ハレの場」として機能しえた建物であると理解される。

遺構群の変遷（図76）

位置的に重複するものに主屋としたＳＢ02・03，付属屋としたＳＢ04・05，その他ＳＢ10・ＳＡ01があり，該期は少なくとも２小期に分かれる。ただし，いずれも柱穴の切り合い関係はなく，直接に先後関係を認識することは不可能であった。従って，間接的ではあるが遺物，建物構造から変遷を推定しておきたい。

先に示した建築構造の複雑化の流れから，主屋はＳＢ03→ＳＢ02と変遷したと考えられる。この理解に立って，建物の軸線方向から付属屋の同時並存を勘案すると，

主屋	３号建物跡	→	２号建物跡
	‖		‖
付属屋	５号建物跡	→	４号建物跡

という変遷が推定される。ＳＢ07を除く10棟の建物跡，ＳＫ02・10は，その軸線方向から２分が可能であり，主屋・付属屋の変遷により　期，　期に整理することができた。

〔　期〕　ＳＢ03・05・06，ＳＫ10，ＳＤ01が認められ，ＳＢ06との関係からＳＥ02も含める。

堀内側に主屋のＳＢ03，軸線を直行させて付属屋のＳＢ05が位置する。また，南方には厨屋と推定したＳＢ06が位置し，東にＳＥ02を隣接させる。掘の北西外には貯蔵庫としてＳＫ10が設けられていた。そのためこの位置には木橋などが架けられていた可能性がある。

〔　期〕　ＳＢ02・04・08～12，ＳＫ02，ＳＤ01が認められる。さらに建物との位置関係からＳ

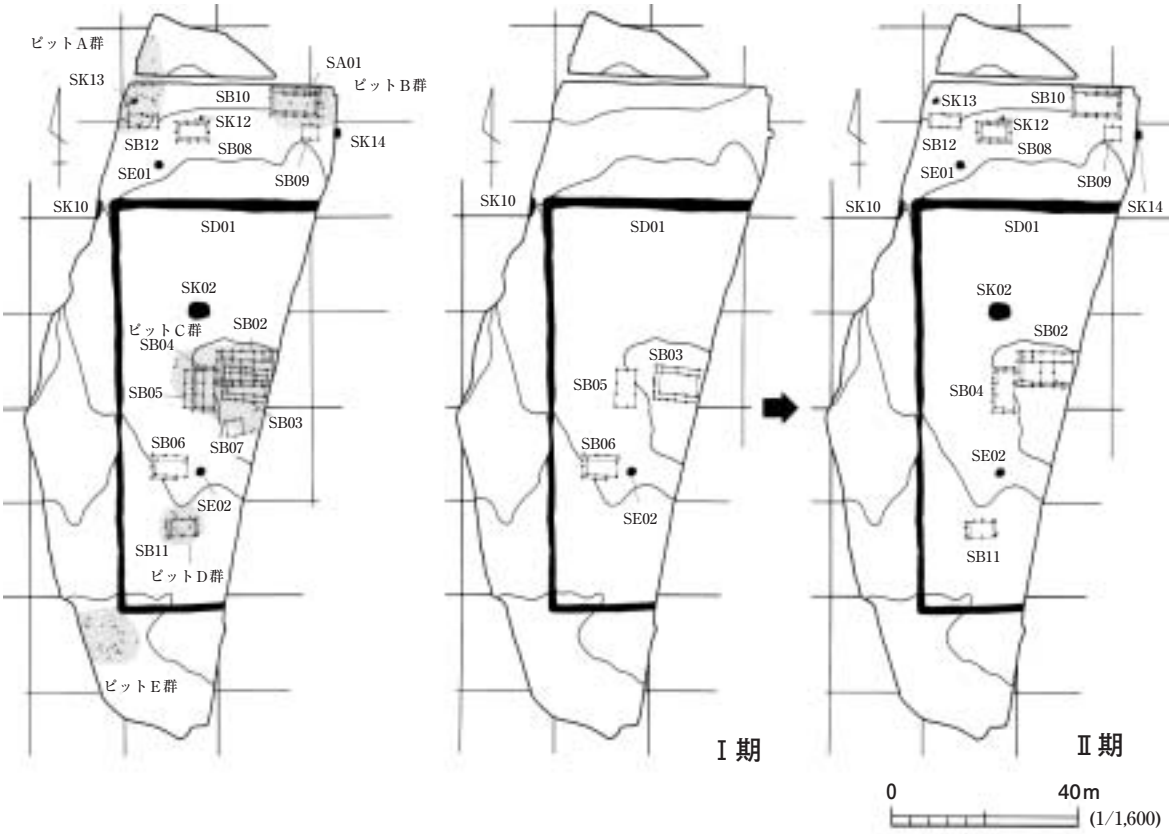


図76　中世の遺構群とその変遷

Ｋ12～14，ＳＥ01についても該期の遺構と認識する。また，ＳＥ02は埋土の堆積状況から廃絶時まで開口していたと考えられ，該期まで存続していたと判断した。

主屋（ＳＢ02），付属屋（ＳＢ04）は建て替えられ，若干規模を大きくしている。南方には家人の居住施設としたＳＢ11が位置する。主屋の北側，敷地内の裏に当たる位置には貯蔵庫としてＳＫ02が設けられている。またこの時期には堀の北側外にも遺構群の範囲が広がり，居住施設として公的なＳＢ10，私的なＳＢ08，厩屋としたＳＢ12が認められる。あるいは宗教的な施設であろうか。また建物に沿うようにＳＫ12～14，ＳＥ01が造られる。ただし，建物群の範囲はこれより北側には広がらない。堀の北側外には遺構群が存在し，掘の北辺には木橋が設けられていた可能性が高い。

以上，麻生館は連続した２小期が認められる。ただし，変遷を捉えられない遺構（ＳＢ07，ＳＡ01，ピット群など）も存在し，さらに前後に繋がる可能性は残る。

遺構の変遷からは，時期を経て館の規模，内容ともに発展していく姿が捉えられた。建物跡の建て替えは１度のみであり，館としての存続期間は比較的短いと考えられる。その年代的な幅は100年の内に収まるものと推定される。

３，麻生館跡の復元

館の形状と規模（図77）

〔占地〕　麻生館跡は西を田付川，東を姥堂川，南を日橋川に囲まれた微高地上に位置する。こ

の地の標高は183.00m前後と比較的高く，19世紀初頭に成立した『新編会津風土記』上遠田村・下遠田村の項によると，「此地巨川ニ傍ヘトモ，地形高ケレハ水ヲ引ヘキ便ナカリシ」とある。周囲は平坦であり，四方視界を遮るものは少ない。現在西に字上屋敷の集落があり，その傍らに白山神社，真福寺が位置する。北は県道を挟んで字第六と接している。

〔規模と形状〕　堀跡（１号溝跡）は北・西・南の３辺が確認される。西辺は全長87.6m（約48間），内法は85.4mを測る。北・南辺の東側は調査区外に延び，調査においてその規模は確認しえなかった。そのため，工事前の水田地割，空中写真において確認できる稲の生育状態（口絵１，図版３）を参考に，堀の規模，形状の復元を試みた。その範囲を示したものが図77左側である。また塩川町役場に保管されていた明治代の字切り図との対照を行い，ほぼ当時の地割と合致することを確認している。これを示したものが図77の右側であり，堀の一部は用水として利用されていたことが分かる。遺存状態の良い範囲では土層の上位に薄いシルト質土，その上に人為堆積土が確認され，後世における水利施設としての再利用，埋め戻しを伴う廃絶の痕跡として理解される。

以上推定復元の結果，北辺は東辺よりやや先に延び，推定長は73m（約40間）。東辺は軸線をやや西に向け北辺にぶつかり，推定長は86m（約47間）。南辺の推定長は67m（約37間）となる。内郭の推定面積は約5,300　であり，形状は僅かに北が狭くなるがほぼ方形に近い。よって麻生館跡は平地に存在する単郭式方形館であり，南北48間×東西40間となる南北に長い長方形状に復元される。

年代的検討

発掘調査によって得られた，年代的指標は以下の通りである。

①　単独ピット埋土，表土中から出土した瀬戸・美濃系天目茶碗２片。

②　建物跡から出土した柱材の形状。

③　建物跡出土，木製建築用材に遺存する工具痕。

④　主屋から推定される建築様式。

⑤　主屋，付属屋にみられる１度の建て替え。

①は瀬戸・美濃系大窯期前半と考えられ，15世紀末～16世紀前半の年代が推定される。②は全て角材であり，④で述べる建築様式に関連して，室町期，特に後半代が予想される。③から復元される工具には台鉋，大鋸（前挽大鋸），与岐などがある。台鉋痕は16世紀後半の遺物には確認され（一乗谷朝倉氏遺跡柱材，厳島神社棟札など），少なくとも16世紀代には普及したとされる。また大鋸による製材は室町期後半，15世紀後半以降に始まるとされ，与岐は近世以降，伐採に用いられることは少なくなる。よっておよそ15世紀後半～16世紀の幅が考えられる。④では，角柱の使用や間仕切の多用から引違戸の存在が想定され，複雑な柱穴配置から機能的に分かれた空間利用が看取できる。そのため寝殿造りから書院造りへの過渡期の幅で捉えられ，その幅の中でも書院造り的な要素が大きい。よって，室町期後半～戦国期の年代幅が予想される。⑤により，本館内部の遺構は概ね２小期に限定され，存続年代は比較的短かった可能性が高い。

以上，①～④から得られる年代観はそれぞれ矛盾せず，本館跡は15世紀末～16世紀代，室町末期

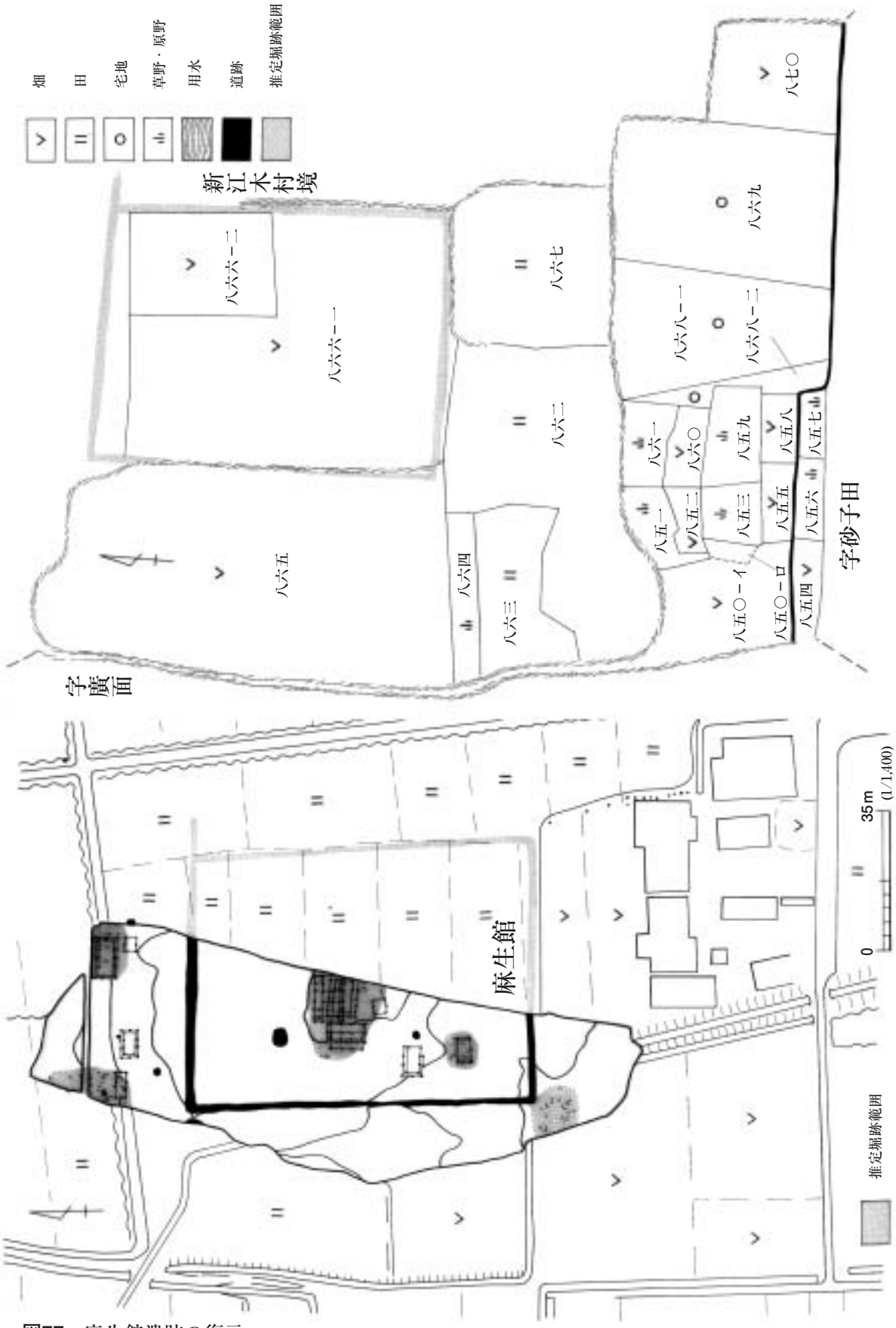


図77　麻生館遺跡の復元

～戦国期の幅で捉えられる。⑤により，まず100年には満たない短期間の存続期間が予想され，おそらく下限は16世紀代に収まると考えておきたい。

文献にみる麻生館跡

『新編会津風土記』の上遠田村・下遠田村の項には，上遠田，下遠田合わせて４箇所，そのうち上遠田には１箇所，館跡が存在したとの記載がみえる。

「館迹四　上遠田村ノ戌亥ノ方ニアリ，東西四十八間，南北四十間，何レノ頃ニカ湯上豊前某ト云者住セシトソ，今ハ畠トナル，又法林寺秀綱ノ後裔葛西三郎義貞住シ，後遠田五郎長綱領セシト伝レトモ詳ナラス」

また，湯上豊前某という名は，麻生館跡の西に位置する真福寺についての記載にもみえる。

「真福寺　境内東西二十六間，南北十五間半，年貢地　上遠田村ニアリ，宝田山ト号ス，何レノ頃ニカ湯上豊前某トイフ者草創スト云フ」

この内容にみえる館跡は，復元される麻生館の規模と合致する。しかし，東西，南北の長さが逆となる。またこの館は上遠田村の戌亥（北西）の方角にあるとされ，現在の上遠田集落は麻生館遺跡の南西であり，これが上遠田村と思われるため位置が合わない。また，上遠田集落の北西部には，湯上豊前某が創建したという真福寺が現存し，その傍には館を思わせる不自然な方形地割が認められる。集落の範囲とその周辺には現在「上ノ屋敷」，「前田」，「大堀向」，「殿田」など，館を思わせる地名が存在し，『新編会津風土記』にみえる上遠田の館跡は，麻生館ではない可能性が高い。なお福島県の中世城館跡（佐々木他1988）では，上遠田館としてこの地を候補に考えているようである。

また，『新編会津風土記』と前後して成立したと見られる『会津鑑』には，

「柵　東西二十六間南北三十間葛西三郎義貞住此人法林寺秀綱後胤也」

とあるが，これは規模において異なる。

この他にも，麻生館跡の内容と合致する記載は見当たらない。『新編会津風土記』中の館跡とは規模が合致するため可能性が全く否定されるものではないが，近世には既に麻生館の存在は忘れ去られていた可能性が高い。

歴史的背景と麻生館

文献や伝承が全く残らないため，本館跡に居住した人物についても判然としない。室町期の前半には，位置的にこの周辺は新宮氏や北田氏の勢力下にあったものと考えられる。『会津鑑』には「應永十九年（1413）九月三日　遠田合戦」という記載もみられ，蘆名氏を交えた抗争の舞台となっていたと思われる。その後，室町末期（1502年）には周辺の常世氏，西勝氏，三橋氏，小荒井氏が蘆名氏に追われており，麻生館遺跡一帯を支配した領主もこれに従った可能性がある。調査成果から，本館跡は主に16世紀代に機能したと推測され，想像をたくましくすれば，蘆名氏にこれら小領主が追われた後遠田の地に入り，数十年の短期間この地を領した人物の居館とも考えられる。上記の通り，歴史的にみて周辺に有力な氏族が居住した痕跡はなく，この人物は現在の大字程度かそれ以下の所領を有した土豪クラスであった可能性が高い。ただし主屋（主殿）は規模，内容から「ハレの

場」としての機能を十分に充足しえた建物と考えられ，当時，下層の武家館にまで儀礼や形式を尊重する風が存在し，館内において具現化されていたことを示している。　（横須賀）

第３節　ま　と　め

調査成果から平安時代（９世紀後半），及び中世末（15世紀末～16世紀）の２時期にわたる遺跡であることが明らかとなり，最後に本遺跡における変遷を概観してまとめとしたい。

平安時代に至るまで人々の営みはみられない。周辺一帯は河川に囲まれた微高地の中央部にあり，広大な平坦地である反面水資源の確保が困難であったためと考えられる。平安時代に入ると，本遺跡を含め，田付川との間に大規模な遺構群が出現している。これは，耶麻郡の分置に伴う官衙関連施設の設置と力を蓄えた有力官人層の活躍によるものと想定され，本遺跡における遺構群についてもその歴史的動きの一環にあるものと理解される。

その後一時断絶があり，周辺は田畑に帰する。中世末期に単郭方形の堀に囲郭された館（麻生館）が築かれ，土豪クラスの小領主が居住したと推測される。館は主屋（主殿）を中心に内容を発展させながら数十年間の短い期間存続するが，16世紀中に何らかの理由で廃絶され，敷地周辺は三たび田畑に帰する。館の痕跡は僅か小字名にのみ残り，現代に伝わったようである。　（横須賀）

註

（１）　ただし，胎土の違いから本遺跡の須恵器に占める大戸古窯産の割合は低く，多くは周辺の在地窯で焼かれたものと推定される。特に位置的に近い喜多方市西新田窯跡産の製品が大量に含まれている可能性が高い（山中雄志氏の御教示による）。

（２）　ただし，荒木氏が類例として挙げた矢玉遺跡ＳＢ18，屋敷遺跡ＳＢ18など身舎部分と間尺，柱穴規模のほぼ等しいものは，庇本来の機能である内部空間拡張を意図したものと考えられ，厳密に区別すべきであろう。

（３）　先に指摘したＳＢ01の非対称柱穴（Ｐ15・Ｐ17）の存在，ＳＢ13における柱穴の一部重複（Ｐ２・Ｐ３），ＳＢ14付帯施設における柱穴の重複（Ｐ３・Ｐ５）。

引用・主要参考文献

会津藩　編　1809　『新編会津風土記』巻54　歴史春秋出版本（第３冊　2001）

荒木　隆　2000　「古代会津郡東半部（会津若松市域）における奈良・平安時代掘立柱建物跡の特質」『若松北部県営ほ場整備事業発掘調査報告書』　会津若松市教育委員会

石田　明夫　1994　『会津大戸窯　大戸古窯跡群発掘調査報告書（遺物編）』　会津若松市教育委員会

猪狩忠雄・高島好一　他　2002　『県道北迫下北泊線内遺跡調査報告１　堂ノ原遺跡』　広野町教育委員会

植村泰徳・和田　聡　2002　「内屋敷遺跡発掘調査概報」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書』６　塩川町教育委員会

遠藤彌三郎・飯村　均　他　1994　「猪久保城」『東北横断自動車道遺跡調査報告』28　福島県教育委員会

小野正敏・飯村　均　他　2001　『図解・日本の中世遺跡』　東京大学出版会

太田　博太郎　1948　『図説　日本住宅史』　彰国社

垣内　和孝　2002　「陸奥国安積郡小川郷と東山田遺跡」『福島考古』43

木本元治・藤谷　誠　他　1991　「屋敷遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告』12　福島県教育委員会

久留島　典子　2001　「一揆と戦国大名」『日本の歴史』13　講談社

坂上　康俊　2001　「律令国家の転換と「日本」」『日本の歴史』05　講談社

佐々木　修　他　1988　『福島県の中世城館跡』　福島県教育委員会

菅原　祥夫　1998a　「陸奥国南部における富豪層居宅の倉庫群」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』　奈文研

菅原　祥夫　他　1998b　「小又遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告書』２　福島県教育委員会

高橋　圭三　他　2002　「河股城発掘調査報告」『川俣町文化財調査報告』19　川俣町教育委員会

高橋　信一　他　1987　「蛭館跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告』23　福島県教育委員会

戸田　芳美　1967　『日本領主制成立史の研究』岩波書店

中村　雄三　1968　『図説　日本工具史』　新生社

成田　寿一郎　1984　『木の匠―木工の技術史』　鹿島出版会

向井　吉重　1672　『会津旧事雑考』（『会津資料叢書』４・７・８　会津資料保存会　1917）

萩生田和郎・石田明夫　他　1999　「矢玉遺跡」『若松北部地区県営ほ場整備発掘調査報告書』　会津若松市教育委員会

平井　聖　1998　『対訳　日本人のすまい』　市ヶ谷出版

福島県考古学会中近世部会　2000　『東北地方南部における中近世集落の諸問題―掘立柱建物跡を中心として―』

藤井恵介・玉井哲雄　1995　『建築の歴史』　中央公論社

藤沢　良祐　1991　「瀬戸古窯址群―古瀬戸後期様式の編年―」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』

藤沢　良祐　1993　『瀬戸市史』陶磁編四　瀬戸市

藤田　盟児　1999　「中世　　鎌倉　南北朝　室町―住宅―」『日本建築様式史』　美術出版社

藤村　泉　1991　「武士の住居」『日本の美術』296　至文堂

羽柴　直人　2001　「柱間寸法が語るもの」『掘立と竪穴　中世遺構論の課題』　東北中世考古学会

山中　雄志　2000　「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相（前・後編）」『福島考古』40・41

吉岡　泰英　1992　『一乗谷朝倉氏遺跡環境整備報告』　福井県立朝倉氏遺跡資料館

吉岡泰英・月輪　泰　他　1993　『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』　福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

和田　聡　1997　「鏡ノ町遺跡Ａ」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書』　塩川町教育委員会

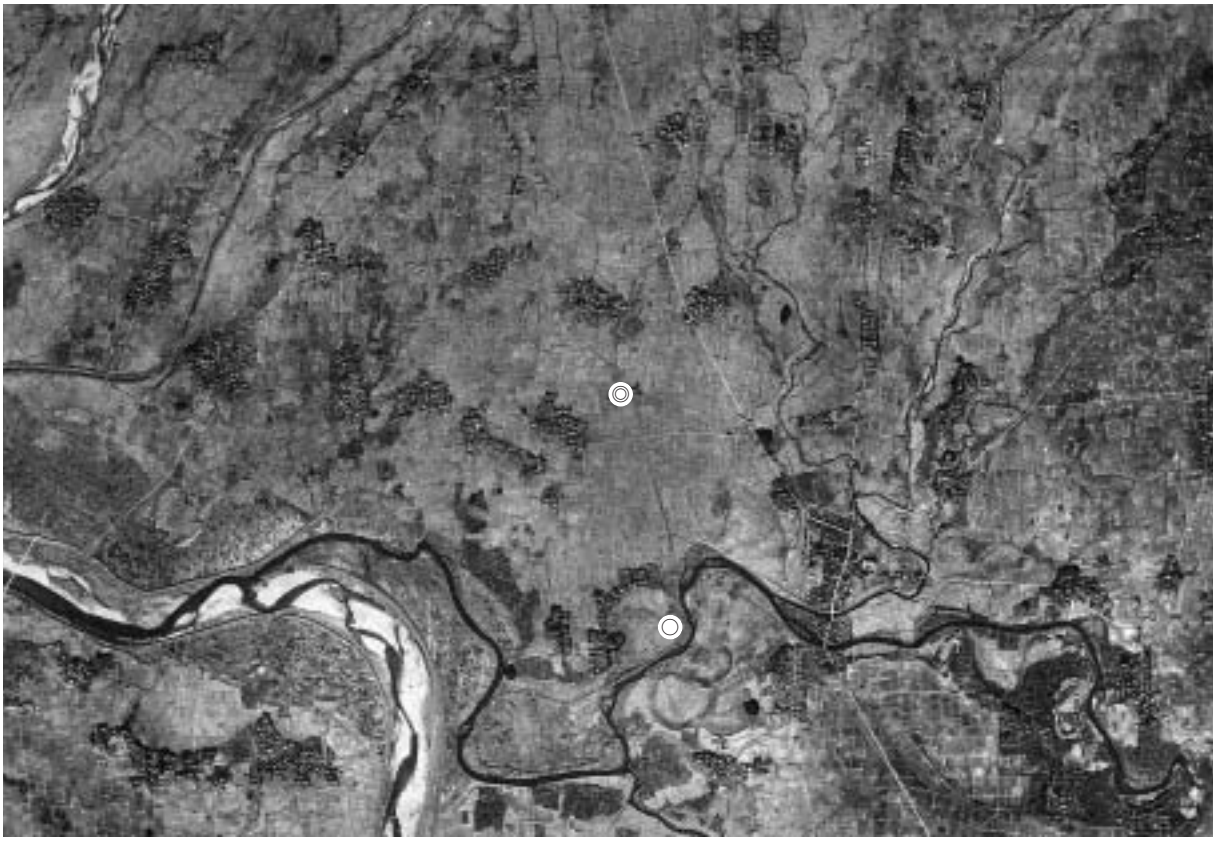
和田　聡・管　智子　他　1998　「舘ノ内遺跡」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書』３　塩川町教育委員会

和田聡・植村泰徳・管智子　1999　「古屋敷遺跡」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書』４　塩川町教育委員会

和田聡・植村泰徳・管智子　2001　「鏡ノ町遺跡Ｂ」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書』５　塩川町教育委員会

不詳　不詳　『会津鑑』巻之34　歴史春秋出版本（四巻　1983）

写　真　図　版



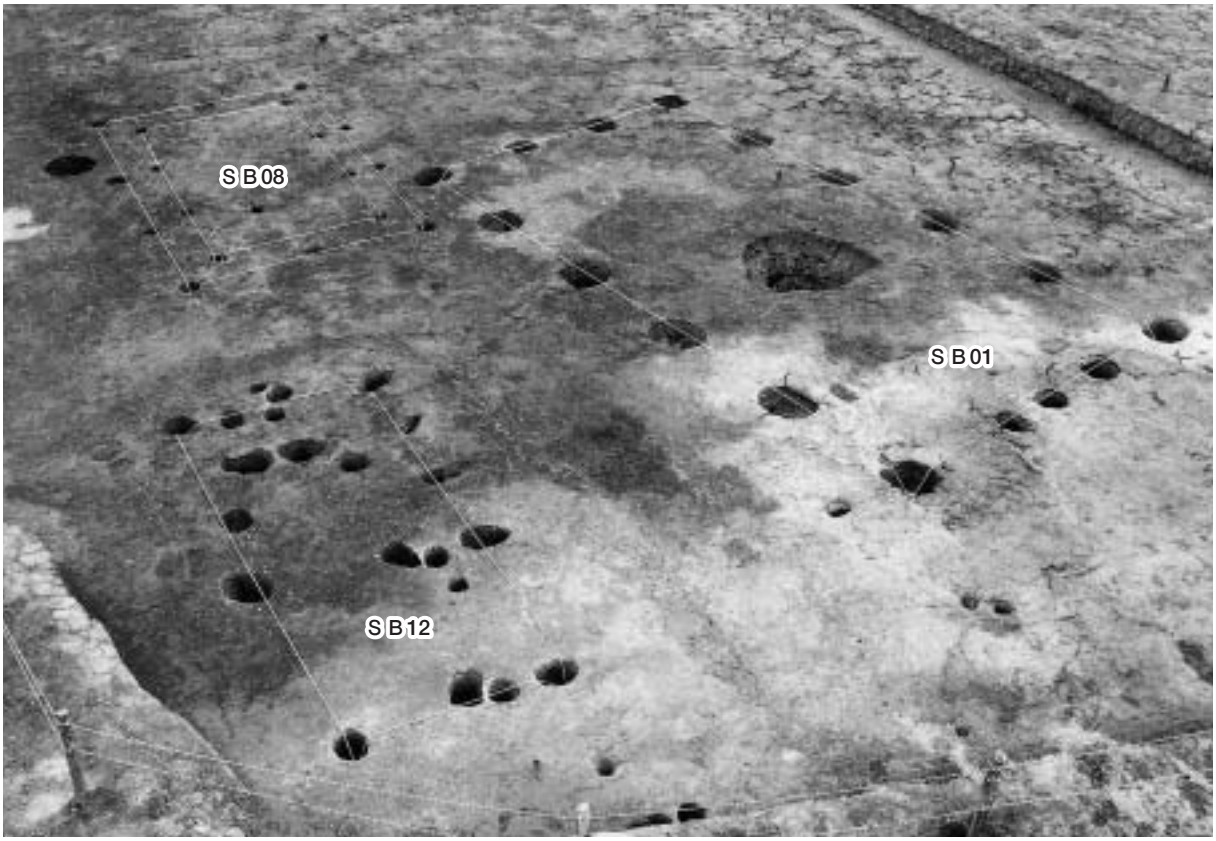
1　麻生館遺跡周辺航空写真（1947年）

2　麻生館遺跡周辺航空写真（1963年）

◎：麻生館遺跡
○：荒屋敷遺跡

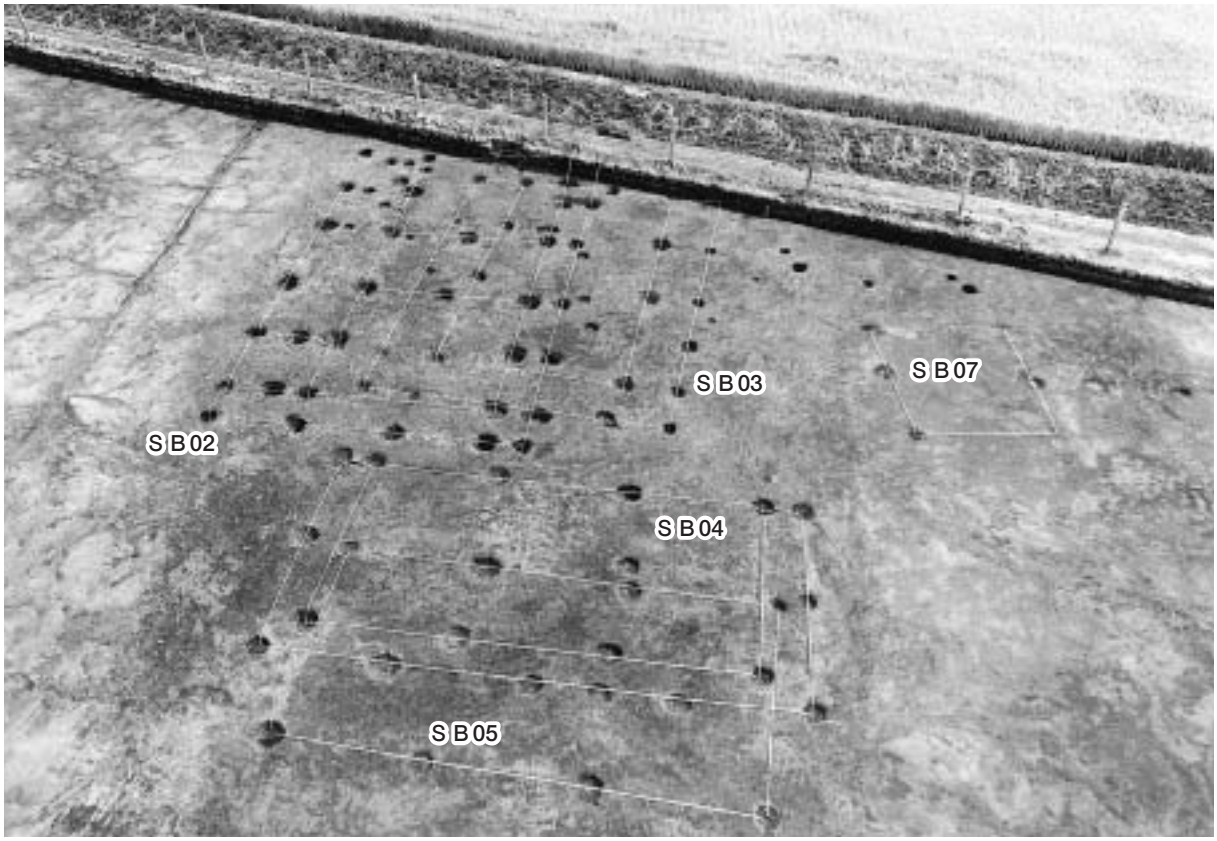
3　調査区全景（上空から）

4　基本土層



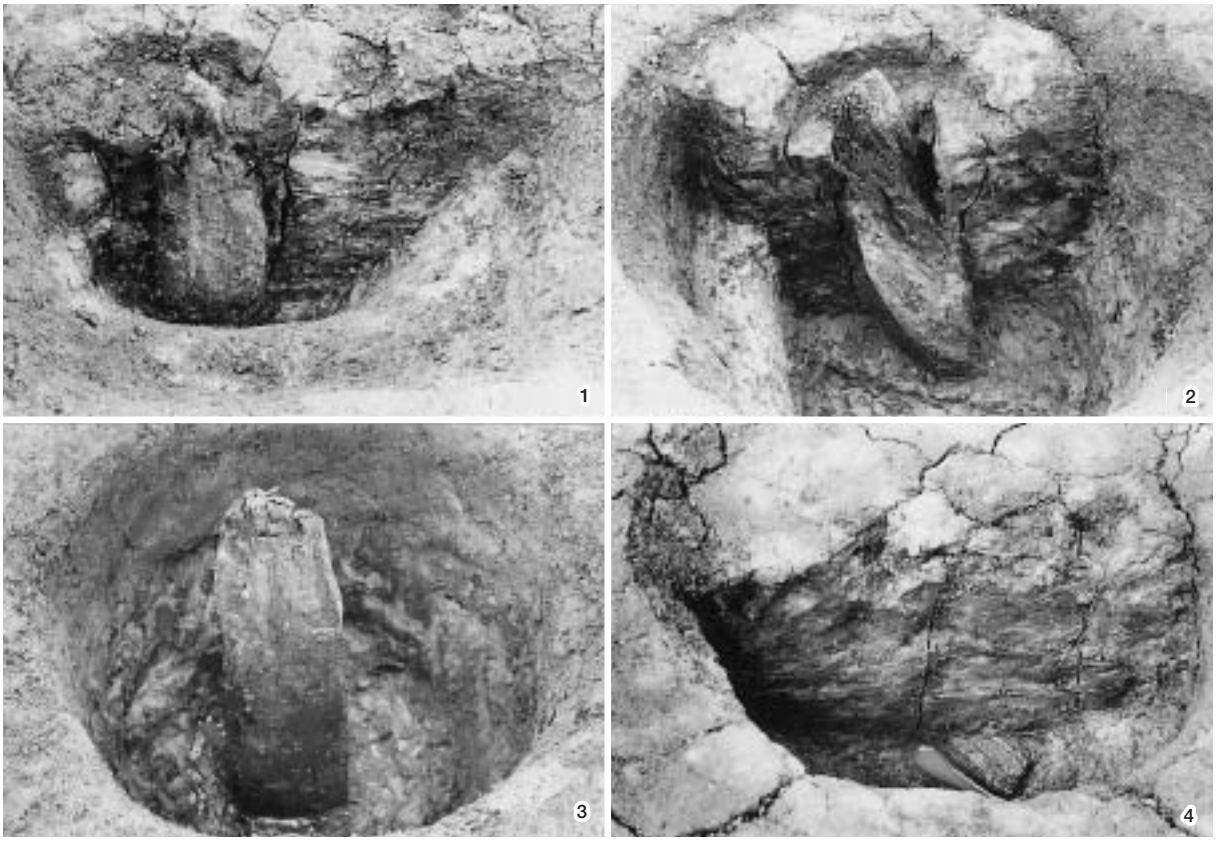
5　1・8・12号掘立柱建物跡（北西から）

6　1号掘立柱建物跡全景（北東から）



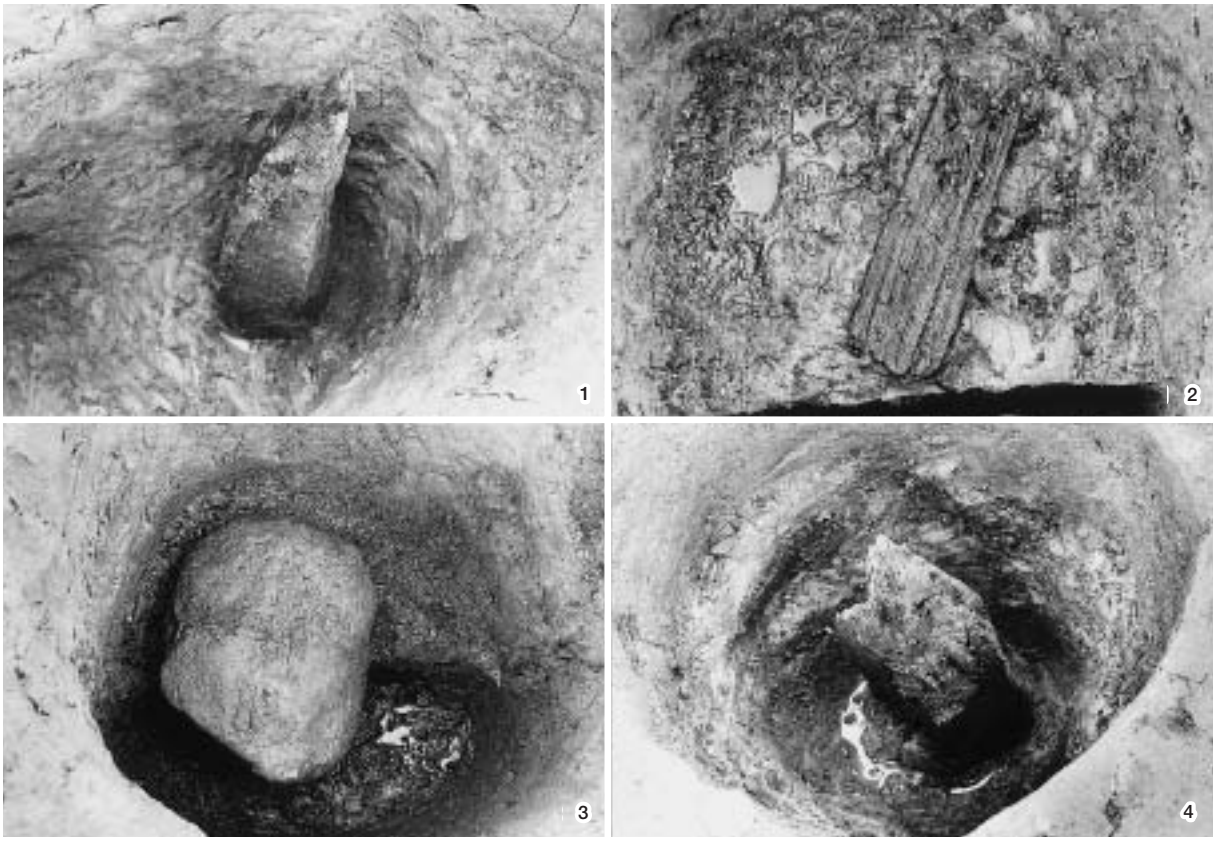
7　2～5・7号掘立柱建物跡（西から）

8　2号掘立柱建物跡全景（西から）



9　２号掘立柱建物跡細部（１）

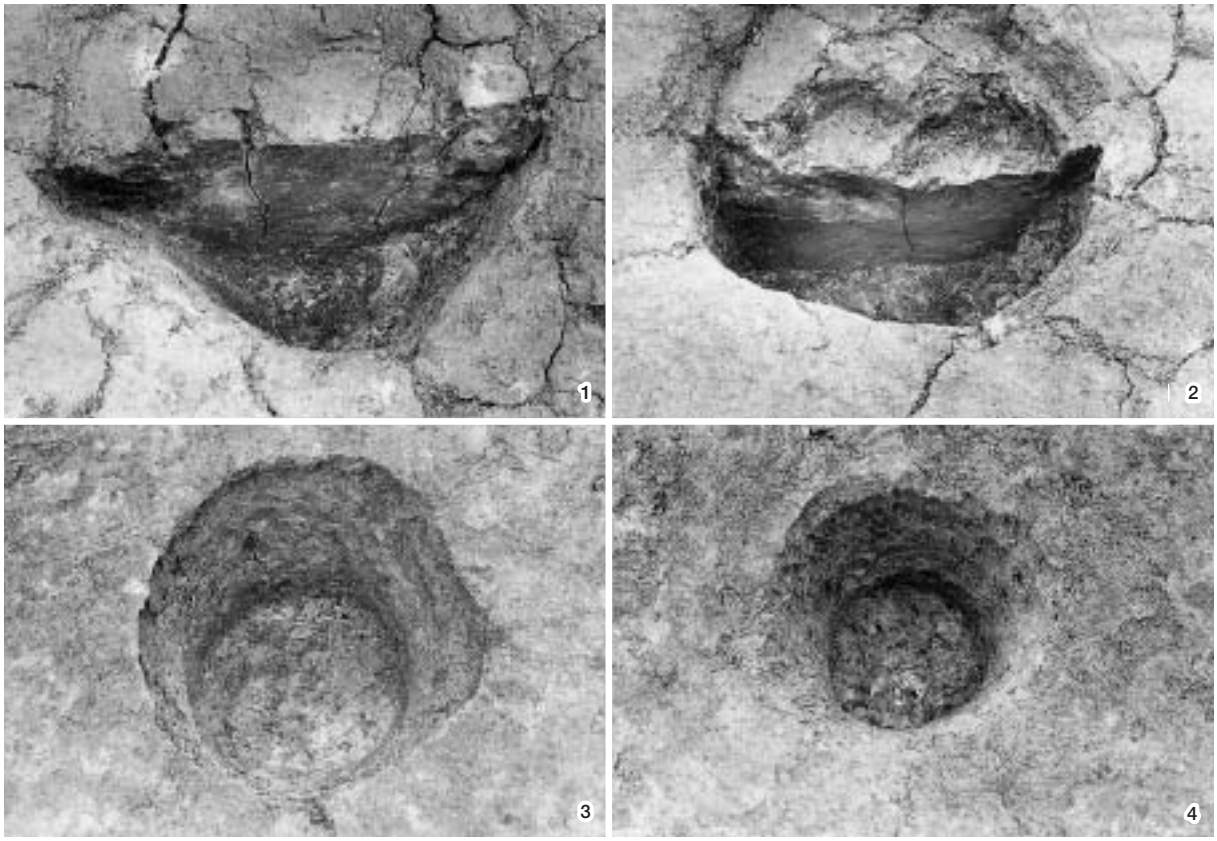
1　Ｐ３土層（北から）　**2**　Ｐ５土層（北から）
3　Ｐ６柱材（北から）　**4**　Ｐ14土層（南から）



10　２号掘立柱建物跡細部（２）

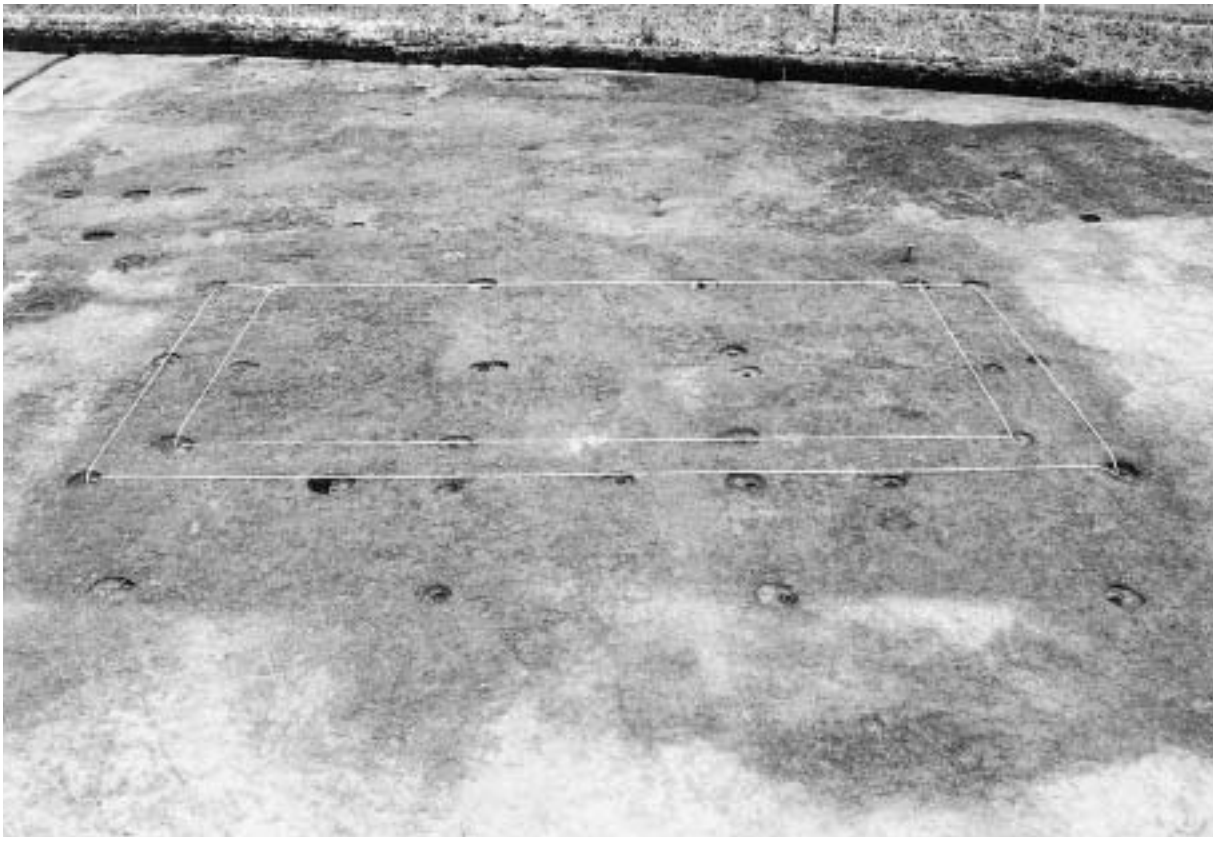
1　Ｐ19柱材（南から）　**2**　Ｐ20木製礎盤（北から）
3　Ｐ23石製礎盤（西から）　**4**　Ｐ28柱材（南から）

11　3号掘立柱建物跡全景（北から）

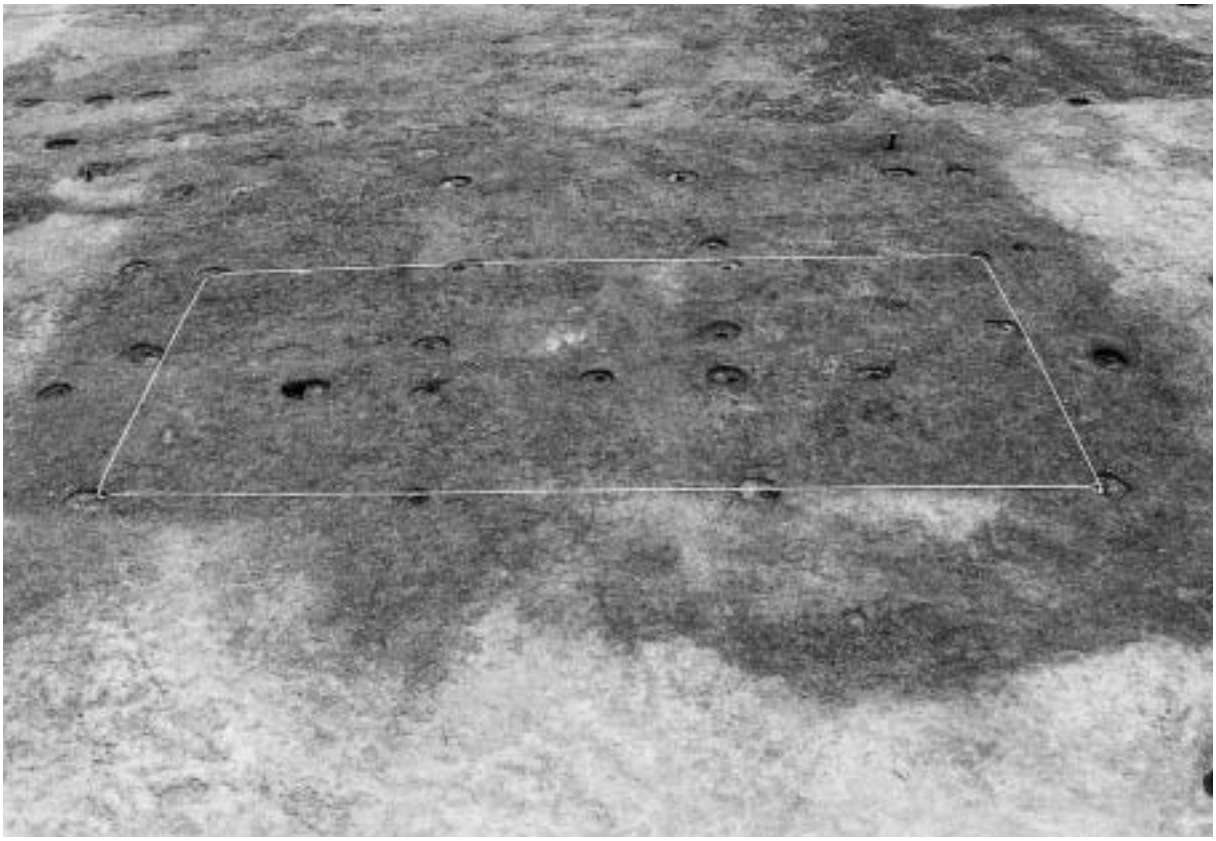


12　3号掘立柱建物跡細部

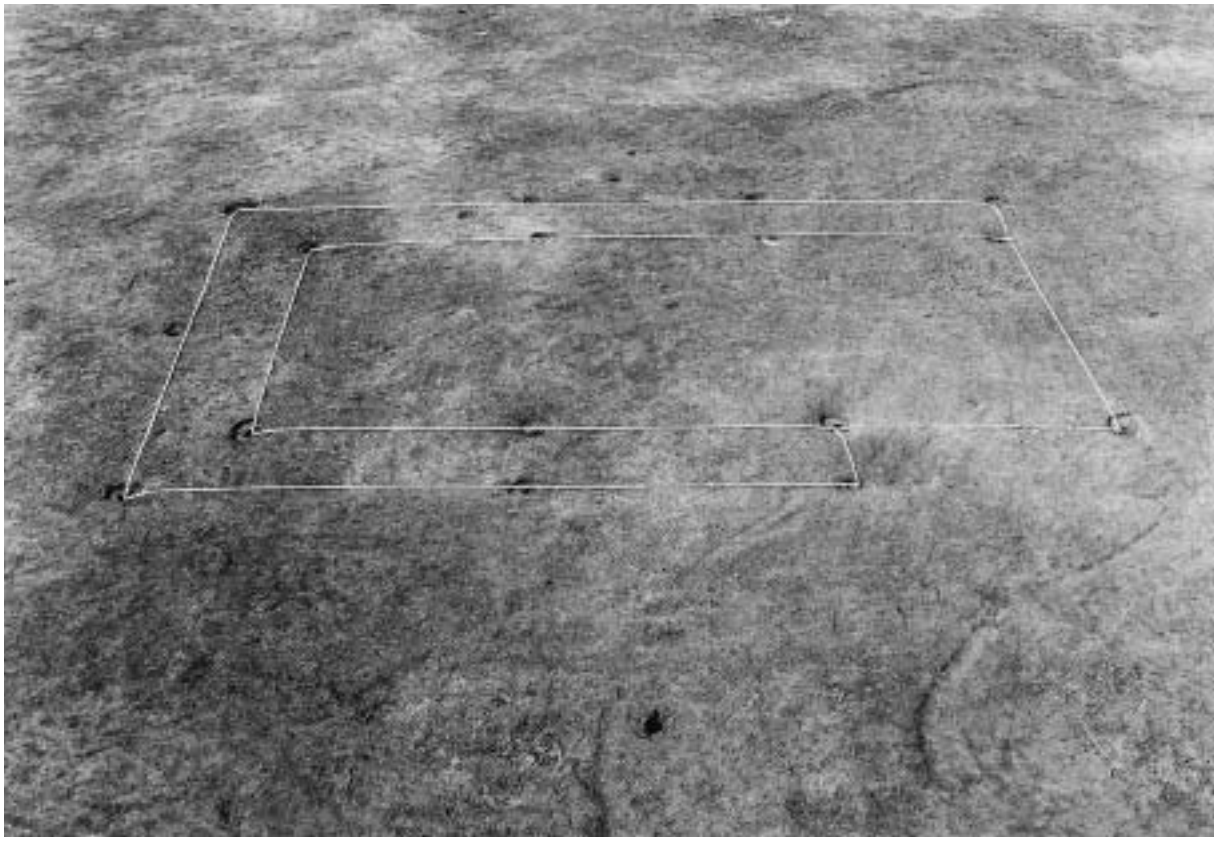
1　P 1土層（北から）　**2**　P 4土層（南から）
3　P 6完掘（南から）　**4**　P 17完掘（南から）



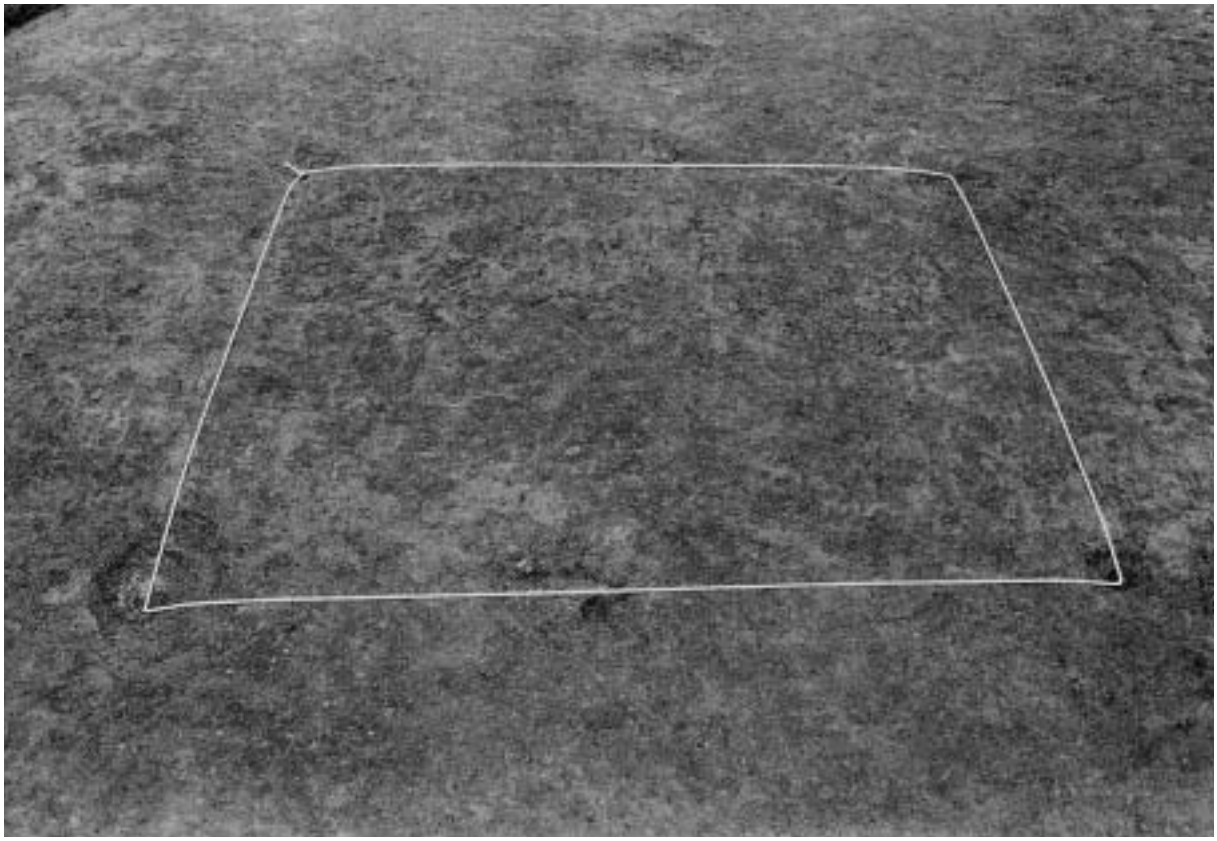
13　4 号掘立柱建物跡全景（西から）



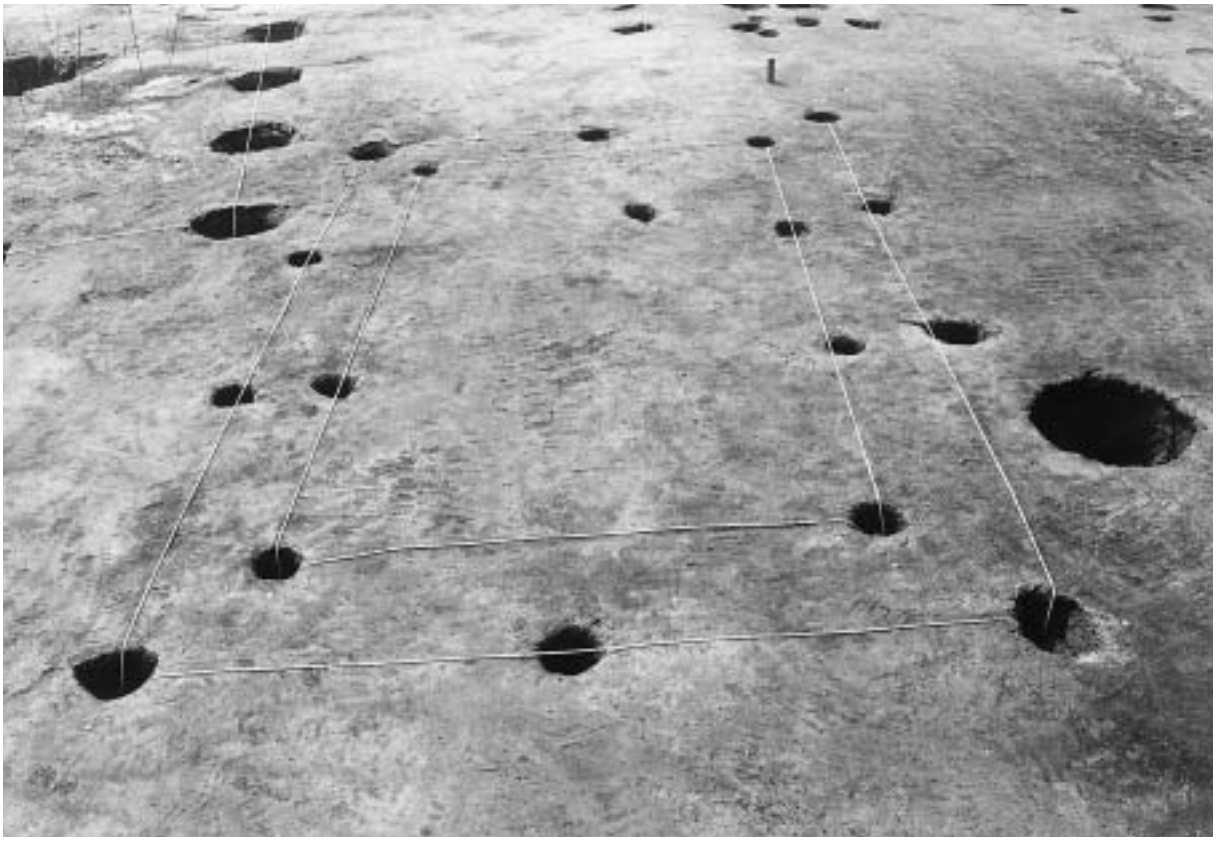
14　5 号掘立柱建物跡全景（西から）



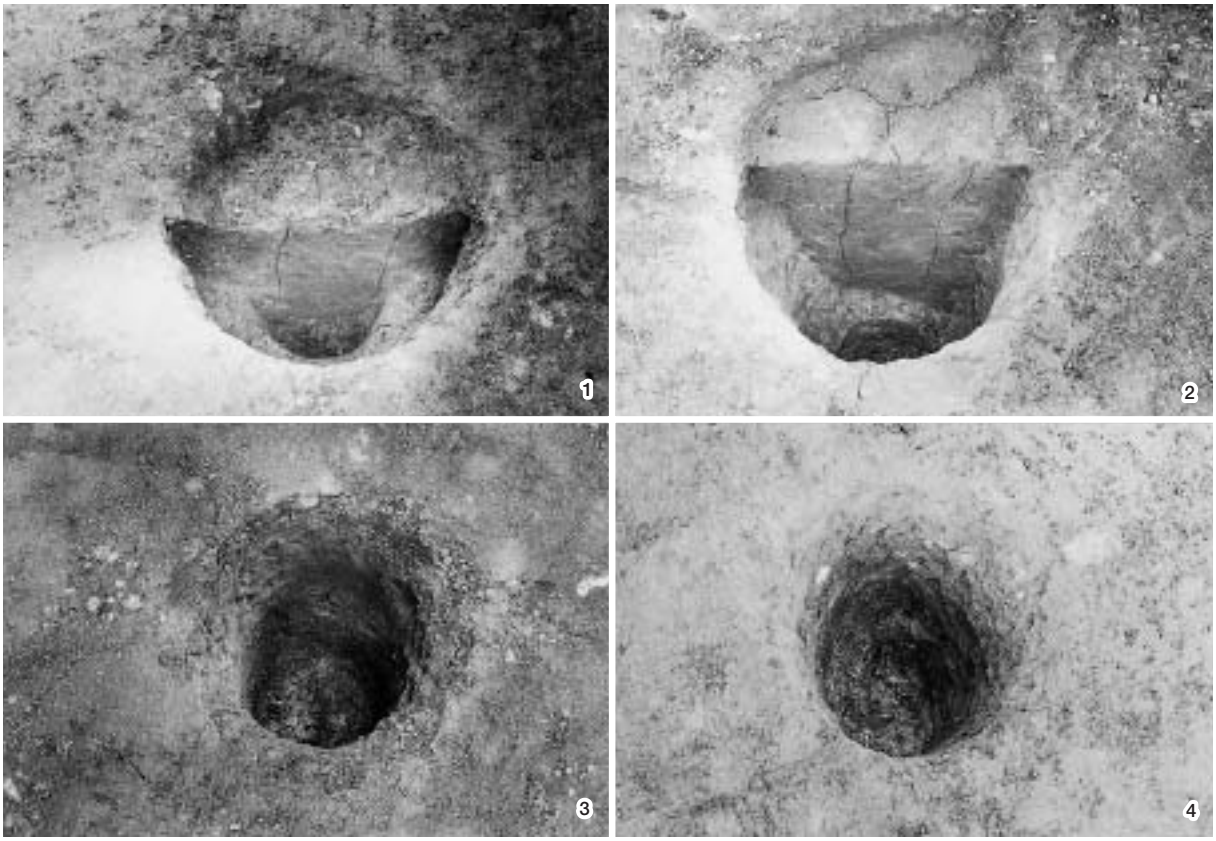
15　6 号掘立柱建物跡全景（南から）



16　7 号掘立柱建物跡全景（北西から）

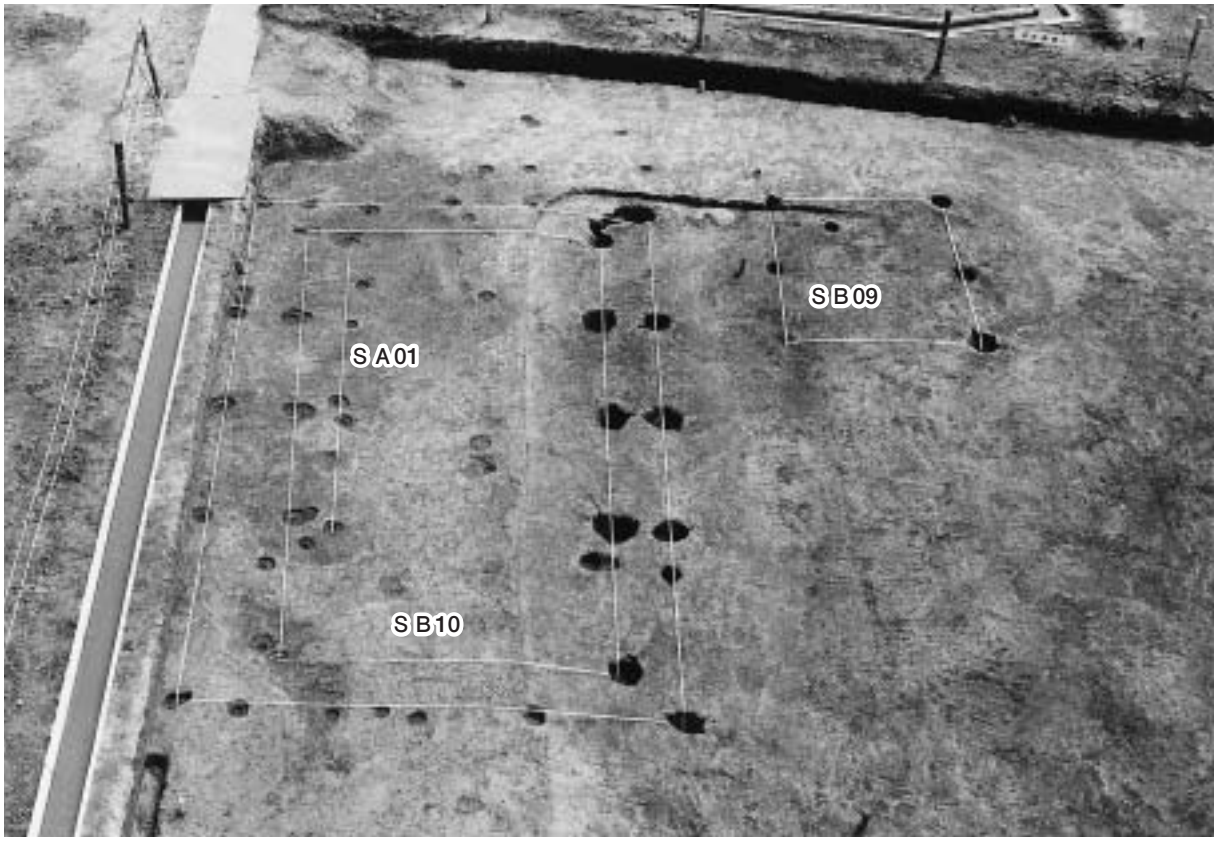


17　８号掘立柱建物跡完掘全景（東から）

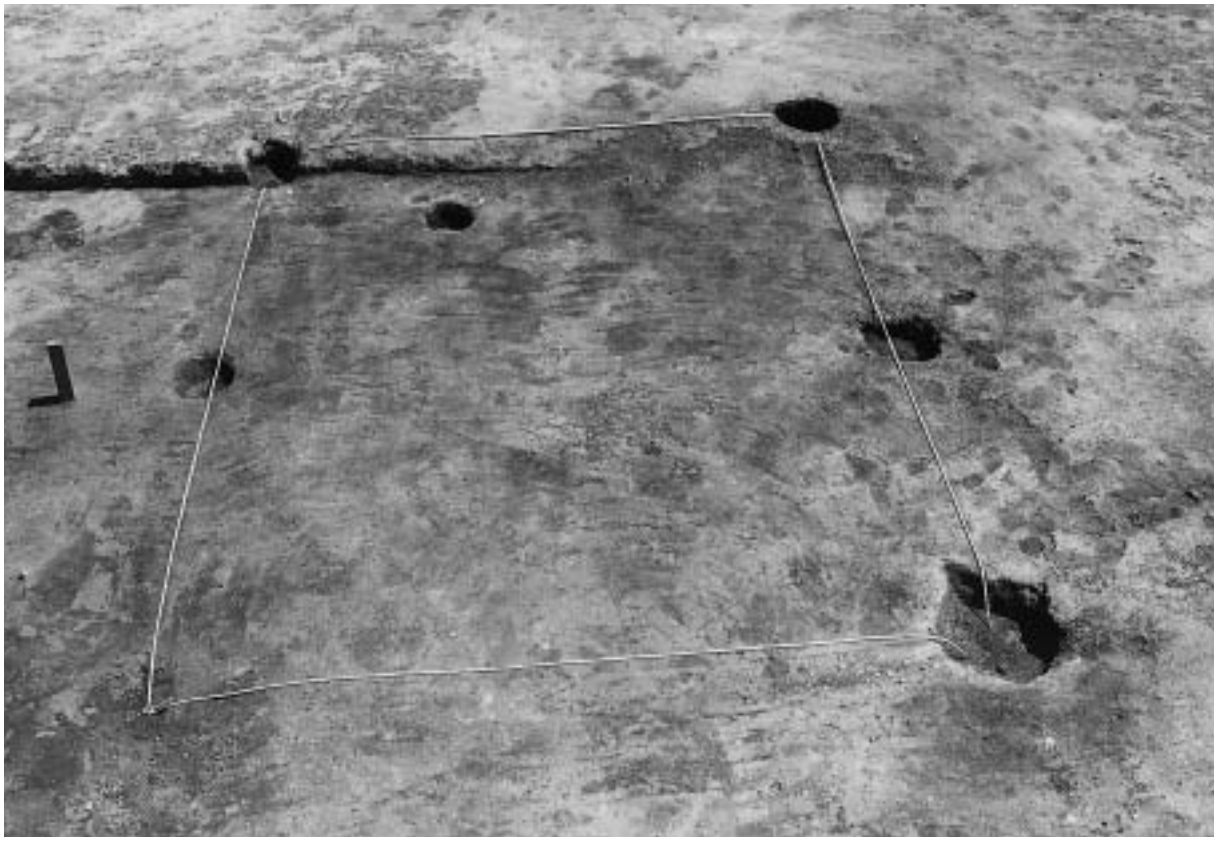


18　８号掘立柱建物跡細部

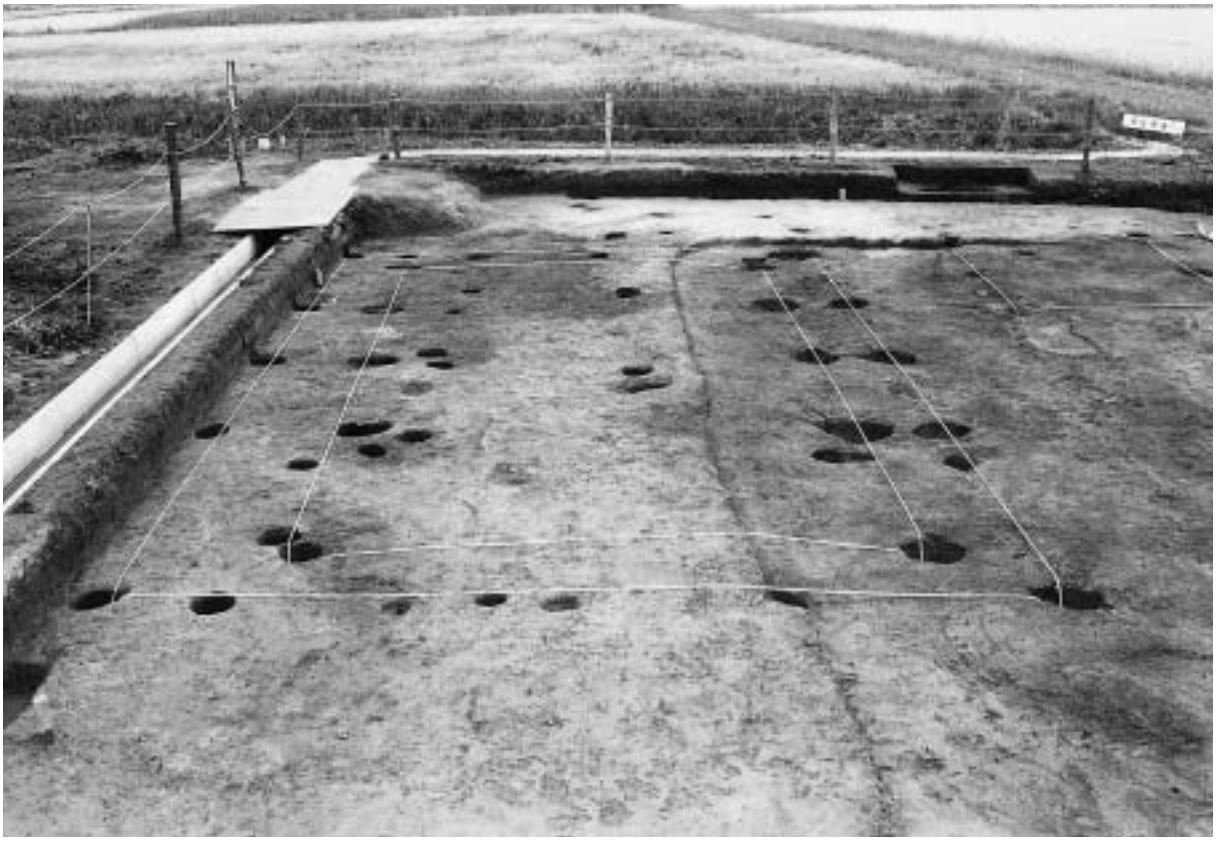
1　Ｐ４土層（北から）　**2**　Ｐ11土層（北から）
3　Ｐ８完掘（東から）　**4**　Ｐ13完掘（南から）



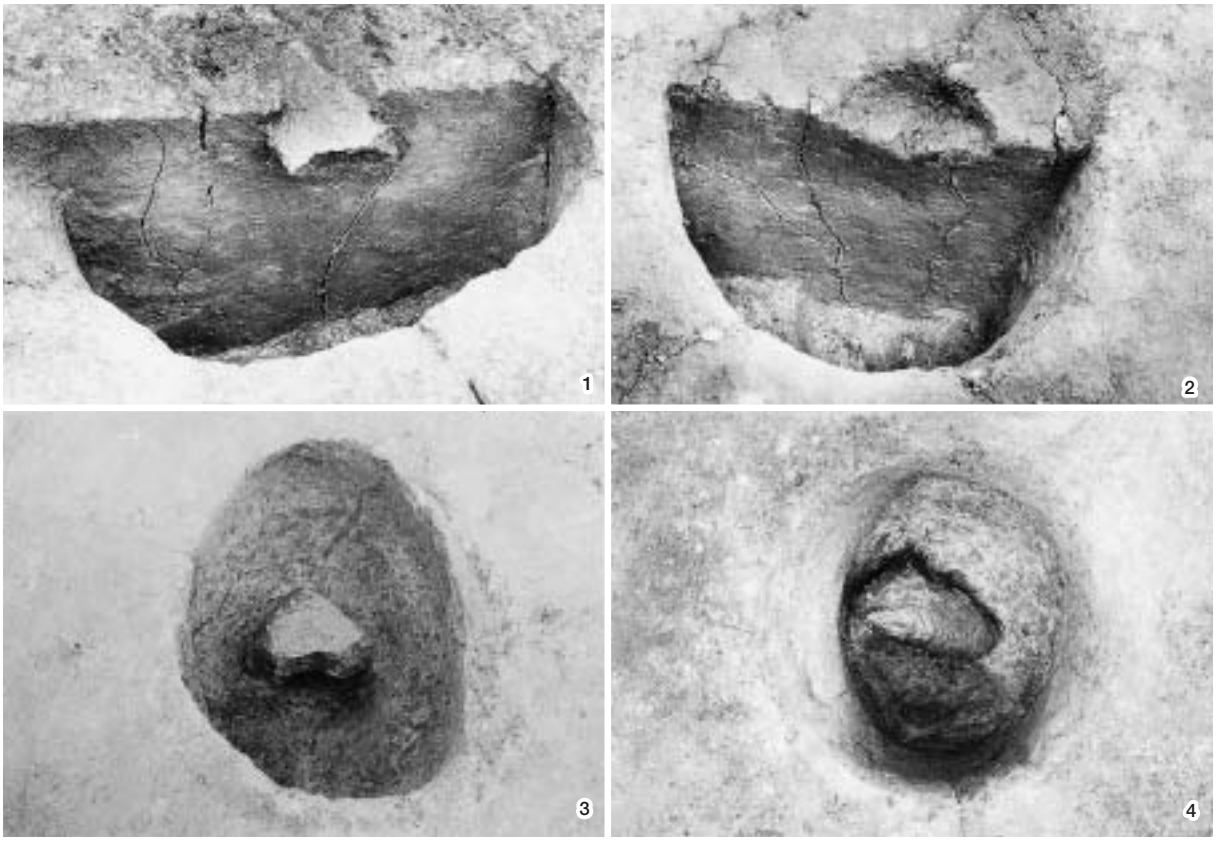
19　9・10号掘立柱建物跡，1号柱列跡（西から）



20　9号掘立柱建物跡完掘全景（西から）

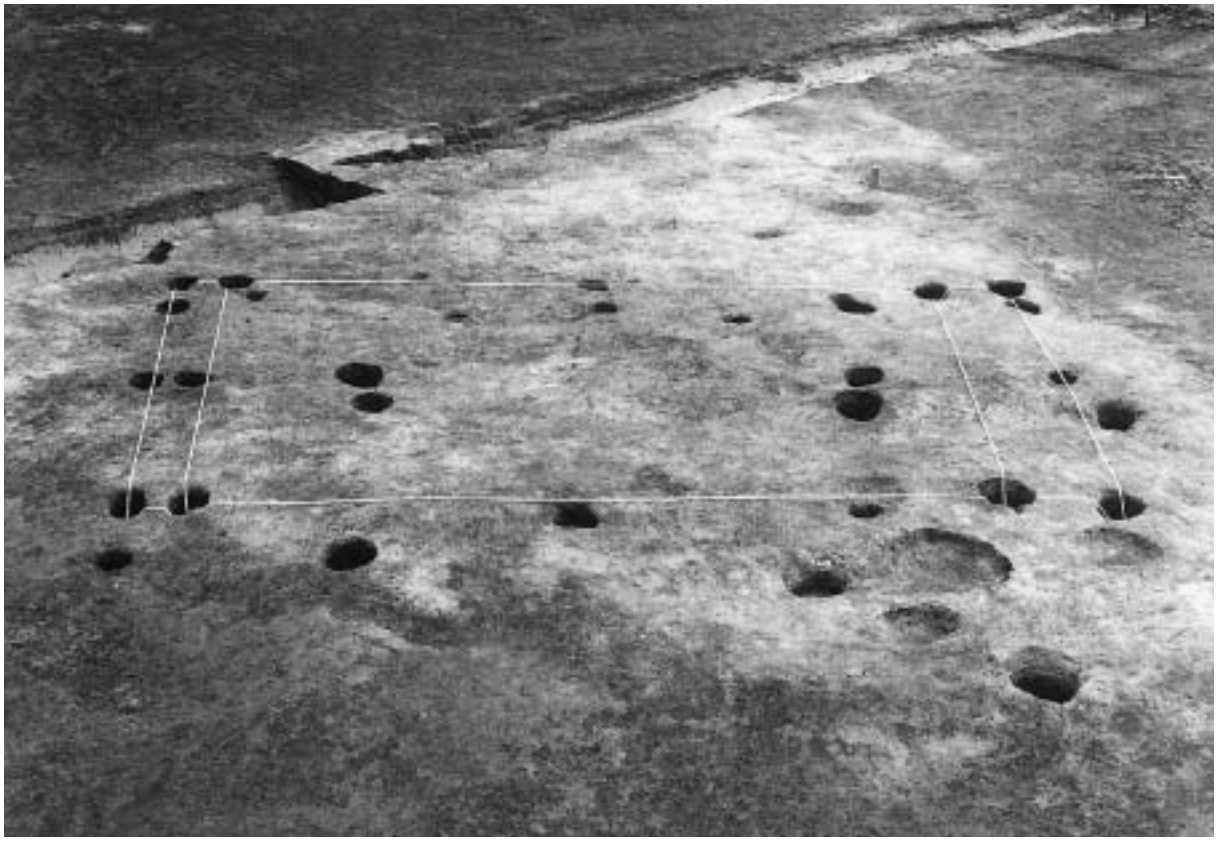


21　10号掘立柱建物跡完掘全景（西から）

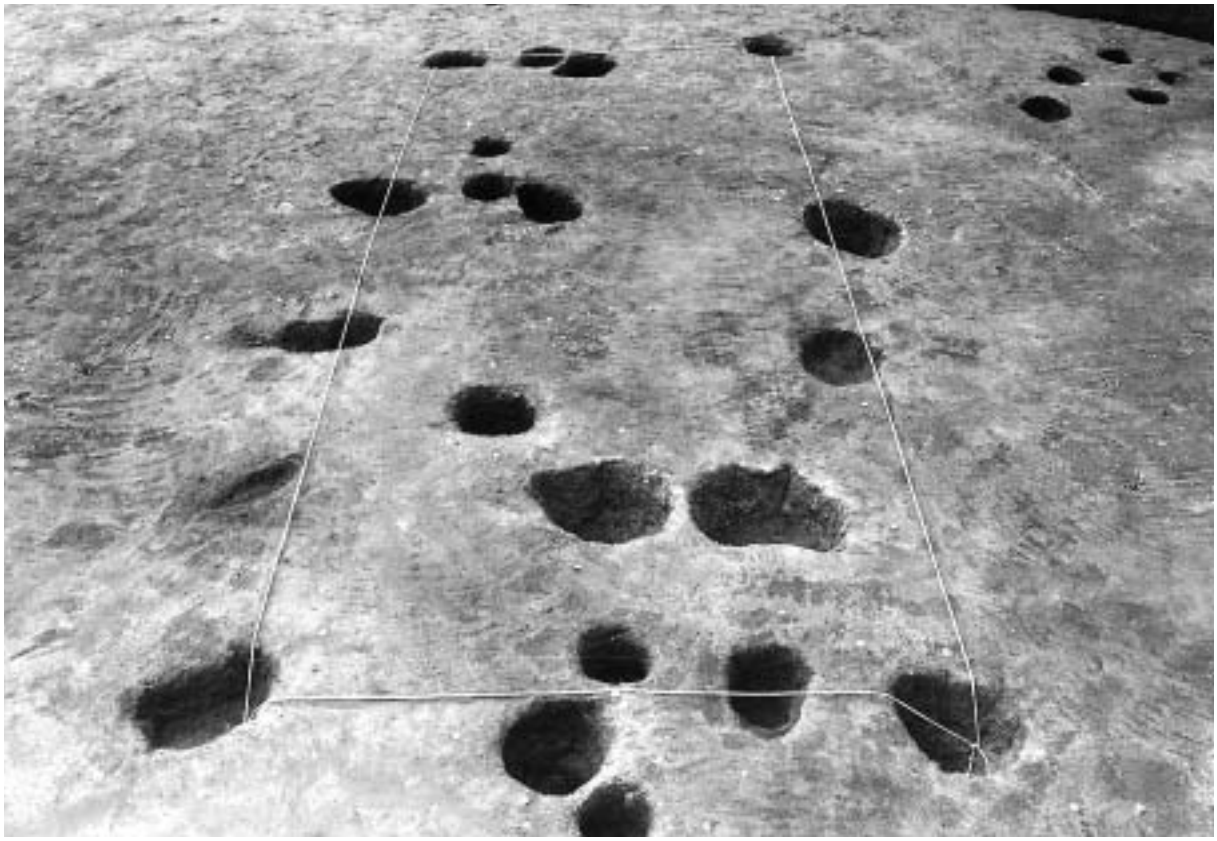


22　10号掘立柱建物跡細部

1　Ｐ３土層（南から）　**2**　Ｐ10土層（南から）
3　Ｐ４完掘（南から）　**4**　Ｐ９完掘（南から）

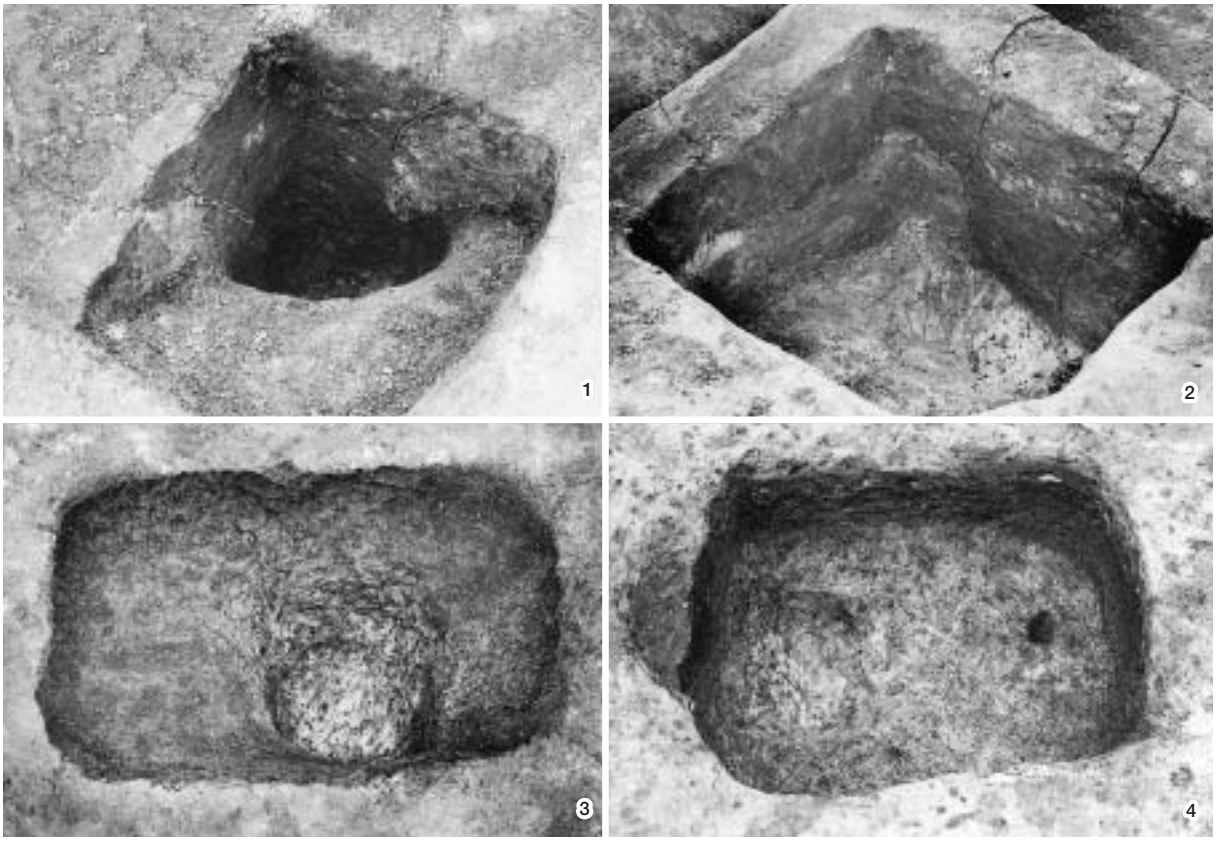


23　11号掘立柱建物跡完掘全景（北から）



24　12号掘立柱建物跡完掘全景（東から）

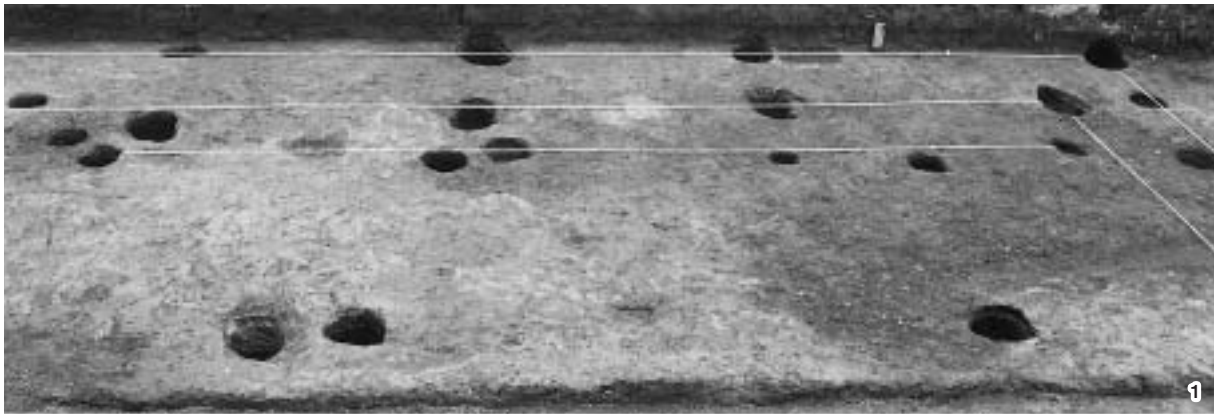
25　13号掘立柱建物跡完掘全景（西から）

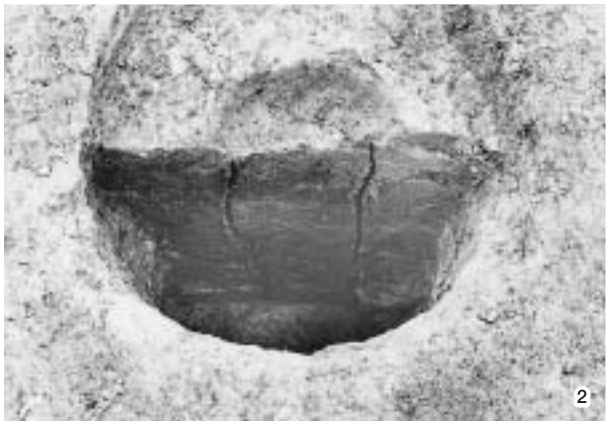


26　13号掘立柱建物跡細部

1　Ｐ１土層（南西から）　**2**　Ｐ２土層（南東から）
3　Ｐ１完掘（北から）　**4**　Ｐ２完掘（北から）

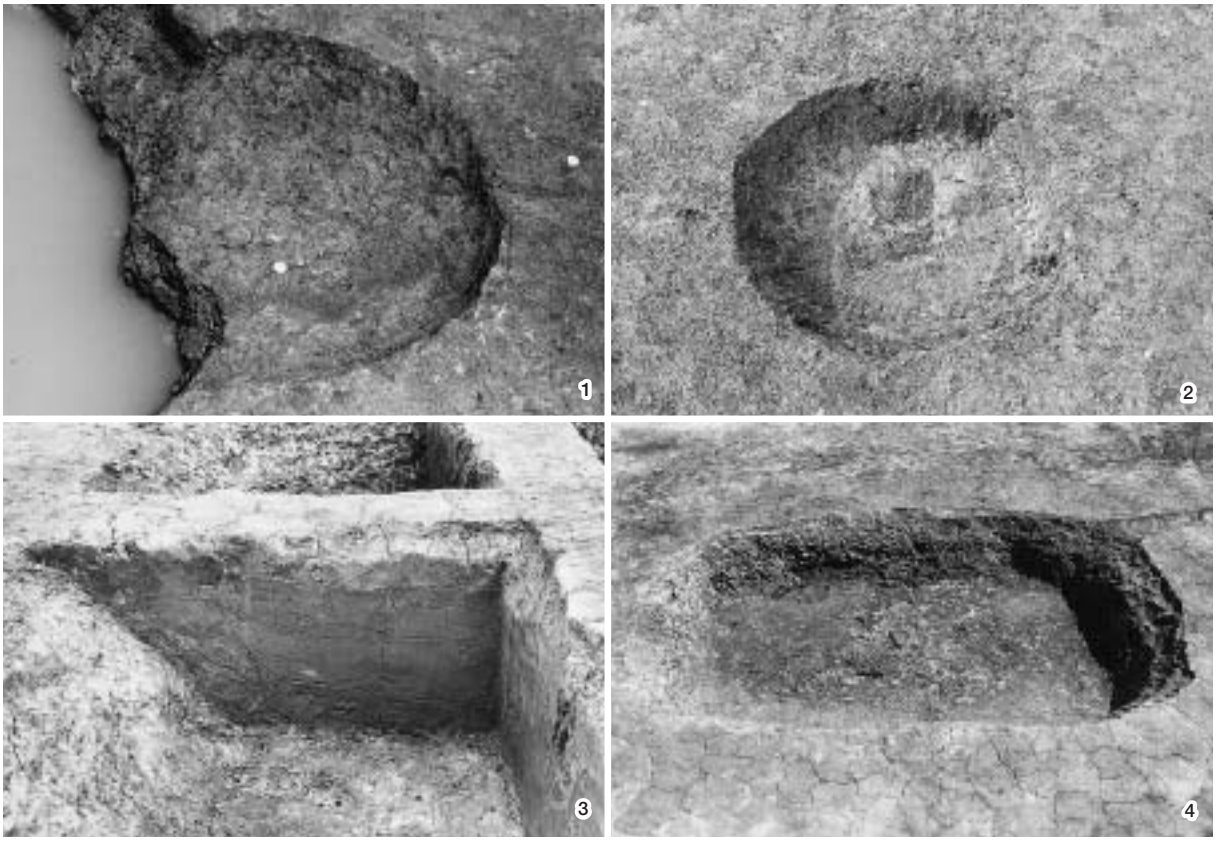
27　14号掘立柱建物跡完掘全景（東から）





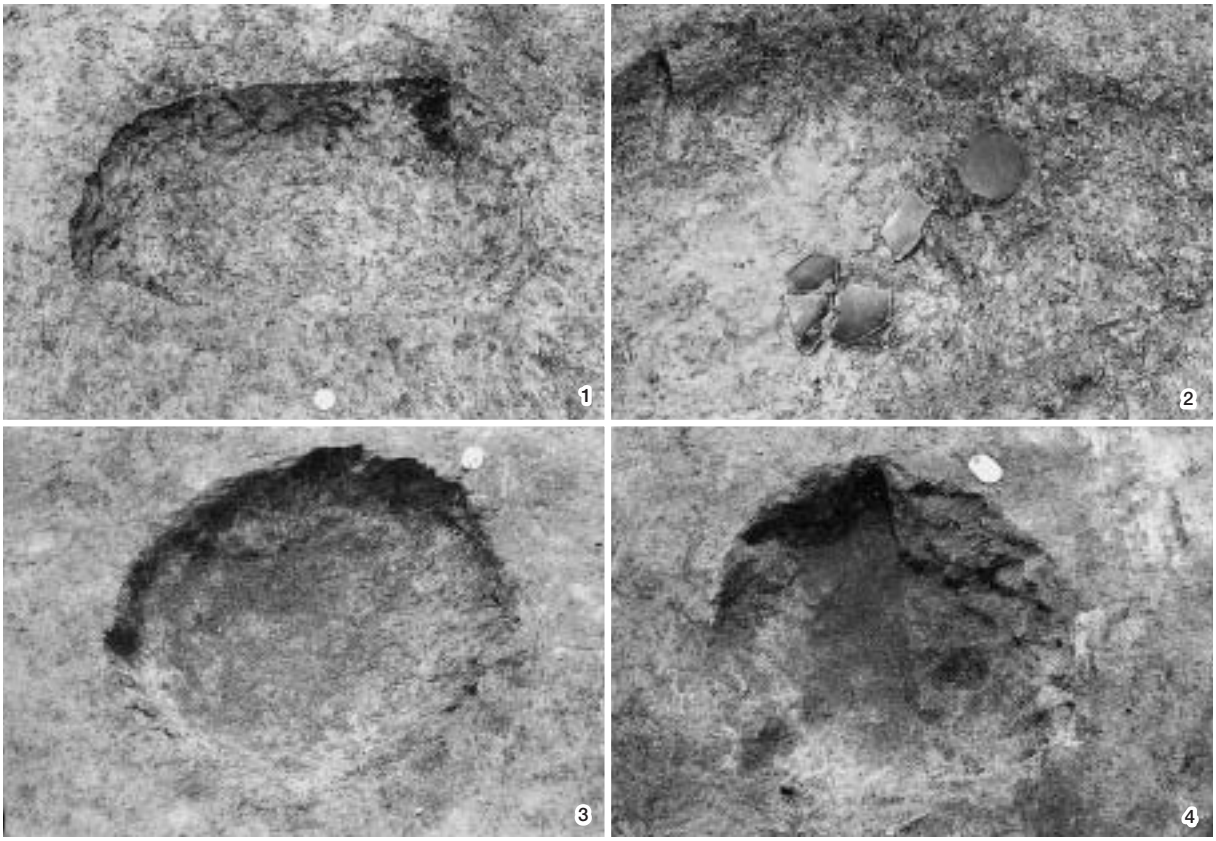
28　１号柱列跡

1　完掘全景（南から）
2　Ｐ１土層（南から）　**3**　Ｐ１石製礎盤（南から）



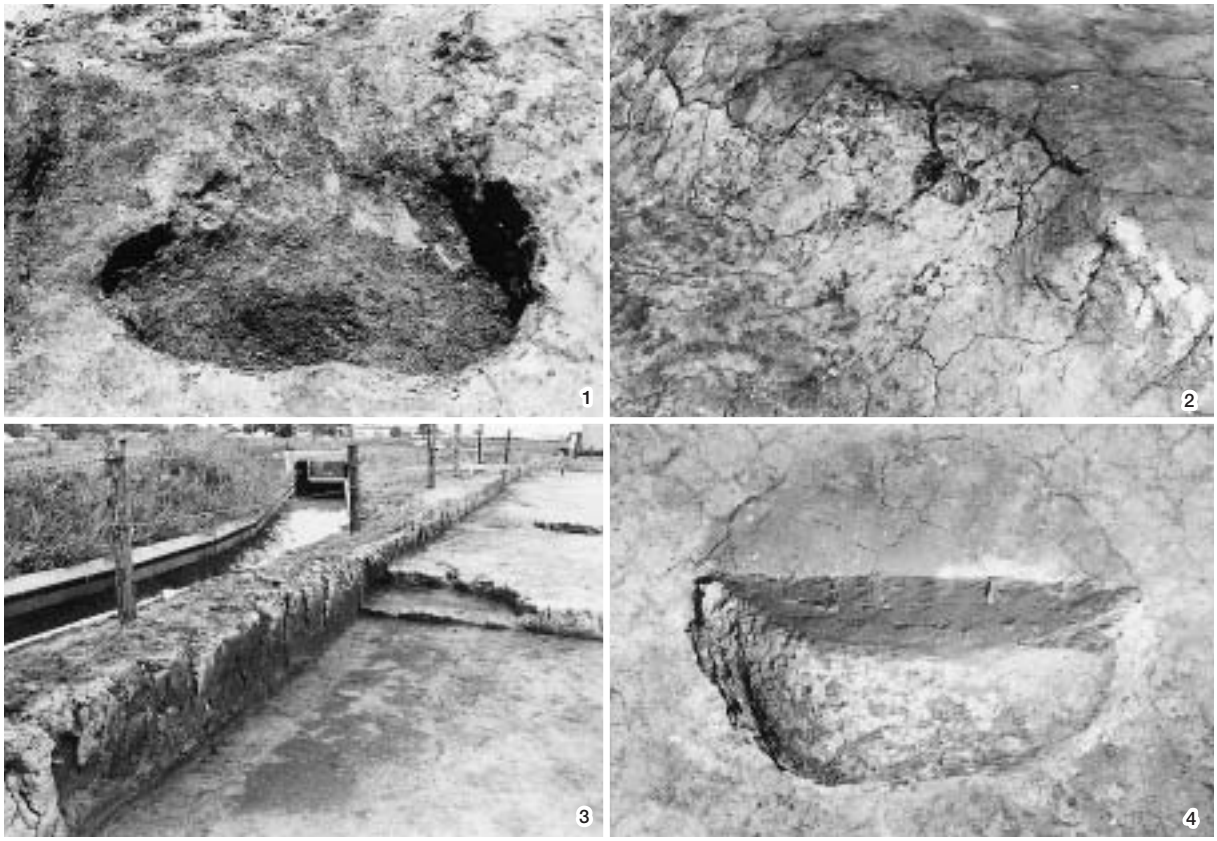
29　1～3号土坑

1　1号土坑完掘（南から）　**2**　3号土坑完掘（南から）
3　2号土坑土層（西から）　**4**　2号土坑完掘（北から）



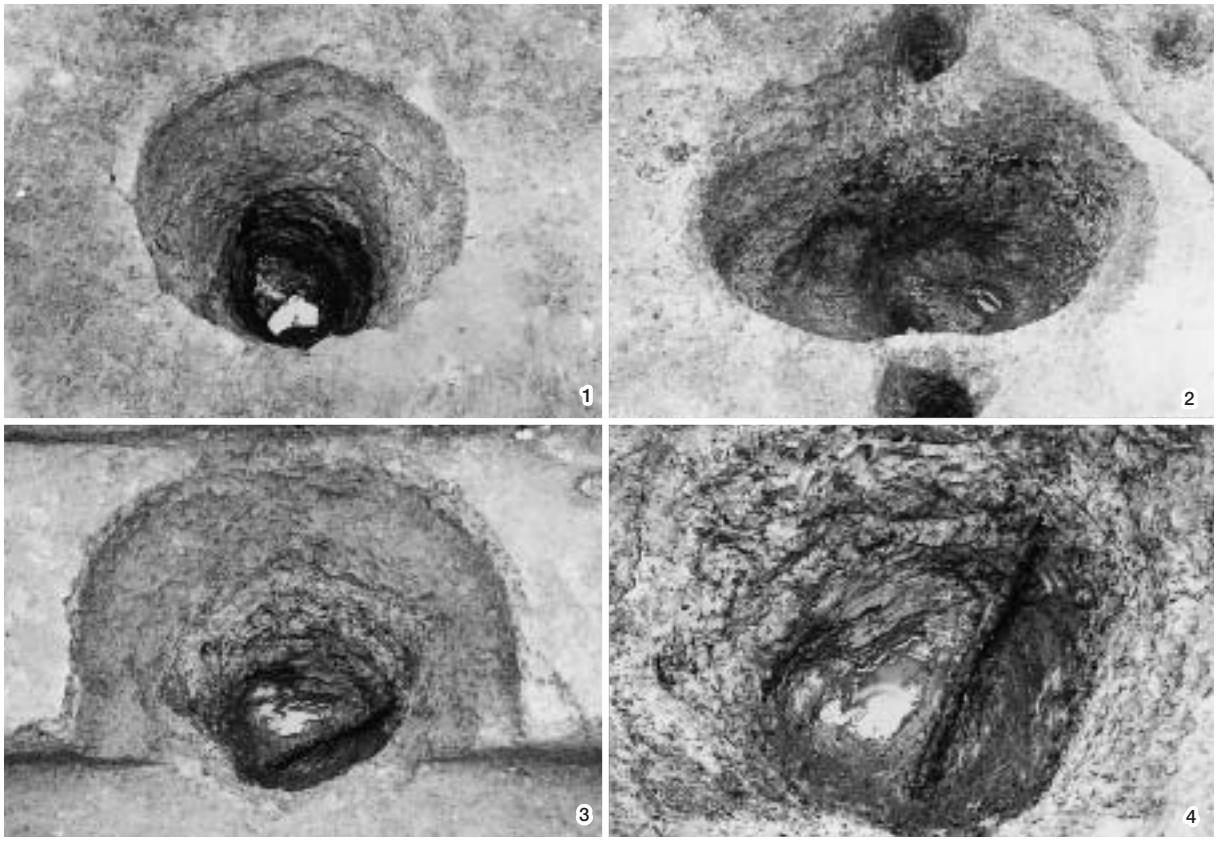
30　4～7号土坑

1　4号土坑完掘（東から）　**2**　5号土坑遺物出土状況（東から）
3　6号土坑完掘（東から）　**4**　7号土坑完掘（東から）



31　8～11号土坑

1　8号土坑完掘（北から）　**2**　9号土坑完掘（南東から）
3　10号土坑完掘（南から）　**4**　11号土坑土層（東から）

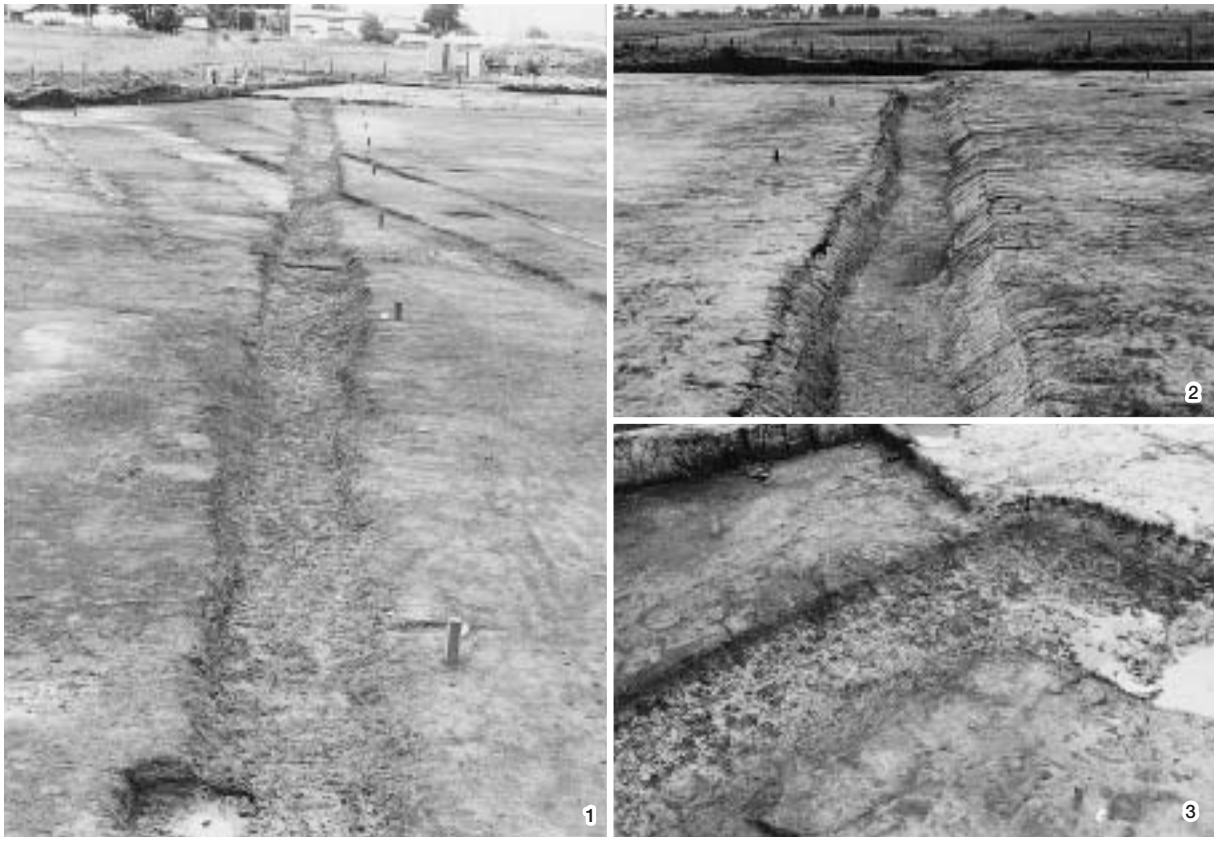


32　12～14号土坑

1　12号土坑完掘（南から）　**2**　13号土坑完掘（南東から）
3　14号土坑完掘（西から）　**4**　14号土坑遺物出土状況（北西から）

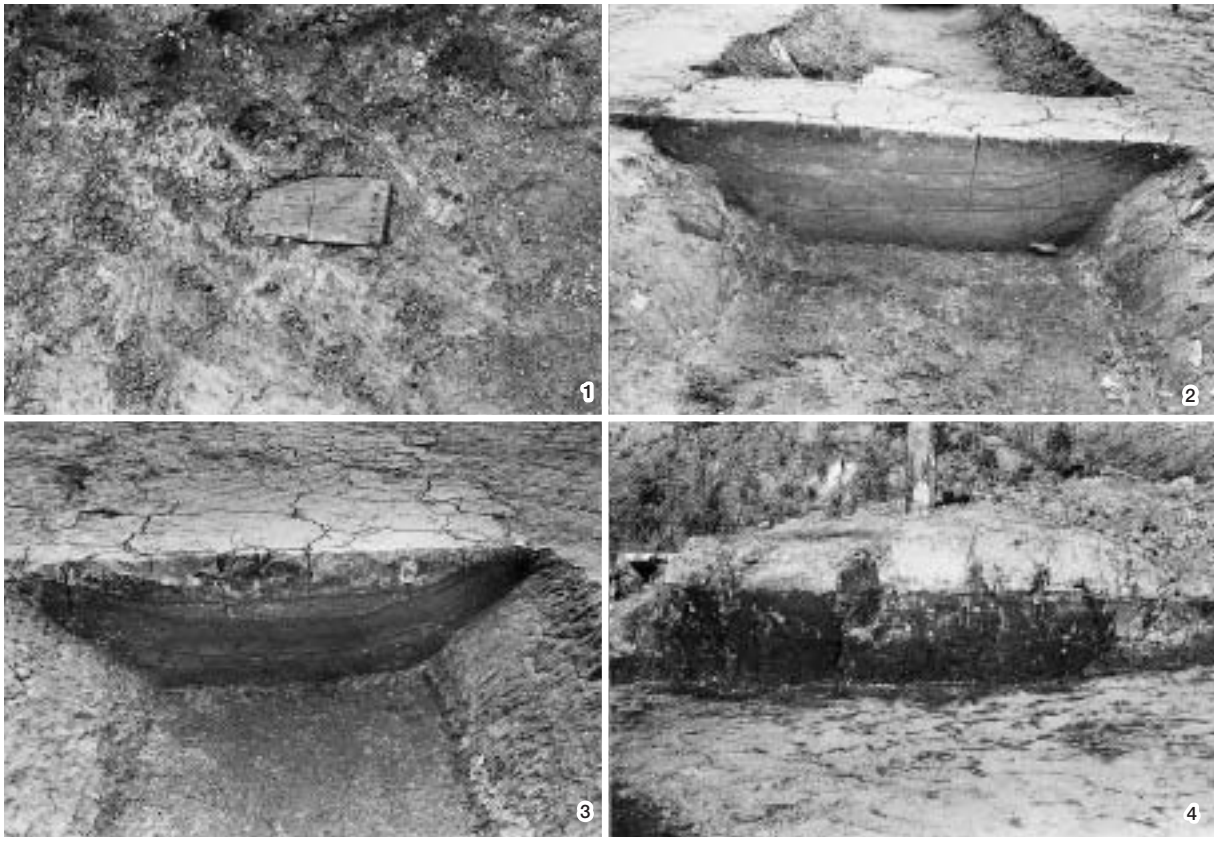
33　１号溝跡全景（１）（上空から）

34　１号溝跡全景（２）（北から）



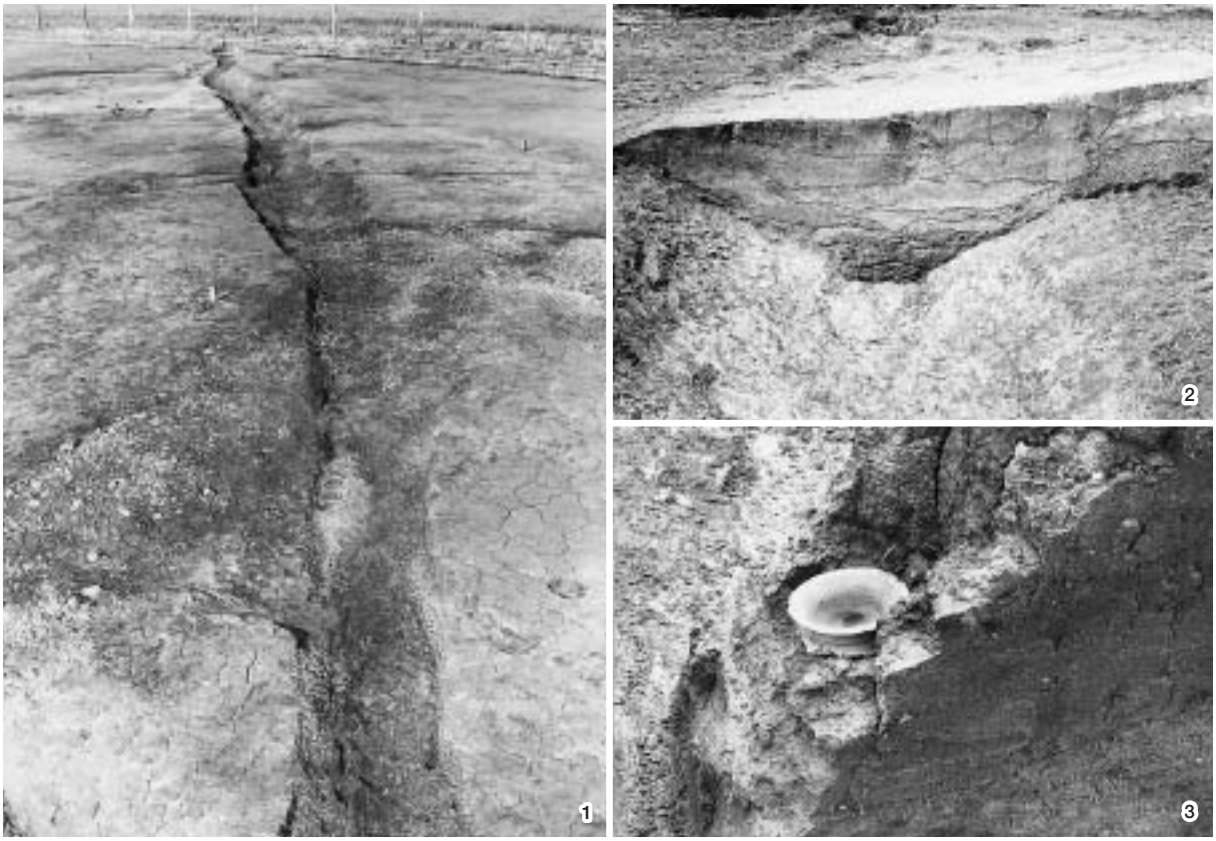
35　１号溝跡（１）

1　西側完掘（南から）　**2**　北側完掘（東から）
3　北西部コーナー（南東から）



36　１号溝跡（２）

1　遺物出土状況（南から）　**2**　ＨＨ'土層（西から）
3　ＫＫ'土層（西から）　**4**　ＡＡ'土層（西から）



37　2号溝跡

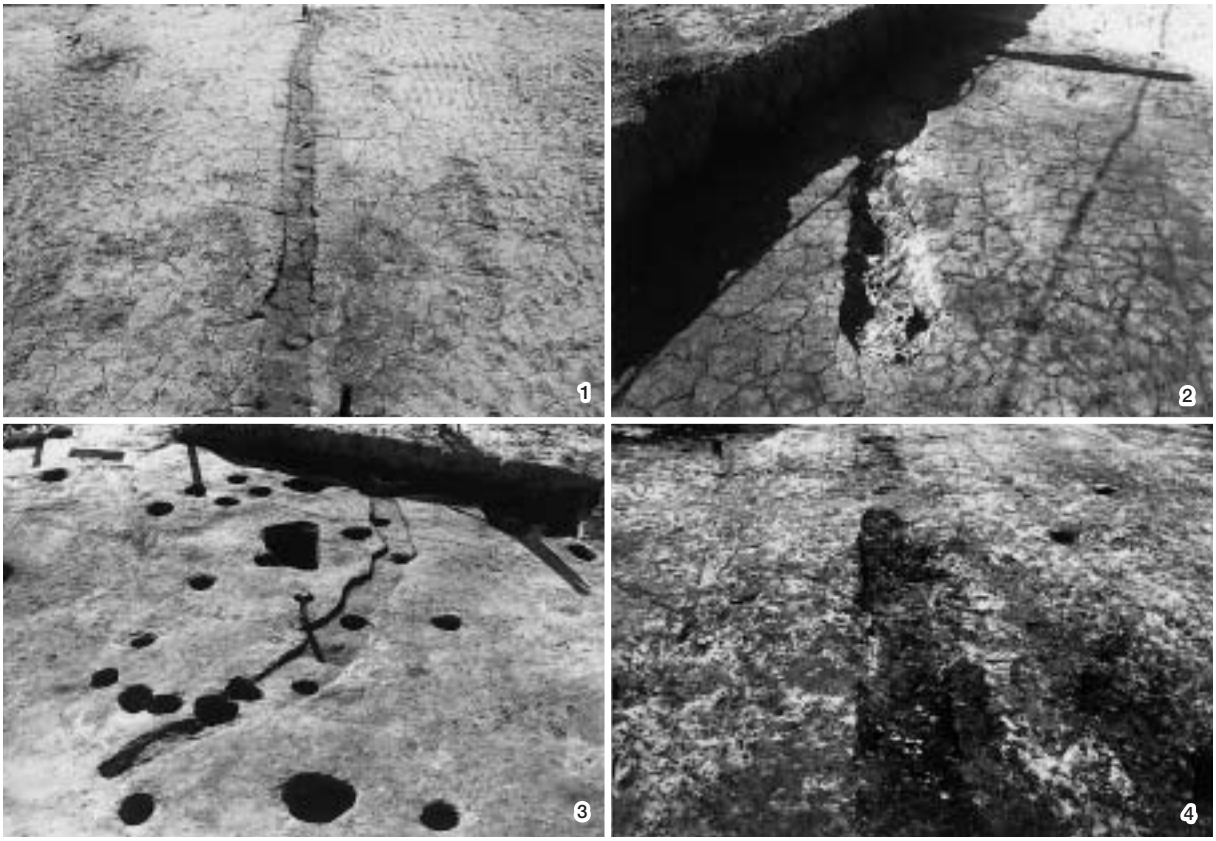
1　全景（南西から）　**2**　ＢＢ’土層（東から）
3　遺物出土状況（西から）

38　3・4号溝跡

1　3号溝跡完掘（北から）　**2**　4号溝跡完掘（南西から）

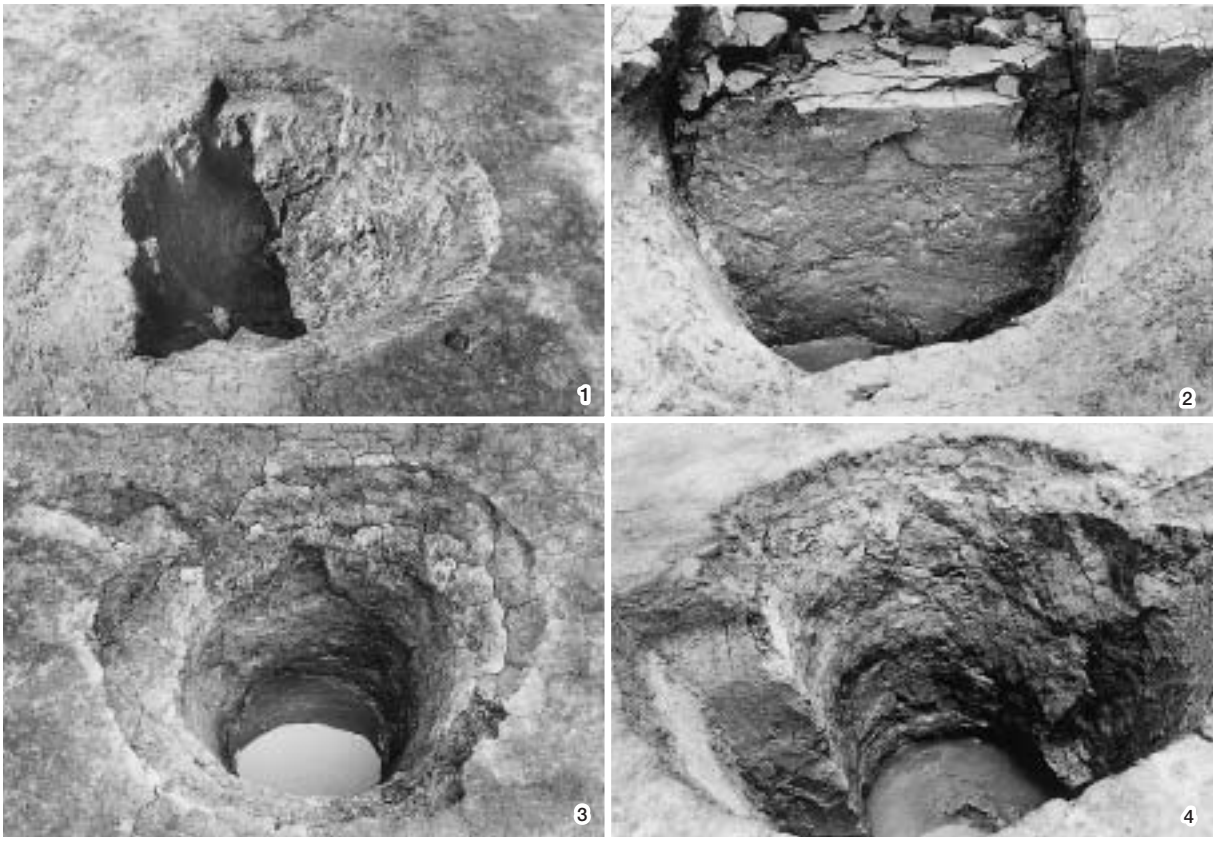
39　5・6号溝跡　　**1**　5号溝跡完掘（東から）　**2**　6号溝跡完掘（南西から）

40　7・8号溝跡，2号土坑　　**1**　7号溝跡南半部完掘（南から）　**2**　2号土坑，8号溝跡（東から）



41　8～11号溝跡

1　8号溝跡完掘（東から）　**2**　9号溝跡完掘（南から）
3　10号溝跡完掘（東から）　**4**　11号溝跡完掘（西から）



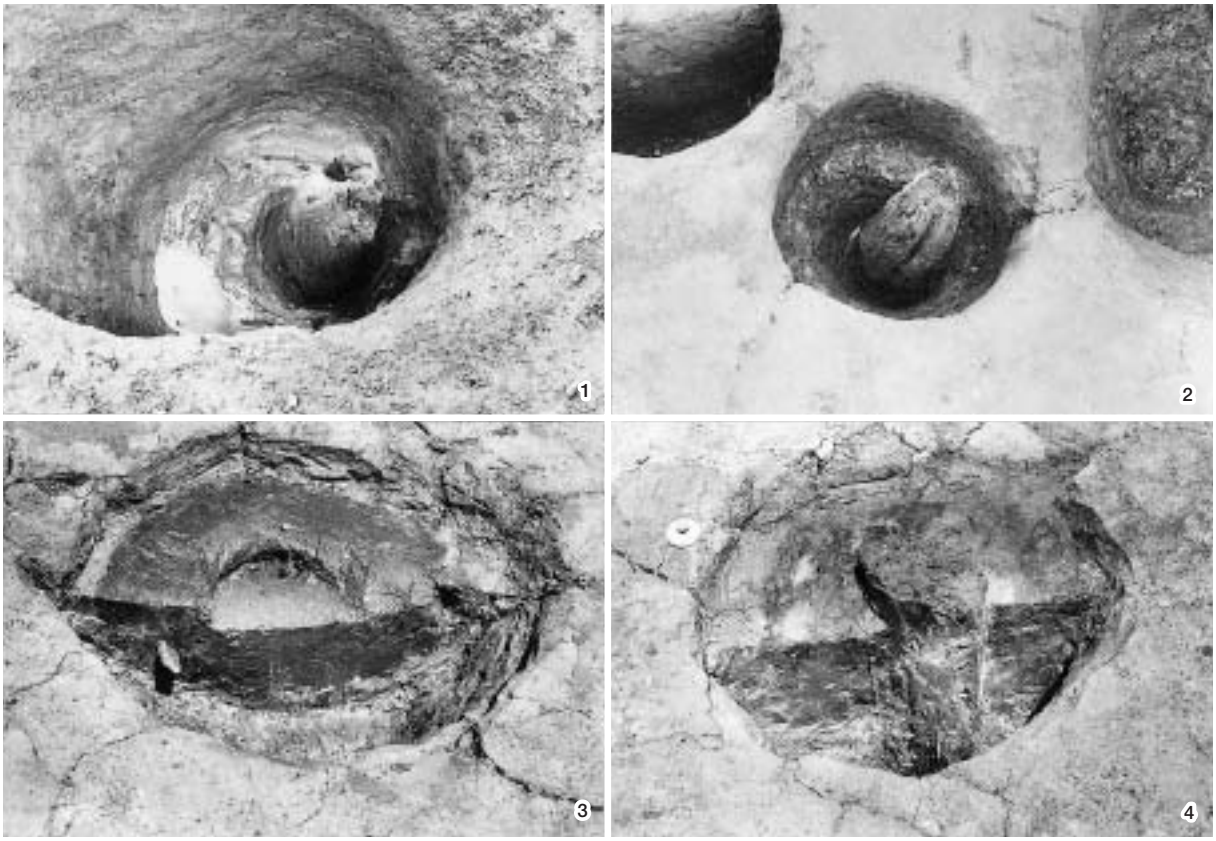
42　1・2号井戸跡

1　1号井戸跡完掘（南から）　**2**　2号井戸跡土層（南から）
3　2号井戸跡完掘（北から）　**4**　2号井戸跡断割状況（南西から）

43　ピットＡ群全景（南東から）

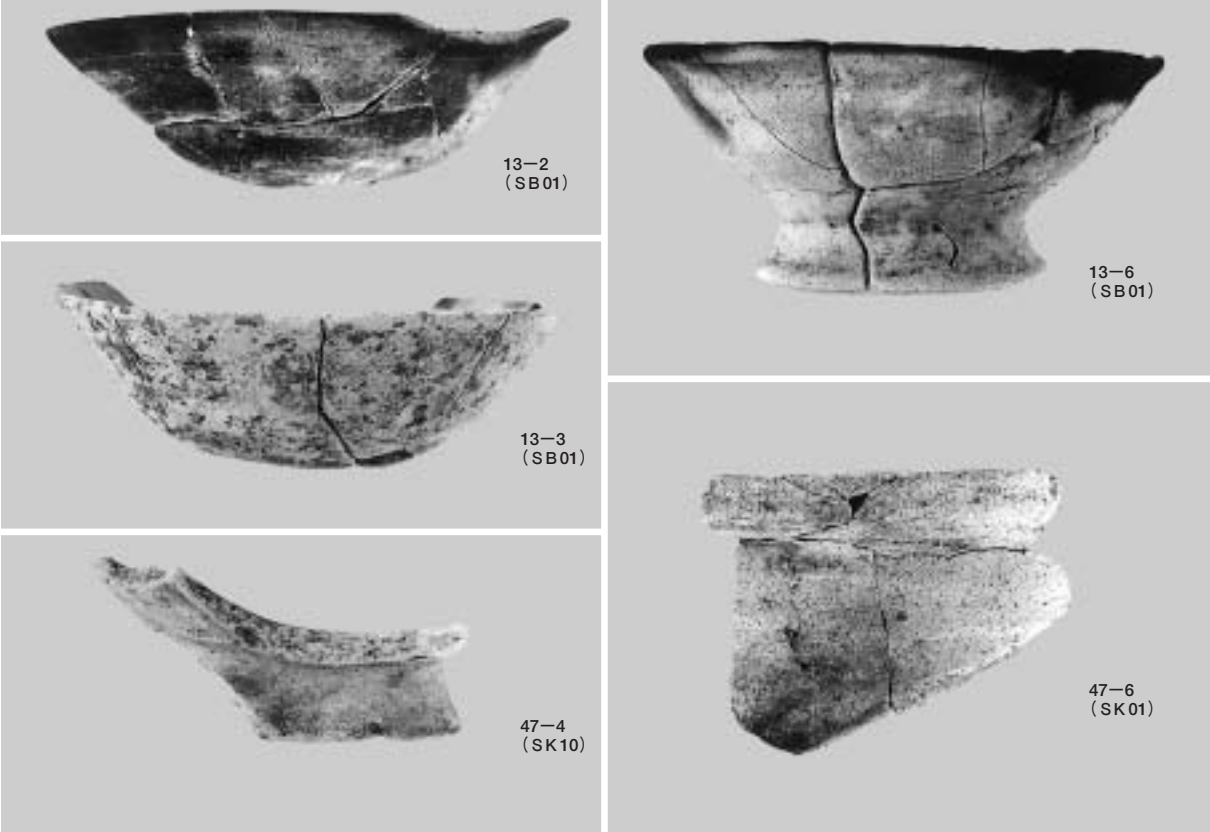
44　ピットＤ群全景（西から）

45　ピットＥ群全景（北東から）

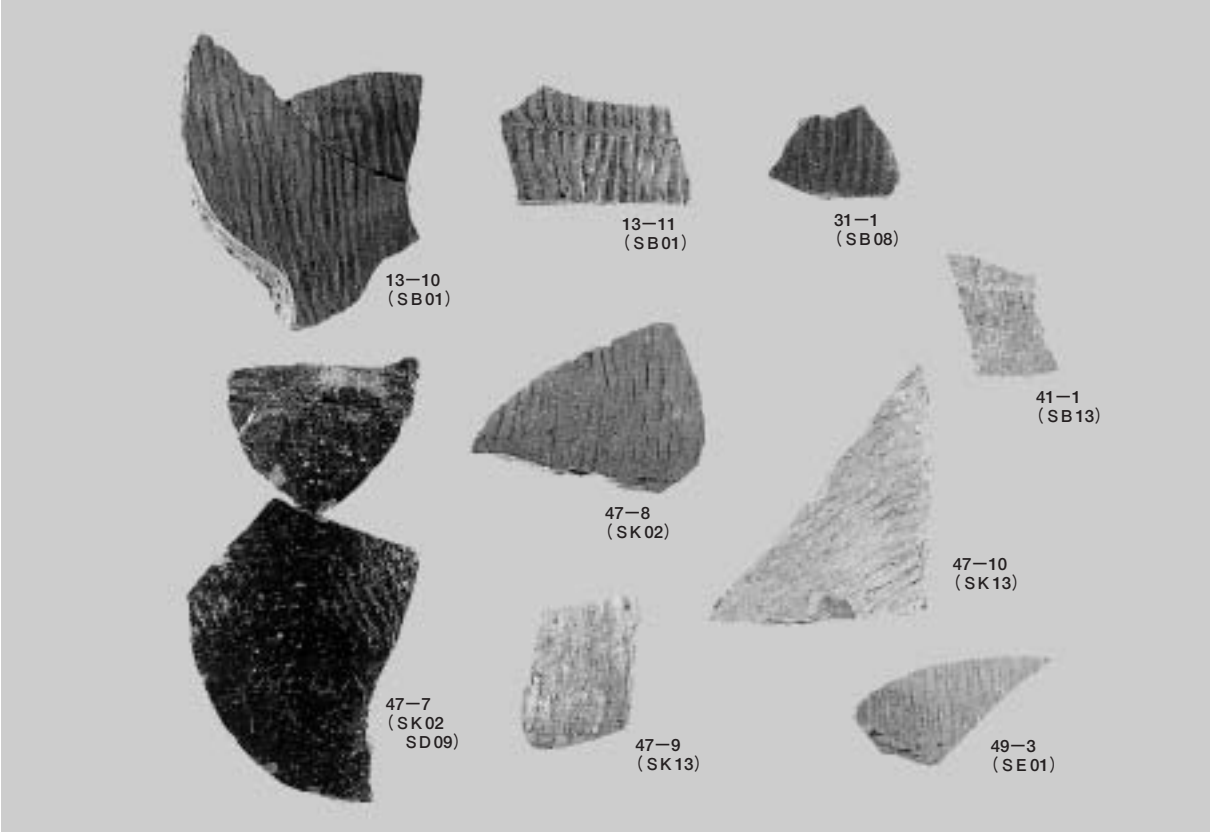


46　ピットＢ・Ｅ群細部

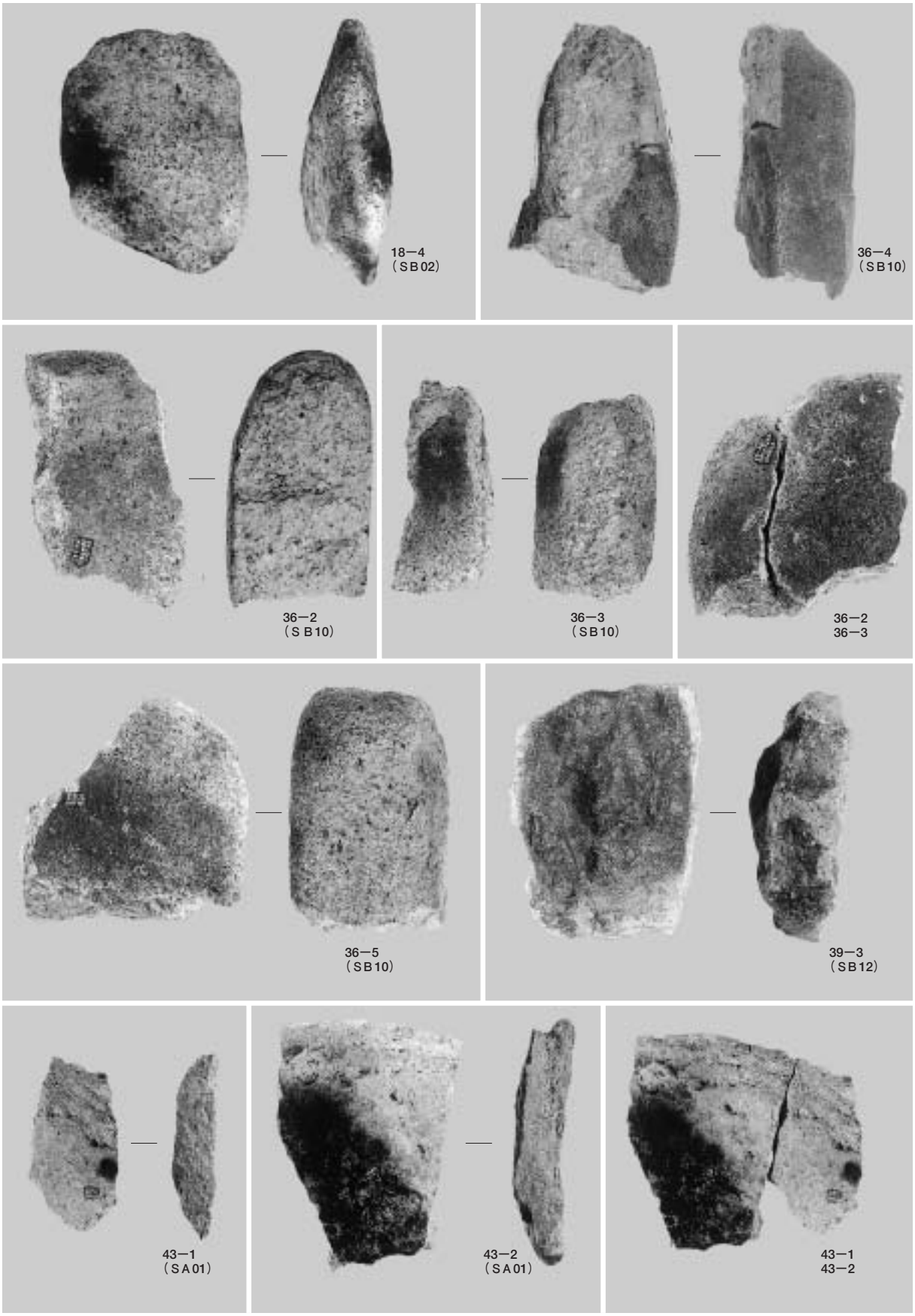
1　ピットＢ群Ｘ33Ｐ１柱材（東から）　**2**　ピットＢ群Ｙ33Ｐ１完掘（北から）
3　ピットＥ群Ｏ12Ｐ１土層（南から）　**4**　ピットＥ群Ｏ11Ｐ２土層（南から）



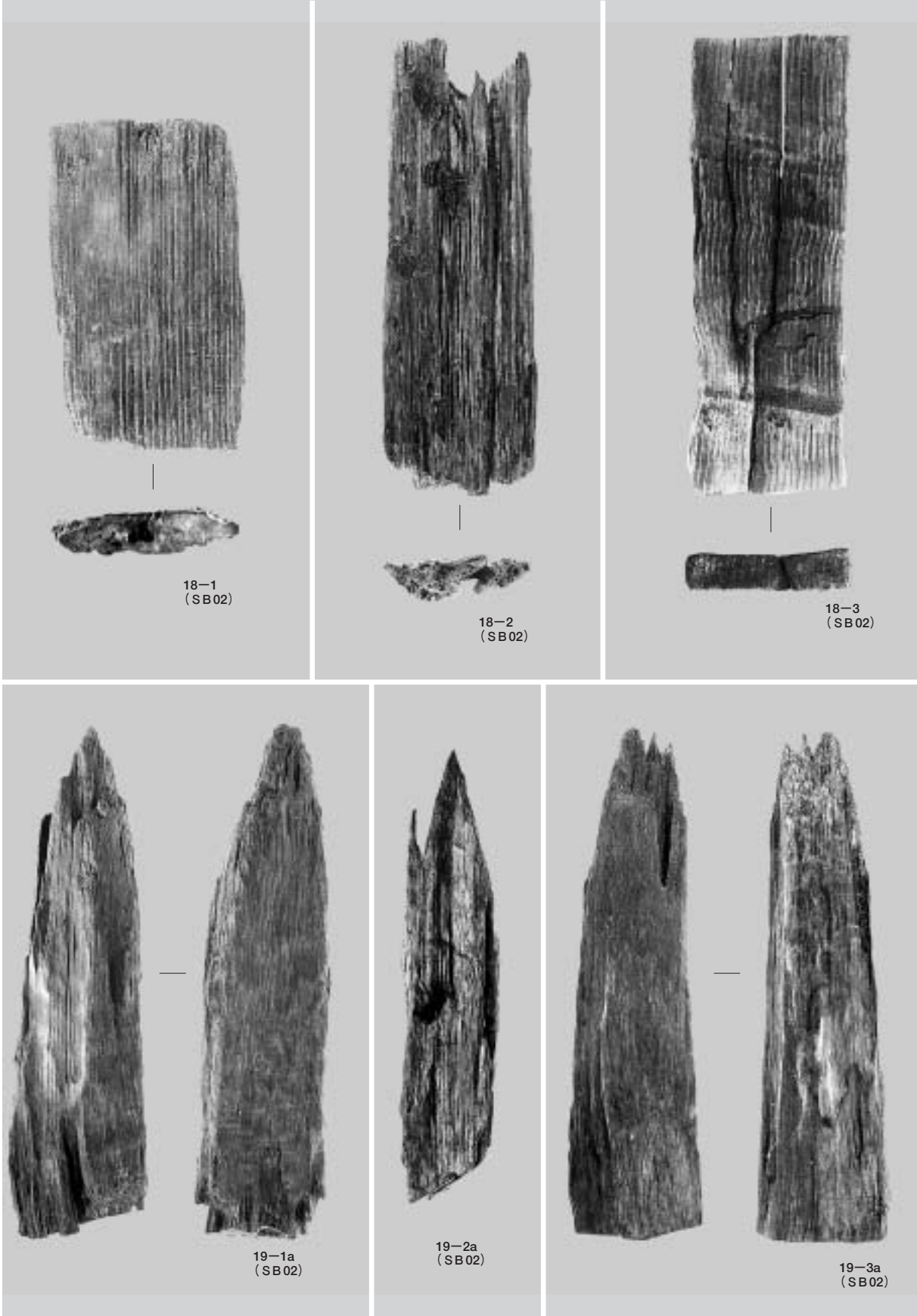
47　掘立柱建物跡・土坑出土土師器



48　掘立柱建物跡・土坑・井戸跡出土須恵器

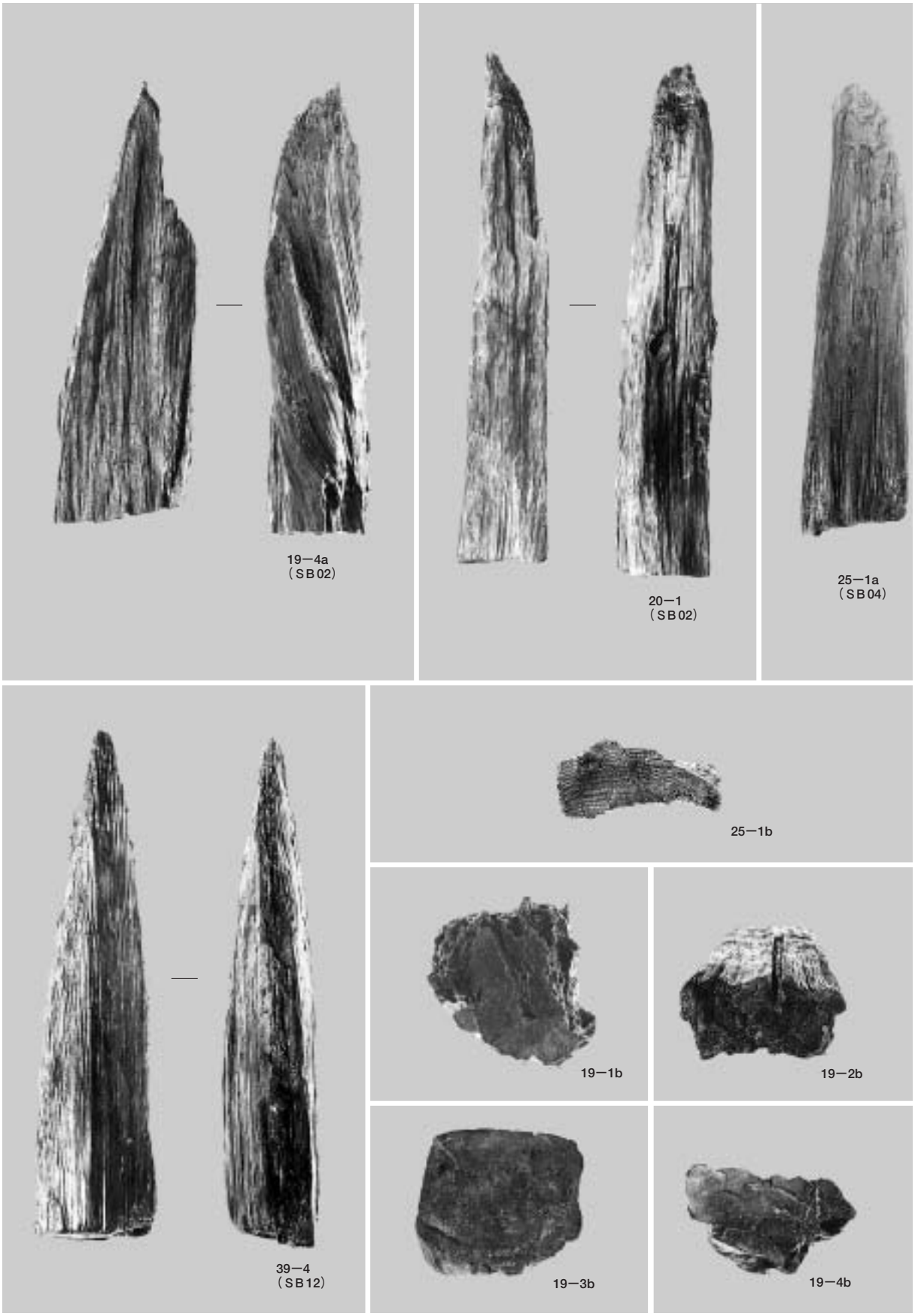


49　掘立柱建物跡・柱列跡出土石製品



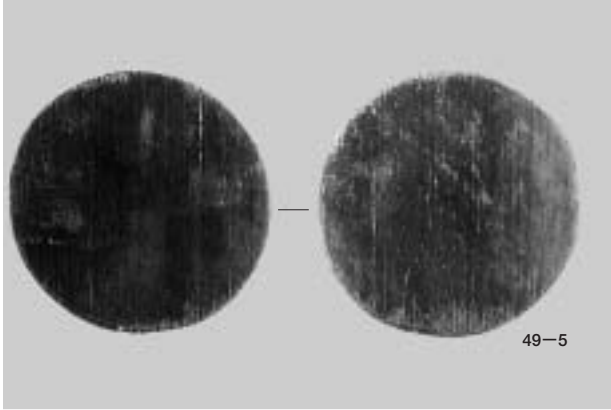
50　掘立柱建物跡出土木製品（1）

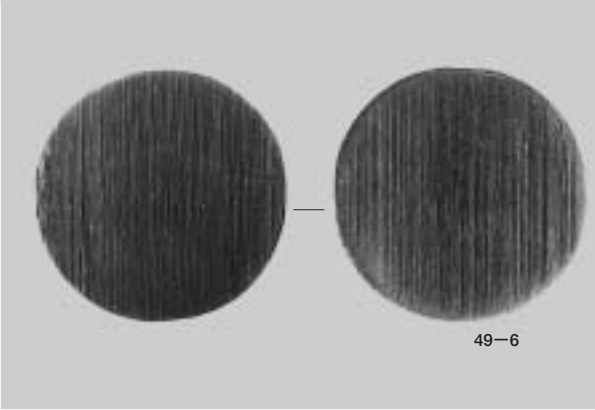
a：側面

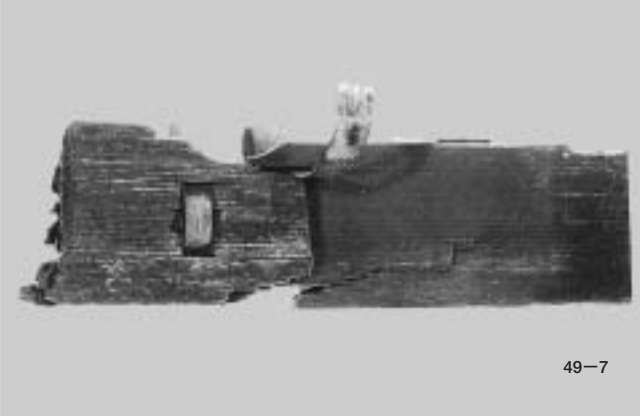


51　掘立柱建物跡出土木製品（２）

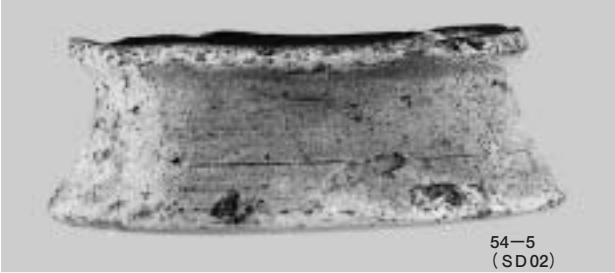
a：側面，b：木口

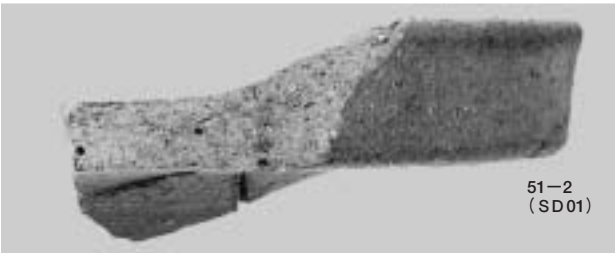




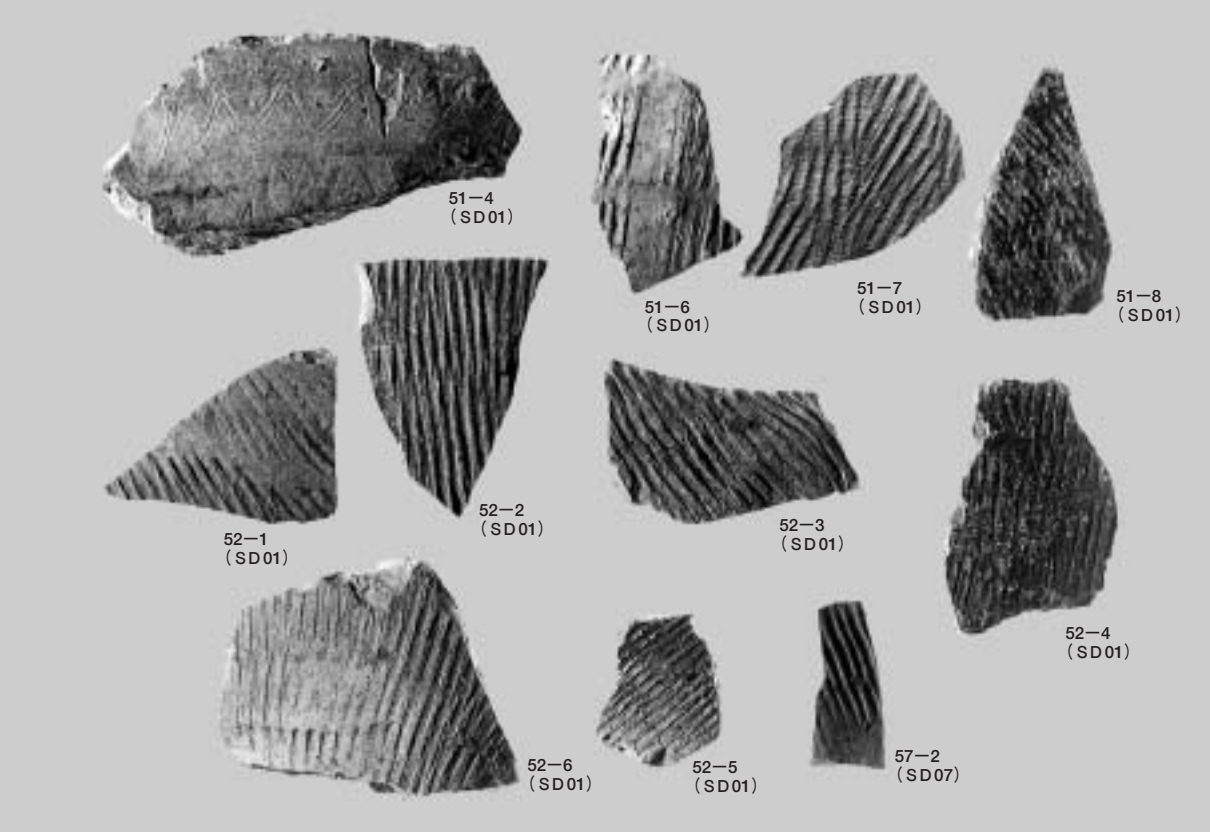


52　2号井戸跡出土木製品

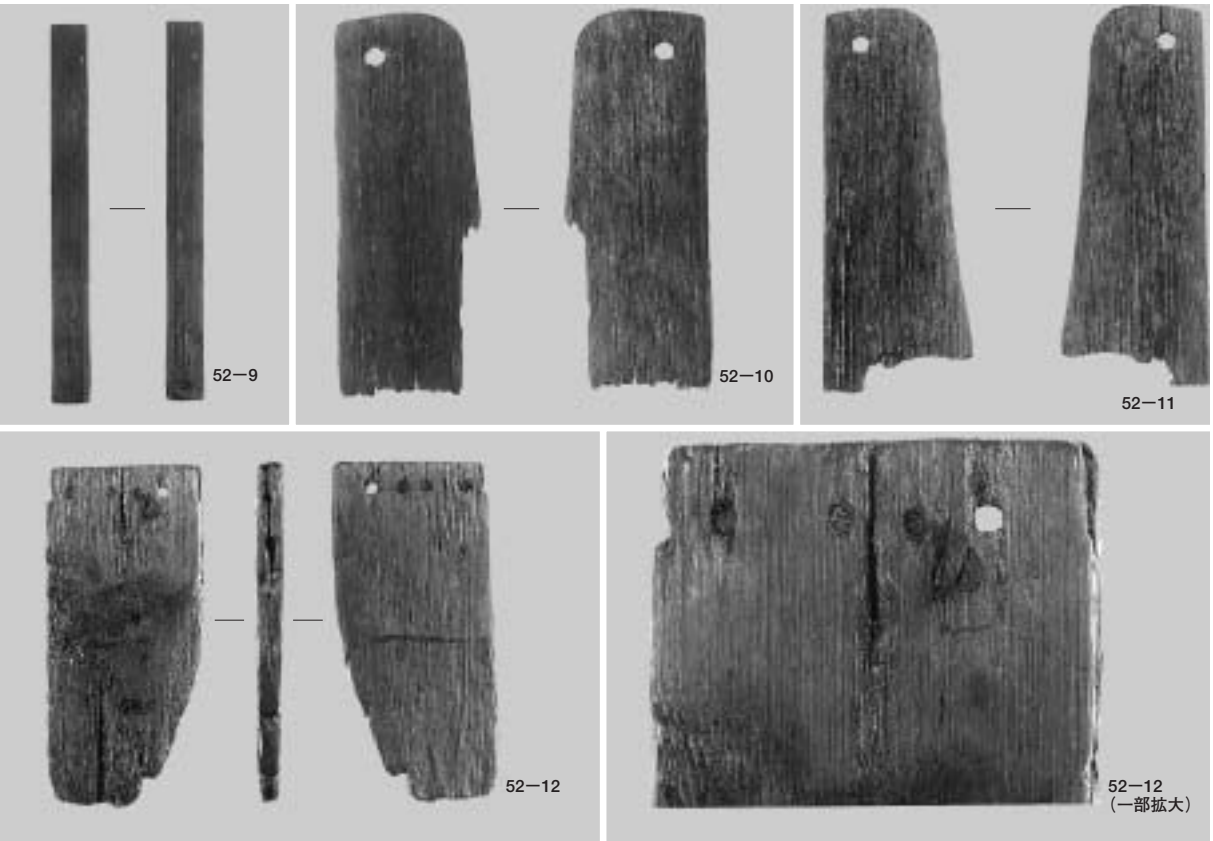




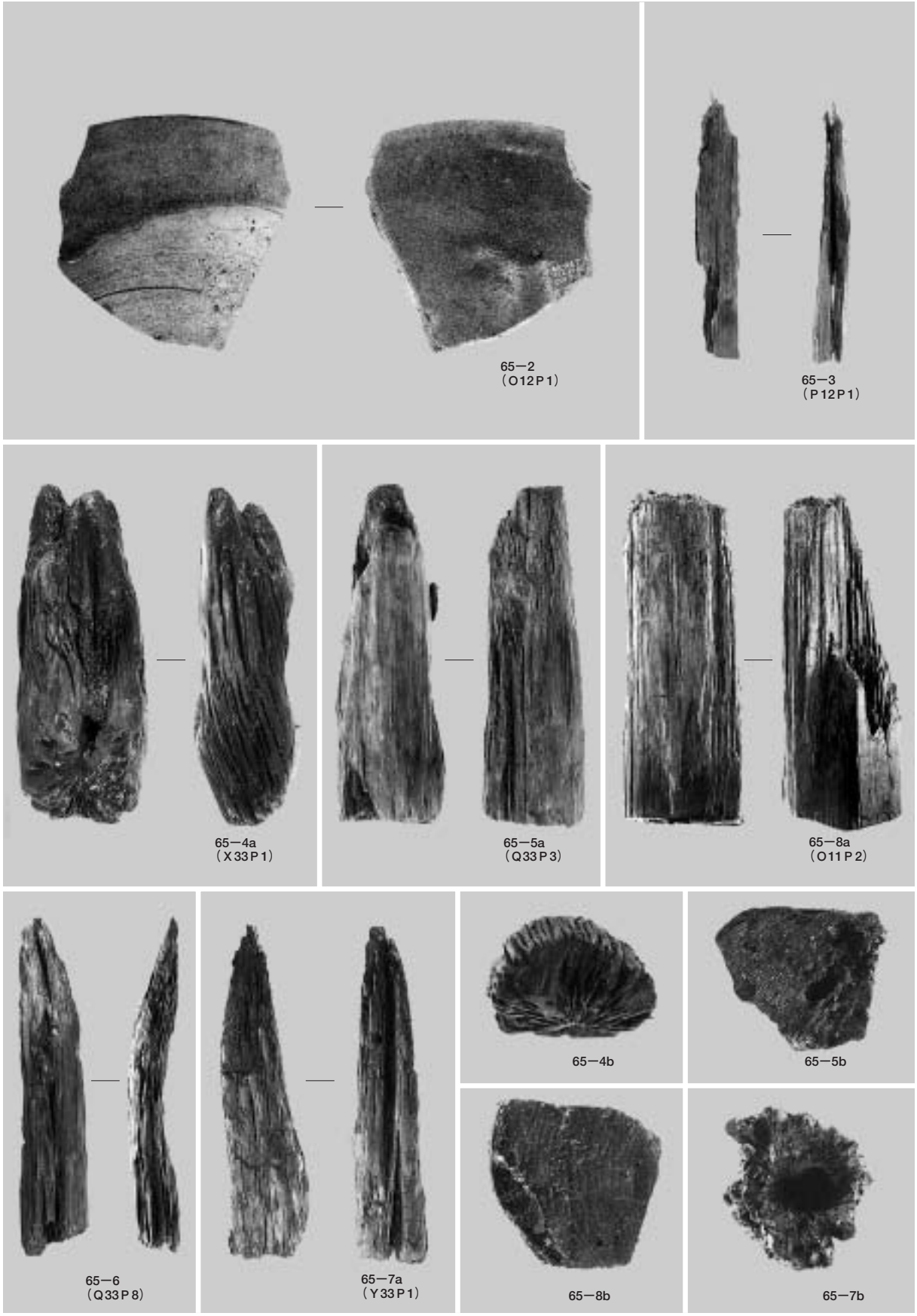
53　溝跡出土土師器・須恵器



54　溝跡出土須恵器



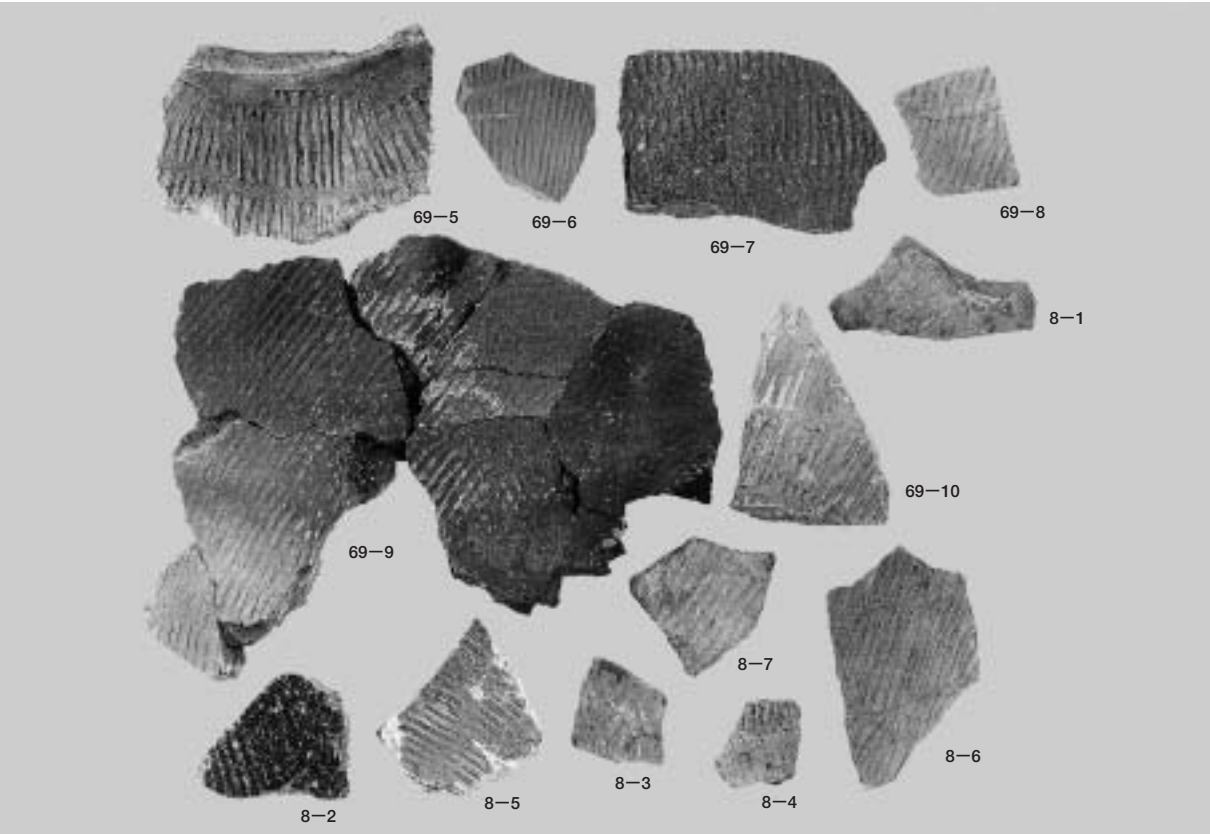
55　1号溝跡出土木製品



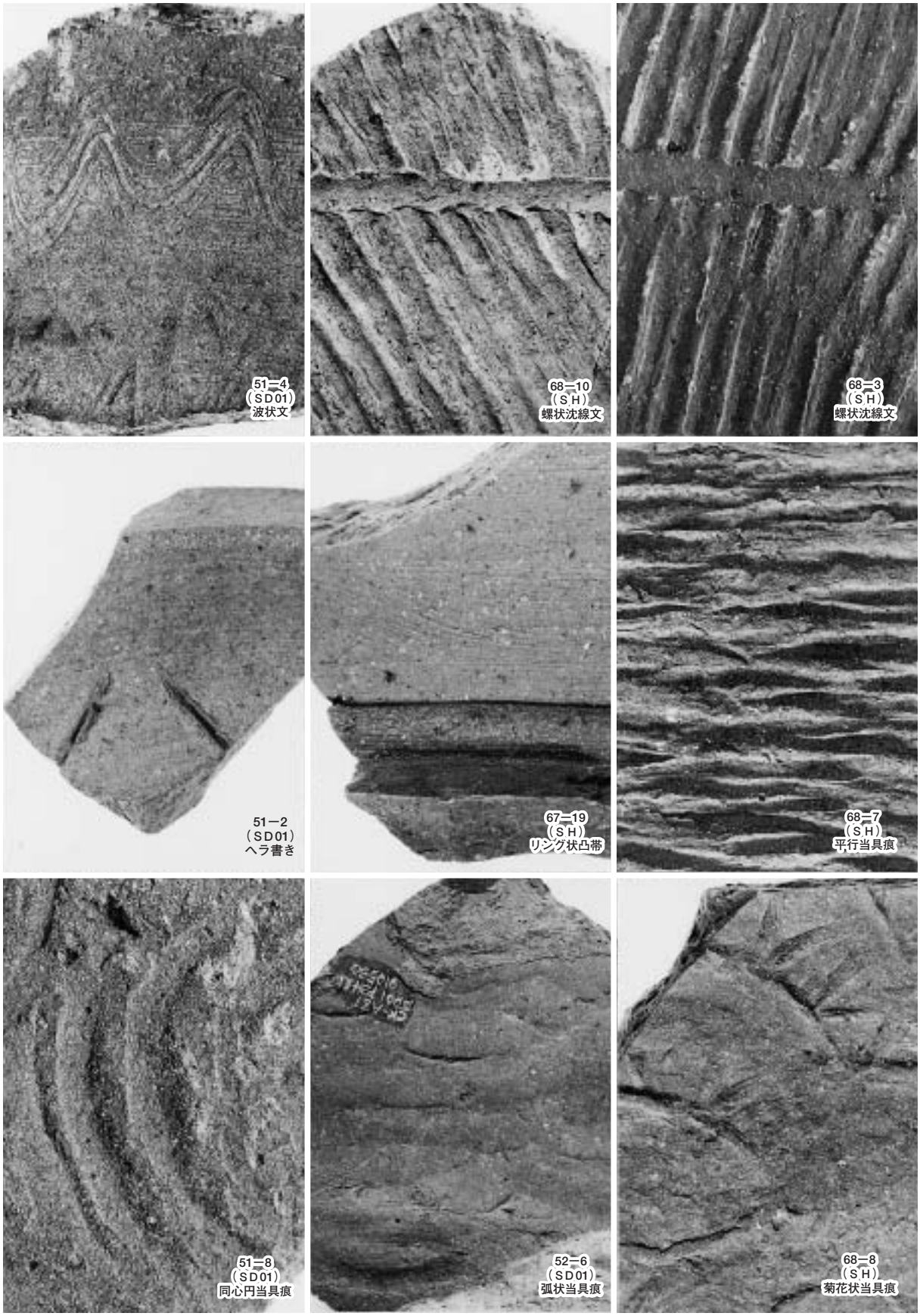
56　ピット群出土遺物

a：側面，b：木口

57　遺物包含層出土須恵器



58　遺構外・範囲確認調査出土須恵器


51－4
（SD01）
波状文
68－10
（SH）
螺状沈線文
68－3
（SH）
螺状沈線文
51－2
（SD01）
ヘラ書き
67－19
（SH）
リング状凸帯
68－7
（SH）
平行当具痕
51－8
（SD01）
同心円当具痕
52－6
（SD01）
弧状当具痕
68－8
（SH）
菊花状当具痕

59　須恵器細部

付　章　　麻生館遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

麻生館遺跡は，阿賀川の支流である日橋川，大塩川，姥堂川が合流する付近の右岸沖積地に位置する。経済企画庁総合開発局（1972）によれば，本遺跡周辺の地形は，複数の扇状地の先端部が集まっており，三角州性低地に分類されている。

本遺跡では，発掘調査により，平安時代及び中近世の遺構（掘立柱建物跡，柱列，土坑，溝跡，井戸跡，ピット群等）が検出されている。これらの遺構は，黄褐色～灰褐色を呈する砂質シルト層から検出されており，遺構内からは土師器，須恵器，陶磁器，石製品，古銭等と共に，木製品も出土している。

本報告では，遺構が構築されている黄褐色～灰褐色を呈する砂質シルト層について，テフラの検出同定及び屈折率の測定を行い，砂質シルト層の堆積時期に関する資料を得る。また，出土した木製品の樹種同定を行い，用材選択に関する資料を得る。

１．テフラの検出同定及び屈折率測定

（１）試料

試料は，調査区南西部のＯ12グリッドのＬ　層から採取されたFBC01A 041（以下試料041とする）と同グリッドのＬ　層から採取されたFBC01A 042（以下試料042とする）の合計２点である。いずれも褐色を呈する砂質シルト～シルト質砂であるが，試料042の方に砂が若干多い。

（２）分析方法

試料約20ｇを蒸発皿に取り，水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し，上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後，実体顕微鏡下にて観察する。観察は，テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし，その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては，その形態によりバブル型と中間型，軽石型に分類する。各型の形態は，バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるＹ字状の高まりを持つもの，中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの，軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状及び気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

屈折率の測定は，古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

（３）結果

試料041：少量の火山ガラスと極めて微量の軽石が認められた。スコリアは全く含まれていない。火山ガラスは，細砂～極細砂径，無色透明のバブル型と軽石型が混在する。軽石は，径１～1.5mm，

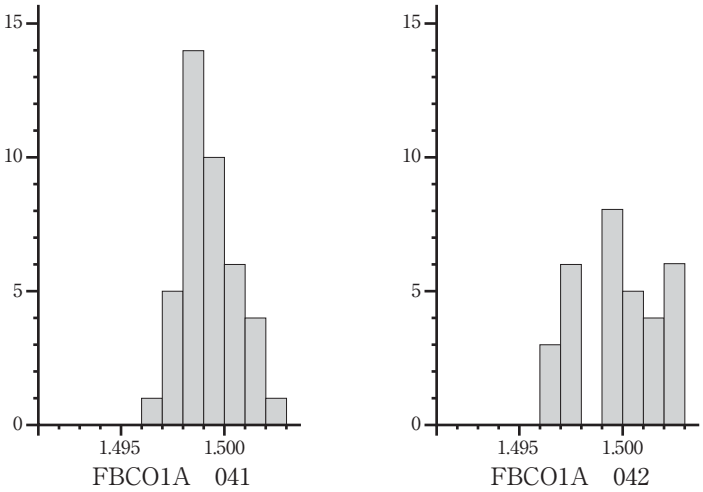


図1　火山ガラスの屈折率

横軸は屈折率、縦軸は測定個数を表す。

白色を呈し，発泡は不良である。火山ガラスの屈折率は，n 1.497～1.502（モードn 1.498～1.499）であった（図１）。

試料042：中量の軽石と微量の火山ガラスが認められた。スコリアは全く含まれていない。軽石は，最大径約５mm，白色を呈し，発泡は不良である。軽石の中には角閃石の斑晶を包有しているものも認められた。火山ガラスは，細砂～極細砂径，無色透明のバブル型と軽石型が混在する。火山ガラスの屈折率は，n 1.497～1.502（モードn 1.497～1.499）であった（図１）。

（４）考察

試料041で認められた火山ガラスは，色調や形態及び屈折率などの特徴と麻生館遺跡の地理的位置及びＬ　層と遺構との年代観を考慮して，これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状（例えば，町田ほか（1981；1984），Arai et al.（1986），町田・新井（1992）など）と比較すると，十和田ａテフラ（Ｔｏ-ａ）に由来する可能性が高い。

ただし，Ｌ　層における火山ガラスの含有量は少量であり，また石英粒や岩片などテフラとは異なる由来の砕屑物が多量に含まれることから，Ｌ　層は降下テフラ層ではなく，Ｔｏ-ａを含んだ土壌層であると考えられる。恐らくＬ　層形成時にＴｏ-ａの降灰があり，Ｌ　層中にその火山ガラスが拡散したものと考えられる。したがって，Ｌ　層の形成年代は，Ｔｏ-ａの降灰前後と考えてよい。Ｔｏ-ａの噴出年代については，A.D.915年（町田・新井，1992；早川・小山，1998）とされているから，調査区内において，Ｌ　層を掘り込んで構築されている遺構は，古くとも10世紀以降であるといえる。なお，微量混在する軽石は，後述するＨｒ-ＦＰに由来するものであろう。

試料042に認められた軽石は，その特徴と町田・新井（1992）などに記載されたテフラの分布図などから，榛名二ツ岳伊香保テフラ（Ｈｒ-ＦＰ：新井，1979；早田，1989）に由来すると考えられる。Ｈｒ-ＦＰの噴出年代は，上記文献において古墳時代の６世紀中葉とされているから，上位のＬ　層中にＴｏ-ａが含まれることと矛盾しない。また，Ｌ　層も，テフラ層とは異質の砕屑物を多く含むことから，Ｈｒ-ＦＰの降下テフラ層ではなく，形成時期にＨｒ-ＦＰの降灰があったために軽石が混在する土壌層となったものと考えられる。すなわち，その形成時期は６世紀前後のある時期になる。なお，Ｌ　層中の火山ガラスは，上位のＴｏ-ａと色調，形態，屈折率がほぼ同じことから，上位からの撹乱によるＴｏ-ａ由来の火山ガラスであると考えられる。

2．木製品の樹種同定

（1）試料

試料は，出土した木製品20点（FBC01A001～20）である。木製品又は製品から採取した5　角程度の木片が送付されてきた。各試料の詳細は，樹種同定結果と共に表1に記した。

（2）方法

木片試料については，木片を採取した際の切断面から0.5～1　角程度の小ブロックを採取して試料とする。剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製する。木製品については，破損面がある場合には5mm角程度の破片を採取して試料とする。破損面がない場合には，製品から直接切片を作製する。

作製した切片をスライドガラス上に載せ，ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入してプレパラートを作製する。プレパラートは，生物顕微鏡で木材組織を観察し，その特徴から種類を同定する。

（3）結果

樹種同定結果と切片作成時に観察した木取りを表1に示す。木製品は，針葉樹3種類（スギ・ヒノキ・サワラ）と広葉樹3種類（クリ・モクレン属・サクラ属）に同定された。また，木取りは，板材・ 角材とも，最も広い面の観察結果を記した。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・スギ（Cryptomeria japonica （L. f.） D. Don）　　スギ科スギ属

軸方向組織は，仮道管と樹脂細胞で構成され，仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で，晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞は，ほぼ晩材部に限って認められ，接線方向に配列する。放射組織は柔細胞のみで構成され，柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で，1分野に2～4個。放射組織は単列，1～15細胞高。

表1　樹種同定結果

番　号	挿図番号	出土遺構	層位	質	送付試料	形状	木取り	器種	樹種
FBC01A001	19－4	SB02 P5		生木	木片	丸木		柱材	クリ
FBC01A002	20－1	SB02 P6		生木	木片	丸木		柱材	クリ
FBC01A003	18－1	SB02 P14	底面	生木	木製品	板材	柾目	礎板	クリ
FBC01A004	19－3	SB02 P19		生木	木片	丸木		柱材	クリ
FBC01A005	18－2	SB02 P20	底面	生木	木製品	板材	柾目	礎板	クリ
FBC01A006	19－2	SB02 P27		生木	木片	丸木		柱材	クリ
FBC01A007	25－1	SB04 P4		生木	木片	半丸材		柱材	スギ
FBC01A008	31－2	SB08 P10	1	生木	木片	丸木		杭	クリ
FBC01A009		SB10 P12		生木	木製品	板材		柱材	スギ
FBC01A010	39－4	SB12 P10		生木	木片	丸木？		柱材	サワラ
FBC01A011	52－9	SD01 S29	2	生木	木製品	板材	柾目	板状木製品	サワラ
FBC01A012	52－10	SD01 T29	4	生木	木製品	板材	板目	板伏木製品	サワラ
FBC01A013	52－12	SD01 W29	4	生木	木製品	板材	柾目	曲物底板？	サワラ
FBC01A014	52－8	SD01 R29	4	生木	木片	角材	柾目～板目	杭	スギ
FBC01A015	49－5	SE02	底面	生木	木製品	板材	柾目	曲物底板	ヒノキ
FBC01A016	49－7	SE02	底面	生木	木製品	板材	柾目	曲物側板	スギ
FBC01A017	47－11	SK14	5	生木	木片	丸木		杭？	サクラ属
FBC01A018	65－8	O11 P2		生木	木片	角材？		柱材	スギ
FBC01A019	65－4	X33 P1		生木	木片	丸木？		柱材	モクレン属
FBC01A020	65－6	Q33 P8		生木	木片	半丸材		柱材	クリ

・ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）Endlcher）　　ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で，晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され，柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で，１分野に１～３個。放射組織は単列，１～15細胞高。

・サワラ（*Chamaecyparis pisifera*（Sieb. et Zucc.）Endlcher）　　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は，仮道管と樹脂細胞で構成され，仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で，晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は早材部の終わりから晩材部にかけて認められ，接線方向に配列する。放射組織は柔細胞のみで構成され，柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はスギ型～ヒノキ型で，１分野に１～３個。放射組織は単列，１～15細胞高。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　　ブナ科クリ属

環孔材で，孔圏部は１～４列，孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち，漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，１～15細胞高。

・モクレン属（*Magnolia*）　　モクレン科

散孔材で，管壁厚は中庸～薄く，横断面では角張った楕円形～多角形，単独及び２～４個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し，壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性　型，１～２細胞幅，１～40細胞高。

・サクラ属（*Prunus*）　　バラ科

散孔材で，管壁厚は中庸，横断面では角張った楕円形，単独又は２～８個が複合，晩材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性　型，１～３細胞幅，１～30細胞高。

（４）考察

樹種同定を行った木製品は，建築・土木材（柱材，礎板，杭），容器類（曲物底板，曲物側板），用途不明品（板状木製品）に大別される。

柱材と礎板は，掘立柱建物跡SB02のものが多く，他にSB04,08,10,12から各１点，建物跡以外の柱穴から出土した３点がある。SB02の柱材と礎板の全てと，SB08P10の柱材は広葉樹のクリであった。一方，SB04,10の柱材は針葉樹のスギ，SB12の柱材は針葉樹のサワラであった。この結果から，建物によって柱材の種類構成が異なっていた可能性がある。しかし，SB02を除く各建物跡では，１点のみの同定であるため，詳細は不明である。一方，建物跡以外の柱穴から出土した破柱材には，スギ，クリ，モクレン属が認められた。スギやクリの利用は，建物跡の柱材と共通しており，同様の用材選択が推定される。

クリは，強度や耐朽性に優れた材質を有する。また，スギやヒノキもクリほど強度は高くないが，耐水性が高い材質を有し，建築材などにもよく利用される（島地・伊東，1988）。これらのことから，柱穴内に埋めた際の耐水性や耐朽性などを考慮した用材選択がうかがえる。

杭は，スギとサクラ属が認められた。用途を考慮すると，周辺に生育し，入手が用意であった種類を利用した可能性がある。また，スギについては，柱材や曲物にも認められることから，遺跡内で加工されたスギの枝などの余材や廃材などが利用された可能性もある。

曲物は，底板・側板とも柾目板を利用している。樹種は，底板がサワラとヒノキ，側板がスギであった。このうち，スギの側板については，比較的近い荒屋敷遺跡でも確認されており，今回の結果とも一致する。これらの木材利用や木取りは，近世・近代の民俗事例（農商務省山林局，1912；成田，1996）とも一致している。いずれも割裂性が高く，薄い板の作製が比較的容易であることや，精油成分により耐水性や防虫性にも優れること等が利用の背景に考えられる。

引用文献

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層．考古学ジャーナル，157，p.41-52．Arai, F.・Machida, H.・Okumura, K.・Miyauchi, T.・Soda, T.・Yamagata, K（1986）Cataalog for late quaternary marker-tephras in Japan －Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido－. Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21, p. 223-250.

古澤　明（1995）火山ガラスの屈折率測定及び形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別．地質学雑誌，101，p. 123-133.

早川由紀夫・小山真人（1998）日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山－．火山，43，p.403-407.

経済企画庁総合開発局（1972）土地分類図07（福島県）.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．276p.，東京大学出版会.

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，p.562-569.

町田　洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦（1984）テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－．渡辺直径編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，p. 865-928.

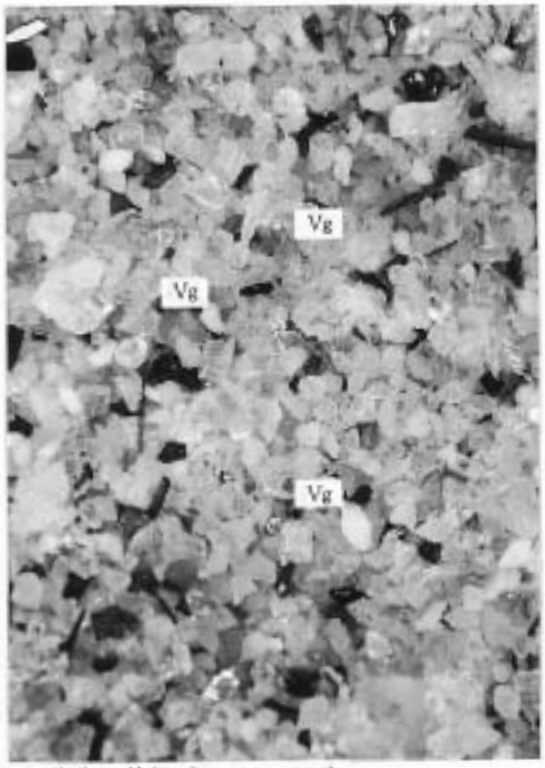
成田壽一郎（1996）曲物・箍物．205p.，理工学社.

農商務省山林局編（1912）木材ノ工藝的利用．1308p.，大日本山林會.

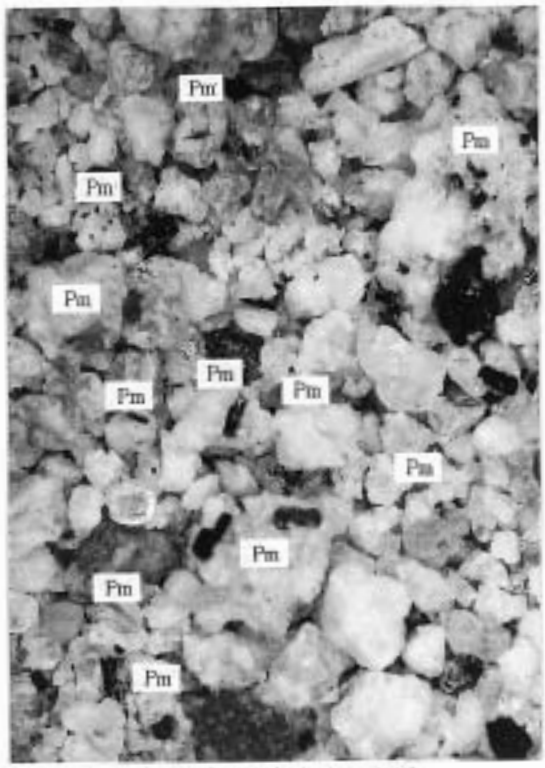
島地　謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．296p.，雄山閣.

早田　勉（1989）六世紀における榛名火山の二回の噴火とその災害．第四紀研究，27，p. 297-312.

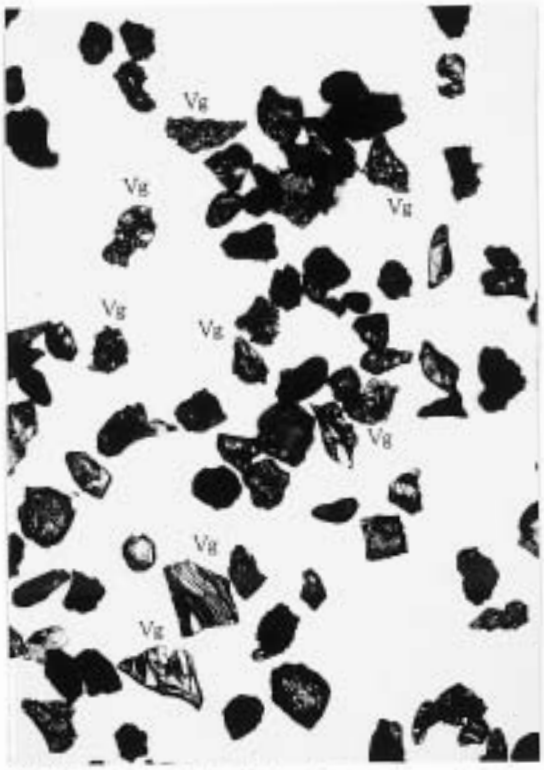
図版１　テフラ



1. 砂分の状況 (FBC01A 041)



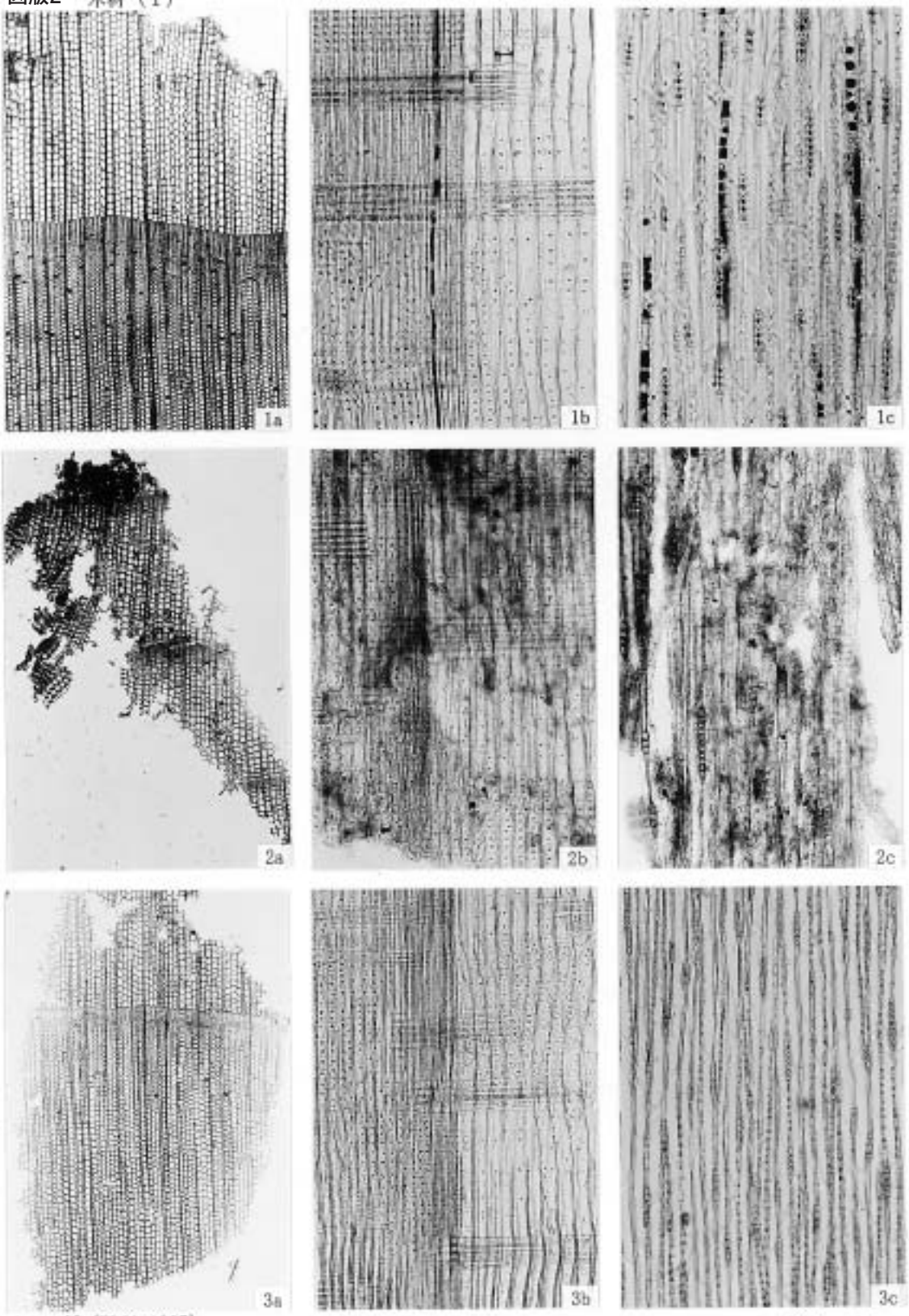
2. Ｈｒ－ＦＰの軽石 (FBC01A 042)



3. Ｔｏ－ａの火山ガラス (FBC01A 041)

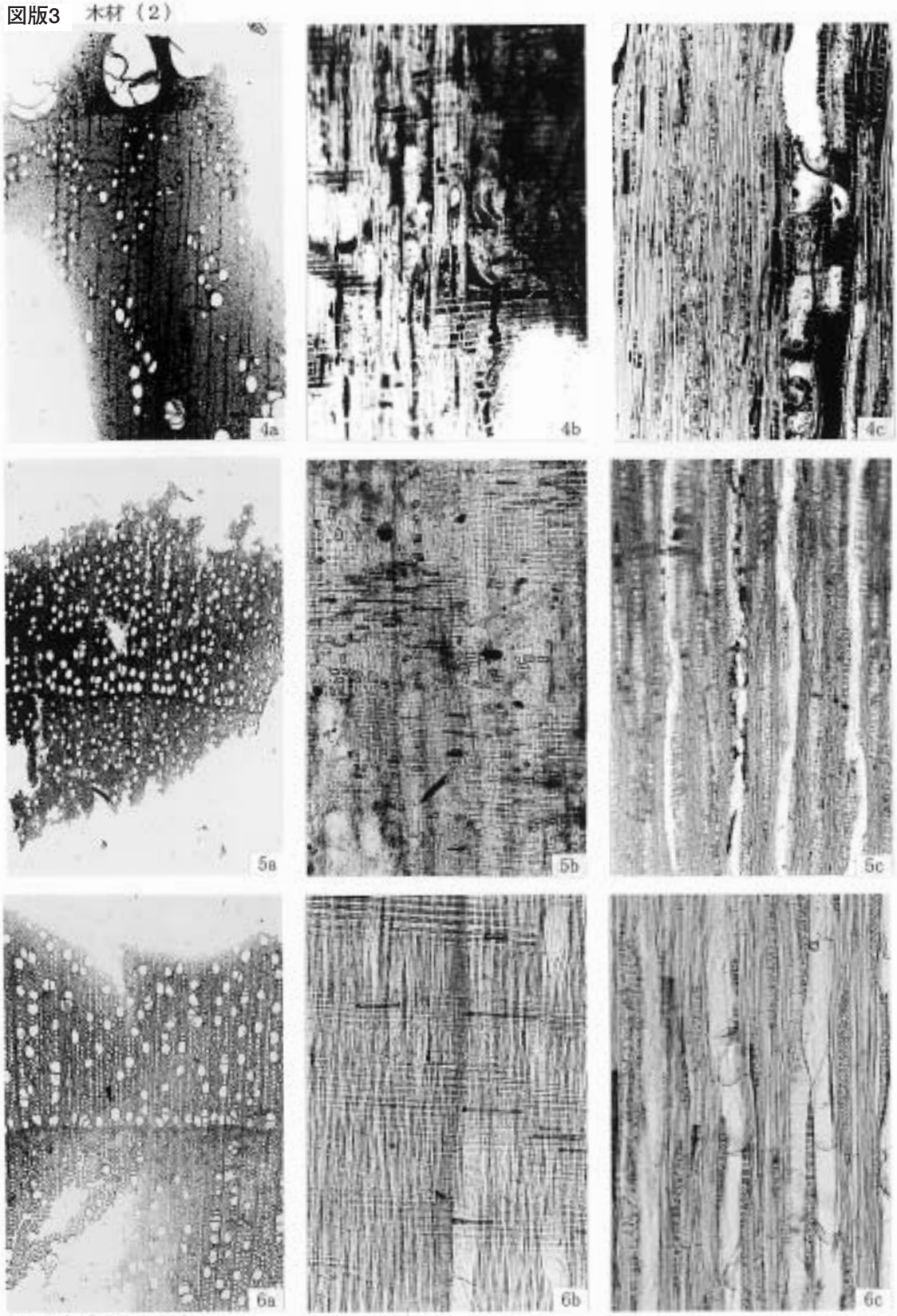
Pm: 軽石，Vg: 火山ガラス，

図版2　木材（1）



1. スギ（FBC01A007）
2. ヒノキ（FBC01A015）
3. サワラ（FBC01A010）
　a：木口，b：柾目，c：板目

図版3　木材（2）



4. クリ（FBC01A001）
5. サクラ属（FBC01A017）
6. モクレン属（FBC01A019）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm:a
200 μm:b, c

報告書抄録

ふ り が な	あいづじゅうかんきたどうろいせきちょうさほうこく
書　　名	会津縦貫北道路遺跡調査報告１
シリーズ名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第404集
編 著 者 名	高橋信一・斎藤竜一・菊田順幸・井　憲治・横須賀倫達
編 集 機 関	財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部　遺跡調査課 〒960-8116 福島県福島市春日町5-54　TEL 024-534-2733
発 行 機 関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16　TEL 024-521-1111
発行年月日	2002年10月31日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
麻生館遺跡（あざぶだていせき）	福島県耶麻郡（ふくしまけんやまぐん） 塩川町大字遠田（しおかわまちおおあざとおだ） 字麻生館（あざあざぶだて）	403	40300049	37°36′14″	139°52′35″	2001年4月9日 ～ 2001年9月21日	6,200	道路（会津縦貫北道路）建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種類	主な時代	主な時代		主な遺物	特記事項
麻生館遺跡（あざぶだていせき）	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡（14） 土坑（14） 溝跡（11） 遺物包含層（1）	柱列跡（1） 井戸跡（2） ピット群（5）	土師器・須恵器 陶器・石製品 木製品・銭貨	調査区の北西部に平安時代の集落跡，調査区全域に中世末の館跡。堀に囲まれた館跡の西半が明らかとなり，堀跡内部の掘立柱建物跡は館の主屋，副屋などの建物跡と推定される。
	館跡	中世				

福島県文化財調査報告書第404集

会津縦貫北道路遺跡調査報告１

麻生館遺跡（あざぶだていせき）

平成14年10月31日発行

編　集　財団法人福島県文化振興事業団（遺跡調査部　遺跡調査課）

発　行　福島県教育委員会　（〒960-8688）福島市杉妻町２－16

財団法人福島県文化振興事業団　（〒960-8116）福島市春日町５－54

国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所　（〒963-0111）郡山市安積町荒井字丈部内28－１

印　刷　シーアイエー株式会社　本社工場　（〒960-0719）伊達郡梁川町やながわ工業団地90－１

本書は中性紙を使用しています